

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第326集

高槻市

梶原南遺跡2

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2023年11月

公益財団法人 大阪府文化財センター

高槻市

梶原南遺跡 2

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2023 年 11 月

公益財団法人 大阪府文化財センター

高槻市

梶原南遺跡 2

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

序 文

高槻市域は北を北摂山地が占め、南は市域の南端を限る淀川が形成した沖積地が占めることから地形変化に富んだ景観を呈しています。梶原南遺跡を含む一帯は幹線道路と、もう一つの物流の基幹であった淀川が近接する場所でもあり、歴史的にみて重要な役割を果たしてきたことが知られています。一方、近世には市内中心域に高槻城と城下町が作られ、それを核として今日の市街域が形成されたことから、開発等に伴う発掘調査は現在の市街地に包括される部分やその周辺で先行して行われてきました。

梶原南遺跡は1980年代の府営住宅建て替えに伴う事前調査により周知されるようになった集落遺跡で、奈良時代の大型建物を含む建物群や、それを画するように配された溝が検出されたことで注目されました。公益財団法人大阪府文化財センターでは、平成22年度から新名神高速道路建設に伴う埋蔵文化財調査を実施しています。それにより当遺跡が弥生時代から中世にかけて断続的に営まれた複合遺跡であり、各時期の具体的な様相が明らかになるなど、新たな知見が蓄積されつつあります。特に古代集落に関しては、墨書土器や斎申、役人の位を示した「腰帯」の部品である鉸具金具、そして今回新たに見つかった内外面に黒漆を塗布した一木造の箱等の出土により、官衙・駅や寺院といった古代の公的な施設に近い場所だった可能性がより高まっています。また、弥生時代中期の方形周溝墓や中世集落に関連する遺構から、土地利用の時期的変遷もとらえられつつあります。

こうした埋蔵文化財の調査成果が有効に活用され、地域の歴史像や各時代の社会像が明らかとなる一助となることを、切に願います。今回の事業の実施にあたってご理解・ご協力を賜りました、西日本高速道路株式会社、関西電力株式会社、大阪府教育庁文化財保護課、高槻市街にぎわい部文化財課、地元関係各位に厚く御礼申し上げます。今後とも大阪府文化財センターの事業により一層のご理解とご協力を賜りますよう、なにとぞよろしくご願ひ申し上げます。

令和5年11月30日

公益財団法人 大阪府文化財センター
理 事 長 坂 井 秀 弥

例 言

1. 本書は、高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴い実施した大阪府高槻市梶原3・4丁目地内における梶原南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査と整理作業は、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所から委託を受け、公益財団法人大阪府文化財センターが、大阪府教育庁文化財保護課の指導のもと実施した。現地調査は令和3年10月から令和4年12月まで行った。引き続き中部調査事務所において令和5年1月から令和5年8月まで整理作業を行い、令和5年11月30日に本書の刊行を以て完了した。
3. 発掘調査および遺物整理作業に関する受託事業名と事業実施期間は下記のとおりである。
 - [調査名] 梶原南遺跡 21 - 1
 - 【事業名称】高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（高槻市域）その12
 - [事業契約期間] 令和3年9月13日から令和4年4月25日
 - [調査名] 梶原南遺跡 22 - 1
 - 【事業名称】高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（高槻市域）その14
 - [事業契約期間] 令和4年4月1日から令和5年1月27日
 - [整理作業]
 - 【事業名称】高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理（高槻市域）その6
 - [事業契約期間] 令和5年1月4日から令和5年11月30日発掘調査および遺物整理は下記の体制で実施した。
 - [令和3年度] 事務局次長 市本芳三、総務企画課長 亀井 聡
調査課長 岡戸哲紀、課長補佐 佐伯博光、副主査 若林幸子（調査担当）
 - [令和4年度] 事務局次長 市本芳三、総務企画課長 亀井 聡
調査課長 佐伯博光、課長補佐 後藤信義、副主査 若林幸子（調査・整理担当）
 - [令和5年度] 事務局次長 亀井 聡、総務企画課長 島谷美穂
調査課長 佐伯博光、課長補佐 後藤信義、副主査 若林幸子（整理担当）
4. 本書に掲載した写真の撮影は、遺構を若林が、遺物を中部調査事務所写真室が行った。
5. 遺物整理の過程で以下の分析を依頼し、第5章に成果を掲載した。
 - 年輪年代測定 名古屋大学遺物整理の過程で以下の分析を委託し、第5章に成果を掲載した。
 - 大型植物遺体同定（4点） 古代の森研究舎
 - 委託名称：令和5年度 梶原南遺跡（その3・4）遺物整理大型植物遺体同定分析業務委託
 - 委託期間：令和5年4月29日から令和5年6月30日まで
6. 出土遺物の保存処理について、以下の機関に委託した。
 - 木製品（1点） 株式会社 古環境研究所

委託名称：令和5年度 梶原南遺跡（その3・4）発掘調査出土木製品保存処理（糖アルコール含浸法）業務

委託期間：令和5年5月30日から令和5年11月30日まで

7. 本書の執筆および編集は若林が行った。第5章については、機関・個人に委託・頼依した報告書・原稿を掲載し、文中に筆者名を記載している。
8. 発掘調査ならびに報告書の作成過程において、下記の方々からご指導・ご協力を賜った。記して感謝いたします。

（順不同、敬称略、所属は調査・整理当時のもの）

山上 弘・中西裕見子・小泉翔太（大阪府教育庁文化財保護課）、今西康弘・矢野昌史・小平梨沙（高槻市街にぎわい部文化財課）、内田真雄（高槻市立今城塚古代歴史館）、網 伸也（近畿大学）、大庭重信（一般財団法人大阪市文化財協会）、村上由美子（京都大学総合博物館）、中野 咲（奈良県文化・教育・暮らし創造部文化財保護課）、四柳嘉章（石川県輪島漆芸美術館名誉館長）、蒲 蓉子（奈良文化財研究所）、金井千紘（立命館大学）、春名英行（同志社大学）

凡 例

1. 遺構図および断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。図中の標高は、すべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値であり、T.P. +は省略した。
2. 座標値は世界測地系（測地成果2011）による平面直角座標系第VI系に基づき表示している。単位はすべてmであり、mの表記は省略した。
3. 全体図および遺構実測図の方位は、いずれも平面直角座標系第VI系の座標北を示す。なお、真北は東に $0^{\circ} 16' 24''$ 、磁北は真北に対し西に $7^{\circ} 17'$ 傾く。
4. 現地調査および遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。土層の記載方法は、記号・土色名・土質名の順とする。（例：10Y4/2 オリーブ灰 シルト）
6. 遺構番号は、調査段階にはトレンチごとに遺構種類に関わらず1から順に付し、遺構番号―遺構名として表現した。複数の遺構の組み合わせによって一つの遺構が構成されている場合は、建物1のように遺構名 - 遺構番号として表記している。挿図ではピットのみ遺構番号のみを表記している。
7. 遺構実測図における断面位置は、図面上に破線で示した。破線両端の矢印は断面観察方向を示す。掲載縮尺はおおむね20分の1から40分の1で、縮尺およびスケールは図版内に明記している。
8. 遺物実測図の縮尺は、4分の1を基本とするが、石器、金属器等で小型のものは寸寸から2分の1で掲載する等、遺物の大きさに即した縮尺としたため、一部はこの限りではない。各図面に縮尺およびケールを付している。写真図版の遺物はスケールを統一していない。
9. 掲載遺物には通し番号を付した。本文・挿図・写真図版ともに一致する。
10. 出土遺物の年代観や器種・器形分類の大枠については、おおむね下記の文献に依拠した。

古代の土器研究会編 1992『古代の土器1 都城の土器集成』 古代の土器研究会

- 小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房
- 笹栗 拓 2022『摂津東部・上牧遺跡における古墳時代の土器編年』『大阪文化財研究』第 55 号
- 神野 恵 2015『土器の年代と木簡の年紀』『遺跡の年代を測るものさしと奈文研』クバプロ
- 田中清美 2021『古墳時代中期の土器研究と暦年代』『中期古墳研究の現状と課題 V』中国四国前方後円墳研究会
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 中世土器研究会編 1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
- 中世土器研究会編 2022『新版概説中世の土器・陶磁器』真陽社
- 辻 美紀 1999『古墳時代中・後期の土師器に関する一考察』『国家形成期の考古学』大阪大学文学考古学研究室
- 中野 咲 2010『古墳時代中・後期における奈良盆地の土師器編年とその特質』『考古学論叢』第 33 冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 奈良国立文化財研究所編 1985『木器集成図録—近畿古代篇—』奈良国立文化財研究所史料第 27 冊
- 橋本久和 1991『大阪北部の古代後期・中世土器の様相』『高槻市文化財年報 昭和 63 年・平成年度』高槻市教育委員会
- 森田克行 1990『摂津地域』『弥生土器の様式と編年』近畿編 II 木耳社

11. 引用文献および参考文献

- 鎌田博子編『橿原瓦窯跡発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第 3 輯 名神高速道路内遺跡調査会
- 川瀬貴子編 2015『橿原西遺跡』（公財）大阪府文化財センター調査報告書第 261 集
- 川村雪絵・宮崎康雄 1997『27. 橿原南遺跡（96 - 2）の調査』『嶋上遺跡群 21』高槻市文化財調査概要 XXIII 高槻市教育委員会
- 笹栗 拓編 2021『上牧遺跡』（公財）大阪府文化財センター調査報告書第 313 集
- 高槻市史編さん委員会編 1973『高槻市史』第 6 巻 考古編
- 高槻市史編さん委員会編 1977『高槻市史』第 1 巻 本編 I
- 高村勇士 2019『島下郡殖村駅家を考えるために』『茨木市立文化財資料館報 5』茨木市立文化財資料館
- 富成哲也・宮崎康雄 1985『橿原南遺跡発掘調査概要 第 2 次調査』橿原遺跡調査会
- 橋本久和 1980『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第 13 冊 高槻市教育委員会
- 橋本久和 1997『26. 橿原南遺跡（96 - 1）の調査』『嶋上遺跡群 21』高槻市文化財調査概要 XXIII 高槻市教育委員会
- 別所秀高 2022『第三章摂津市の地形と地質』『新修摂津市史』第一巻 摂津市史編さん委員会
- 森本 徹編『橿原南遺跡』（公財）大阪府文化財センター調査報告書第 315 集
- 宮崎康雄 1988『橿原南遺跡発掘調査報告書』橿原遺跡調査会
- 宮崎康雄 1992『橿原南遺跡』『高槻市文化財年報 平成 2 年度』高槻市教育委員会

目 次

序文、例言、凡例

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3節 既往の調査成果	6
第3章 調査の方法	8
第4章 調査成果	11
第1節 基本層序	11
第2節 21 - 1 - 1 ~ 5区の遺構と遺物	15
第1項 層序	15
第2項 第1面の遺構	15
第3項 最終遺構面の遺構	30
第4項 21 - 1 - 1 ~ 5区出土遺物	44
第3節 22 - 1 - 6 ~ 10区の遺構と遺物	52
第1項 8区	52
第2項 6区	72
第3項 7区	94
第4項 10区	109
第5項 9区	113
第6項 古代漆器箱について	123
第5章 自然科学分析	124
第1節 梶原南遺跡出土材の酸素同位体年輪年代および放射性炭素年代	124
第2節 大型植物遺体同定分析	130
第6章 総括	132

写真図版

報告書抄録、奥付

插图 目 次

图1 新名神高速道路計画路線図埋蔵文化財調査地点……………1	图38 21 - 1 - 5 出土遺物(3)……………49
图2 淀川北岸東部地域遺跡分布図……………4	图39 21 - 1 木製品(1)……………50
图3 調査地区地図……………9	图40 21 - 1 木製品(2)……………51
图4 基本層序模式図……………12	图41 22 - 1 - 6~8 第1面平面図……………53
图5 21 - 1 - 1 東壁土層断面図(1)……………16	图42 22 - 1 - 8 東壁土層断面図……………54
图6 21 - 1 - 1 東壁土層断面図(2)……………17	图43 22 - 1 - 8 西壁土層断面図……………55
图7 21 - 1 - 1 東壁土層断面図(3)……………18	图44 22 - 1 - 8 北壁土層断面……………56
图8 21 - 1 - 1 北壁土層断面図……………19	图45 22 - 1 - 8 最終遺構面平面図……………57
图9 21 - 1 - 1 西壁土層断面図……………20	图46 22 - 1 - 8 時期別遺構分布図……………58
图10 21 - 1 - 1 南壁土層断面図……………21	图47 22 - 1 - 8 包含層出土遺物……………58
图11 21 - 1 - 4 東壁土層断面図……………22	图48 21 - 1 - 8 最終遺構面古代末~中世構平・断面図……………59
图12 21 - 1 - 4・3 東壁土層断面図……………23	图49 21 - 1 - 8 1溝遺物出土状況A図……………60
图13 21 - 1 - 3 北壁土層断面図……………24	图50 21 - 1 - 8 1溝遺物出土状況B図……………60
图14 21 - 1 - 3 南壁土層断面図……………25	图51 22 - 1 - 8 1溝出土遺物……………61
图15 21 - 1 - 4・5 南壁土層断面図……………26	图52 22 - 1 - 8 4土坑出土遺物……………61
图16 21 - 1 - 5 南壁土層断面図……………27	图53 22 - 1 - 8 中世遺構出土遺物……………62
图17 21 - 1 - 2 北・西壁土層断面図……………28	图54 22 - 1 - 8 建物1平・断面図……………63
图18 21 - 1 第1面平面図……………29	图55 22 - 1 - 8 最終遺構面古代遺構平・断面図(1)……………64
图19 21 - 1 第1面遺構断面図(1)……………31	图56 22 - 1 - 8 74溝・75溝出土遺物……………65
图20 21 - 1 第1面遺構断面図(2)……………32	图57 22 - 1 - 8 74溝最下部平・断面図……………66
图21 21 - 1 最終遺構面平面図……………33	图58 22 - 1 - 8 最終遺構面古代遺構平・断面図(2)……………67
图22 21 - 1 最終遺構面部分拡大平面図……………34	图59 22 - 1 - 8 古代遺構出土遺物……………67
图23 21 - 1 - 1 放棄流路断面図……………36	图60 22 - 1 - 8 11井戸出土遺物……………67
图24 21 - 1 遺物出土状況A・B図……………37	图61 22 - 1 - 8 11井戸・40井戸断面図……………68
图25 21 - 1 遺物出土状況C図……………37	图62 22 - 1 - 8 40井戸出土遺物……………69
图26 21 - 1 最終遺構面遺構断面図(1)……………38	图63 22 - 1 - 8 方形周溝墓平・断面図……………70
图27 21 - 1 最終遺構面遺構断面図(2)……………39	图64 22 - 1 - 8 150溝出土遺物……………70
图28 21 - 1 遺物出土状況D図……………40	图65 22 - 1 - 8 最終遺構面検出遺構平・断面図……………71
图29 21 - 1 遺物出土状況E図……………40	图66 22 - 1 - 6 東壁土層断面図……………73
图30 21 - 1 - 1 出土遺物(1)……………41	图67 22 - 1 - 6 南壁土層断面図……………74
图31 21 - 1 - 1 出土遺物(2)……………42	图68 22 - 1 - 6 第2層・第3層出土遺物……………75
图32 21 - 1 - 1 出土遺物(3)……………43	图69 22 - 1 - 6 第3~4層・第4層出土遺物……………76
图33 21 - 1 - 1 出土遺物(4)、21 - 1 - 2 出土遺物……………44	图70 22 - 1 - 6 最終遺構面平面図……………77
图34 21 - 1 - 3 出土遺物(1)……………45	图71 22 - 1 - 6 時期別遺構分布図……………78
图35 21 - 1 - 3 出土遺物(2)、21 - 1 - 4 出土遺物……………46	图72 22 - 1 - 6 建物1平・断面図……………79
图36 21 - 1 - 5 出土遺物(1)……………47	
图37 21 - 1 - 5 出土遺物(2)……………48	

図 73	22 - 1 - 6	建物 2 平・断面図	80		
図 74	21 - 1	42 ビット出土遺物	80	図 103	22 - 1 - 7 最終遺構面弥生遺構断面図
図 75	22 - 1 - 6	建物 3 平・断面図	81		105
図 76	22 - 1 - 6	建物 4 平・断面図	82	図 104	22 - 1 - 7 50 溝検出面出土遺物
図 77	22 - 1 - 6	60 土坑平・断面図	83	図 105	22 - 1 - 7 最終遺構面遺構断面図 (1)
図 78	22 - 1 - 6	60 土坑遺物出土状況図	84		107
図 79	22 - 1 - 6	60 土上層出土遺物	84	図 106	22 - 1 - 7 最終遺構面遺構断面図 (2)
図 80	22 - 1 - 6	60 土坑下層・最下層出土遺物	85		108
図 81	22 - 1 - 6	62 溝・53 溝・68 溝・29 ビット	86	図 107	22 - 1 - 10 北・西壁土層断面図
図 82	22 - 1 - 6	建物 5 平・断面図	87	図 108	22 - 1 - 10 最終遺構面平面図
図 83	22 - 1 - 6	建物 6 平・断面図	88	図 109	22 - 1 - 10 最終遺構面遺構平・断面図 (1)
図 84	22 - 1 - 6	最終遺構面古代遺構平・断面図	89	図 110	22 - 1 - 10 最終遺構面遺構平・断面図 (2)
図 85	22 - 1 - 6	7 ビット平・断面図	90	図 111	22 - 1 - 9 南・北壁土層断面図
図 86	22 - 1 - 6	方形周溝墓 1~3 他平面図	91	図 112	22 - 1 - 9 西壁土層断面図
図 87	22 - 1 - 6	最終遺構面弥生遺構断面図	92	図 113	22 - 1 - 9 土層断面図 (土色)
図 88	22 - 1 - 6	66 溝出土遺物	93	図 114	22 - 1 - 9 最終遺構面平面図
図 89	22 - 1 - 6	69 土坑平・断面図	93	図 115	22 - 1 - 9 1 落込み断面図
図 90	22 - 1 - 7	西壁土層断面図	95	図 116	22 - 1 - 9 1 落込み最上層 (第 1 層含む) 出土遺物
図 91	22 - 1 - 7	東壁土層断面図	96	図 117	22 - 1 - 9 1 落込み (上層)・(下層) 出土遺物
図 92	22 - 1 - 7	北壁土層断面図	97	図 118	22 - 1 - 9 2 井戸・3 井戸平・断面図
図 93	22 - 1 - 7	1 集石遺構平面図	98	図 119	22 - 1 - 9 2 井戸・3 井戸出土遺物
図 94	22 - 1 - 7	1 集石遺構出土遺物	98		121
図 95	22 - 1 - 7	第③層・第④ - 1 層・第④ - 2 層出土遺物	99	図 120	22 - 1 出土木製品
図 96	22 - 1 - 7	最終遺構面平面図	100	図 121	22 - 1 漆器年輪
図 97	22 - 1 - 7	時期別遺構分布図	101	図 122	22 - 1 ハケメ観察図
図 98	22 - 1 - 7	最終遺構面古代末~中世・古代遺構平・断面図	102	図 123	22 - 1 サンプル B の酸素同位体比の年輪年代パターンマッチング
図 99	22 - 1 - 7	13 ビット・47 ビット出土遺物	103	図 124	22 - 1 出土材サンプル B の 14C ウィグルマッチング
図 100	22 - 1 - 7	最終遺構面古墳遺構断面図	103	図 125	22 - 1 出土材サンプル E の 14C ウィグルマッチング
図 101	22 - 1 - 7	37 土坑出土遺物	103	図 126	変遷図 (1)
図 102	22 - 1 - 7	方形周溝墓 1~5 平面図	104	図 127	変遷図 (2)

表 目 次

表 1	出土材サンプル B の 14C 年代測定とウィグルマッチングで得られた年代	128
-----	---------------------------------------	-----

表2 出土材サンプルEの14C年代測定とウィグルマッチングで得られた年代	128
表3 梶原南遺跡出土木材および種実の同定結果	130
表4 遺物一覧表	137

挿入写真目次

写真1 a 面漆膜	131
写真2 a 面漆膜	131
写真3 b 面漆膜	131
写真4 b 面漆膜	131

写真図版目次

図版1 3井戸出土漆器 2区から高槻市街地を望む(東から)	図版9 6区 6区 方形周溝墓(南東から) 66溝 遺物出土状況(東から)
図版2 1区 1区 全景(南西から) 1区 全景(北東から)	図版10 7区 7区 全景(南西から) 1集石遺構(南から)
図版3 1・2区 1区 槽出土状況(西から) 2区 全景(南西から)	図版11 7区 50溝 検出状況(南から) 52溝 遺物出土状況(北から)
図版4 5区 5区 全景(北東から) 5区 遺物出土状況(南から)	図版12 9区 9区 全景(南西から) 2井戸(南西から)
図版5 3・4区 4区 全景(南西から) 3区 全景(北西から)	図版13 遺物1 22-1 中世 図版14 遺物2 22-1 中世 図版15 遺物3 22-1・21-1 中世
図版6 8区 8区 全景(北東から) 8区 全景(南西から)	図版16 遺物4 22-1 古代 図版17 遺物5 21-1 古代 図版18 遺物6 21-1 古代~古墳
図版7 8区 11井戸(南東から) 40井戸(北から)	図版19 遺物7 21-1 古墳 図版20 遺物8 22-1 古墳~弥生 図版21 遺物9 21-1 弥生~縄文
図版8 6区 6区 全景(南西から) 60土坑 遺物出土状況(北西から)	図版22 遺物10 木製品

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

本書は、西日本高速道路株式会社（以下、事業者）が実施する高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う梶原南遺跡の発掘調査報告書である。略称新名神高速道路は名古屋～神戸を結ぶ道路で、渋滞・混雑の解消と自然災害時等におけるバイパスとしての役割を期待されている。大阪府内の路線計画地は枚方市・高槻市・茨木市・箕面市にわたり、道路用地内の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関し、事業者と工事の届け出を受けた大阪府教育庁文化財保護課との間で協議がすすめられた。その結果、建設工事に先立つ埋蔵文化財の確認調査ならびに発掘調査が指示され、平成22年度以降、公益財団法人大阪府文化財センター（以下、センター）が確認調査と発掘調査を進めている。梶原南遺跡では平成28年度・平成31年度に実施された試掘調査の結果を受け、拡大した埋蔵文化財包蔵地を対象として令和元年度以降、発掘調査を行ってきた（図1）。

発掘調査は主に道路用地内の橋脚・側道部分を対象として行われてきた。またこれと並行して道路用地周辺では、道路建設事業に伴う関西電力鉄塔および電線の移設工事の必要性も生じたことから、大阪府教育庁・高槻市街にぎわい部文化財課・事業者・関西電力による協議がもたれ、鉄塔建設予定地における本調査もセンターが実施した。梶原南遺跡内の道路用地において、令和4年度の段階で阪急電車および東海道新幹線線路以南の橋脚・側道部分の発掘調査はおおむね終了している。

今回の発掘調査対象は、阪急電車および東海道新幹線線路からJR線路までの区間の側道の一部と2基分の橋脚建設地、国道171号から阪急電車および東海道新幹線線路の間では橋梁架設工事の際にベントを設置する場所である。ちなみにベント部（6～8区）は令和元～2年度にかけて行った発掘調査区に近接する。

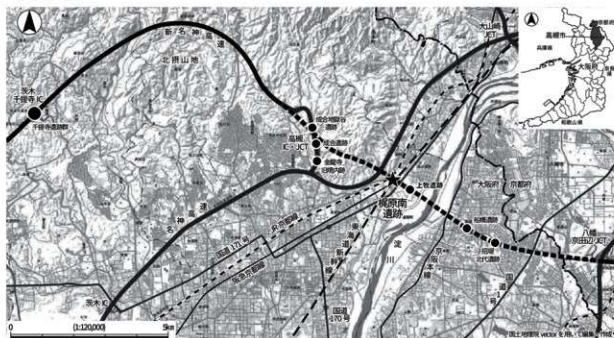


図1 新名神高速道路計画路線図と埋蔵文化財調査地点

第2節 調査の経過

発掘調査は令和3年9月13日から令和4年1月25日まで、令和4年4月1日から令和5年1月27日までの2件の受託契約において、2か年にわたり実施した。令和3年度の調査では令和3年9月10日付で事業者とセンターが発掘調査の委託契約を締結し、同年10月1日から発掘調査に着手した。想定をはるかに超える掘削深度であることがわかったため、調査期間を延長する必要性が生じた。大阪府教育庁・事業者・センターの協議により調査期間を延長することが決まり、令和3年12月22日に調査期間を令和4年4月25日までとする契約変更を行った。この発掘調査の終了後、引き続き令和4年度の調査に着手した。なお本文では令和3年度の発掘調査を21-1発掘調査、令和4年度の発掘調査を22-1発掘調査と表記する。

21-1発掘調査はおおむね5区から4区、2区、1区、3区の順に、22-1発掘調査は6区、7区、9区、10区、8区の順に進めた。ただ令和4年7月の1か月間は諸工事の都合上、発掘調査を中断する必要があったため、それまでに6・7区の調査を終え、発掘調査中断期間は出土遺物と函面・機材等を中部調査事務所に運び、注記済みの遺物を対象とした接合作業と実測対象遺物の選別を進めた。各調査区の発掘調査終了時には大阪府教育庁の現地立会を受け、調査完了後に埋め戻した。

発掘調査終了後、令和5年1月から遺物整理と報告書作成作業を中部調査事務所において実施した。令和5年8月末日をもってそれらと資料の取納作業を終了し、報告書の印刷・製本を行った。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

梶原南遺跡は高槻市東端部に位置する弥生時代から中世の複合遺跡である。高槻市梶原3・4丁目、梶原中村町、五領町8番地外等にまたがり、遺跡の範囲は南北約500m、東西約300mにおよぶ。今回の調査区は遺跡範囲の北半部にあたり、北摂山地南裾に連なる扇状地末端から沖積地にまたがる範囲である。梶原南遺跡の北端部は沖積平野の北縁部でかつ、北摂山地裾部に沿って東西に延びる有馬—高槻構造線に近接する。

その有馬—高槻構造線を境に市域が北部と南部に大きく二区分されることが多いのは、これを介して南と北とで地形・地質が分かれ、必然的に土地利用や景観に違いが生じてきたからである。有馬—高槻構造線に沿って形成された断層帯は平野部に接しているのに加え、その規模や延長距離が大きいこと、傾斜が緩やかで一定していることから、古代山陽道を例として古くから東西を結ぶ主要交通路として利用されてきた。

断層帯より南側の平野部は、北東から南西方向に流れる淀川によって形成された沖積地と、北摂山地に源を発して南流する安威川・楡尾川・水無瀬川などの中小河川によって形成された低位段丘帯と沖積低地からなる。現在は楡尾川と水無瀬川の間約5kmにわたる範囲には目立った河川はないが、今回の調査によりそれらの他にも流路変更を繰り返しながら埋没した河川や谷が、かつては存在したことがわかった。

調査地の東に隣接する内ヶ池は、淀川分流の河跡湖と目されている。梶原山が淀川河床に向かって張

り出すため、梶原南遺跡とその周辺は平野部が狭狭なのに加え、淀川本流によって運ばれる土砂堆積量が限られることから自然堤防の発達が悪く、小規模なものが島状に散在する地形だったと考えられている（『高槻市史』第1巻）。以上のことから調査地とその周辺は、北摂山系に端を発する中小河川と、淀川の本流や分流による堆積活動が交錯する場所だったと考えられる。

河内湾1の時期には当遺跡とその周辺は水際付近に位置し、その後徐々に汀線は西に向かって後退していったとみられる。ただ当遺跡とその周辺で、人の生活痕跡が明確ではない縄文時代晩期までの時期においては、沖積平野の狭狭部に含まれる当遺跡とその周辺は、周囲の河川からの堆積活動が活発なため、居住地に適した安定した環境を得にくい状況だった可能性が今回の調査成果からうかがえる。

少なくとも当遺跡で方形周溝墓が構築される弥生時代中期前半以降は、流路沿いに微高地の発達が進み、そこを生活域としたと考えられる。本調査地から淀川本流に向けて少し降ると、小規模な微高地が点在する葦原が広がる景観が古代の段階にも続き、その立地を利用した牧が存在したと考えられている。

梶原南遺跡に隣接する先述の内ヶ池は、近年の護岸部分の発掘調査成果から古代に流路が埋没した後、中世にかけて現在の景観が形成されたことがわかった。淀川に向かって流れ込む支流の固定化は中世以降顕著となり、中世後半から近世にかけては天井川化に向かったとみられる。

特に天井川化は神崎川や安威川で顕在化し、周囲の耕作地との比高が大きくなるにつれてたびたび越流と洪水被害をもたらし、近代にかけて流路の付け替えや排水施設の設置などの対策が必要な状況を生じさせることとなった。

第2節 歴史的環境（図2）

梶原南遺跡が位置する高槻市、ないし梶原地区の歴史的環境については既刊の報告書（笹栗編 2021等）に詳しいので、ここでは特に梶原南遺跡における遺構・遺物の消長と関連する時期の周辺地域の動向を中心に述べたい。

縄文時代以前 第5章第1節で詳述するが、今回の調査では第7-3層出土の自然木から紀元前3900年、第7-2層出土の自然木から紀元前1550年という年代が得られた。今回も含め、これまでの梶原南遺跡の調査でそれらの時期の遺構・遺物はほとんど出土しておらず、周辺の遺跡においても同様である。高槻市域全体を対象としても、縄文時代中期以前の遺物の出土は現在でも限られる。縄文時代後期・晩期になると、沖積地から段丘頂まで広範囲にわたって遺跡の検出例が増えつつあり、当遺跡近辺でも梶原寺跡で定角石斧や後期後半の宮滝式土器が、神内遺跡では後期の土器が出土している。ちなみに22-1-6～8区で検出した最終遺構面の基盤層は、前述の第7-2層を覆うように堆積していることから、その堆積時期は縄文時代後期以降と考えられる。この段階ではまだ、当遺跡を含む一帯の沖積平野部においては、生活に適した安定した住環境を得られにくい状況だったのではないかと考える。

弥生時代 淀川右岸地域では弥生時代以降に遺跡の増加が顕著となる。調査地周辺における弥生時代中期前半の遺構の検出例は梶原南遺跡の他、上牧遺跡・梶原西遺跡・神内遺跡等、近年増加しているが、いずれも方形周溝墓群である。これまで高槻市域で検出された弥生時代中期以降の集落の多くは台地や丘陵上に位置していることから、それらの墓域の母体となった集落居住域も、近隣の丘陵や扇状地上に展開した可能性はある。ただそれも現状では推測の域を出ず、当該期の集落実態は不明である。梶原南遺跡においてもこれまでのところ、同時期の明確な集落居住域の存在を示す遺構は検出されていない。ただ府宮住宅の建設等に先立って行われた発掘調査の際、中期の土坑が2基検出されており、うち1

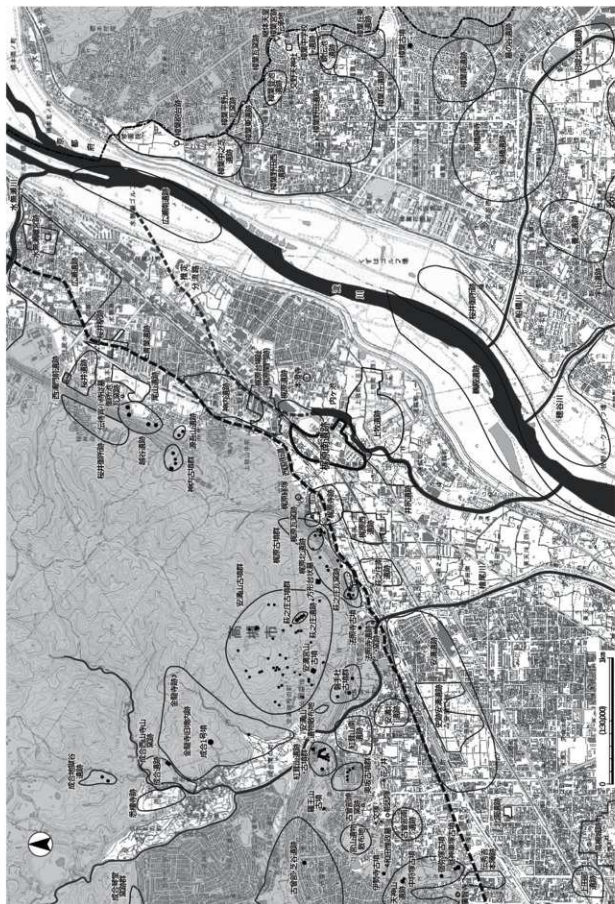


図2 淀川北岸東部地域遺跡分布図

基は中期前半のものだった。また後期の竪穴住居2基と、溝が数条検出されているのに加え、溝埋土から中期前半の土器が若干検出されている。一方、井尻遺跡でも弥生時代中期後半の遺物を含む土坑が1基検出されている。これらのことから、梶原南遺跡が展開する微高地の南半部や、沖積地に点在する小規模な微高地とその周辺に、弥生時代中期～後期の集落居住域と生産域が存在した可能性は否定できない。今回の調査でも、1区・9区などで弥生時代後期の土器がわずかに出土した。ただ遺物量は僅少なうえ同時期の遺構も検出されていないことから、丘陵縁部に位置する未検出の弥生時代後期の集落から転入したものと考える。

古墳時代 弥生時代後期後半～古墳時代を通して遺構・遺物が確認される安満遺跡の存在から、規模は不明ながら楡尾川扇状地に集落居住域が存在したのに加え、扇状地頂部の紅葺山南遺跡や成合谷の金龍寺旧境内跡などで中期の遺構・遺物が確認されている。梶原地域では井尻遺跡で前期・中期の遺構・遺物がまとまって確認されたのに加え、近年の上牧遺跡の調査成果により、内ヶ池周辺に規模の大きな当該期の集落が展開したことが明らかとなった。梶原南遺跡においても古墳時代中期を中心とする時期の土器が、中世や奈良時代の土器に次いで出土するが、遺構・遺物の検出密度はそれほど高くなく、当該期の集落居住域の縁部にあたるのではないかと考えられる。梶原南遺跡に近い丘陵部には後期の梶原古墳群、神内・源吾山・越谷古墳群が展開する。梶原遺跡で後期の竪穴建物や掘立柱建物が検出されているが、同時期の集落遺跡の実態を知る手がかりは現在のところ乏しい。

古代 梶原南遺跡では今回の調査においても、調査区全域から当該期の遺物が最も安定的に出土した他、8区・6区を中心に掘立柱建物や井戸を検出している。昭和58年以降に実施された府宮上牧住宅の建て替え工事に伴う発掘調査などでは奈良時代前半・後半の2時期に大きく分けられる軸方向をそろえて計画的に配置された掘立柱建物群や柵、溝が検出された。また「新屋首乙賣」と記された木簡や鑄造関連遺物、多量の製塩土器が出土したことで知られている。周辺では神内遺跡、井尻遺跡、梶原西遺跡、上牧遺跡等でも奈良時代を中心とする古代の遺構が確認されている。

梶原南遺跡の北西で山陽道に面して寺域が想定される梶原寺が、嶋上・嶋下郡域に建立された古代寺院の中でも、他に先駆ける7世紀中ごろに創建されるのは、当地が山陽道と淀川対岸の楠葉駅の渡河点に近接する場所にあたり、当該期に交通の要衝としての重要性が増したことと関連付けられよう。梶原寺に付設された梶原瓦窯は、奈良時代には東大寺の建立に際して瓦の生産を分担したことが知られており、発掘調査で5基の瓦窯が検出されている。これらのことから梶原南遺跡は「大原駅」の候補地として注目されるに至っている。

古代末～中世 『上牧遺跡発掘調査報告書』では紀貫之の土佐日記の記述から、平安時代の淀川沿岸の牧で、水田化が進んでいたらしいことが指摘されている。

上牧遺跡では9・10世紀代とみられる遺構・遺物は出土しておらず、11世紀後半に中世集落が営まれたことが発掘調査結果から指摘されている。本遺跡で中世集落が明らかに出現するのは12世紀代で、その盛行期は13世紀前半から中頃にかけての時期である。これらのことから律令制度の崩壊後、古代末～中世にかけての開発が本格化する時期になっても、淀川の上流域や丘陵部に近づくと、耕地開発の着手が遅れる状況がみとれる。

なお14世紀以降には梶原南遺跡に展開していた中世集落の居住域は確実に廃絶もしくは移動し、一帯は生産域に転じたとみられる。

第3節 既往の調査成果

梶原南遺跡は昭和58年度・昭和60年度に梶原遺跡調査会により実施された府営五領（上牧）住宅の建て替えに伴う発掘調査により、既知の埋蔵文化財包蔵地であった梶原遺跡から分離され、周知されるようになった。この府営住宅建て替えに伴う発掘調査は昭和62年度にかけて実施され、その成果は調査会により調査概要が報告されている。この調査では、集合住宅建設予定地等に合計9か所の調査区が設けられ、弥生時代、奈良時代、中世（平安時代～鎌倉時代）の遺構が確認された（宮崎1988）。民間開発に伴う平成2年度の発掘調査では上記調査地の北側に調査区が、平成4年度に実施された発掘調査では、平成2年度調査区の北東に隣接する敷地に6か所の調査区が設けられ、弥生時代、奈良時代、中世の遺構が検出されている。

それらの発掘調査の他に、梶原南遺跡では新名神高速道路建設に伴う発掘調査が行われてきたのは第1章第1節で若干ふれたとおりである。その具体的な経過を記すと、平成28年度ならびに平成31年度に実施された試掘調査の結果を受け、拡大した部分も含めた遺跡範囲を対象に、令和元年度に19-1発掘調査を、令和2年度に20-1発掘調査を実施した。19-1発掘調査では計画路線内の橋脚2か所、側道6か所、合計8か所の調査区が設定された。20-1発掘調査では計画路線内の橋脚3か所、側道2か所、関西電力高圧線鉄塔移設地2か所、合計7か所の調査区が設定された。うち1トレンチとされた調査区は、遺構・遺物が広がらないことから調査対象から除外され、関西電力高圧線鉄塔移設に関わる保護鉄塔設置予定か所の調査が加わった。これらの調査では主に弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安～鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。

既往の発掘調査成果から把握できる梶原南遺跡の概要と時期的変遷をまとめた。前述したように梶原南遺跡はおおむね南北方向に延びる楕円形の微高地に展開した集落遺跡と考えられる。新名神高速道路建設に伴って行われた発掘調査範囲を北半部、これに先駆けてその南側に調査会や高槻市教育委員会によって行われた発掘調査範囲を南半部としてそれらの調査成果を概観すると、大略次のような傾向をとることができる。

梶原南遺跡では、弥生時代前期以前の時期に属する遺構は現在のところ検出されていない。当遺跡で明確な生活痕跡が認められるのは弥生時代中期前半からである。遺跡北半部と、南半部でも最も北寄りの調査区においてこれまで計8基の方形周溝墓が検出されており、それらは微高地の稜線上に列状に並んで配されていたことがわかった。南半部では弥生時代中期の土坑が2基検出されているが、前述の墓域を構成する集落居住域を想起させる遺構は現在のところ未検出である。弥生時代後期に関しては南半部で竪穴住居が2基、灌漑水路とみられる溝が2条検出されたが、北半部では包含層などから当該期の土器細片が若干出土するにとどまる。

古墳時代の遺構は北半部で検出されている。ただ古墳時代前期の土地利用痕跡は希薄であり、布留式甕を伴う土坑2基を検出したのみで、遺物の出土も希薄である。遺構、遺物が散見されるようになるのは5世紀中葉段階で、須恵器環蓋・環身の埋置が認められる土坑1基、環類2点を併置した埋納遺構の可能性が高い遺構1基、須恵器環・高環を埋納もしくは投棄した土坑2基がある。また当該期の可能性がある掘立柱建物3棟検出されており、居住域の存在が想起される。ただ遺構・遺物の検出密度の低さに加え、煮沸具がほとんどみられず井戸も未検出なことから、当該期集落の縁辺部ととらえられている。南半部では古墳時代後期の竪穴住居1基と土器細片が少量出土している。

奈良時代の遺構は南半部だけでも掘立柱建物 29 棟、井戸 6 基、柵、土壇墓等がある。建物群の様相と時期的変遷は、南半部の中でも府営住宅用地内と、それより北側の平成 2 年度・平成 4 年度調査区とで若干様相を異にする。府営住宅用地内で検出された掘立柱建物は、出土遺物や遺構の切り合い関係から、おおむね 8 世紀前半から中頃にかけてと、8 世紀中頃から後半にかけての 2 段階の変遷をもつととらえられている。掘立柱建物群は 2～3 棟からなる 9 つ程度の単位からなるとみられ、総柱建物を含み、L 字に配されたものもみられる。大規模な建物はみられないものの、計画的に配置された建物群ととらえられる。また建物群に付随する井戸から、「富」が記された墨書土器、転用硯、帯金具（鉸具）「新屋首乙賣」と記された木筒等、公的施設とのかかわりを想起させる遺物が出土しており、官人層の居住域と考えられている。それより北側の調査区で検出された当該期の遺構は、奈良時代初頭、奈良時代前半、奈良時代後半の 3 時期に分けることができ、8 世紀前半には井戸を設けた広場を中心とする規則的な建物配置や、軸をそろえて配置された大型の掘方をもつ総柱建物 2 棟が含まれる等、規模の大きな掘立柱建物によって構成される傾向が認められた。これらのことから遺跡南半部においては北側を公的な施設群が占め、南側がそれに付随する居住域が占めたと想定されている。遺跡北半部の調査でも、微高地のほぼ全域にわたって奈良時代の遺構が検出されており、微高地の最高所と西縁辺部との 2 か所の当該期の遺構のまとまりが認められている。ここでも奈良時代の遺構群は 2 時期に分けられるが、奈良時代前期に属する遺構・遺物は明確に把握できず、奈良時代後半が 2 時期に分かれる可能性が指摘されている。最高所の遺構群の中には大型の層柱建物 1 棟が含まれるのに加え、2 基の井戸からは墨書土器や斎車、横櫛などが出土した。また一木刎り抜きの井戸枠を据え、須恵器壺の埋納がみられる井戸もみられた。これらのことから微高地最高所には公的な役割をおった施設が置かれていたと考えられるのに対し、西側縁辺部にはより日常的かつ事務的な空間機能をおっていたのではないかと考えられている。そうであれば奈良時代前半と後半とで、公的な役割をおった施設が北東方向に移動した可能性が指摘できる。

古代に関しては以上のようなこれまでの調査成果から、当遺跡が和銅 4 年（711）に設置された大原駅の候補地として挙げられ現在に至っているが、それを立証するためには今後、より複合的な検証が必要となろう。

中世の遺構としては南半部で瓦器碗や土師器皿がまとめて出土した方形土坑が検出されているが、概して遺跡北半部に居住域の中心が存在した印象をもつ。遺構・遺物が多くみられるのは平安時代後期から鎌倉時代中期の段階である。当該期の井戸の検出状況からみて、遺跡北半部の微高地最高所を中心とするエリアに当該期集落の中心域があったのではないかと考えられる。礎石を用いた小規模な建物も 3 棟検出され、溝で区画された屋敷地の存在もうかがえる。その集落居住域が廃絶もしくは移動した後、一帯は耕地化したと考えられる。

第3章 調査の方法

発掘調査 本体工事の設計に基づき、工事に伴って遺構面の破壊を免れない橋脚と側道部分、橋梁設置工事の際に機材を据えるベント部等に対して発掘調査を行った。設計段階の橋脚番号や工区番号等が付されていたが、発掘調査ではそれとは別に調査区番号を付した(図3)。21-1発掘調査では1~5区まで、22-1発掘調査ではその続き番号である6~10区までの調査区番号を付した。22-1の調査場所は、国道171号から阪急電鉄および東海道新幹線線路までと、阪急電鉄および東海道新幹線線路からJR線路間の区域に2分されることから、前者区域に含まれる3か所のトレンチを6~8区、後者区域の橋脚部と側道部トレンチを9~10区とした。調査面積は21-1発掘調査が1,848㎡、22-1発掘調査が1,875㎡である。

なお今回の調査ではトレンチ名称を用いず、区名称を用いた。これは19年度・20年度調査の際に付されたトレンチ名称との重複による混乱を避けるためである。以下のページでは、特に図キャプション等で調査区名称を示す際に、調査年度-調査年次-区順で表記する。たとえば21年度に調査した1区の場合は、21-1-1とする。

現代の盛土や近世以降の耕作土・整地層をバックホウで慎重に掘削・除去し、それ以下の遺物を含む中世以前の遺物包含層を人力で掘り下げた。人力掘削は、主にスコップ・鋤簾などを用いて土層を確認しながら慎重に行い、遺構面を検出した。遺構は遺構面を鋤簾・草刈鎌等で表面の土を薄く削って検出し、遺構等を掘削した後、図面と写真による記録保存をはかった。

平面図の作成においては基本的に最終遺構面検出後、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。その後掘削・調査した弥生時代方形周溝墓の周溝や、21-1-4区・5区最終遺構面は三次元レーザ測量で記録し、平面図を作成した。主要な遺構については20分の1、または10分の1の平面・断面図を個別に作成した。土層断面においては20分の1の土層断面図を手測り、ないしオルソ画像を基に作成した。遺構概略図や補足的な平面実測図作成にあたっては、トータルステーションを用いた。各調査区の発掘調査終了時には大阪府教育庁の現地立会を受け、調査成果に関する行政指導を仰いだ上で調査を完了し、事業者および施工業者に引き渡した。

写真撮影は、遺構面の全景や主要な遺構を対象に6×7cm判の白黒フィルム・リバーサルフィルムによるアナログ写真撮影を行い、全般的な写真記録としてデジタル一眼レフカメラによるデジタル撮影を併用した。デジタル撮影データについてはRAWデータとJPEGデータのファイル形式で保存した。

出土遺物は調査区・層位・遺構ごとに地区割と出土年月日に基づいて、センター所定の遺物取り上げ用ラベルに出土情報を記載したものを添付して取り上げた。その後、遺物ラベルごとに登録番号を付し、登録台帳を作成した。登録番号は調査名ごとに、おおむね時系列に通し番号を付した。

整理作業および収納 発掘調査と並行しながら現場詰所において、出土遺物の洗浄・乾燥・注記などの基礎整理作業の大半を終了した。発掘調査終了後、令和5年1月から東大阪市長田所在の中部調査事務所にて整理作業を実施した。実測対象遺物を抽出し、遺物実測図を作成するとともに、必要なものに関しては石膏復元を行った。実測対象遺物はその種類や形態・残存状態等により、それを包含する遺構や層位の所属年代や特性を把握するための手がかりとなり得るものである。遺物実測はセンター所定のセクションペーパーを使用し、ファイリングして保管している。遺物実測図はスキャンおよびアドビ社の

PhotoshopCS 6 を用いてデジタルデータ化し、アドビ社の IllustratorCS 6 を用いて浄書し、実測図版の版組にも用いた。調査現場において実測した図面も同様の方法を用いてデジタル化し、挿図を作成した。その他に空中写真測量や3次元測量、写真測量などで作成したデータは、直接 Illustrator で読み込めるファイル形式に整え、データを調整または浄書して挿図に用いた。

写真図版で用いた写真のうち現地で撮影した写真は、デジタルカメラで撮影したものから選び、画像を適宜調整して掲載した。遺物写真撮影は実測遺物の中から重要性の高いものや、残存状態がよく全体の形状や風合いがとらえやすいものを抽出した。写真図版でのみ掲載したのももわずかにある。

報告書の編集はアドビ社製 IndesignCS 6 で行い、印刷に際してはデジタルデータで出稿した。

出土遺物のうち、本報告書に掲載した遺物には実測番号と報告書掲載番号を付し、実測・掲載遺物台帳に登録した。出土遺物は報告書掲載遺物、報告書不掲載遺物ともコンテナ等に収納し、掲載遺物・不掲載遺物ごとにコンテナ番号を付し、上記台帳で管理する他、収納リストを別に作成した。

撮影写真についてはフィルムと密着プリントをアルバムに収め、デジタルデータはハードディスクに保存している。出土遺物や写真の台帳は Microsoft 社の Excel で作成し、適切に保存・管理を行っている。作成した各種図面類は断面図・平面図といった種類ごとに分けてファイリングし、それぞれに通し番号を付した。

自然科学分析 発掘調査・遺物整理の過程で古環境や年代の検討を目的として自然科学分析を実施した。分析項目は年輪年代測定と大型植物遺体同定である。年輪年代測定は第7層以下の層に含まれていた自然木を対象とし、当遺跡で人的な活動が活発化する以前の地層形成がどのような時間軸の中で進行したかを知る目的で、名古屋大学に測定を依頼した。これにより非常に有益な情報を得ることができた。大型植物遺体同定は遺跡周辺の植生やその利用状況を知ること、また生活環境の時期的変遷を知ingことを目的として、古代の森研究舎に分析を委託した。これらの成果は第5章で掲載している。

保存処理 出土遺物のうち重要性が高く、水付け保存では漆膜の剥落などの変形・劣化を免れないと判断された古代の漆器に対し、大阪府教育庁文化財保護課と協議の結果、保存処理業務を委託事業として実施することが決定し、令和5年5月～11月の期間で保存処理を行った。木器保存処理方法のうち、漆膜に対する負担や剥落が生じにくいと判断される糖アルコール含浸法による処理を株式会社古環境研究所に委託し実施した。

第4章 調査成果

第1節 基本層序(図4)

今回の調査地は比較的最近まで耕地として利用されてきた場所で、現地形はおおむね平坦である。大局的にみればこれは、自然の堆積作用に加えて中～近世以降の耕地造成に伴い、微地形の凹凸が均された結果ととらえられる。最終遺構面である無遺物層上面の標高を比較すると、阪急電鉄および東海道新幹線線路から国道171号線までの間に位置する6～8区ではT.P.+7m程度なのに対し、JR線路近くに位置する9区は、それより数十cm標高が高い。それらの調査区に挟まれる21-1発掘調査範囲では、1区を中心に最深部がT.P.+4m弱まで大きく落込み、5区・10区ではその落込みに向けての傾斜部分を検出した。必然、近～現代耕作土・床土から無遺物層上面までの土層の堆積状況や層厚は、旧地形に応じて異なる。

6～8区は自然堤防状の微高地にあたり、弥生時代には墓域、古墳時代～中世にかけての時期には断続的に集落域として、中世後半以降は主に耕作域として利用されてきた。一方、21-1発掘調査区のうち、2区を除いた部分を南西から北東に横断するように延びる溝状の落込みは、前述した微高地の縁辺をかすめるように流れていた旧河道の最終形態とみられる。河道変更に伴いその機能を失った後は、湿地として河道痕跡が残されたとみられる。それは積極的に手を入れられることなく、しばらくは湿地ないし窪地として放置されていたとみられる。

この河道痕跡の埋積土や整地層から、隣接する集落居住域から転入もしくは混入したとみられる縄文晩期から中世にかけての遺物が出土した。河道痕跡より西および北の低位段丘縁辺部もしくは扇状地末端部は、前面する窪地や低地をかさ上げし、かつ丘陵部へ向けての傾斜を平坦化して耕作面積を広げるため、大規模に削平されたとみられる。そのため9区では第1層を除去した段階で、おおむね無遺物層上面が露出し、第2層は局所的にみられる状況だった。このように6～8区と、旧河道痕跡が大きく占める1・3・5区とで基本層序は大きく異なる。現時点では第2層より下の土層の相関関係を具体的にとらえることができないのに加え、その前後関係を明確にすることも困難なため、第2層より下の層に関しては6～8区とその他の調査区とで区別して層序を述べる。両者の違いが明確なように、6～8区においては第2層より下層を第③層・第④層と丸囲みのアラビア数字で表記するが、その他の調査区では第3層・第4層・第5層・第6層と表記する。第1層・第2層に関しては、全ての調査区で通行の土層とする。なお22-1発掘調査ではいずれの調査区でも、近～現代耕作土の上に1m強の厚さの盛土を認めたが、これは高速道路建設等に伴う工事に先立って敷設されたもののため、基本層序には含まない。

近～現代耕作土層・床土

第1層：近世の耕作土と床土である。おおむね全ての調査区で認められ、層厚は薄いとこで10cm強、厚いとこで40cm強と差がある。概して21-1発掘調査区で厚い傾向がみられるのは、少しでも耕地の水はけをよくするため、近世においても継続的にかさ上げが図られた結果と考えられる。一方、9区・10区で薄い傾向がみられるのは、近～現代に耕作土を耕起する際にすきこまれたためと考えられる。

第2層：中世後半から近世にかけて形成された耕作土層もしくは整地層。薄いとこで数cm程度、厚い

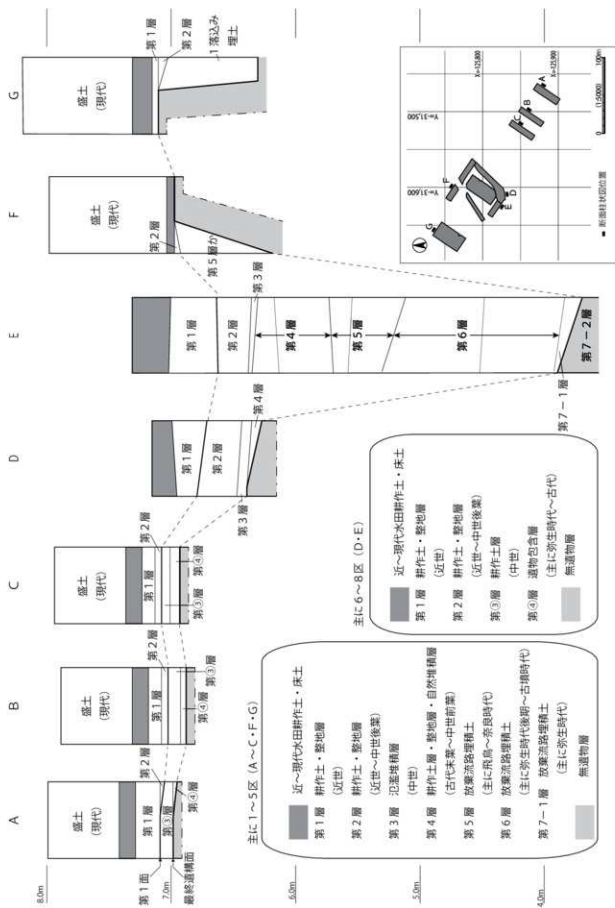


図4 基本層序模式図

ところでは70cmにおよび、複数枚の耕作土層の累積で構成される部分もある。8区・9区においては局所的な分布だったのに加え、層厚も極めて薄い傾向がみられた。10区では無遺物層上面の標高が下降する南西角部分においてのみ検出した。一方、21-1発掘調査区においては放棄流路中央部で厚みを増す。このように第2層を介することで、近世の耕作面がより平坦化されたことがわかる。土師質羽釜・須恵器・陶器等を含有し、13～14世紀代のものが大半を占め、ごく微量だが12世紀代のもものや15世紀以降のものも含む。

[1～5区]

第3層：氾濫堆積層が土壌化した層で、その度合いや土質により、数枚に細分できる。東および北に向けて徐々に厚みを増す傾向がみられる。標高がT.P. + 6.5 m前後の範囲に分布しており、それより高い地盤では認めなかった。第3層を認めなかった部分は微高地にあっており、第3層を生じさせた洪水の影響を直接的には受けなかったか、氾濫堆積層の被覆を受けたものの、その後の耕作にともなって耕作土層に取り込まれたと考えられる。12～13世紀の瓦器・青磁・白磁の破片に加え、弥生時代～古代の摩滅した土器片が出土した。

第4層：整地層・耕作土層・自然堆積層の互層。大略2層に分けることができる。放棄流路に起因する窪地を中心に堆積し、21-1発掘調査区においては2区を除いてほぼ全域に分布する。現地盤の標高が低い部分で厚い傾向がみられた。自然堆積層は氾濫堆積層を基調とするが、窪地が一時的に水のおり道となった際に堆積したとみられる流水堆積層も含まれる。整地層は旧河道痕跡の低地をかさ上げし、耕地造成するために敷設されたと考えられるが、自然堆積層の被覆により耕作は部分的かつ断続的だったとみられる。古墳～奈良時代の須恵器・土師器・瓦等の含有量が多く、白鳳期の重弧紋軒平瓦も出土した他、古代末葉から中世前葉の遺物も含まれる。

第5層：自然堆積層。放棄流路の埋積土で、大略2層に分けられる。植物遺体は含まないが、有機物や炭化物粒を多く含み、黒色化する。飛鳥～奈良時代の須恵器・土師器・瓦類の含有量が最も多いが、弥生～古墳時代の遺物も含む。この層からの出土遺物にはあまり摩滅しておらず、残存状態のよいものが含まれる傾向があり、白鳳期の重弁連華紋軒丸瓦もこの層から出土した。

第6層：自然堆積層。放棄流路の埋積土で、最深部では大略2層に分けられる。上層は植物遺体を多く含むシルト層、下層はラミナ構造が顕著でかつ上層よりも植物遺体を多く含む。縄文時代晩期～古墳時代の遺物を含み、時期判別が可能なものは古墳時代・弥生時代が多数を占める。

第7層：自然堆積層。放棄流路の埋積土で、第6層に比べて明瞭に砂粒の粒径が大きく、粘性も弱い。大略3層に分けられるが、第6層と第7-2層の中間的な土質である第7-1層の分布域は谷の西側斜面裾部に限られ、局所的である。第7-2層以下は無遺物層である。

・第7-1層 放棄流路の埋積土で、谷の西側斜面裾部のみ分布。植物遺体を多く含む微～細砂。4区・5区では第7-1層から弥生時代後期後半～古墳時代の遺物の他、縄文時代晩期の土器片が出土した。1区・3区においてはこれに対応するとみられる層から遺物は検出しなかった。自然木を多く含む。

・第7-2層 放棄流路の埋積土で無遺物層。この層の堆積段階では周囲に人の活動領域がほとんど及ばなかった可能性が高いと考えられる。自然木を多く含む。

・第7-3層 自然堆積層で無遺物層。第7-2層より砂粒が粗く、小礫を含むため上層よりは硬くしまった印象を受ける。第7-2層との層界が明瞭で、旧河道埋土の最上面の可能性があると考える。

自然木を多く含む。

無遺物層：放棄流路埋土の第7 - 2層以下が無遺物層であるため、意味的には重複するが、放棄流路埋土が及ばない部分や放棄流路の流末を埋めるように堆積した層を最終遺構面の基盤層とする場所では、それが第7 - 2層以下とは異なることを示すためにこの表記を用いた。

主体となるのは浅黄橙の微砂混シルトで、次節第2項でとりあげる粘土探掘の対象となっているのはこの層である。

[6～8区]

第③層：中世の耕作土層。層厚は50cm前後で、当該調査区のほぼ全域に分布する。層厚は8区から7区に向けて徐々に厚みを増す傾向があり、2層に細分できる所もある。主に古代末葉～中世の遺物を多く含むが、古代以前の時代の遺物も含む。

第④層：弥生時代～古代の遺物を主体的に含む遺物包含層。当該調査区のほぼ全域に分布し、北西方向に向けて層厚が厚くなる傾向がみられた。層厚が40cmに達する部分では2層に細分できる所もある。その反面、極めて薄いか認められない部分もあり、中世以降の耕作に伴いすきこまれた部分もあったとみられる。

無遺物層：主としてみられるのは浅黄橙の微砂混シルトで、氾濫堆積層の上部に堆積する層とみられる。鉄塔脚部や埋設管の設置により生じたかく乱坑を周囲より一段掘り下げた際などに、その下部の様子を観察したところ、下方に向けて徐々に砂粒が大きくなるとともに、粘性が弱くなる傾向がみられた。さらにそれより下方に向けては砂粒が細くなり、粘性が強くなり黒色化した、かつての地表面に形成された土壌化層とみられる土層を認めた所もある。

浅黄橙の微砂混シルト層は8区に向けて層厚が薄くなり、第④層除去段階で灰白色細砂層が露出する所もみられた。このことから8区に向けてかつての微高地の標高が高まるのは明らかである。かつての微高地最上部では、後世の造成に伴い氾濫堆積層の上部がより大きく削平されたと考えられる。

この微高地の北裾部を検出した5区南東端部から4区南西端部にかけてでは、この浅黄橙微砂混シルト層より下部の砂質土層は放棄流路埋土に類似しているため、両者が接する部分では堆積の前後関係を明確に区別することができなかった。ただ4区における11溝の貫入とその基盤層との関係や、放棄流路断面の観察等から、基本的に放棄流路の埋積土を覆うように6～8区の無遺物層上面でみられる浅黄橙の微砂混シルト層が堆積したものと考える。

第2節 21 - 1 - 1～5区の遺構と遺物

第1項 層序

調査地一帯は耕地が広がり、現状ではほぼ平坦な地形を呈するが、発掘調査によって下層の状況が明らかになると、21 - 1調査地を縦断するように大規模な流路痕跡が残存することがわかった。併せて放棄流路に起因する低地部とそれ以外とで、それ以降の土層堆積状況が大きく異なることがわかった。

放棄流路に起因する低地部としたのは最終遺構面で検出した谷状の落込みである。それは北摂山系に源を発し、その南斜面を開析しながら南流していた流路が、流路変更に伴って機能を失った後に残されたものとみられる。以下で述べる旧流路に関する所見や、放棄流路の埋積過程等に対する説明は、調査区の側壁等を対象にした土層断面の観察と遺物の出土状況を基にしている。各層の概要は前節を、調査区ごとの詳細は図5～17を参照されたい。放棄流路の埋積過程は第3項で詳述する。

第4章第1節で述べたように放棄流路は、増水時には一時的に水のとおり道となるものの、通常は水はけの悪い湿地だったため、しばらくはほとんど手を付けられることなく放置されていたとみられる。その湿地が周辺の河川氾濫による土砂流入や、耕地造成に伴う整地によって徐々に埋まり、かさ上げされ、本格的に耕地として利用されるのは中世後半以降のこととみられる。放棄流路に起因する窪地は、耕地化以降もしばらくは耕地地区画にその痕跡が残され、それがほぼ完全に均されたのは近世以降とみられる。

一方、放棄流路周辺の微高地部分や、丘陵斜面裾部に連なる扇状地末端部分では大規模な削平を受けていたことがわかった。そのような状況は中世後葉～近世にかけての、一帯を覆う全面的な耕地開発が行われた際に連動して生じた現象ととらえられる。

今回の調査では遺構面を2面検出した。第1面は第1層を除去した段階で検出した、第2層を基盤層とする面である。ただ放棄流路の北西側、つまり丘陵側に位置する2区では先述したように大規模な削平を受けており、耕作土・床土を除去するとおおむね無遺物層を基盤とする最終遺構面に達した(図17)。この面で検出したピット・土坑は、遺物の出土状況や切り合い、埋土の土質などから、少なくとも中世と古代の2時期に分けられるが、同一面で検出したものであることからそれらをあえて弁別することはせず、最終遺構面検出遺構として一括して後述する。

第2項 第1面の遺構

第1面の基盤層である第2層は、3区の北半部や2区を除いたほぼ全域に分布するが、その上面で遺構を検出したのはおおむね1区とその近辺だった(図18)。第1面で検出した遺構には土坑、溝、ピット等がある。

第1面で検出した遺構のうち最も顕著なのは、1区の北縁から西縁にかけての部分で逆L字状に連続して並ぶ、長方形もしくは楕円形の土坑である。それらが位置するのは最終遺構面(図21)と比較すると、放棄流路の肩部もしくはそれに近い斜面部分に当たる。換言すればそれらの土坑の分布範囲は、無遺物層上部に堆積する微砂混粘質シルト層までの深さが比較的浅い所である。いずれの土坑も底部が、無遺物層上部より深いところまでおよんでいたことから、梶原西遺跡や上牧遺跡におけるこれまでの調査で多数検出されている、粘土採掘土坑に類するものと考えられる。ただそれらの調査で検出した粘土採掘坑の形状と比較すると、大きさや深さ・形状に若干の相違が認められる。今回の調査で検出した粘土採掘坑とみられる土坑の形状や深さを具体的にみると以下のとおりである。

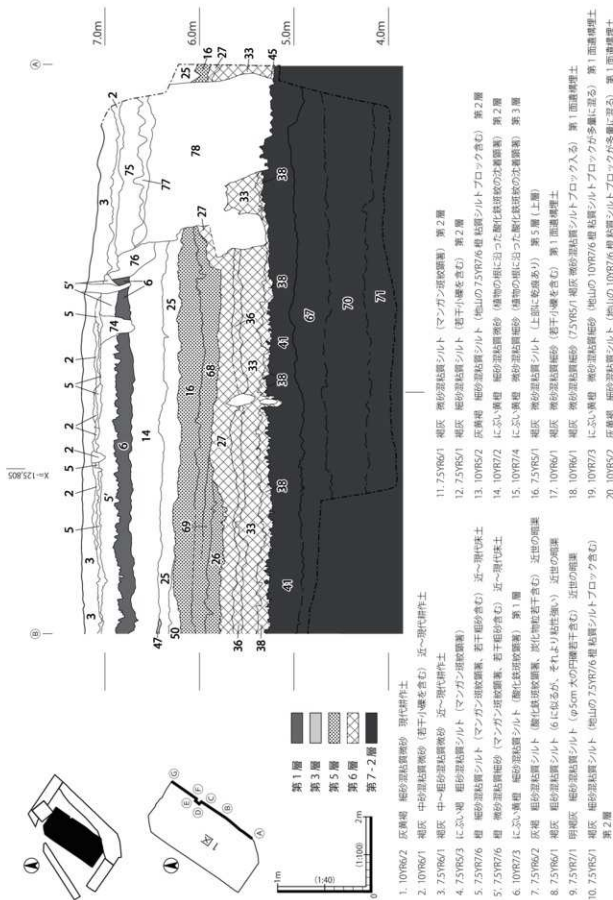


図5 21-1-1 東壁土層断面図(1)

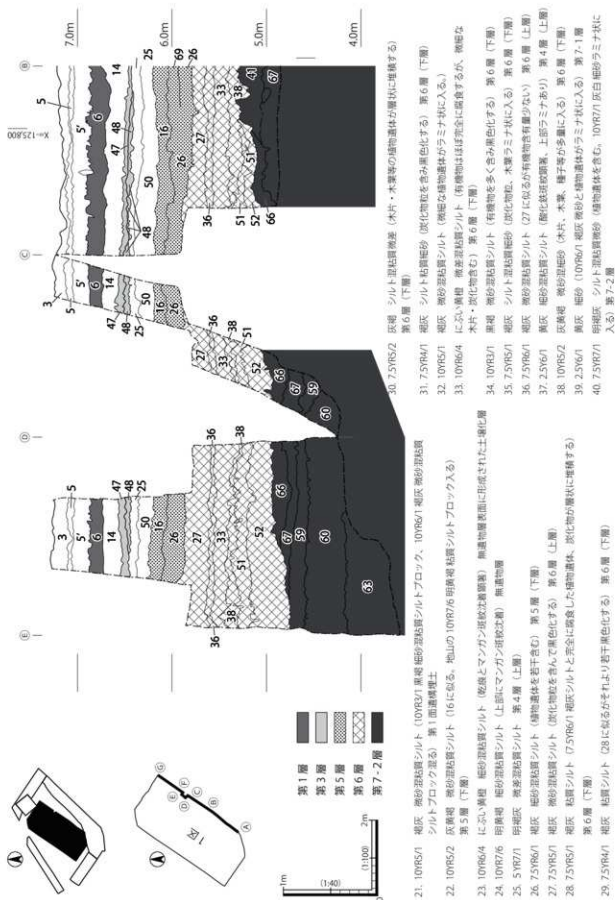


図6 21-1-1 東壁土層断面図(2)

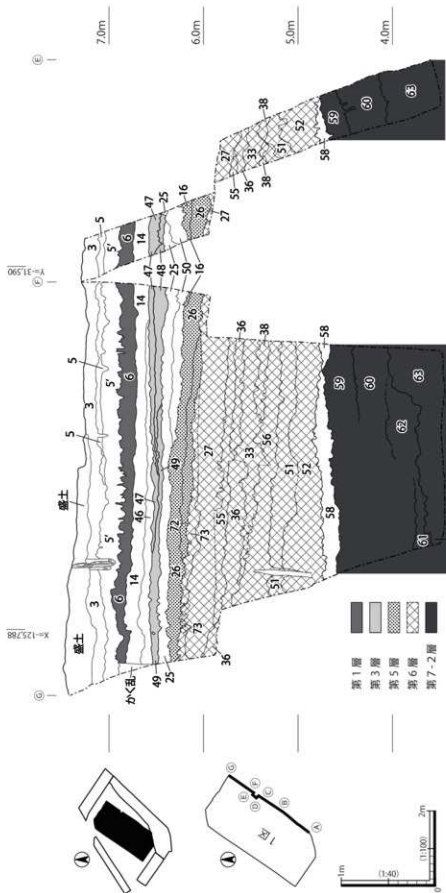


図7 21・1・1 東壁土層断面図(3)

41. 10/R6/2 灰黄褐 細砂混粘質シルト (木葉と炭化物がラミナ状に入る) 第7-2層
 42. 2.5/R6/1 黄灰 中砂混漚～細砂 (2.5/R6/2 灰白～灰白～中砂がラミナ状に入る。壁跡へむけて粗粒化) 第7-2層
 43. 10/R7/6 明黄褐 シルト混粘質細砂 第3層
 44. 10/R8/4 浅黄褐 細砂混粘質細砂 第3層
 45. 10/R5/1 相灰 細砂混粘質シルト (木片・木葉等の植物遺体を含む) 第6層 (下層)
 46. 10/R7/1 灰白 細砂混粘質シルト (粗粒若干含む) 第2層
 47. 10/R7/6 明黄褐 シルト混粘質細砂 (炭化物乾着を含む) 第3層
 48. 10/R7/3 土に近い黄褐 細砂混粘質細砂 第3層
 49. 10/R6/4 土に近い黄褐 細砂混粘質シルト 第3層
 50. 10/R6/1 相灰 細砂混粘質シルト (土層に似るがそれより砂の含有量多い) 第4層 (下層)
 51. 2.5/R7/2 灰黄 粘質シルト (炭化物がラミナ状に入る) 第6層 (下層)
 52. 2.5/R6/1 相灰 細砂混粘質シルト (木片・木葉等の植物遺体を含む) 第6層 (下層)
 53. 2.5/R6/1 相灰 細砂混粘質細砂 (木片・木葉等の植物遺体を含ま) 第6層 (下層)
 54. 10/R6/1 相灰 粘質シルト (炭化物が入る。下部ほど黒色化する) 第6層 (土層)
 55. 10/R5/1 相灰 細砂混粘質シルト 第6層 (上層)
 56. 10/R7/1 灰白 粘質シルト (微細な植物遺体・炭化物粒を含む) 第6層 (下層)
 57. 10/R6/1 相灰 粘質シルト (6) に似るがそれより黒色化する) 第1層

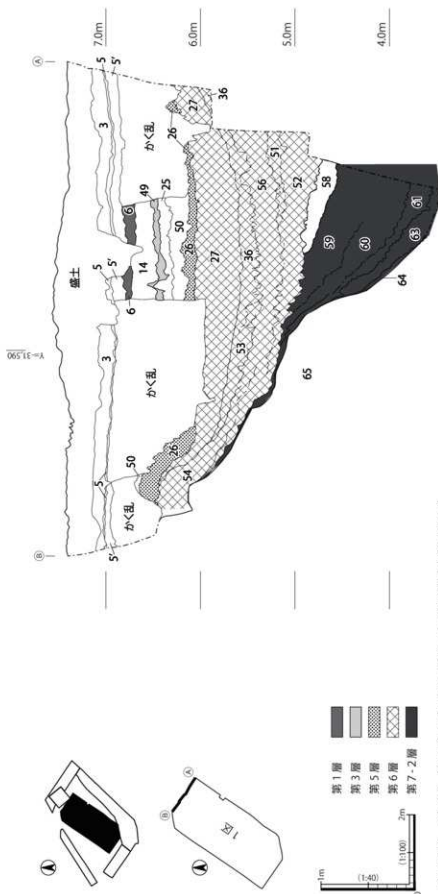


図8 21・1・1 北壁土層断面図

58. 10YR7/3 にふい草層 榎～柾砂 (下方に向けて粗粒化。木片等の植物遺体が若干混入する) 第7-1層相当
59. 10YR6/2 灰黄緑 褐色泥炭砂 (10YR7/2 にふい草層 榎砂からミナホに入る) 第7-2層
60. 2.5Y5/2 暗灰黄 褐色泥炭砂 (10YR7/2 にふい草層 榎砂からミナホに入る) 第7-2層
61. 2.5Y6/2 灰 中砂泥炭砂 (木片等の植物遺体と 10YR6/2 灰黄 シルトからミナホに入る) 第7-2層
62. 10YR6/1 暗灰 褐色泥炭砂 (60と63の中間的粘土質) 第7-2層
63. 10YR7/2 にふい草層 褐色泥炭砂 (10YR6/2 灰黄層 褐色泥炭シルトからミナホに入る) 第7-2層
64. 2.5Y7/2 灰黄 榎～柾砂 (ラミナ構造を呈する) 第7-2層
65. 10YR7/4 にふい草層 褐色泥炭砂 (直径3cm以下の円礫を含む) 第7-3層
66. 10YR7/1 灰白 褐色泥炭質シルト 第7-2層
67. 2.5Y7/1 灰白 シルト～細砂 (木片・種子等の植物遺体ラミナ状に入る。下方へ粗粒化) 第7-2層
68. 2.5Y5/1 黄灰 褐色泥炭質シルト (中砂・灰化微粒を若干含む) 第5層 (上層)
69. 10YR6/1 暗灰 粘質シルト (10YR7/1 灰白シルトと灰化微粒からミナ構造を呈する。特に下部で顕著) 第5層 (上層)
70. 10YR6/2 灰黄緑 褐色泥炭砂 (10YR7/1 灰白シルトと灰化微粒からミナ構造を呈する) 第7-2層
71. 10YR7/2 にふい草層 榎～柾砂 (微小な植物遺体がラミナ構造を呈する) 第7-2層
72. 10YR6/1 暗灰 褐色粘質シルト 第5層 (下層)
73. 7.5YR5/1 暗灰 褐色粘質シルト (灰化微粒を含む) 第6層 (上層)

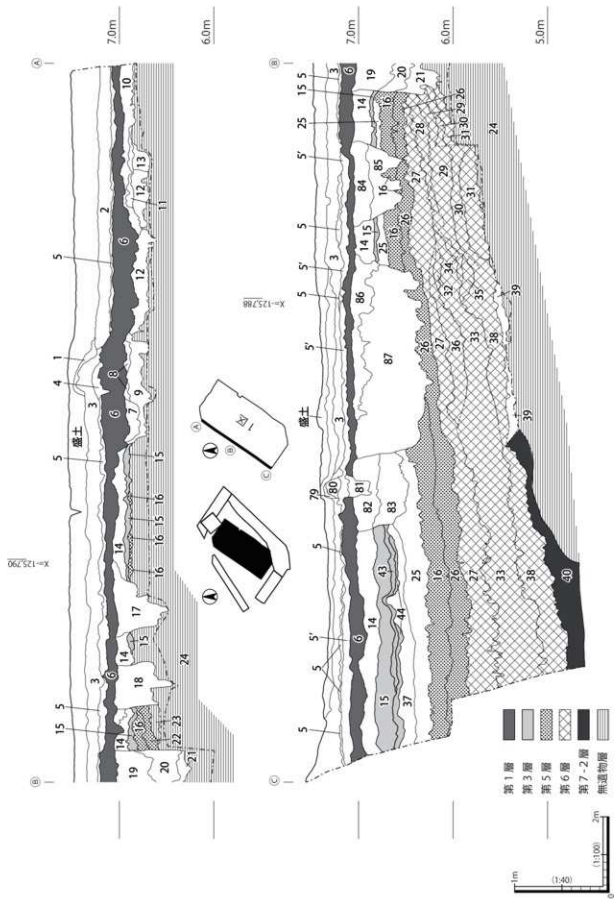


图9 21·1·1 西壁土層断面图

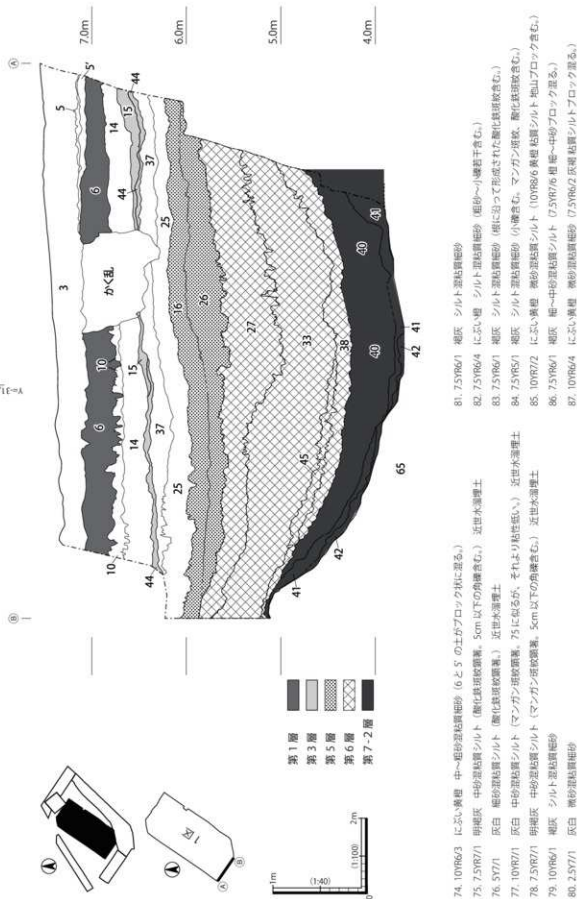


図 10 21 - 1 - 1 南壁土層断面図

74. 10R6/3 に近い黄壤 中～粗砂混粘質細砂 (6と5の土がブロック状に混る.)

75. 75R7/1 明泥灰 中砂混粘質シルト (酸化鉄斑状噴霧, 5cm以下の角礫含む.) 近世水運埋土

76. 5Y7/1 灰白 細砂混粘質シルト (酸化鉄斑状噴霧) 近世水運埋土

77. 10R7/1 灰白 中砂混粘質シルト (マンガン斑状噴霧, 75に似るが, それより粘性低い.) 近世水運埋土

78. 75R7/1 明泥灰 中砂混粘質シルト (マンガン斑状噴霧, 5cm以下の角礫含む.) 近世水運埋土

79. 10R6/1 明泥灰 シルト混粘質細砂

80. 25Y7/1 灰白 細砂混粘質細砂

81. 75R6/1 明泥灰 シルト混粘質細砂

82. 75R6/4 に近い細 シルト混粘質細砂 (粗砂～小礫混平含む.)

83. 75R6/1 明泥灰 シルト混粘質細砂 (角に沿って形成された酸化鉄斑状噴霧含む.)

84. 75R5/1 明泥灰 シルト混粘質細砂 (小礫含む, マンガン斑状噴霧, 酸化鉄斑状噴霧含む.)

85. 10R7/2 に近い黄壤 細砂混粘質シルト (10YR6/6黄壤 粘質シルト 地山ブロック含む.)

86. 75R6/1 明泥灰 粗～中砂混粘質シルト (75R7/6粗～中砂ブロック混る.)

87. 10R6/4 に近い黄壤 細砂混粘質細砂 (75R6/2灰黄粘質シルトブロック混る.)

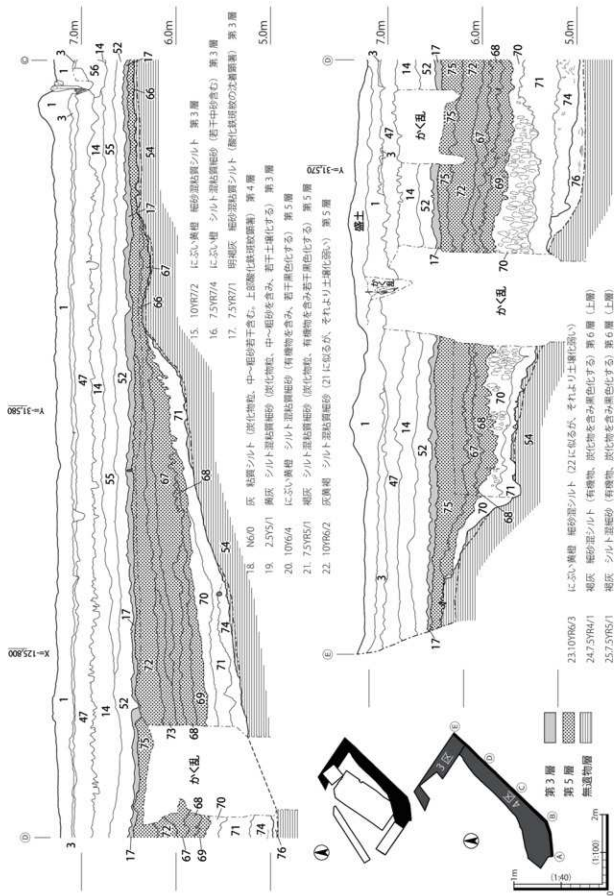


図12 21 - 1 - 4・3 東壁土層断面図

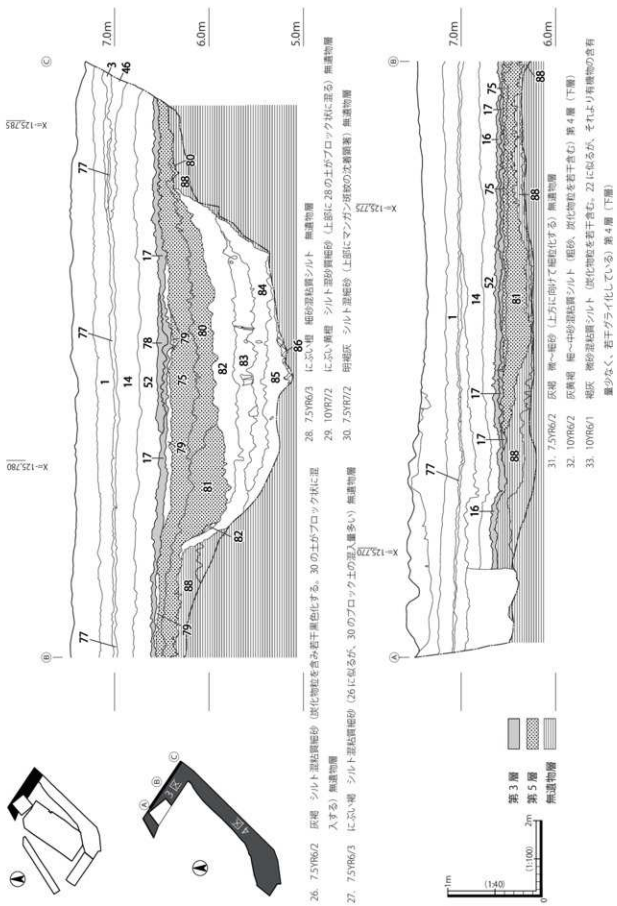


図13 21 - 1 - 3 北壁土層断面図

26. 7.5YR6/2 灰褐色 シルト凝結質細砂 (炭化物粒を含み若干黄色化する。30の土がブロック状に置入する) 無遺物層
27. 7.5YR6/3 にふいふ シルト凝結質細砂 (6に似るが、30のブロック土の混入量多い) 無遺物層
28. 7.5YR6/3 にふいふ 細砂凝結質シルト 無遺物層
29. 10YR7/2 にふいふ層 シルト凝結質細砂 (上部に28の土がブロック状に置入) 無遺物層
30. 7.5YR7/2 暗褐色 シルト凝結質細砂 (上部にマンガング斑紋の沈着層あり) 無遺物層
31. 7.5YR6/2 灰褐色 塊状細砂 (上方に向けて細粒化する) 無遺物層
32. 10YR6/2 灰褐色 細中砂凝結質シルト (粗砂、炭化物粒を若干含む) 第4層 (下層)
33. 10YR6/1 相沢 細砂凝結質シルト (炭化物粒を若干含む。22に似るが、それより粘着物の含有量少なく、若干グライ化している) 第4層 (下層)

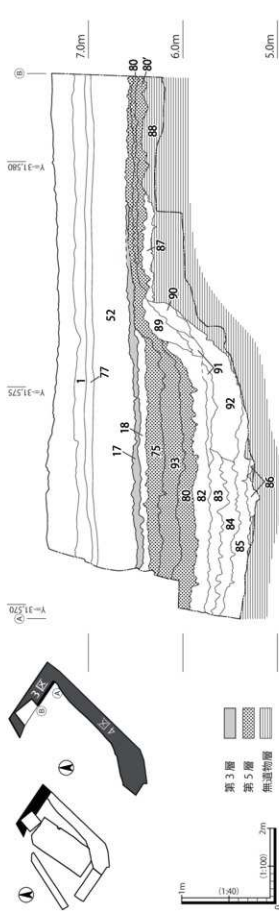


図 14 21 - 1 南壁土層断面図

- | | | | |
|-------------|------|---|--------------------------|
| 34. 10TR6/3 | 白 | 無砂混結質シルト (24に似るがそれより粘性強い) | 第 6 層 (上層) |
| 35. 10TR5/2 | 灰黄緑 | 無砂混結質シルト (小礫、木片等の植物遺体を多く含む黒色化する) | 第 6 層 (下層) |
| 36. 10TR4/1 | 黄緑 | シルト混結質細砂 (木片、種子等の植物遺体を多く含む) | 第 7 - 1 層 |
| 37. 10TR6/1 | 褐灰 | 無砂混結質シルト (炭化物を含み、上部が若干土壌化する) | 第 7 - 1 層 |
| 38. 10TR5/1 | 褐灰 | シルト混結質細砂 (炭化物、植物遺体を多く含む。下部に泥~中砂のラミナ状部あり) | 第 7 - 1 層 |
| 39. 10TR6/1 | 褐灰 | 無砂混結質シルト (炭化物、植物遺体を多く含む。38との境界は不明瞭) | 第 7 - 1 層 |
| 40. 10TR7/1 | 灰白 | 無砂混結質細砂 (炭化物、植物遺体を若干含む若干グライ化する) | 第 7 - 1 層 |
| 41. 10TR6/1 | 灰 | 無砂混結質シルト (泥に移行するにつれて砂の含有量が増す) | 第 4 層 (下層) |
| 42. 5TR6/1 | 灰 | シルト混結質細砂 (41に似るがそれより土壌化がすむ) | 第 4 層 (下層) |
| 43. 25TR6/1 | 黄灰 | シルト混結質細砂 (42に似るがそれより粘性強い) | 第 4 層 (上層) |
| 44. 25TR7/1 | 灰白 | 無砂混結質シルト (木片、植物遺体を多く含む。上部が若干黒色化する) | 第 5 層 (上層) |
| 45. 25TR7/1 | 褐灰 | 無砂混結質細砂 近~現代耕作土 | |
| 46. 25TR6/1 | 灰褐 | 中砂混結質細砂 (1cm以下の円礫を若干含む、マンガン塩酸腐葉) 近~現代耕作土 | |
| 47. 25TR5/2 | 灰黄緑 | 無砂混結質シルト 近~現代耕作土 | |
| 48. 10TR6/2 | 灰白 | 無砂混結質シルト (炭化物がラミナ状に入る) | 第 6 層 (下層) |
| 49. 10TR7/1 | 褐灰 | 無砂混結質細砂 | |
| 50. 10TR6/1 | 多(い) | 第 6 層 (下層) | |
| 51. 75TR5/1 | 褐灰 | 無砂混結質シルト (炭化物粒、植物遺体がラミナ状に入る) | 第 6 層 (下層) |
| 52. 75TR7/1 | 明灰 | 無砂混結質シルト (14に似るがそれより粘性強い) | 第 2 層 |
| 53. 10TR6/2 | 灰黄緑 | 無砂混結質シルト (54の土壌化が若干進んだもの) | |
| 54. 10TR6/3 | 白 | 黄緑 | 無砂混結質シルト (酸化鉄斑散在あり) 無遺物層 |
| 55. 25TR6/1 | 黄灰 | 無砂混結質シルト (52に似るがそれより粘性強い) | |
| 56. 10TR6/1 | 灰 | 無砂混結質細砂 | |
| 57. 25TR5/2 | 明灰 | 無砂混結質細砂 | |
| 58. 75TR5/2 | 灰褐 | 無砂混結質シルト | |
| 59. 25TR6/2 | 灰黄 | 結質シルト (炭化物粒を若干含む) | |
| 60. 10TR7/4 | 白 | 無砂混結質シルト (酸化鉄斑の沈着層) | |
| 61. 75TR5/1 | 褐灰 | 無砂混結質シルト (2.5TR7/2灰黄シルトブロックと炭化物粒含む) | |
| 62. 10TR7/2 | 白 | 無砂混結質シルト (2.5TR7/2灰黄・75TR5/1褐灰シルトブロック含む) | |
| 63. 10TR6/1 | 褐灰 | 結質シルト (2.5TR7/2灰黄・75TR5/1褐灰シルトブロック、炭化物粒含む) | |
| 64. 25TR7/1 | 灰白 | シルト混結質細砂 (5TR5/1褐灰シルトブロック、炭化物、植物遺体含む。下部ラミナあり) | |
| 65. 25TR5/2 | 明灰 | 無砂混結質細砂 | |

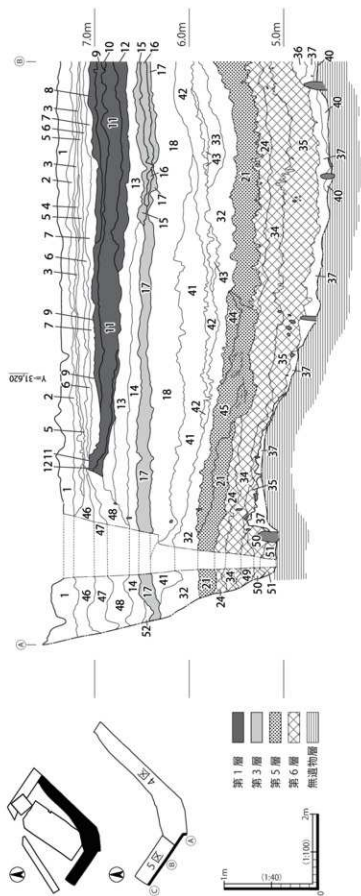


図15 21 - 1 - 4・5 南壁土層断面図

66. 10YR6/3 に近い黄褐色 シルト凝結質細砂 (マンガン埋込顕著) 第5層 (下層)
67. 10YR6/1 褐灰 細砂凝結質シルトブロック、炭化物粒、マンガン埋込含む) 第5層 (下層)
68. 10YR6/2 灰黄褐 シルト凝結質細砂 (炭化物粒、炭化埋込顕著) 第5層 (下層)
69. 10YR6/1 褐灰 結質シルト (10YR6/2 灰黄褐・5Y7/2 灰白シルトブロック含む) 第5層 (下層)
70. 2.5YR5/1 褐灰 シルト凝結質細砂 (5Y7/1 灰白シルトブロックを多量に含む) 11 溝埋土
71. 10YR6/2 灰褐 細砂凝結質細砂 (木片、種子、微小な植物遺体、炭化物粒含む) 11 溝埋土
72. 10YR6/2 灰黄褐 細砂凝結質シルト (2.5Y7/1 灰白シルトブロック、炭化物粒を含む) 第5層 (上層)
73. 2.5YR5/1 褐灰 細砂凝結質シルト (72 に似るが有機物を多く含む黒色化する) 第5層 (上層)
74. 10YR6/2 灰黄褐 細砂凝結質シルト (木片、種子、微小な植物遺体、2.5Y7/1 灰白シルトブロックがラミナ状に入る) 11 溝埋土
75. 2.5Y6/1 黄灰 細砂凝結質 (中砂、炭化物粒若干含む) 第5層 (上層)
76. 5Y6/1 灰 シルト～細砂 (褐色な植物遺体、10YR7/1 灰白 細砂がラミナ状に入る) 11 溝埋土
77. 10YR6/4 に近い黄褐色 シルト凝結質細砂 近～現代住土
78. 2.5Y6/1 黄灰 シルト凝結質細～中砂 (上部にマンガン埋込顕著) 第3層
79. 7.5YR6/1 褐灰 中～粗砂凝結質細砂 (酸化鉄・マンガン埋込若干含む) 第4層
80. 2.5Y5/1 黄灰 粗砂凝結質細砂 (2.5YR7/1 シルトブロック、炭化物粒含む) 第5層 (下層)
81. 10YR6/2 灰黄褐 粗砂凝結質シルト 第5層 (下層)
82. 10YR6/1 褐灰 粗砂凝結質シルト (炭化物粒がラミナ状に入る) 11 溝埋土
83. 7.5YR4/1 褐灰 粗砂凝結質シルト (木片・種子等の植物遺体を多量に含む) 11 溝埋土
84. 7.5YR5/1 褐灰 粗砂凝結質シルト (褐色な植物遺体、炭化物粒、5Y6/1 シルトブロック含む) 11 溝埋土
85. 10YR7/2 灰黄 粗砂凝結質シルト (木片・種子等の植物遺体、2.5YR2 シルトブロックを多量に含む) 11 溝埋土
86. 2.5Y5/1 黄灰 粗砂凝結質シルト (赤化油前、2.5YR7/1 シルトブロック含む) 11 溝埋土

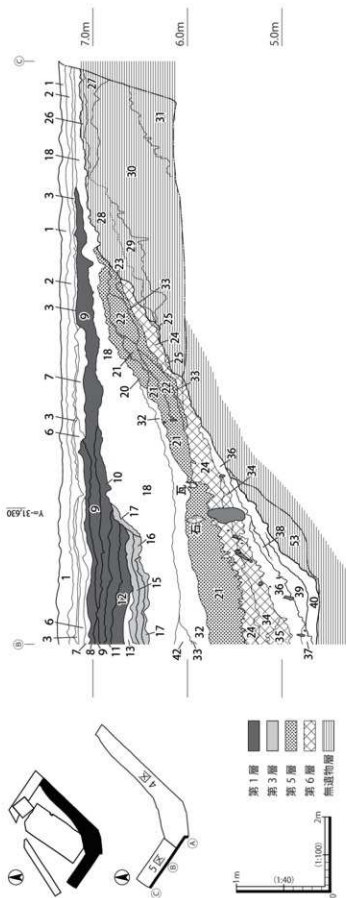


図16 21・1・5 南壁土層断面図

87. 10YR5/2 灰黄褐 細砂混粘質シルト (無遺物層、若干土礫化する。) 11 溝埋土
 88. 10YR8/6 淡黄橙 微砂混粘質シルト 無遺物層
 89. 7.5YR5/3 にぶい褐 シルト混粘質細砂 (酸化鉄斑紋顕著。) 11 溝埋土
 90. 10YR5/2 灰褐 シルト混粘質細砂 (酸化鉄斑紋顕著。帯褐色炭化物粒を含む) 11 溝埋土
 91. 10YR5/1 灰褐 シルト混粘質細砂 (顕著な炭化物粒を含む) 11 溝埋土
 92. 10YR6/2 灰黄褐 微砂混粘質シルト (木片・糠子等の顕著な植物遺体、炭化物粒を含む) 11 溝埋土
 93. 5Y7/1 灰白 細砂混粘質シルト (75 に似るがそれより土礫化弱い) 第5層 (上層)
 94. 10YR6/1 褐灰 10YR7/1 粗砂と 10YR6/1 黄〜粗砂が互層にラミナを形成 (木片等の植物遺体を含む) 無遺物層
 95. 10YR6/1 褐灰 微砂混粘質シルト (炭化物粒を若干含む) 第4層 (下層)

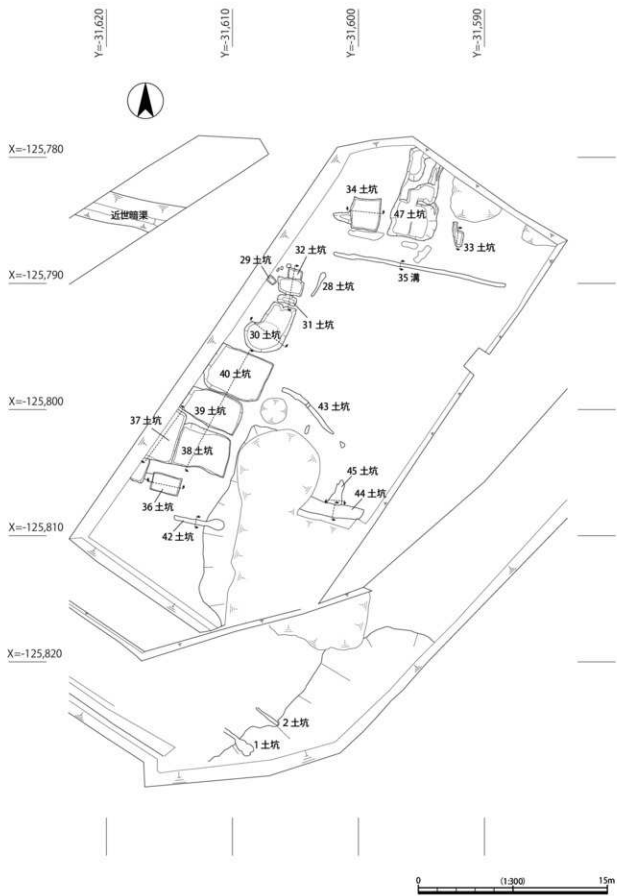


图 18 21 - 1 第 1 面平面图

第1面で検出した土坑の平面形はおおむね長方形で、長楕円形や不整形なものも含まれる。大きさは一辺5m前後と大型のものと、2m前後の小型のもの、その中間的なものがある。

大型の土坑はその規模や平面形状だけをみると、上牧遺跡で検出されたものと類似する。ただ上牧遺跡例は無遺物層の微砂混粘質シルト層を1m強の深さまで掘り抜いているのに対し、当遺跡例はそこまでの深さにはいたっておらず、30～50cm程度を掘り込む深さである。梶原西遺跡例は平面形が一辺2m前後、深さは50cm弱のものが主体である。したがって梶原西遺跡における粘土採掘坑は、当調査で検出した小型の土坑と規模や深さが類似する。一方、当遺跡で検出した大型のものは、深さに関しては梶原西遺跡例に近く、平面形態の点では上牧遺跡例に類似する。以上のことから今回の調査で検出した粘土採掘坑とみられる土坑のうち、大型のものは梶原西遺跡例と上牧遺跡例との中間的な要素をもち、小型のものは梶原西遺跡例に近似するということができる。

これらの土坑埋土から出土した遺物は大半が細片で、古墳時代～中世の土師器・須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦、染付磁器等からなる。出土遺物からみてそれらの土坑は、14・15世紀～近世にかけての時期のものと考えられる。ただ次のような点から、それらの土坑には若干の時期差が含まれるとみられる。

大半の土坑埋土には無遺物層や包含層のブロック土が含まれていたことから、掘削後あまり時間を経ずに人為的に埋められたと考えられるが、34土坑のようにブロック土を含まず、しばらく放置されていたと思われるものもある(図19・20)。33土坑は埋土から須恵器・土師器・火鉢とみられる瓦質土器が出土しており、おそらく14世紀代に帰属するとみられる。また36・37・39・40・47土坑は埋土最上層にのみ近世の染付の破片が混入していたことから、掘削後あまり時間を経ずにあらかじめ埋められたものの、完全に埋まりきらない状態で放置され、近世以後に完全に埋まった可能性がある。一方、30・32・38土坑は埋土最下層に染付の破片が含まれていたことから、それを切っている31土坑とともに近世に掘削された可能性が高い。

以上を勘案すると、今回の調査で検出した粘土採掘土坑とみられる遺構は、上牧遺跡で検出された中世の粘土採掘土坑より掘削時期がさらに降る傾向がみられる。上牧遺跡調査の報告では、淀川対岸の楠葉牧で中世の土器生産が盛んだった点と、楠葉牧が淀川両岸一帯の広い地域を包括していたとされることを勘案し、粘土採掘が土師器や瓦器の粘土素地を獲得するためのものだった可能性が指摘されている。そうであれば当調査区で検出した粘土採掘坑は、楠葉周辺における土器生産が最盛期を過ぎた時期にあたる。そのような理由から、梶原南遺跡では採掘規模に縮小傾向がみられるのかもしれない。

35溝は2区で検出した近世暗渠の延長線上に位置しており、方向軸も一致する。したがってこれらの遺構は耕作痕跡もしくは耕地区画に関連するものと考えられる。35溝埋土出土の須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・磁器はいずれも細片で図化できるものはなかったが、おそらく13世紀後半～14世紀に帰属するとみられる。これらのことから中世後半に成立した耕地区画が近世以降にも踏襲されたことがわかる。なお1土坑は10cm強、2土坑は20cm弱の深さで、いずれの埋土からも遺物は出土しなかった。

第3項 最終遺構面の遺構

最終遺構面は無遺物層を基盤層とする遺構面である。先述したように、2区と3区北端部は中世後葉～近世以降の耕地開発の際に大きく削平されたこととみられ、第1層を除去した段階でおおむね無遺物層上面が露出する状態だった。したがって遺構検出面は最終遺構面のみで行った。この面において21-1調査区を南西から北東に向けて縦断するようにはする放棄流路と、その肩部およびそれに連なる微高地

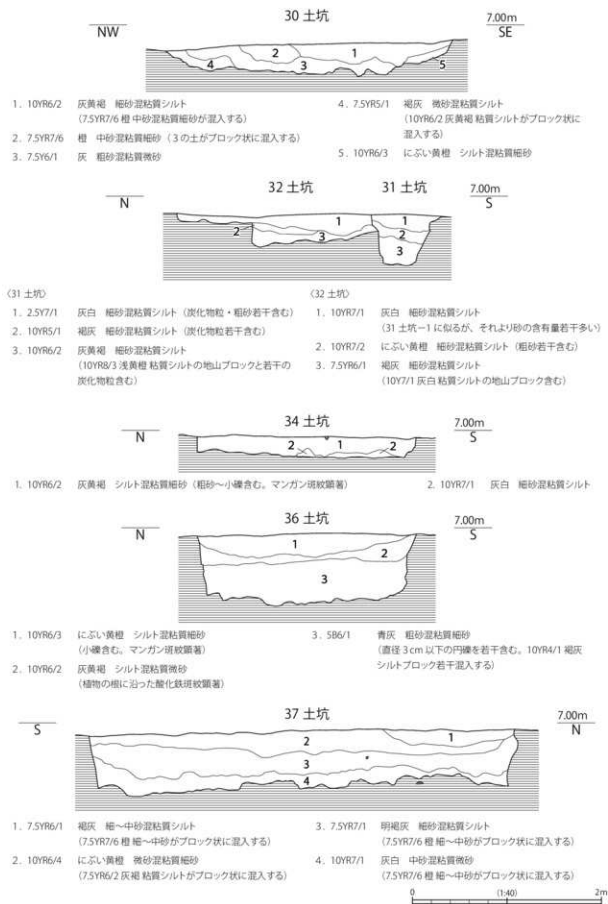


図 19 21 - 1 第 1 面遺構断面図 (1)

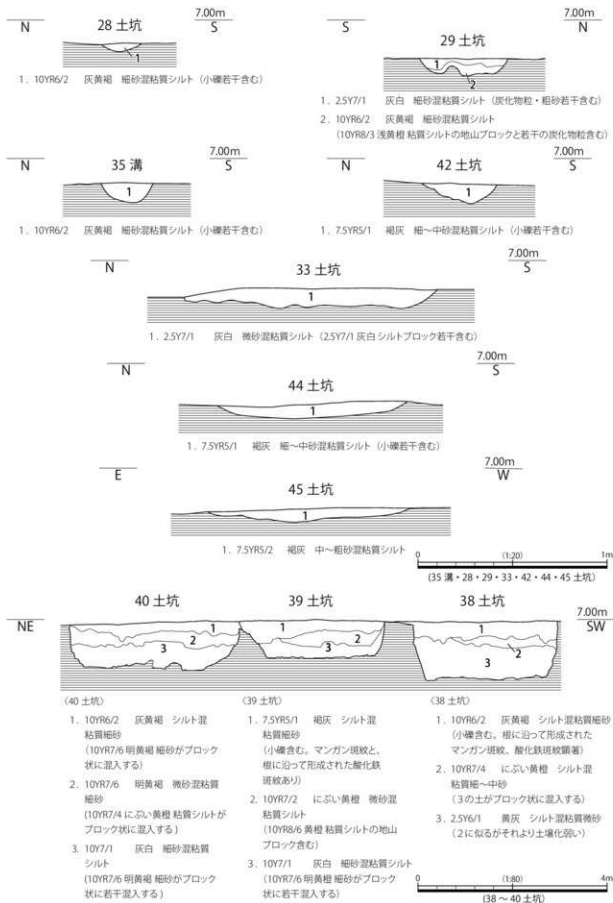


図 20 21 - 1 第 1 面遺構断面図 (2)

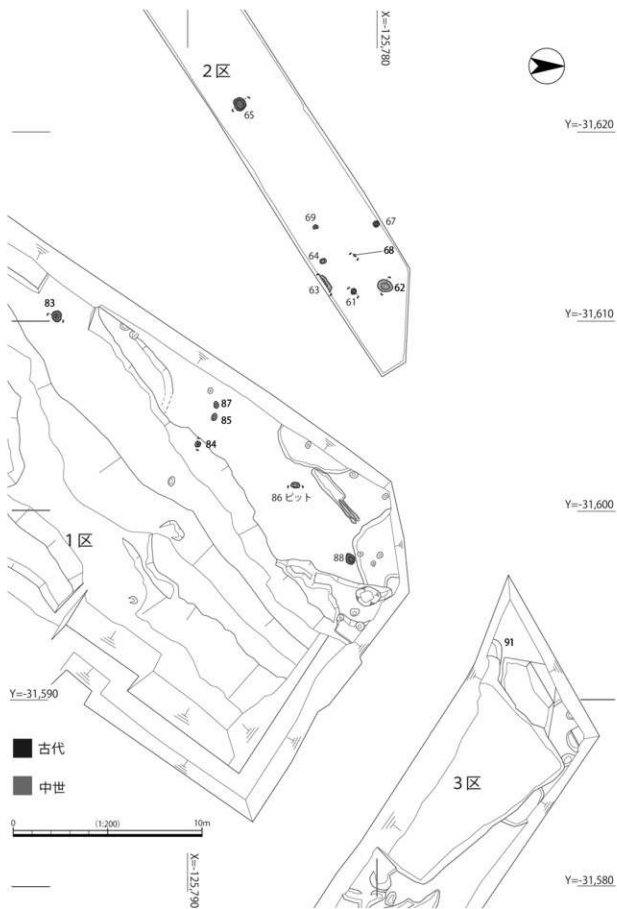


図 21 21 - 1 最終遺構面平面図

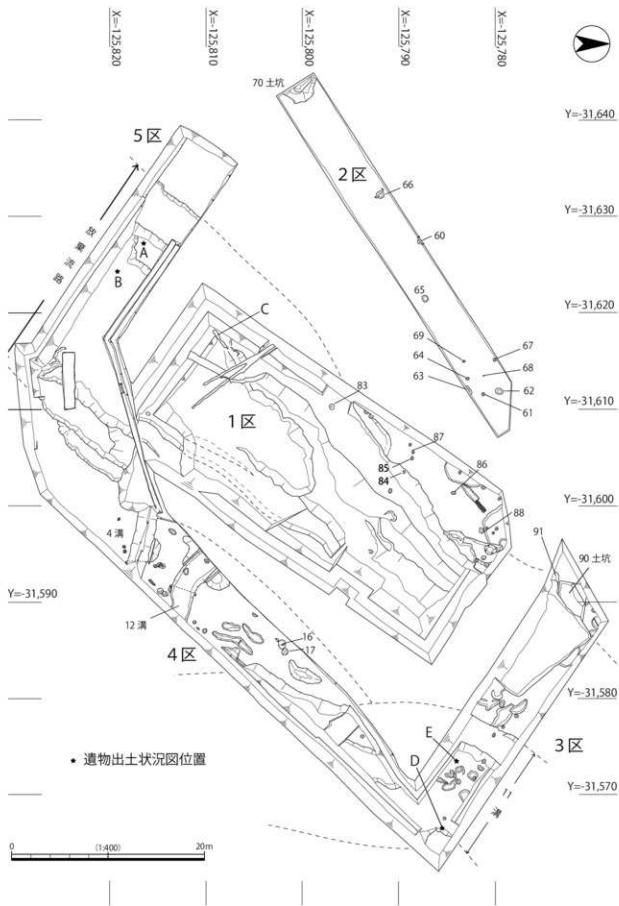


图 22 21 - 1 最終遺構面部分拡大平面図

でピット・土坑・溝を検出した(図21・22)。

放棄流路は1区・3区・5区の大部分を占める。放棄流路の南東側にあたる4区で検出した平場は、6～8区に広がる微高地につらなるとみられる。つまりこれまでの梶原南遺跡の調査で、弥生時代中期前半の墓域や古墳時代～中世にかけて断続的に展開する集落居住域が展開した微高地の、西縁辺部にあると考えられる。4区における遺物出土量が全体的に少なく、遺構検出密度が低い傾向が明瞭なのは、その部分が集落居住域の縁辺部にあっているためと考えられる。このようなことから放棄流路に起因する湿地は、集落の外縁部にあたるエリアだったととらえられる。放棄流路の埋積土から出土した遺物のうち、流路の東肩に近い部分における遺物の出土量が少ない点もそれを傍証すると考える。

1区における放棄流路の西肩より丘陵側では、第2層ないし第3層を除去した段階で無遺物層上面にいた。その面で検出したピットは、埋土の特徴や出土遺物から古代とみられるもの、中世とみられるもの、どちらも判別できないものが混在する状況がみられた。ただ遺構の検出密度は低く、それらの並びに緩やかな方向性はうかがえるものの、掘立柱建物や櫓ととらえられるような規則性を有するピットの配列は認めなかった。

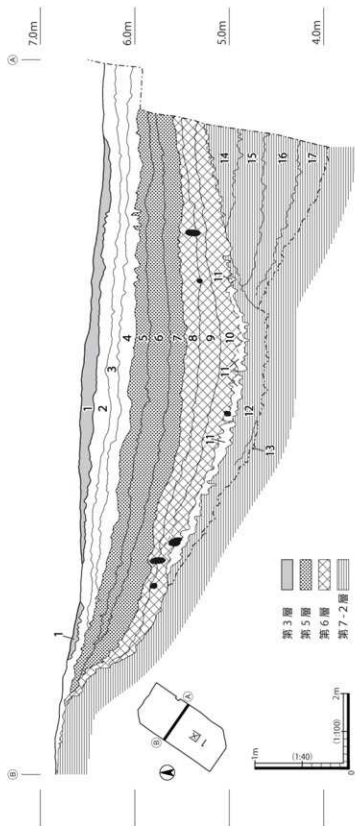
後述する9区・10区の調査成果と併せると、放棄流路より丘陵側の部分では、耕地造成などの際の削平がかなり大規模なものだったと考えられる。そのため当調査区においてかつて存在した遺物包含層や遺構が削り取られ、生活痕跡がきわめて希薄になってしまった可能性はある。放棄流路埋土から出土した遺物の多くが、梶原南遺跡で検出された集落が展開する微高地の反対側、つまり放棄流路の西肩に向けての斜面もしくは斜面寄りから出土している。この点においても放棄流路の西側、北摂山地南斜面裾部に人々の活動領域が展開していたことがうかがえる。

放棄流路 1区の最深部で検出した第7-3層上面(図8・10-65)は、旧流路の埋土上面と考えられ、1区の北壁と南壁とでとらえられるその標高差から、旧流路は南西から北東に向けて流下していたと考えられる。この部分だけを見ると周辺の地形に対して流下方向が逆行しているように感じられるが、現在の水無瀬川・榎尾川の河道をみても、山間部から沖積地に出たところで一旦河道が北東側に湾曲してから南へ方向を転じる様子を見ることができ、同じ状況がこの旧流路でも生じていたと考える。

『高槻市史』第1巻によると、「北部の山地を流れる河川は、全体としては樹枝状水系をなして必従河川の性格をもち、その流路方向は北東～南西の方向をとるものと、これに直行して北西～南東方向をとるもの、およびそれ以外のものに類型化することができ、北摂山地の構造線の方向と流路方向が一致すると記されている。このことから今回検出した旧流路の山間部における河道も、北東～南西の方向をとっていたとみられる。この河道が斜面を降って沖積地縁辺に達すると、流路は南へ流れを転じることになるが、その場合は屈曲部の西側に土砂が多く堆積することになり、必然的に流路は東に振ることになる。今回検出した旧河道の痕跡も、沖積平野縁辺で河道が方向を転じる部分と考えられる。

第7-2層・第7-1層は第7-3層と比べて細粒化し、さらにそれらはそれぞれ上方に向けて細粒化することから、流路変更した河道からの氾濫堆積層ととらえられる。第6層・第5層は第7-1層よりさらに粒度が細かく、木葉・種子・木片等の植物遺体を多く含み、越流堆積層とみられることから、それらの土層が堆積した時期には、河道はさらに遠のいたと考えられる(図23)。

遺物が混入するのは第7-1層以上の層だが、第7-1層の分布は極めて限られており、遺物が出土する範囲も限られる。安定的に遺物が出土するのは第6層以上の層で、第6層に含まれる遺物の様相から、古墳時代以降には調査地周辺における人の活動がより活発化すると考えられる。



- | | |
|---|---|
| <p>1. 7.5YR7/1 明灰 細砂凝結質シルト (酸化鉄珪質の沈着層) 第3層</p> <p>2. 10YR5/2 灰黄褐 細砂凝結質微砂 (若干小礫含む) 第4層 (上層)</p> <p>3. 10YR6/1 灰黄 細砂凝結質シルト (上層に似るが、それより土壌化強い) 第4層 (上層)</p> <p>4. 2.5Y6/1 黄灰 シルト凝結質細砂 (若干炭化物を含む) 第4層 (下層)</p> <p>5. 2.5Y5/1 黄灰 細砂凝結質シルト (中砂・炭化物を若干含む) 第5層 (上層)</p> <p>6. 10YR6/1 褐灰 粘質シルト (10YR7/1 灰白 シルトと炭化物がラミナ構造を呈する) 第5層 (上層)</p> <p>7. 10YR4/1 褐灰 細砂粘質シルト (10YR5/1 褐灰シルトと炭化物がラミナ構造を呈する) 第5層 (下層)</p> <p>8. 7.5YR5/1 褐灰 粘質シルト (7.5YR6/1 褐灰シルトと完全に融合した植物遺体・炭化物粒が層状に堆積する) 第6層 (上層)</p> <p>9. 7.5Y5/2 灰オリーブ シルト凝結質微砂 (木片・木葉等の植物遺体が層状に堆積する) 第6層 (下層)</p> | <p>10. 10YR4/1 褐灰 シルト凝結質微砂 (8に似るが、それより黒色化する) 第6層 (下層)</p> <p>11. 10YR6/1 褐灰 シルト凝結質細～中砂 (木片・木葉等の植物遺体を若干含む、側方ほど粗粒化する) 第7-1層相当</p> <p>12. 2.5Y6/1 黄灰 微～細砂粘質シルト (植物遺体・炭化物粒を含む、側方ほど粗粒化する) 第7-2層</p> <p>13. 2.5Y6/1 黄灰 細砂粘質微砂 (上方ほど粗粒化する) 第7-2層</p> <p>14. 2.5Y6/2 黄灰 シルト凝結質細砂 (植物遺体がラミナ状に混入する、下部に微～細砂をラミナ状を含む) 第7-2層</p> <p>15. 2.5Y7/1 灰白 シルト～細砂 (木葉・木片等の植物遺体がラミナ状に混入する、下方ほど粗粒化する) 第7-2層</p> <p>16. 10YR6/2 灰黄褐 微砂粘質微砂 (木葉・木片等の植物遺体がラミナ状に混入する、下方ほど粗粒化するが、ラミナは不明瞭) 第7-2層</p> <p>17. 10YR7/2 に近い黄褐 微～細砂 (微小植物遺体を若干含む、ラミナ顕著) 第7-2層</p> |
|---|---|

図 23 21 - 1 - 1 放棄流路断面図



図 24 21 - 1 遺物出土状況 A・B 図

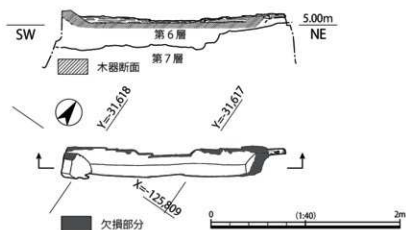


図 25 21 - 1 遺物出土状況 C 図

現時点では梶原南遺跡で断続的に集落居住域が展開した微高地の、全体的な形状を明確に把握できていないわけではないが、その微高地を形成する無遺物層上部の粘質シルト層は放棄流路の流末側を塞ぐように堆積しており（図 11～16）、後述する 11 溝がそれらに貫入するように流れ込む状況が土層断面観察の結果からよみとれた。

第 4 層も含めた放棄流路埋土は、下層になるにしたがってそこに含まれる遺物の所属年代が古くなっていく傾向がみられる。ただ主体となる時期の遺物に加えて、ごく微量にそれよりも古い時期や新しい時期の遺物がみられる。古い時期の遺物は、氾濫堆積層や越流堆積層が流入した際に、下層を削ったり巻き上げる等して混入したものと考えられるが、新しい時期の遺物に関しては、もともとその層に含まれていた可能性の他、土層の掘り分けが貫徹できずに上層の遺物が混入した可能性がある。各層における主要な時期の遺物とそれから外れる時期の遺物の比率には明確な差があることから、後者の可能性が高いかと思われるが、前者の可能性も排除できないため、実測が可能なものに関しては主要な時期から外れるものも除外せず掲載することとした。

放棄流路埋土に含まれる遺物の量は必ずしも多くないが、特に下層ほど残存率の高い遺物が含まれる傾向がみられる。埋土を掘削中に完形もしくはそれに近い状態の遺物を検出した際は、極力出土状況の記録に努めた。図 24 は 5 区で第 5 層掘削中に検出した図 37 - 126・132・133、図 39-153 の検出状況である。いずれも放棄流路西肩に連なる斜面部分で検出したもので、検出時にこれらに伴うピット

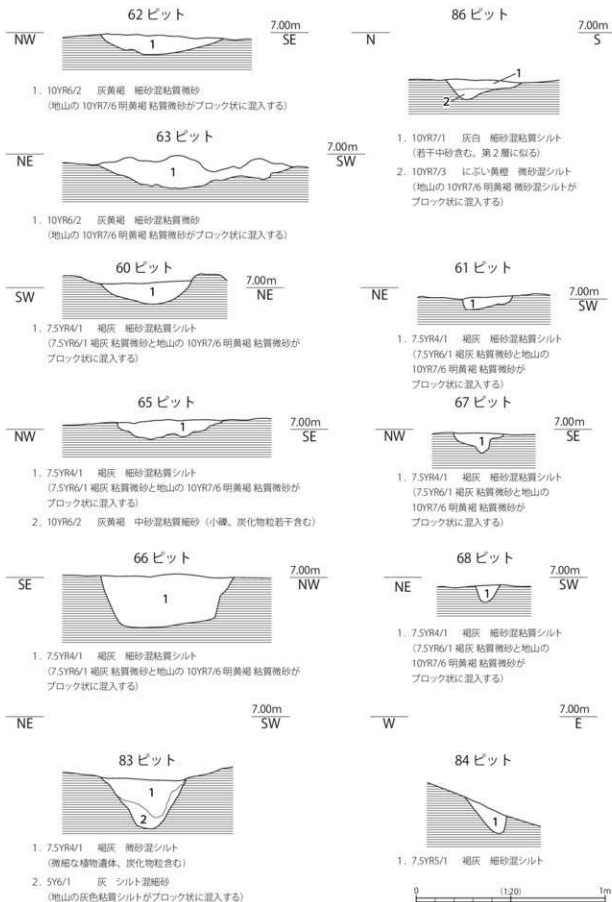


図 26-21-1 最終遺構面遺構断面図(1)

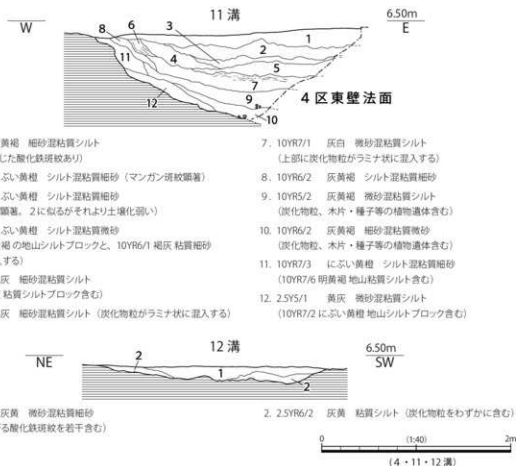
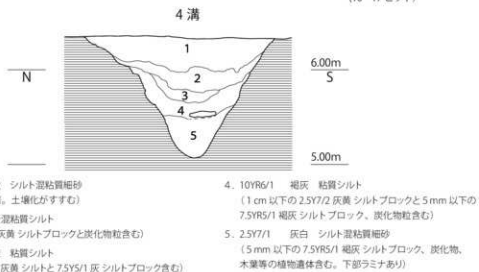
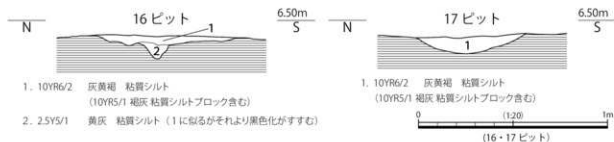


図 27 21 - 1 最終遺構面遺構断面図 (2)

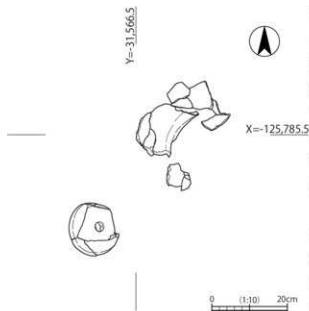


図28 21-1 遺物出土状況D図

のではなく、第6層が流入した際に運ばれ埋没したものと考えられる。

91ピット (図21・22) 3区の南壁際で検出し、東半部はかく乱坑で壊されているため全体の形状や規模は不明だが、埋土にブロック土が多量に混入する状況等から粘土採掘土坑とみられる。したがって第2項で記述した、第1面検出の粘土採掘土坑と同類のものと考えられるが、第2層が残存しなかったため最終遺構面での存在を確認した。

埋土から瓦・土師器・須恵器・梁付・瓦質土器が出土しており、近世に掘削されたものが、時間を置かず埋められたと考えられる。

70土坑 (図17・21) 2区南西端で検出した土坑で、調査区外にも広がる。最大径は4mを越え、調査区内における最深部は検出面から深さ約70cmである。土層断面図(図17)を見る限り、底部は湧水層に達しておらず、井戸とは考えにくい。水溜めの可能性があるか。

遺構埋土から瓦・須恵器・土師器・白磁・瓦器が出土した。遺物は細片が多く、図示可能なものは図33-61以外なかった。そのため細かい時期比定はできないが、11～13世紀のいずれかの時期と考えられる。

62～64・69・85～87ピット (図26)

中世の遺構とみられる62～64・69・85～87ピットのうち、遺構埋土から遺物が出土したのは、瓦片が出土した64ピット

や土坑の痕跡の有無を検討したが、それを認めなかったのに加え、斜面に沿うようにそれらの遺物の上面ないし口縁部が傾いていたことから、人為的に置かれたり埋納されたものではないと考える。おそらく第5層が流入した際に、それとともに運ばれ埋没したと考えられるが、いずれもあまり摩擦していないことからそれほど遠くない場所から運ばれたと考える。

出土状況C(図25)は1区で第6層(下)を掘削中に検出した図40-157で、放棄流路の西側斜面裾部で検出した。短辺に2か所づつ突起が作りつけられた長大かつ精巧な木製品で、放棄流路の西側斜面に近い部分で、長軸方向をほぼ水平にした状態で埋没していた。おそらくこれも人為的に置かれたも



図29 21-1 遺物出土状況E図

トのみで、それ以外は遺構埋土と基本層序の第3層・4層との類似性から遺構の帰属時期を類推した。
 深さ16cmの69ピットを除くと、いずれも深さは10cm前後と浅いが、周辺が大きく削平された際に遺
 構上部も削平されたためと考えられる。

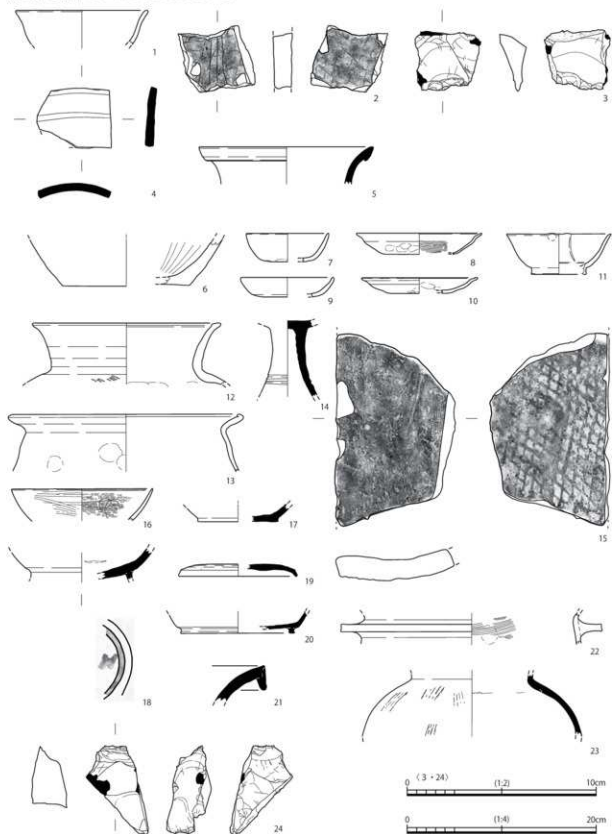


図30 21-1-1 出土遺物(1)

60・61・65～68・83・84・88・16・17ピット（図26・27） 古代の遺構とみられる60・61・65～68・83・84・88・16・17ピットのうち、遺構埋土から遺物が出土したのは67ピットのみで、それ以外は遺構埋土と基本層序第5層・第6層との類似性から遺構の帰属時期を類推した。66・83ピットのように深さが20cmを越えるものもあったが、おおむね10cm前後と浅い。

11溝（図27） 放棄流路に第6層が堆積する時期に、これを切って形成された溝である（図21）。埋土下部に無遺物層上層の粘質シルトや第6層とみられるブロック土の混入が顕著である。人為的なものではなく、周辺の地盤が軟弱で不安定な時期に形成されたものとみられる。

遺構埋土から弥生中期前半の土器、古墳時代の須恵器・土師器、土錘等が出土した。出土遺物より弥生時代中期前半を上限とし、5世紀中頃を下限とする時期に形成され、6世紀を下限とする時期に埋積したと考えられる。出土状況D・Eは、埋土の最下層を掘削しながら基盤層上面を検出している際にまとまって出土した遺物の出土状況図で、出土状況Dは図34・69・82、出土状況Eは図34・89である。これらの他にも、当該期の土器には図34・88、図35・106・109～111がある。

4溝（図27） 4区で検出した東西方向を指向する直線的な溝で、放棄流路に向かって流下する。おおむね放棄流路の6層除去面に達する深さだが、放棄流路が4区最終遺構面の基盤層である無遺物層に覆われた後にそれを貫入して走っていることから、明らかに放棄流路より後に形成されたものである。

遺構埋土は第6層に類似した土質で、底部近くで自然木が出土したものの、土器は出土しなかった。11溝と同様、人為的に形成されたものではないとみられる。

12溝（図27） 4溝の東側をゆるやかに湾曲しながらおおむね東西にはしる溝で、放棄流路に向けて流下する。深さは10cm前後と極めて浅く、底部には凹凸がみられ不整形なことから、人為的に形成されたものではないとみられる。遺構埋土から遺物は出土しなかった。

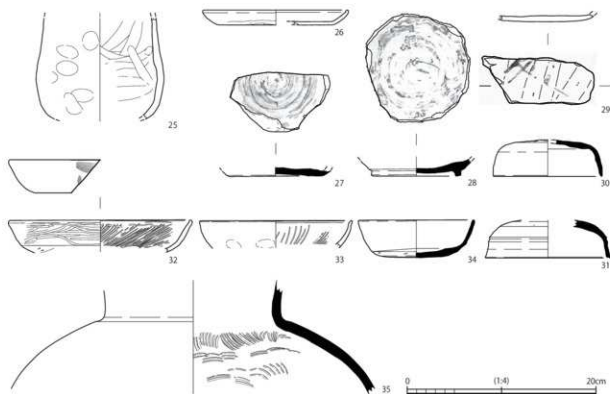


図31 21-1-1 出土遺物(2)

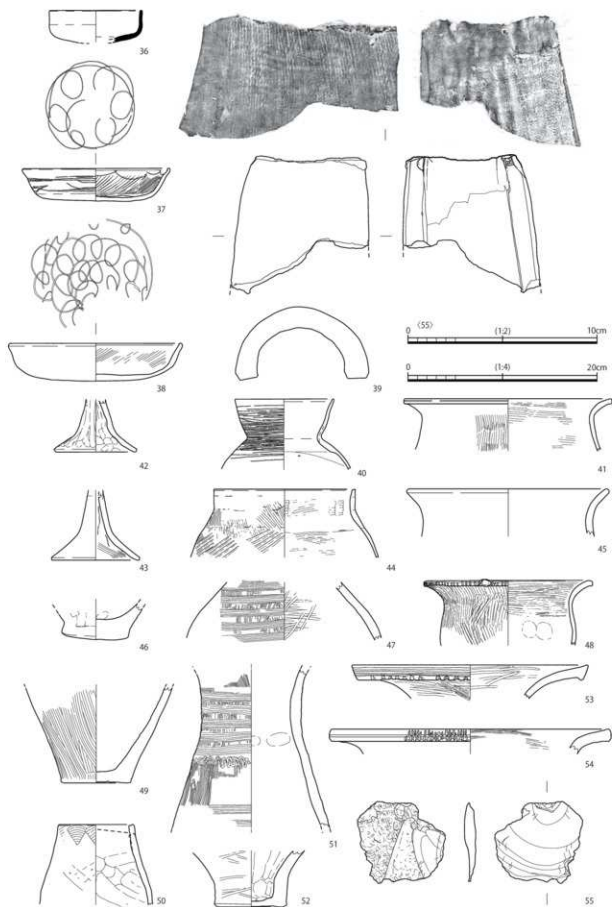


图 32 21 - 1 - 1 出土遺物 (3)

第4項 21 - 1 - 1 ~ 5区出土遺物

ここでは調査区ごとに遺物の出土状況述べる。前述したように21 - 1調査区では放棄流路以外の遺構検出密度は低く、出土遺物も極めて限られる。したがってここで掲載した遺物のほとんどは整地層や耕作土出土遺物を除くと、放棄流路埋土から出土したものである。

1区 (図30~33) 第1層出土遺物は図化しなかったが、須恵器・土師器・染付・陶器(播鉢)・瓦質土器等がある。第2層出土遺物は図化したものの他に須恵器・陶器・瓦器・土師器・土師質羽釜・埴輪等がある。出土量は少なく細片がほとんどである。遺物の時期幅が広いのは、整地層に混入したものや耕起に伴って下層から混入した遺物が含まれるからだろう。3はサヌカイトで、おそらく打面調整の際に生じた剥片に刃部を作り出したものと考える。第3層出土遺物はさらに少なく、図示した5の他に須恵器・土師器・瓦・弥生土器・瓦器・瓦質土器・黒色土器の細片がある。4は須恵器の大型器種の破片を、破面を研磨するなどして長方形に作り直したもので、用途は不明である。

第4層は2層に細分できたため上層と下層とで遺物を採り分けた。図30・6~15は第4層(上層)、16~24は第4層(下層)出土の遺物である。上層には6の陶器播鉢のように中世後半を降る時期のものが含まれるが、上・下層とも中世を主体としつつ古代以前の遺物も一定量含む等、出土遺物の時期的・器種の構成に大きな違いは認められない。11は体部に花卉の表現を施し、見込みに沈線を入れる。整形方法等から京都周辺の窯でつくられたとみられるが、器種・器形・釉葉の色調に近江系の緑釉陶器の模倣がみられる。10世紀後半の所産とみられる。24はサヌカイト石核から素材剥片を打ち割った際に分離したものとみられる。

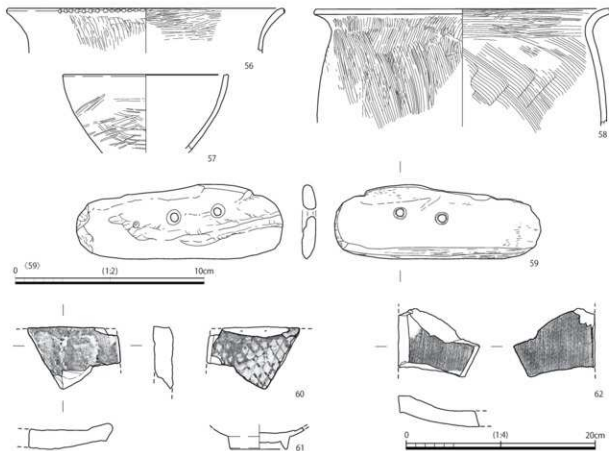


図33 21 - 1 - 1 出土遺物(4), 21 - 1 - 2 出土遺物

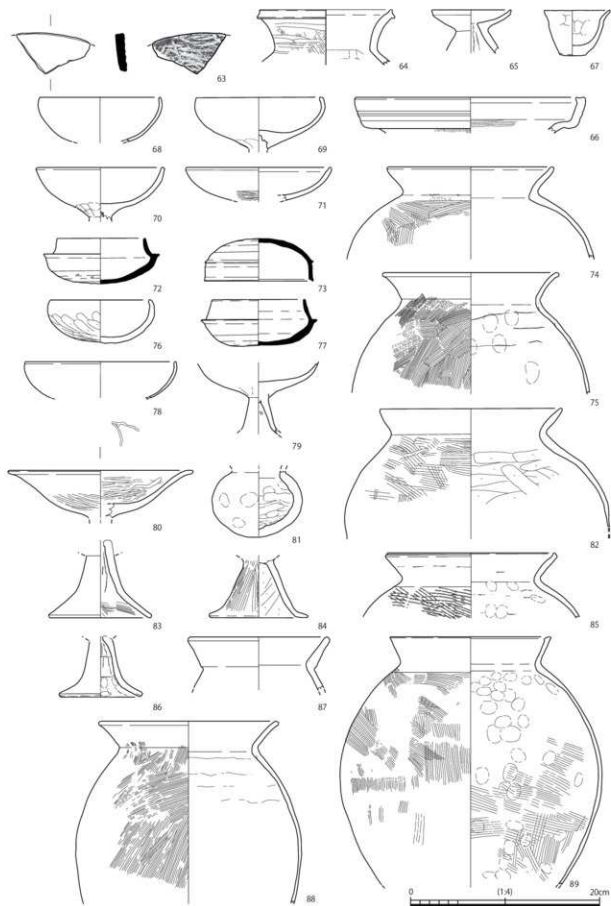


图34 21-1-3 出土遗物(1)

第5層は2層に細分できたので、上層と下層とで遺物を採り分けた。図31 - 25 ~ 31は第5層（上層）、32 ~ 35は第5層（下層）出土遺物である。第4層出土遺物に比べて第5層出土遺物には残存状態の良いもの含まれる傾向がみられ、古代の遺物を主体としつつ古墳時代、中世の遺物がそれに次いで出土する。25は製塩土器で、底部と口縁部を欠く。古墳時代の所産か。27・28は転用硯として使用された須恵器杯の底部で、底部からの立ち上がり部分を意図的に打ち欠いて円盤状に作り替えたものである。意識的に体部を打ち欠いた意図は不明である。29と32には墨書がみられるが、残存範囲が極めて限られるため判読できない。30は頂部の整形が丁寧なため蓋と判断した。第5層（上層）では図化したもの他、弥生土器・瓦・陶器・土師器とみられる細片も含まれる。第5層（下層）では瓦・弥生土器の細片の他に図39 - 154 ~ 156の木器が出土した。

第6層は2層に細分できたので、上層と下層とで遺物を採り分けた。図32 - 36 ~ 41は第6層（上層）、42 ~ 55は第6層（下層）出土遺物である。いずれの層の出土遺物も古墳時代・弥生時代のもの

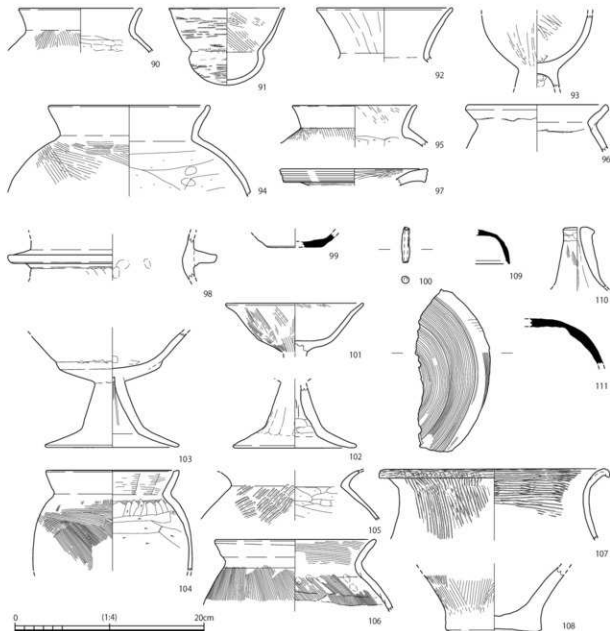


図35 21 - 1 - 3 出土遺物 (2)、21 - 1 - 4 出土遺物

が多数を占め、古代の遺物がそれに次ぐが、第6層（上層）の方が古代の遺物の含有量が多い傾向がみられる。弥生土器は中期前半の遺物が主体だが、中期後葉もしくは後期に属するとみられるものも若干含まれる。

第7 - 1層出土遺物は図33 - 56 ~ 59で、出土量が限られるのに加え、57以外は弥生時代のものである。57は外面にミガキが施されており、胎土は瓦器のようなきめの細かさだが、当該期にこれに類する器形が見当たらないため、時期を確定し得なかった。きわめて地域性の強い器種かもしれない。59はB面に未穿孔の孔が1か所認められる。刃部断面の角度からみて、研ぎ直しながら可能な限り使用したものととらえられる。この層から出土した弥生土器の時期はおおむね中期におさまる。

2区（図33） 遺物の出土量は極めて少量でかつ細片である。図33 - 60・62は部分的に残存した第4層に含まれていた。61は70土坑埋土から出土した白磁の底部で、古代末～中世初頭の時期のものとみられる。70土坑からこれ以外に瓦・須恵器・土師器・瓦器の細片が出土した。

3区（図34・35） 第3層より上の層では須恵器・陶器・土師器が少量出土した。図34 - 63は須恵器破片の縁辺部を研磨して円盤状に作り直したものとみられる。用途は不明である。第4層出土遺物はほとんどなく、図示できるものもなかった。図34 - 64 ~ 66は第5層出土遺物である。須恵器・土師器・弥生土器が出土し、おおむね弥生時代・古墳時代の遺物からなる。第6層出土遺物が最も多く、2層に細分できたので上層と下層とで遺物を採り分けた。図34 - 67・68・70 ~ 75が第6層（上層）、図34 - 76 ~ 81・83 ~ 87、図35 - 90 ~ 97が第6層（下層）出土遺物である。おおむね5世紀中頃のもの占めるが、それよりやや時期の降るものや、弥生時代・古代の遺物もわずかに含まれる。

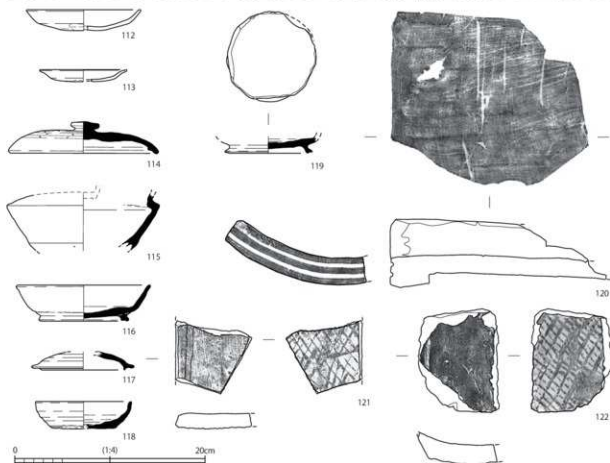


図36 21・1・5 出土遺物(1)

4区(図35) 概して遺物の出土量は多くなく、第5層以下の出土遺物が大半を占める。図35-98は第2層出土遺物、図35-99・100は第5層出土遺物である。99は底部のみ残存するが、内面の状態から硯に転用したとみられる。

第6層は2層に細分できたので上層と下層とで遺物を採り分けた。第6層(上層)出土遺物で図化できるものはなかったが、瓦・須恵器・土師器・弥生土器がある。図35-101~105は第6層(下層)出土遺物である。おおむね5世紀中頃の遺物が占めるが、弥生土器を若干含む。第7-1層の出土遺物(図35-107・108)も少量認められた。それらは4区南端部で、5区に隣接する所で検出したもので、おおむね弥生時代中期の時期のものである。

5区(図36~38) 第4層は第4層(上層)と第4層(下層)に細分できたので、層ごとに遺物を採

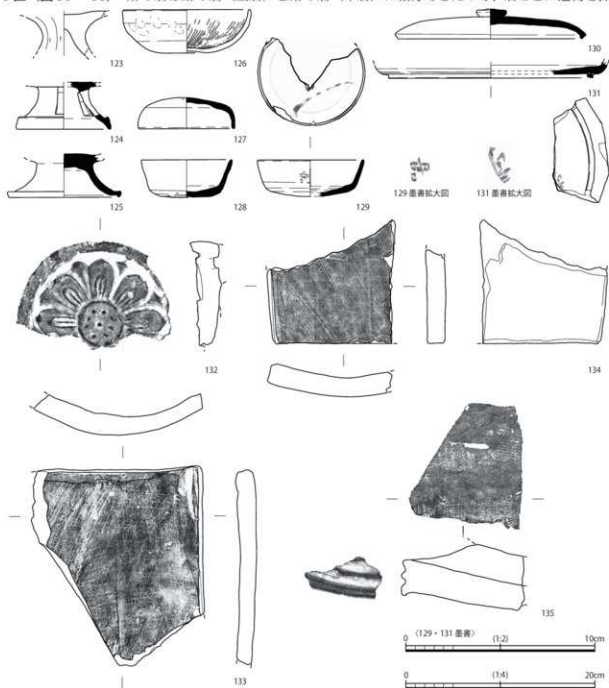


図37 21-1-5 出土遺物(2)

り分けた。第4層（上層）から須恵器・土師器・瓦が出土したが出土量はわずかで、いずれも細片だった。図36 - 112～122、図37 - 123は第4層（下層）出土遺物で、飛鳥～奈良時代にかけての遺物を主体とし、中世の土師器皿が若干含まれる。119は須恵器環の底部で、立ち上りの部分で意図的に打ち欠き、円盤状に作り替えている。用途は不明である。梶原寺創建時期のものとみられる重圍紋軒平瓦が出土した他、タタキメや模骨痕のある古代の瓦片が出土した。図37 - 124～135、図38 - 136は第5層出土遺物で、古代の遺物が多数を占める。遺物の出土量は必ずしも多くないが、完形品が一定量含まれる。132と135は120と同様、梶原寺創建時の年代の瓦で、126と併せて飛鳥時代中

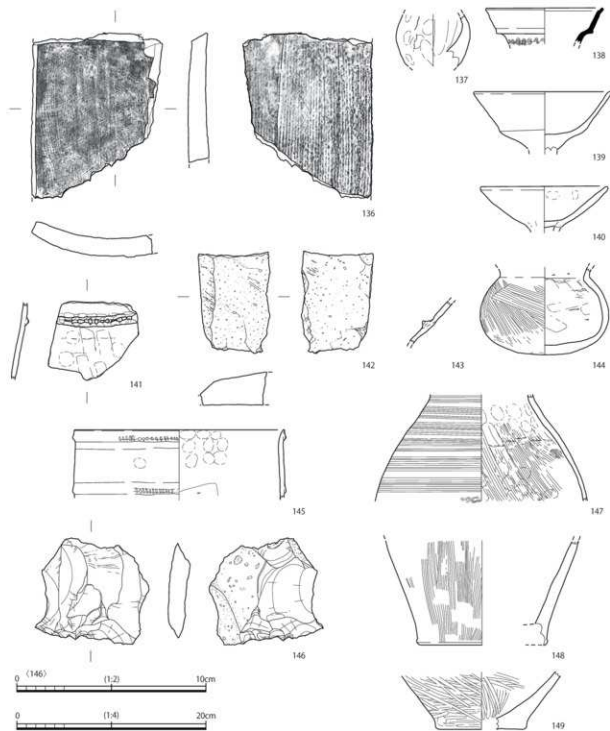


図38 21 - 1 - 5 出土遺物(3)

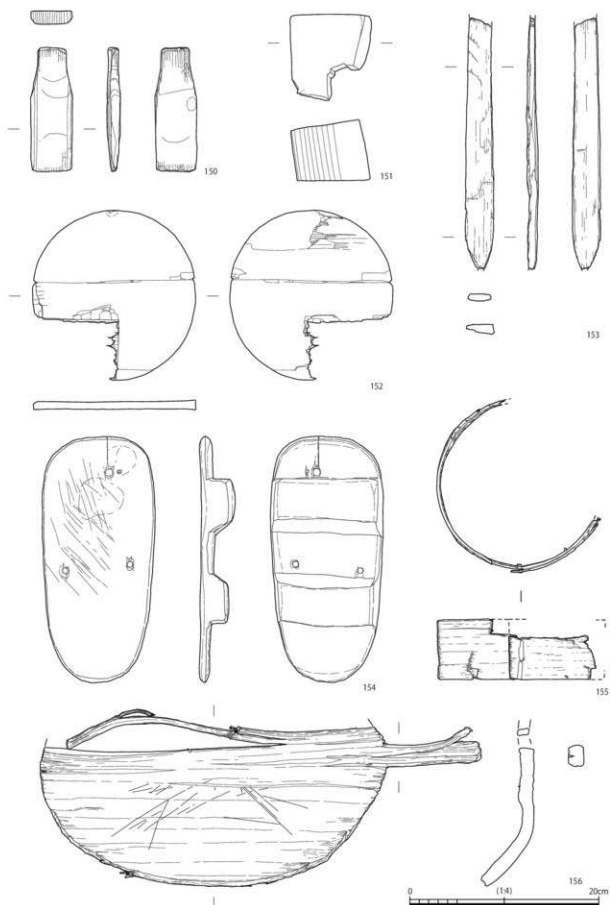


图 39 21 - 1 木製品 (1)

葉の時期とみられる。129 は底部内面と体部外面に、131 は底部外面に墨書がみられる。

第6層は2層に細分できたので、第6層（上層）と第6層（下層）とで遺物を採り分けた。図38 - 137・138は第6層（上層）、図38 - 139・140は第6層（下層）もしくはその可能性のあるものである。第6層出土遺物はおおむね古墳時代のもので、弥生土器や瓦が微量に含まれる。図38 - 141～149は第7 - 1層出土遺物である。弥生時代の遺物が主体で、古墳時代や縄文晩期の土器（141・145）が若干含まれる。縄文晩期の遺構は梶原南遺跡では検出されておらず、遺物の出土量もわずかである。今回の出土例はそれほど摩滅していないことから、北西側の丘陵縁辺部に未検出の当該期の集落が存在した可能性がある。いずれも長原式並行期で河内の土器と類似する胎土だが、突帯の形状や調整方法等に播磨地域の土器との共通点がみられる。

木製品（図39・40） 2区・3区を除く調査区で木製品が出土した。第5層出土のものが大半を占め、第6層・第7層出土遺物がそれに次ぐ。150は短辺をへら状に丁寧に整形したもので、用途は不明である。153は図37 - 132 検出時に出土したもので、全体に整形されて剣形を呈するが、用途は不明である。図40 - 157は精巧な把手を作り出した長大な槽で、把手3か所・本体の縦方向半分強を欠損している。158・159は全体に丁寧に整形され、ほぞ孔状の窪みが作り出されるが、貫通はしていない。

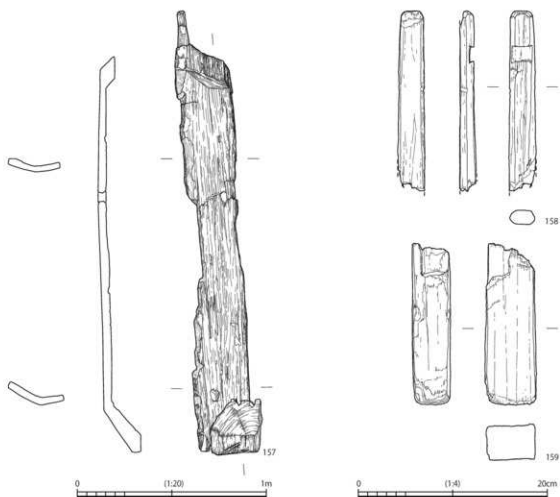


図40 21・1 木製品（2）

第3節 22 - 1 - 6～10区の遺構と遺物

22 - 1 発掘調査成果は南から北に向かい、8区・6区・7区・10区・9区の順に記載する。6～8区では、第2層除去後に検出した第③層を基盤層とする面と、第④層除去後に検出した無遺物層を基盤層とする最終遺構面とで遺構検出を試みた。8区では、第③層上面で検出した遺構には中世以降とみられるものが含まれているのに対し、方形周溝墓の周溝は第④層除去面で露出するという差は認められたものの、中世の遺構と古代の遺構が第③層上面・第④層除去面のいずれにおいても含まれていたことから、両者に明確な時期差を認めることはできなかった。したがって8区では両者をあえて弁別せず、すべてを最終遺構面検出遺構とした。一方、6区・7区では第1面で、最終遺構面とは明らかに遺構の検出状況が異なっていたことから、第③層上面を第1面、第④層除去面を最終遺構面とし、第1面の遺構検出状況を実測した(図41)。9・10区では第1面に相当する遺構面はなかった。

第1項 8区

最終遺構面の標高は、南西から北東に向けてわずかに低くなる傾向が認められた。全体に第2層が薄く、第1層を除去した段階で第③層上面にいたる所もある。第③層はおおむね調査区全域で認められたが、無遺物層上面の標高が低い場所で厚みを増す傾向がみられた。また第④層は調査区南西半部に限られる傾向がみられた(図42～44)。無遺物層は灰白色ないし浅黄色の微～細砂で、6・7区とはやや異なる状況がみられた。その土質は粘性が弱く砂質土だが、下方に向けて漸移的に砂粒が細かくなるとともに粘性が強くなり、明黄褐色の粘質シルト層にいたる。微～細砂の含有量が多い土質では土壌化が進む傾向がみられ、土壌化層の厚みが60cm強におよぶ所もあった。以上のことから微高地を形成する無遺物層は、氾濫堆積層の累積ととらえることができる。

調査区全域で遺構を検出したが、無遺物層上面の標高がやや下がる中央部では溝が数条みられるもののピット等の分布密度は低く、その両側の微高地部分でピット・土坑や掘立柱建物等の遺構が密集する傾向を認めた(図45)。

時期別の遺構分布状況は次のとおりである(図46)。古代末～中世の遺構は調査区全域におよぶ。この時期の遺物も包含層出土のものを含めて調査区全域で出土する。埋土から遺物が出土せず、時期を認定できなかったピットの中にも、当該期のピットと大きさや埋土の土質の似るものは相当数みられる。ただ配置の規則性などから掘立柱建物と認定できるものは見出せなかった。古代の遺構は調査区の中央部では認めず、それ以外の部分に集中する傾向がみられた。この時期の遺構には、平行する直線的な2条の溝と、掘方の大きな柱穴を伴う掘立柱建物およびその一部の可能性があるピット列・井戸・ピット等がある。遺物は包含層出土のものも含めて調査区のほぼ全域から出土する。古墳時代の遺構は認めなかったが、遺物は包含層や古代の遺構埋土等に若干含まれる。包含層出土遺物は調査区北寄りの部分には分布しない傾向を認めた。弥生時代の遺構は調査区の両端で方形周溝墓の一部を検出した。周溝やそれを切って掘削された古代の溝埋土、および包含層からも弥生土器が少量出土した。遺物には細片が多く図化できたものは少ないが、時期判別が可能なのは中期前半の遺物が主体である。包含層出土遺物の時期幅は、最終遺構面検出した遺構の時期幅とおおむね合致する(図47)。

・古代末～中世の遺構

1溝(図45・48～51) 1溝は近年のかく乱で一部を破壊されているが、東西方向を指向する直線的な溝である。その上部も現代の埋設管設置工事の際に大きく削平されており、底部付近がかろうじて残

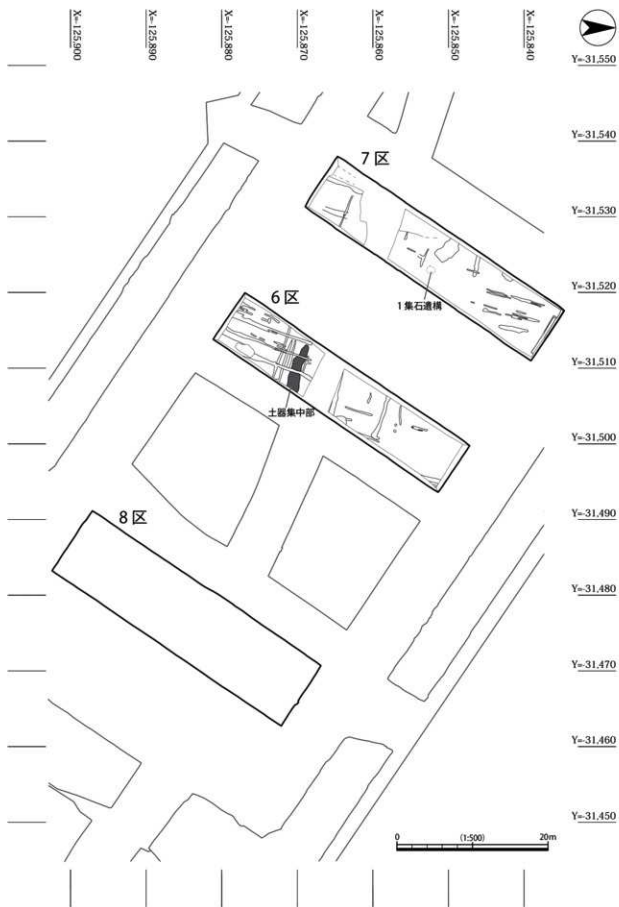


図41 21・1・6～8 第1面平面図

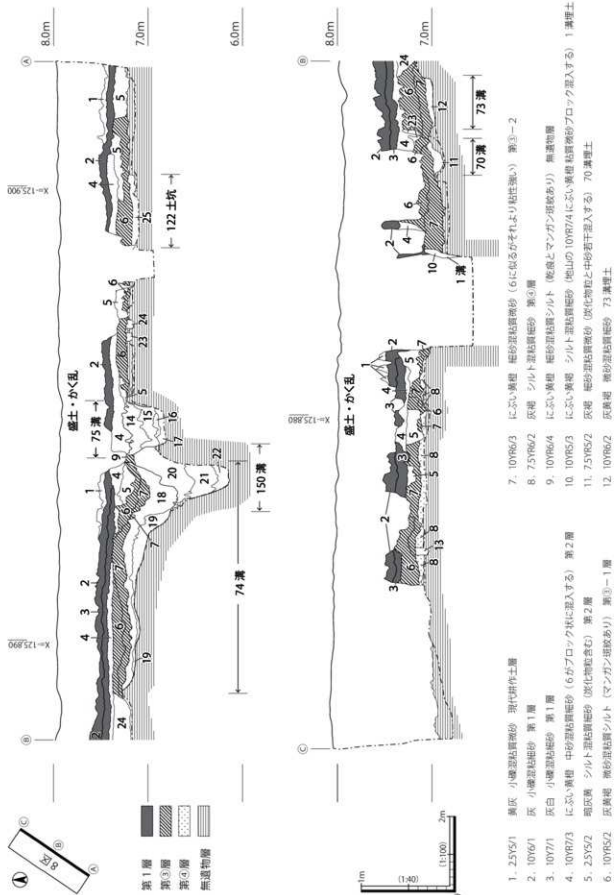


図42 22 - 1 - 8 東壁土層断面図

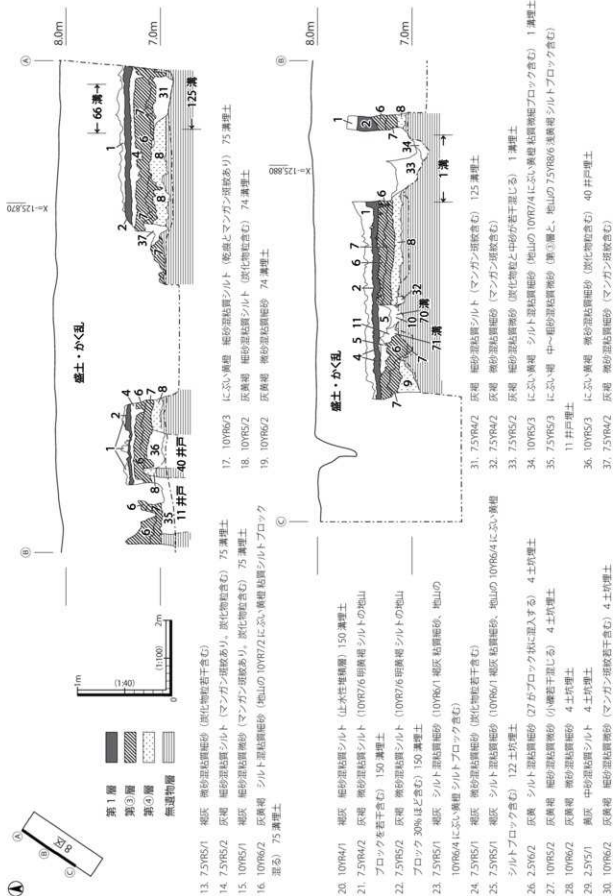


図43 22 - 1 - 8 西壁土層断面図

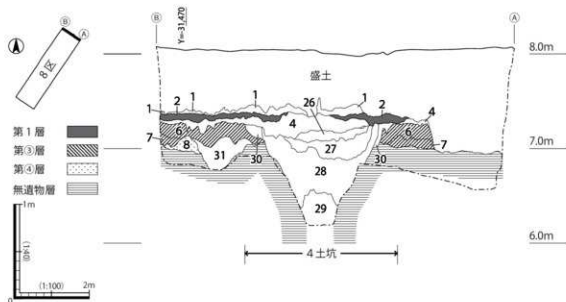


図44 22・1・8 北壁土層断面

存している状況だったが、遺構埋土やその周辺から多数の土器を検出した。19・1・20・1発掘調査成果から微高地に展開した中世集落には、東西ないし南北方向を指向する計画的に配された水路が存在したことがわかっている。おそらく1溝もその一つとみられる。

1埋土もしくはその周辺から出土した土器には残存率の高いものが多く含まれるとともに(図49・50)、おおむね13世紀前半から中頃の遺物が占める傾向がみられ(図51)、1溝が当該期の集落居住域と近接していた様子がうかがえる。

70溝(図45・48) 1溝の南側に位置しそれよりやや浅く、緩やかに蛇行しながら東西方向を指向する。埋土も1溝に似るが、1溝のように完形に近い土器は出土しなかった。小型化傾向がみられる瓦器椀の口縁部・須恵器・皿を含む土師器・製塩土器・弥生土器等が出土したが、いずれも細片で図示できるものはなかった。1溝と近接しているものの、遺物の出土状況は1溝と対照的である。この点から、1溝が集落居住域から排出された土器とともに埋没し、集落居住域が廃絶もしくは移動して生産域に変わった後、70溝が掘削された可能性も考えられる。

71溝(図45) 70溝よりさらに浅いか掘り込み面が高かったとみられ、東に移行するにつれて溝の痕跡が途絶える。残存深度は10cm前後だった。図示した出土遺物(図53-201~203)のうち、弥生土器(201)はもともと近辺の方形周溝墓に供献されていたものとみられる。それ以外に片口鉢等の須恵器、瓦質羽釜、瓦器、黒色土器、複数個体の土師器等が出土した。

4土坑(図44・45・52) 安全面を考慮して最深部は掘削できなかったが、検出面より1.2m以上の深さがあり、おそらく井戸とみられる。埋土から瓦器椀・土師器皿・瓦質三足羽釜の他、14世紀代の白磁の合子が出土した(図52-199)。主要な出土遺物の時期は1溝出土遺物とほぼ同時期とみられる。

3土坑(図45・53) 調査区南西角に近い所で検出した土坑で、大半をかく乱坑で壊されていることもあり、規模や形状は不明である。遺構埋土に無遺物層のシルブロックを多く含んでいたことから、掘削後あまり時間をおかず人為的に埋め戻されたとみられる。図53-204以外に須恵器・瓦器・瓦質羽釜・土師器が出土した。

122土坑(図45・53) やや不整形の土坑で掘削深度は10cm弱である。図53-205は古代の甕で2

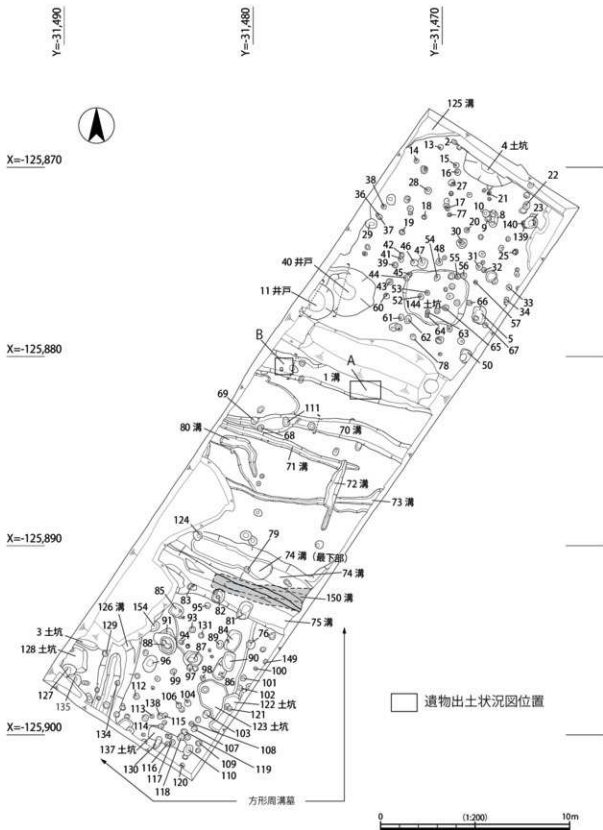


図45 22・1・8 最終遺構面平面図

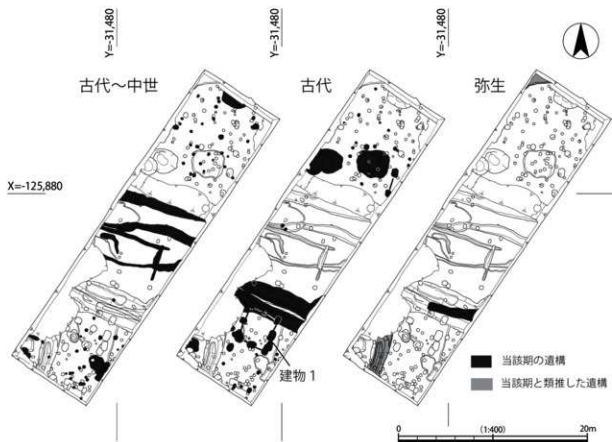


図46 22 - 1 - 8 時期別遺構分布図

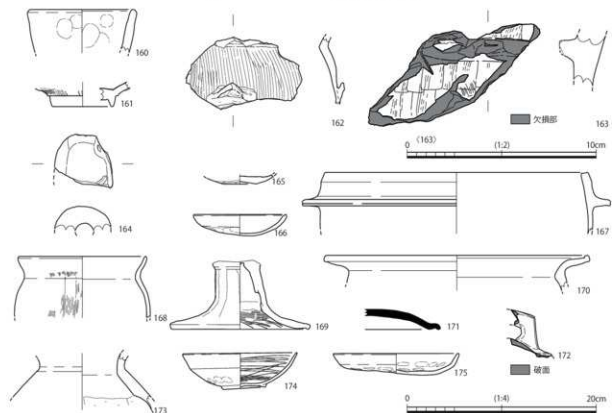


図47 22 - 1 - 8 包含層出土遺物

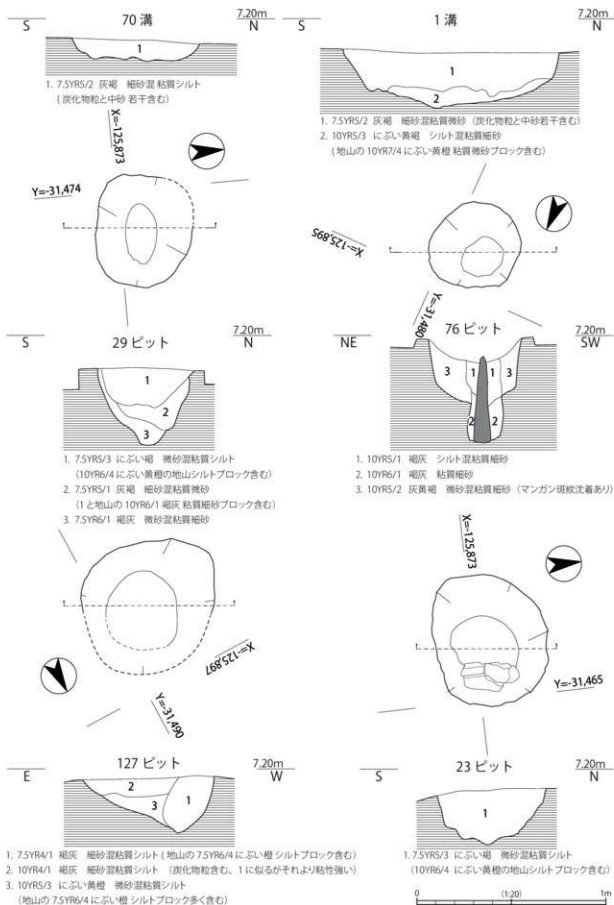


図 48 22 - 1 - 8 最終遺構面古代末～中世遺構平・断面図

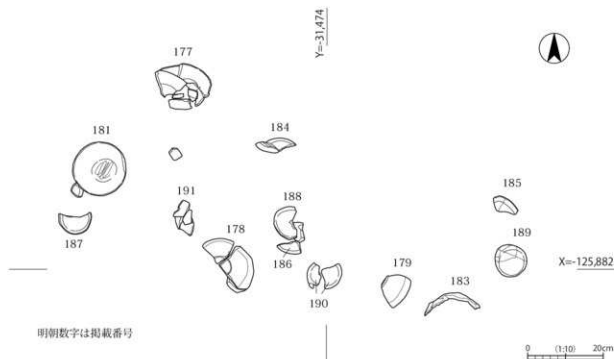


図49 22-1-8 1溝遺物出土状況A図

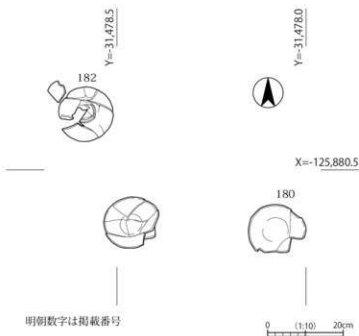


図50 22-1-8 1溝遺物出土状況B図

次に混入したものとみられる。当該遺構出土の土師器片が115ピット出土品と接合した。異なる遺構の出土遺物が接合したのはこの1例のみである。**ピット** (図48・53) 当該期のピットはその可能性があるものも含めると多数あるが、それらの深さはおおむね20cm前後で、図48に断面図をあげた23・29・76・127ピットはその中でもやや深いものである。76ピットには柱根が残っていた(図120-520)他、23ピットは底部に根石が置かれており、柱穴だったと考えられる。ただこれらに対応して建物跡と考えられる規則的な位置関係のピットを検出することはできなかった。

図53には18・119・120・149ピット埋土出土遺物を掲載したが、これらは細片で意図的に残置されたものではなく、2次的に混入したものとみられる。いずれも13世紀におさまる時期のもので、他の遺構埋土出土遺物と併せると、13世紀後半以降には当地に展開した中世集落居住域が廃絶もしくは移動したととらえられる。

・古代の遺構

建物1 (図54) 建物の西側をかく乱坑が占めているため、そちらに向けてさらに拡大する可能性は否定できないが、85-84ピット間と87-82ピット間で柱穴を検出できなかったことから総柱建物では

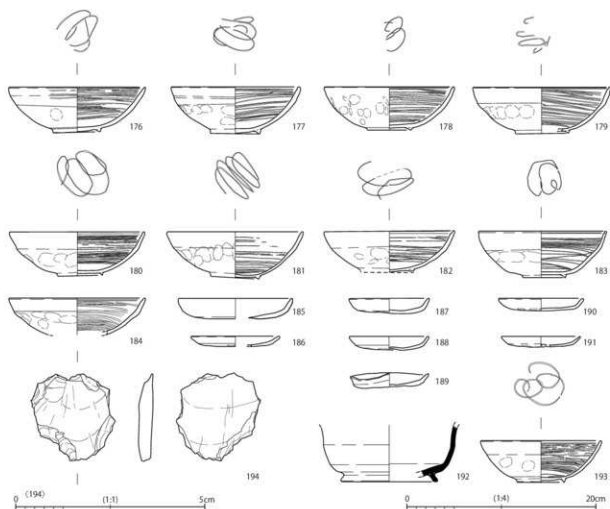


図51 22・1・8 1溝出土遺物

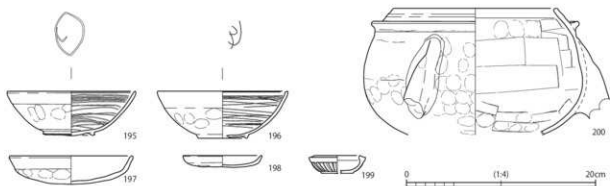


図52 22・1・8 4土坑出土遺物

なく2間×2間の掘立柱建物の可能性が高いと考える。建物の方向軸は座標北に対しておおむね30°東に振る。建物規模は芯々距離で東西・南北ともに3.3mで、柱間は南北方向辺が1.5～1.8m、東西方向辺が1.6m前後である。82・83ピットは検出面において75溝埋土との判別ができなかったため、75溝の底面で検出したが、81ピットの検出時にはそれが75溝の埋土を切っていることを確認した。つまり当該遺構は75溝の埋没後に構築されたものである。ピットには礎石もしくは根石を伴うものが認められた。柱穴の大きさは長軸1m強、短軸80cm弱の隅丸方形の長方形を基調とし、建物の規模に比べて大きい印象を受ける。82・83ピット埋土から遺物は出土しなかったが、それ以外のピット埋土

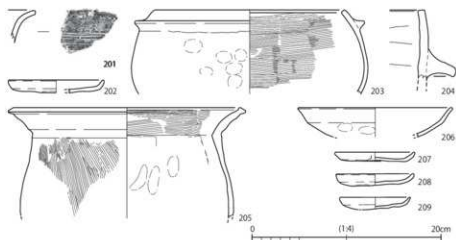


図53 22-1-8 中世遺構出土遺物

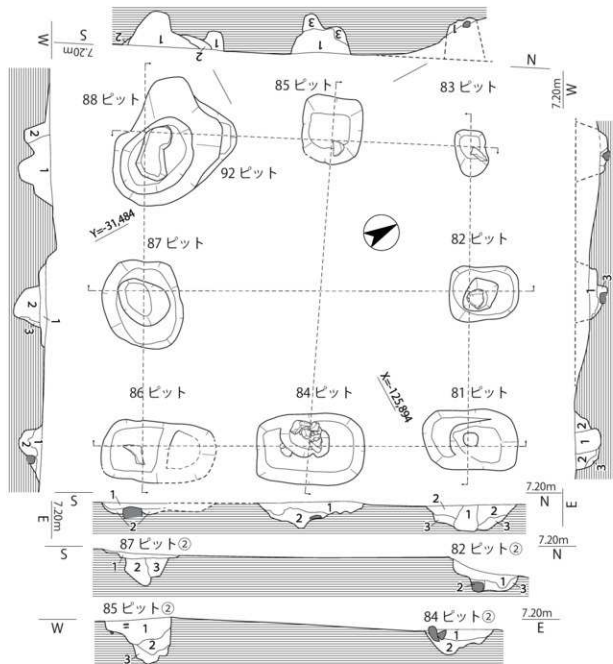
から古墳時代ないし古代の土器片等が出土した。いずれも極めて細片で、意図的に埋納されたと思われるものはなかった。また86ピットは同規模の90ピットに切られている。以上から、この建物に一部重なる位置関係で、数時期の建物が存在した可能性がある。

ピット列(図45・55・59) 5ピットには柱痕が、50ピットには柱の抜き取り痕があり、ピットの平面形態や深さが建物1の柱穴と類似することから、当該期の掘立柱建物の可能性があるが、柱間は2.0m強とやや広い。これらが建物の柱穴である場合、その大部分は調査区外に広がる。ピット列の方向軸は座標北に対して19°東に振る。

90ピットは建物1の86ピットを切るそれと同規模・同規格のピットだが、柱痕は認めなかった。またこれとセット関係をなすピットは検出しなかった。図59-240は5ピット掘方出土遺物でおそらく8世紀の所産であろう。図59-243は50ピットの柱の抜き取り痕から出土したもので、9世紀前葉の所産とみられる。これらのことから50ピットと5ピットからなる掘立柱建物が存在したとすると、その帰属時期は8世紀ととらえられる。96ピットは88ピットに切られる91ピットとセットをなす可能性があるが、他にこれらと関連付けられそうなピットは検出しなかった。両者の位置関係をみると柱間は1.8m、ピット列の方向軸は座標北に対して29°東に振り、建物1の規格に近似する。

74溝・75溝(図45・55・56) 8区の西隣に位置する20-1-8トレンチで検出された2条の古代溝の東側延長部にあたる。20-1発掘調査区ではこれらの溝の東端部が中世以降の遺構等で壊されており、今回検出した溝の西端部との間には10m強の距離があるが、両者の位置関係と方向軸が一致することから、それらは一連の遺構と考えられる。2条の溝は平行し、当調査区では検出面での両者の距離は極めて近接する。遺構埋土掘削時に両者の切り合い関係の有無を念入に検討したが、重なる部分は認めなかった。最も近接するところでは数cm程度の距離しかなかったため、同時併存で2条の溝が掘削されたとは考えにくい。したがって先行して掘削された片方の溝が埋没した後、それと並行しつつ重ならない位置で、もう片方の溝が掘削されたと考えられる。

図56に掲載した出土遺物のうち、226～232・234・237・238は74溝出土、233・235・236は75溝出土遺物である。74溝出土遺物のうち、234は埋土下層、237・238が埋土最下層出土遺物で、それ以外は上層ないし最上層出土である。一方、75溝出土遺物のうち233は埋土上層、それ以外は埋土下層出土である。このように、74溝埋土上層および最上層遺物が最も多く、埋土下層出土遺物は両溝とも少量である。また74溝埋土上層出土遺物である227は中世の所産であるのに加え、他にも9世紀

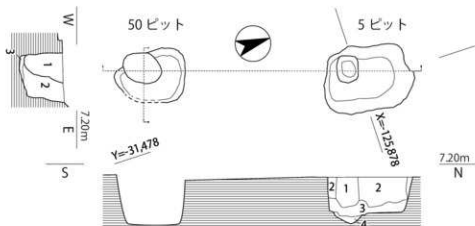


- <81ピット> 1. 10YR6/1 褐灰 細砂混粘質シルト
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック若干含む)
2. 7.5YR5/2 灰褐 細砂混粘質シルト
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック若干含む)
3. 10YR5/3 にぶい黄褐 細砂混粘質微砂
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック多量に含む)
- <82ピット> 1. 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト混粘質微砂
2. 10YR6/1 褐灰 細砂混粘質シルト
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック若干含む)
3. 10YR5/3 にぶい黄褐 細砂混粘質微砂
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック多量に含む)
- <83ピット> 1. 10YR5/2 灰黄褐 微砂混粘質細砂
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック含む)
- <84ピット> 1. 10YR5/2 明黄褐 シルト混粘質細砂
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック含む)
2. 10YR5/3 にぶい黄褐 細砂混粘質微砂

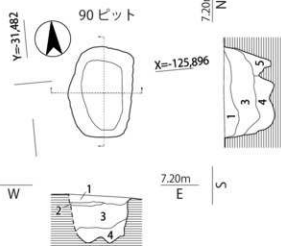
- <85ピット> 1. 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト混粘質微砂
2. 10YR5/3 にぶい黄褐 細砂混粘質微砂
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック多量に含む)
3. 10YR5/2 灰黄褐 微砂混粘質細砂
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック含む)
- <86ピット> 1. 10YR5/2 灰黄褐 シルト混粘質微砂
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック多量に含む)
2. 10YR5/3 にぶい黄褐 細砂混粘質微砂
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック多量に含む)
- <87ピット> 1. 10YR5/2 灰黄褐 シルト混粘質微砂
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック含む)
2. 10YR6/1 褐灰 細砂混粘質シルト
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック若干含む)
3. 10YR5/3 にぶい黄褐 細砂混粘質微砂
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック多量に含む)
- <88ピット> 1. 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト混粘質微砂
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック多量に含む)
2. 10YR5/3 にぶい黄褐 細砂混粘質微砂
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック多量に含む)
- <92ピット> 1. 10YR6/3 にぶい黄褐 シルト混粘質微砂
(地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック多量に含む)

0 (1:40) 2m

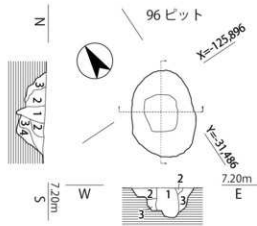
図 54 22 - 1 - 8 建物1平・断面図



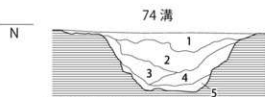
- 〈5ピット・50ピット〉
1. 10YR6/2 灰黄褐 細砂混粘質微砂 (地山の10YR7/4にふい黄橙シルトブロック若干含む)
 2. 10YR5/3 にふい黄橙 細砂混粘質微砂 (地山の10YR7/4にふい黄橙シルトブロックと10YR6/1 褐灰 粘質細砂ブロック多量に含む)
 3. 7.5YR5/1 褐灰 細砂混粘質微砂
 4. 7.5YR6/4 にふい橙 微砂混粘質細砂 (地山の土壌化層か)



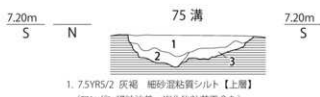
1. 10YR5/2 灰黄褐 細砂混粘質シルト (地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック含む)
2. 10YR6/2 灰黄褐 微砂混粘質細砂 (地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック多く含む)
3. 10YR5/1 褐灰 微砂混粘質細砂 (炭化物粒と地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック若干含む)
4. 10YR6/1 褐灰 粘質微砂 (地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック若干含む)
5. 10YR6/2 灰黄褐 粘質微砂 (4より土壌化弱く、地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック多く含む)



1. 10YR5/2 灰黄褐 細砂混粘質シルト (炭化物粒若干含む)
2. 10YR4/1 褐灰 シルト混粘質細砂 (地山の10YR7/3 明黄褐シルトブロック含む)
3. 10YR4/2 灰黄褐 細砂混粘質シルト (地山の10YR7/3 明黄褐シルトブロック含む、地山の含有量は2より多い)
4. 10YR5/1 褐灰 細砂混粘質シルト (中砂、小礫若干含む)



1. 7.5YR5/2 灰褐 微砂混粘質細砂 【上層】 (中砂と地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック若干含む)
2. 10YR5/3 にふい黄橙 シルト混粘質細砂 【上層】 (地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック若干含む)
3. 10YR5/2 灰黄褐 細砂混粘質微砂 【上層】 (4と地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック若干含む)
4. 7.5YR4/2 灰褐 細砂混粘質微砂 (炭化物若干含む) 【下層】
5. 7.5YR5/1 褐灰 細砂混粘質シルト (炭化物若干含む) 【下層】



1. 7.5YR5/2 灰褐 細砂混粘質シルト 【上層】 (マンガン斑状沈着。炭化物粒若干含む)
2. 10YR5/1 褐灰 細砂混粘質微砂 (1より粘性弱い) 【下層】
3. 10YR6/2 灰黄褐 シルト混粘質細砂 【下層】 (地山の10YR7/6明黄褐シルトブロック含む)



図 55 22 - 1 - 8 最終遺構面古代遺構平・断面図 (1)

以降とみられるものが含まれる。一方、75 溝埋土から明らかに 9 世紀を降るとみられる遺物は出土しなかった。74 溝埋土上層に中世の遺物が含まれるのは、古代の集落域が廃絶もしくは移動した後も溝が埋まりきらずにその後もしばらく痕跡が残っていたためと考えられる。そしてそれが中世以降に人為的に埋められた際、中世遺物が混入したのだろう。74 溝埋土上層・最上層に無遺物層等のブロック土が混入するのがその証左である。また古代の建物 1 が、75 溝埋没後に建てられているという事実もこれと矛盾しない。このことから先行して掘削された 75 溝が埋没

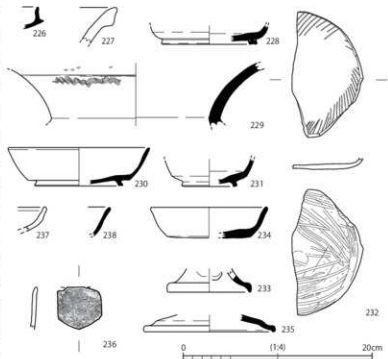


図 56 22 - 1 - 8 74 溝・75 溝出土遺物

した後、その北側に位置をずらして 74 溝が掘削されるとともに、建物 1 が建てられたことがわかる。したがって 8 世紀の遺構には少なくとも 2 段階の時期的変遷があったということになる。

これらの溝の東側延長部分は 20 - 1 - 19 - 1 のこれより東側の調査区では検出されていない。加えて古代集落が展開する微高地は、南および東に向けて徐々に下降することが明らかでない。これらの溝の流末にあたる部分の状況は、現在のところ不明と言わざるを得ない。ただ今回の調査区で 74 溝の東端部分が北に向けて方向を転じる部分を検出していることから、これらの溝が必ずしも微高地を横断するように直進していたわけではなく、いくつかの掘立柱建物からなる屋敷地を囲む区画溝の役割をおっていた可能性が指摘できる。

74 溝（最下部）（図 45・56・57） 74 溝を掘削中に、底部に一段深くなる部分があることに気付いたため、土層断面を設定して観察したところ、それは 4 溝に止水性堆積層が若干溜まった後、部分的に掘削されたものであることがわかった。したがって、74 溝底部で検出した長方形の落込みは、溝を部分的に再掘削した際に生じたものと考えられる。図 56 - 237・238 のように、出土遺物は細片で時期を特定できないが、8～9 世紀を降る時期のものは含まれないと考える。

ピット（図 45・58・59） 先述の建物および建物の一部の可能性のあるピット列をみると、古代の柱穴とみられるピットは平面形や深さが他より明らかに大きい傾向が認められた。ただそれより規模が小さいピットの中にも、遺物の出土状況などから古代に帰属する可能性があるものが認められた。ここではそのうちのいくつかをとり上げる。

図 59 - 244 は 131 ピットの底部に水平に据えられており、礎石の代わりとして据えられたものととらえられる。出土遺物に土師器の細片がある。101 ピットには柱根が残っていた（図 120 - 521）。出土遺物に土師器・須恵器の細片がある。図 59 - 245 は 30 ピットの底部付近で出土したものである。他にも 2 点の平瓦が底部付近にながめに据えられていたことから、根石の代わりに用いられたものと考えられる。平瓦には摸付痕がみられ、古代の瓦とみられる。それ以外の出土遺物に須恵器・土師器・

弥生土器がある。土器は意図的に埋納されたものではない。図 59 - 239 ~ 243 は出土遺物から、古代のピットと考えられる遺構からの出土品である。239 は古墳時代の遺物だが、103 ピットからはこれ以外に古代の遺物の細片が出土した。

11 井戸 (図 45・60・61・120) 40 井戸埋没後、その一部に重なるように掘削された井戸である。ちなみに 19 - 1・20 - 1 発掘調査では合わせて 5 基の当該期の井戸を検出しているが、先に掘られた井戸に重複するように掘削されたものは認められない。調査区の西壁際に位置するため、安全面を考慮して掘削できたのは平面的にみると井戸の半分弱である。井戸の中央に方形の井戸枠が据えられていた。井戸枠は検出面から 50cm 程下がったところで検出したが、土層断面を観察したところ、もとは検出面の高さまでおよんでいたとみられる。ただその井戸枠は、土圧により木材の合わせ目等で変形していた可能性がある。

井戸枠は角材を四隅に建て、それを横木で連結したものの外側に、長方形の板材 (図 120 - 522) を立て並べて組んだものである。図 60 - 210 は井戸枠内部から出土した土師器の環で、外面に粘土の接合痕が残される。8 世紀末葉から 9 世紀初頭の所産とみられる。211 は埋土最上層から出土したもので 8 世紀以降の所産である。遺物の出土量は多くなく、井戸内に意図的に埋納された可能性が有るものは検出しなかった。

40 井戸 (図 45・61・62) 深さ 3.5m に達する素掘りの井戸である。底面から 30 ~ 40cm の厚さで止水性堆積層がみられるが、それより上の層にはブロック土が混入することから、比較的短期間のうちに

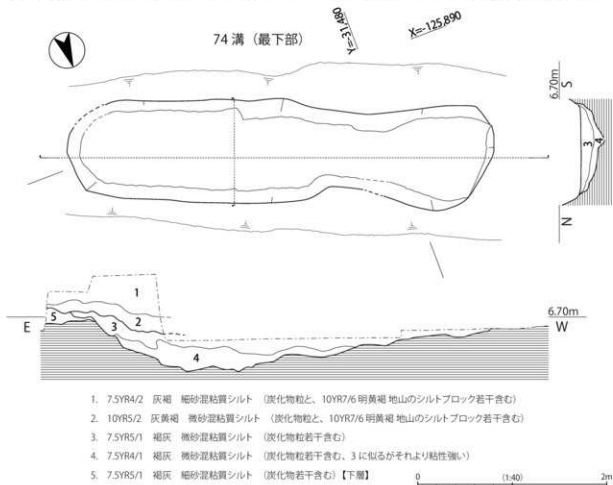


図 57 22 - 1 - 8 74 溝最下部平・断面図

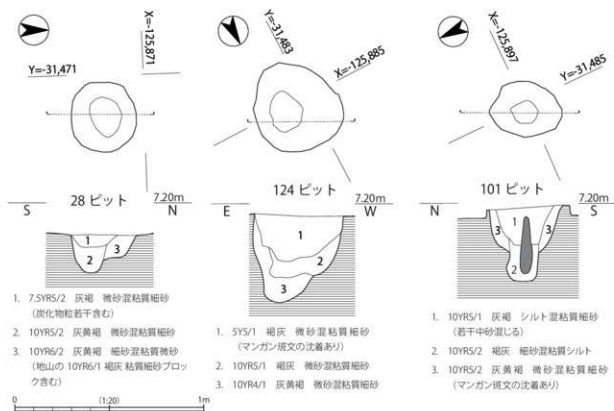


図58 22-1-8 最終遺構面古代遺構平・断面図(2)

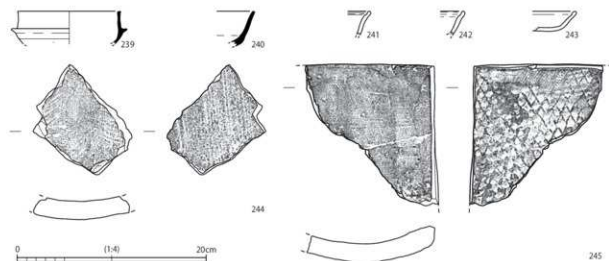
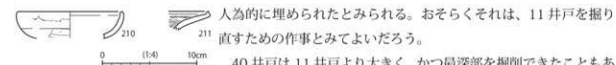
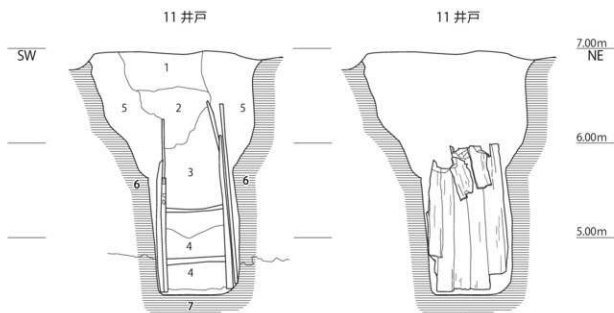


図59 22-1-8 古代遺構出土遺物

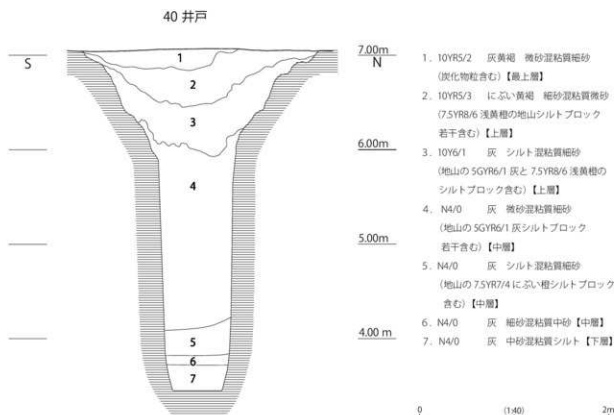


人為的に埋められたとみられる。おそらくそれは、11井戸を掘り直すための作事とみてよいだろう。

40井戸は11井戸より大きく、かつ最深部を掘削できたこともあり、比較的まとまった量の遺物が出土した。木製品である図120-519ははいねいに整形され、穿孔がある。図62-225は埋土下層から出土した須恵器環で、7世紀後半に归属するとみられ、外面に墨が付着する。222～224は埋土中層、220・221は埋土上層、212～



1. 7.5YR5/3 に近い褐 中～粗砂混粘質微砂 (第③層と地山の7.5YR8/6 明黄褐シルトがブロック状に混入する)
2. N5/0 灰 シルト混粘質細砂 (地山の5GY6/1 シルトがブロック状に混入する)
3. N6/0 灰 粗砂混粘質細砂
4. 7.5YR5/3 に近い褐 中～粗砂混粘質微砂 (第③層と地山の7.5YR8/6 明黄褐シルトがブロック状に混入する)
5. 2.5GY5/1 明オリブ灰 シルト混粘質細砂 (2に似るがそれより地山ブロックの含有量が多い)
6. 7.5YR8/6 浅黄橙 微砂混粘質シルト 無遺物層
7. 5GYR6/1 灰 微砂混粘質シルト 無遺物層



1. 10YR5/2 灰黄褐 微砂混粘質細砂 (炭化物粒含む)【最上層】
2. 10YR5/3 に近い黄褐 粗砂混粘質微砂 (7.5YR8/6 浅黄橙の地山シルトブロック若干含む)【上層】
3. 10Y6/1 灰 シルト混粘質細砂 (地山の5GYR6/1 灰と7.5YR8/6 浅黄橙のシルトブロック含む)【上層】
4. N4/0 灰 微砂混粘質細砂 (地山の5GYR6/1 灰シルトブロック若干含む)【中層】
5. N4/0 灰 シルト混粘質細砂 (地山の7.5YR7/4 に近い橙シルトブロック含む)【中層】
6. N4/0 灰 細砂混粘質中砂【中層】
7. N4/0 灰 中砂混粘質シルト【下層】

図 61 22・1・8 11井戸・40井戸断面図

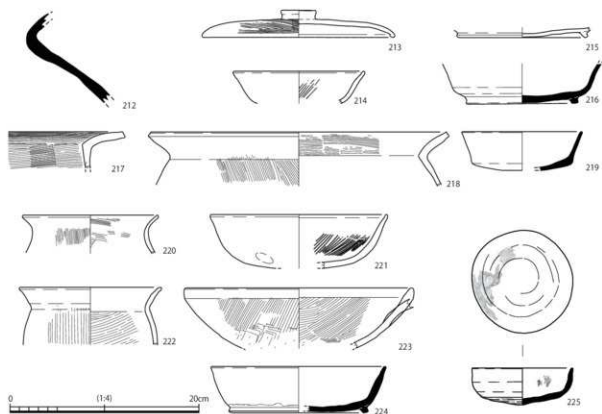


図 62 22 - 1 - 8 40 井戸出土遺物

219は埋土最上層もしくは最上層～上層出土遺物である。古墳時代に遡る時期の遺物が混入するのに加え、上層・最上層から8世紀前半代の遺物が出土した。このことからおそらく8世紀前半にはその役割を終えたのではないかと考えられる。

・弥生時代の遺構

方形周溝墓(図45・63・64) 墳丘北辺と西辺に沿う周溝の一部を検出した。墳丘は残存せず、全体的な形状を把握することはできないが、これまでの調査で検出したものを含めたとしても、かなり大型のものといえる。126溝は北端部をかく乱で壊されており、埋土から遺物は出土しなかった。

150溝は古代の溝によりその上部を大きく破壊されていた。この方形周溝墓に確実に関連する遺物は、150溝埋土から出土した図64-246のみである。弥生土器だが、底部のみのためこれをもって細かな時期を特定することはできない。ただこの溝に重なるように掘削された75溝出土遺物(図56-236)、71溝埋土に含まれていた弥生土器片(図53-201)はもともとは150溝やこの方形周溝墓の墳丘に伴っていた可能性があることから、これらを参考にと弥生時代中期前半に比定し得ると考える。125溝は、20-1-3トレンチで検出した「方形周溝墓3」の南辺に沿う周溝の延長部分と考えられる。掘削深度は10cm強と浅く、埋土から遺物は出土しなかった。

・時期不明の遺構

137土坑(図65) 平面形が角丸長方形の土坑で、長軸方向は座標東に対して26°南に振る。古代に帰属すると考えられる110ピットや130ピットに切られていることから、古代以前に形成されたと考えられる。底面は平坦だが側壁の立ち上がりは緩やかである。埋土から遺物は出土しなかった。

144土坑(図65) 不整形な楕円形の土坑である。古代のピットに切られていることから、古代以前の時期に帰属すると考えられる。掘削深度は10cm前後と極めて浅く、底面も凹凸が顕著である。意図的

に形成されたものとは考えにくい、その形成要因は不明である。遺構埋土から遺物は出土しなかった。
8ピット (図 65) これを切る 10ピット・9ピットと併せて複数のピットが切り合ったものと考えられる。中世の掘立柱建物の角柱にあたる柱穴にはこのような複数の柱穴の切り合いをもつものがみられる。そのためにこのピットと関連付けられそうなピットや建物をうかがわせるような遺構の有無を検討したが、確定にはいたらなかった。埋土から遺物は出土しなかった。

2ピット (図 65) 調査区東側壁近くで検出したピットで、柱痕が認められる。ただこのピットと関連付けられそうな規則的な位置関係をもつピットをとらえることはできなかった。遺構埋土から遺物は出土しなかった。

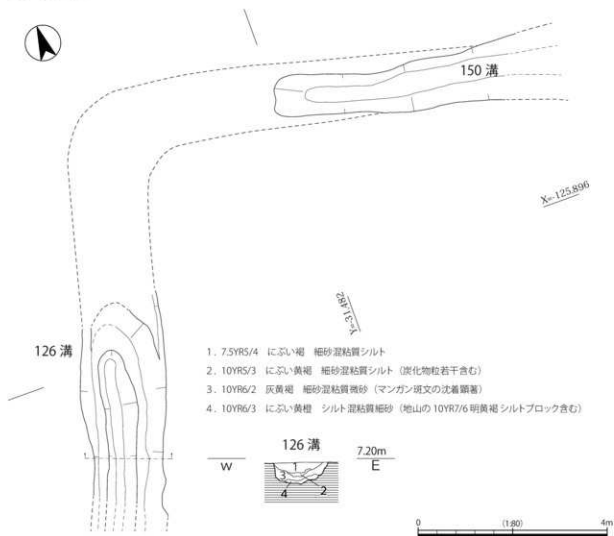


図 63 22 - 1 - 8 方形周溝墓平・断面図

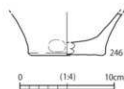


図 64 22 - 1 - 8 150 溝出土遺物

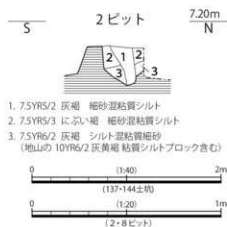
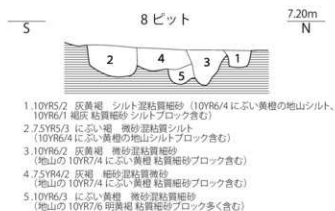
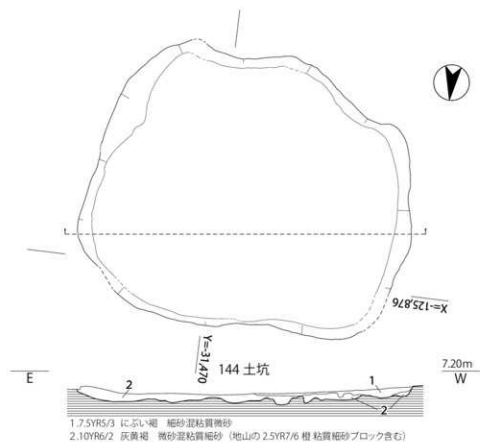
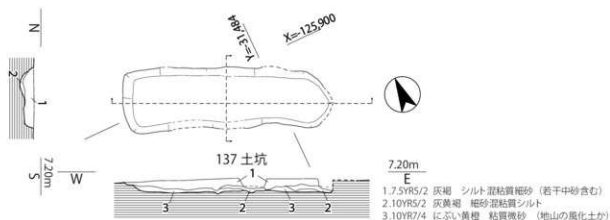


図 65 22・1・8 最終遺構面検出遺構平・断面図

第2項 6区

最終遺構面はほぼ平坦だが、調査区北端部の標高がわずかに高い傾向を認めた。また64溝の南肩に向けてややくぼむ所がある(図66・67)。

第2層は調査区の南半部でのみ堆積が認められた。それも北に向けて徐々に薄くなり、68溝から北では分布しない。第3層は調査区のほぼ全域に分布するが南半部で厚く、北に向けて徐々に薄くなる。このように第3層は概して最終遺構面の標高がやや下がるか所で厚く堆積する傾向を認めた。第4層は調査区全域に分布しており、最終遺構面の標高の高低にかぎらずほぼ均一に堆積する。

第1面(第3層上面)で溝・ピット・土器集中部等を検出した(図41)。溝は耕作痕跡とみられ、東西方向を指向する溝を、それに直行する南北方向溝が切る。土器集中部においては明確な掘方は検出できなかったものの、瓦器碗・土師器皿からなる中世土器がまとまって出土した。土器の分布範囲は東西方向に帯状に広がり、周囲の東西方向溝と並行することから、埋積の過程で土器が多量に投棄された水路底部の可能性がある。これらの遺構は中世集落の居住域が廃絶もしくは移動した後、当地一帯が生産域として利用される過程で生じたとみられる。

第3層・第4層を除去して検出した無遺物層上面を最終遺構面とした。なお第4層上面においても遺構検出を試みたが、遺構を検出することはできなかった。

包含層出土遺物を基に、第1面で検出した遺構の形成時期を検討する。図68に第2層、第3層出土遺物を、図69に第3～4層および第4層出土遺物を掲載した。いずれの層も13世紀前半代の遺物が主体を占め、古代・古墳時代・弥生時代の遺物や土師を少量含むという点で遺物の構成要素が類似する。なお中世土器の中には13世紀後葉の遺物が一定量含まれる。したがってそれを含む第3層・4層を基盤層とする第1面に残された耕作痕の成立時期は、13世紀後葉を上限とする時期といえる。

最終遺構面では調査区全域において遺構を検出した(図70)。時期別の遺構分布状況は次のとおりである(図71)。

古代末～中世の遺構・遺物は調査区ほぼ全域で検出した。検出した遺構は掘立柱建物(4棟)・溝・土坑・ピット等である。掘立柱建物は主に調査区北半部で認めた。

古代の遺構・遺物は調査区ほぼ全域で検出した。検出した遺構は平行して東西方向を指向する2条の溝と掘立柱建物(3棟)等である。2条の溝は8区で検出した当該期の2条の溝と1連のもので、建物はその北側に粗密に展開する。

古墳時代の遺構は極めて少なく、柱穴とみられる大型のピット等をわずかに認めた。ただ当該期の遺物は方形周溝墓周溝の最上層や古代以降の遺構埋土から一定量出土している。

弥生時代の遺構は調査区ほぼ全域で方形周溝墓の周溝を検出した。当該期の遺物は周溝から出土したのものも含めて少なく、細片が大半を占める傾向がある。

なお調査区では掘立柱建物と、弥生時代方形周溝墓の周溝の重なる部分が大きかったため、航空測量時は周溝を完掘せずに柱穴やピット・土坑の記録作成を優先することとし、その後周溝を完掘して周溝の記録作成に努めた。

・古代末～中世の遺構

建物1(図71・72) 建物の西半部は調査区外に当たり、全体の大きさは不明だが南北3間、東西1間以上である。南北辺の柱間のうち、33・35ピット間が1.0mなのに対し、それ以外のピット間は1.5～1.7mと前者が短い。南辺の1間は廂の可能性もある。そうであれば南辺に廂を伴う南北2間×

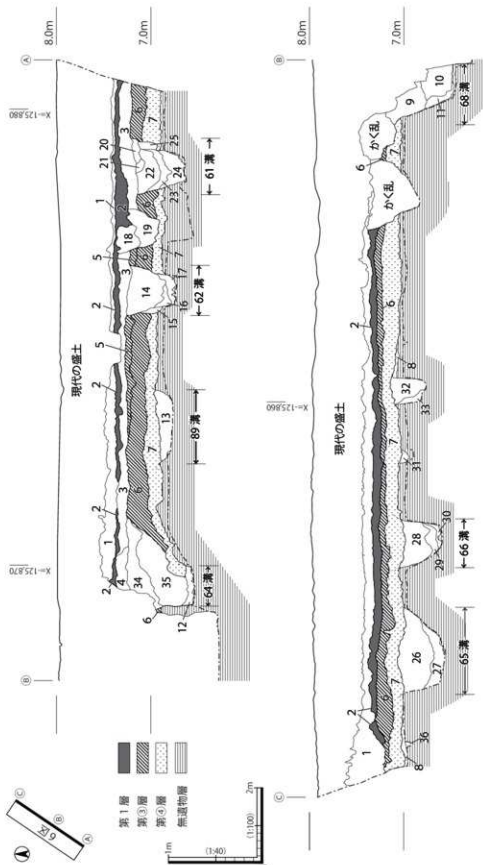
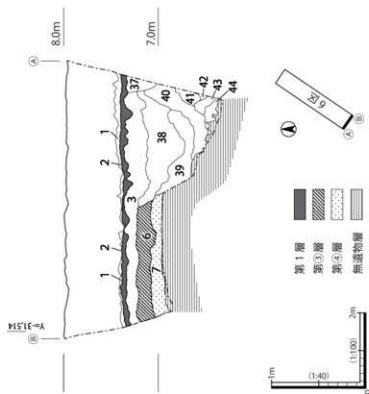


図66 22 - 1 - 6 東壁土層断面図



12. 7.5YR5/2 灰褐色 細砂混粘質シルト (地山の7.5YR7/4にぶい層シルトブロック若干含む) 第6層(上部)
13. 7.5YR5/3 にぶい層 細砂混粘質シルト (地山の7.5YR7/4にぶい層シルトブロック含む)
14. 7.5YR6/2 灰褐色 細砂混粘質シルト (マンガン埋込層, 炭化物粒若干含む) 【中埋土】
15. 7.5YR5/3 にぶい層 細砂混粘質シルト (16に似るがそれより粘性強い)
16. 7.5YR6/2 灰褐色 シルト混粘質細砂 (7.5YR5/3にぶい層シルトがブロック状に混じる)
17. 10YR6/1 褐色 細砂混粘質シルト (7.5YR5/2灰褐色 粘質細砂がブロック状に混じる)
18. 7.5YR6/2 灰褐色 細砂混粘質シルト (マンガン埋込層, 炭化物粒若干含む)
19. 5Y5/1 灰 細砂混粘質シルト (炭化物粒含む)
20. 10YR5/2 灰褐色 シルト混粘質細砂
21. 10YR6/4 にぶい層 細砂混粘質シルト (地山の7.5YR7/4にぶい層シルトブロック若干含む)
22. 7.5YR6/2 灰褐色 細砂混粘質シルト (マンガン埋込層, 炭化物粒若干含む)
23. 7.5YR6/2 灰褐色 シルト混粘質細砂 (7.5YR5/3にぶい層シルトがブロック状に混じる)
24. 10YR6/1 褐色 細砂混粘質シルト (7.5YR5/2灰褐色 粘質細砂がブロック状に混じる)
25. 7.5YR5/3 にぶい層 細砂混粘質シルト
26. 7.5YR5/3 にぶい層 シルト混粘質細砂 (マンガン埋込層に含む)
27. 7.5YR6/3 にぶい層 細砂混粘質シルト (地山の7.5YR7/4にぶい層シルトブロックを30%程度含む)
28. 7.5YR5/2 灰褐色 細砂混粘質シルト (地山の7.5YR7/4にぶい層シルトブロック若干含む)
29. 7.5YR5/3 にぶい層 シルト混粘質細砂 (炭化物粒, 地山の7.5YR7/4にぶい層シルトブロックを若干含む)
30. 7.5YR5/3 にぶい層 細砂混粘質シルト (地山の7.5YR7/4にぶい層シルトブロックを50%ほど含む)
31. 7.5YR5/1 褐色 細砂混粘質シルト (マンガン埋込層含む)
32. 7.5YR5/1 褐色 細砂混粘質シルト (マンガン埋込層含む)
33. 7.5YR5/3 にぶい層 細砂混粘質シルト
34. 7.5YR6/2 灰褐色 シルト混粘質細砂 (マンガン埋込層, 炭化物粒若干含む)
35. 10YR5/3 にぶい層 細砂混粘質細砂 (炭化物粒, 地山の7.5YR7/4にぶい層シルトブロックを若干含む)
36. 10YR6/2 灰褐色 シルト混粘質細砂 (地山の10YR7/6層シルトブロックと炭化物粒含む)
37. 10YR6/2 灰褐色 細砂混粘質細砂 (マンガン埋込層, 炭化物粒若干含む)
38. 10YR7/3 にぶい層 細砂混粘質細砂 (炭化物粒, 地山の7.5YR7/4にぶい層シルトブロックを含む)
39. 10YR7/2 にぶい層 細砂混粘質シルト (マンガン埋込層, 炭化物粒若干含む)
40. 7.5YR5/3 にぶい層 細砂混粘質細砂 (地山の7.5YR7/4にぶい層シルトブロック若干含む)

41. 7.5YR5/1 褐色 シルト混粘質細砂 (地山の7.5YR7/4にぶい層シルトブロック含む)
42. 7.5YR6/1 褐色 細砂混粘質シルト (10YR6/4にぶい層 細砂混粘質シルトブロック含む)
43. 10YR7/2 にぶい層 細砂混粘質シルト (地山の7.5YR7/4にぶい層シルトブロック含む)
44. 7.5YR6/1 褐色 細砂混粘質シルト (地山の10YR7/6埋込層シルトブロックと炭化物粒含む)

図67 22 - 1 - 6 南壁土層断面図

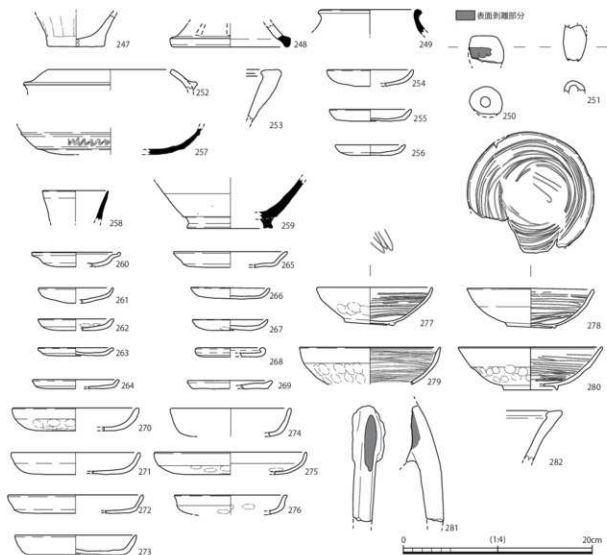


図 68 22 - 1 - 6 第 2 層・第 3 層出土遺物

東西 1 間以上の建物ということになる。このような柱穴配置は後述する建物 6 と類似する。

建物の方向軸は座標北に対して 30° 東に振る。建物規模は芯々距離で南北 4.3m、東西 1.4m 以上である。柱穴は直径 30 ~ 50cm の円形を基調とし、検出面からの深さは 10 ~ 20cm で、根石や礎石を伴うものはない。

35 ピット遺構埋土から中世須恵器の細片が出土したことから、当該期のものと判断した。

建物 2 (図 71・73・74) 建物の東半部は調査区外にあたるため、全体の大きさは不明だが、南北 2 間以上、東西 1 間以上の総柱建物である。柱間は南北方向辺が 1.2 ~ 1.4m、東西方向辺が 1.3 ~ 1.5m である。柱穴は直径 40 ~ 50cm の円形を基調とし、深さは 20cm 前後で根石や礎石を伴うものはない。

建物の方向軸は座標北に対して 8° 東に振る。建物規模は芯々距離で南北 2.6m、東西 1.5m 以上である。

すべての柱穴埋土から土器が出土したが、いずれも細片で図示できたのは 42 ピット出土の須恵器蓋のみだった。必ずしも当遺構の時期を示すものではないが参考資料として掲載する。39 ピット埋土から燈明皿を含む土師器が、41 ピットから中世の可能性のある土師器が出土したことから、当該期に帰属すると考えた。なお 40・42 ピットから土師器・弥生土器、43 ピットから土師器・須恵器が出土したが、細片のため時期比定の手がかりとなるものではない。

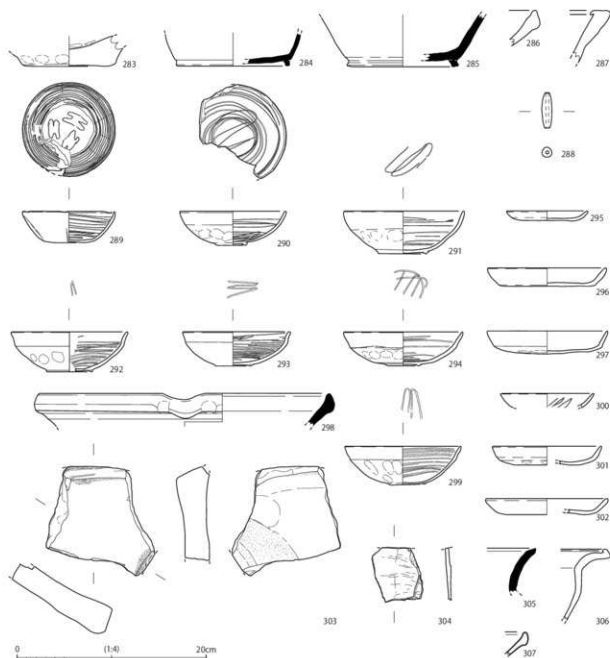


図69 22-1-6 第③～④層・第④層出土遺物

建物3 (図71・75) 建物の東半部は調査区外にあたるため全体の大きさは不明だが、南北2間、東西2間以上の掘立柱建物である。柱間は南北方向辺が1.4～1.6m、東西方向辺は1.0～1.7mとばらつきがある。柱穴は直径30cm前後の円形を基調とし、深さは10cm前後で根石や礎石を伴うものはない。

建物の方向軸は座標北に対して16°東に振る。建物規模は芯々距離で南北3.0m、東西3.1m以上である。図81-402は29ピット出土遺物である。26・27ピット埋土から土師器・瓦器の細片が、30ピットから土師器が出土したことから当該期に帰属すると判断した。

建物4 (図71・76) 南北4間、東西2間の南北に長い掘立柱建物である。建物1と同様、南辺から北側の柱間が短い柱穴配置であることから、南辺に廂をもつ南北3間、東西2間の建物の可能性がある。柱穴は直径40cm前後の円形を基調とし、深さは20cm弱で根石や礎石を伴うものはない。

建物の方向軸は座標北に対して35°東に振る。建物規模は芯々距離で南北約5.0m、東西約3.4mで

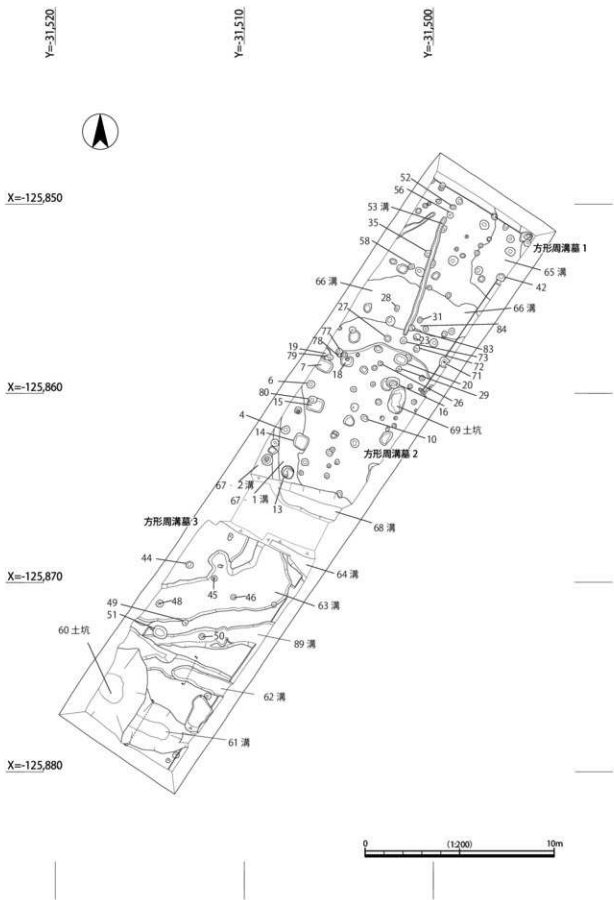


圖 70 22 - 1 - 6 最終遺構面平面圖

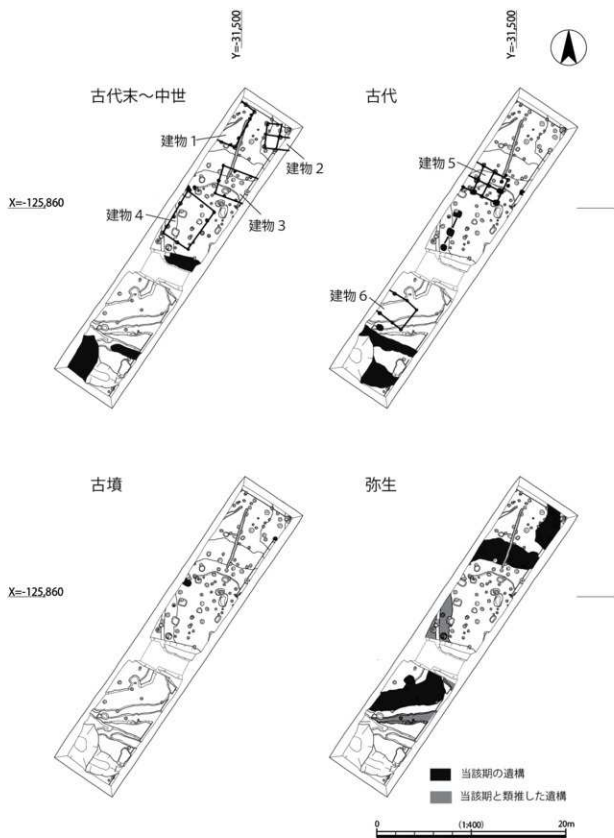


図71 22・1・6 時期別遺構分布図

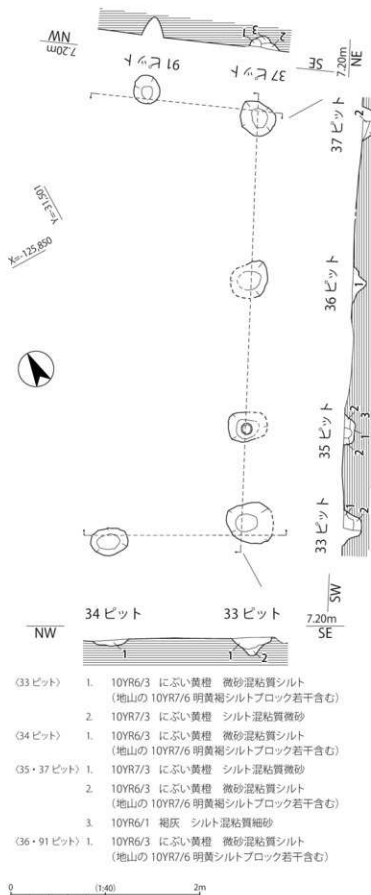
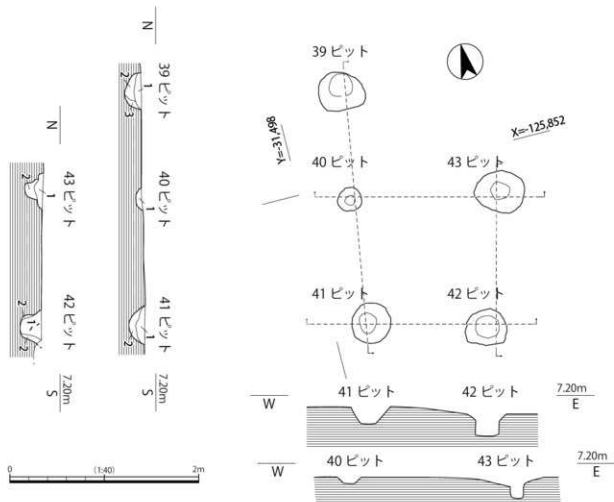


図 72 22・1・6 建物1平・断面図

ある。11・79ピットから土師器、4・6ピットから土師器・須恵器、10ピットから土師器・瓦器が出土した。いずれも細片で図示できるもの、細かな時期比定が可能なものはないが、10ピットから出土した瓦器をもって当該期に帰属すると判断した。

60土坑 (図77～80・120) 調査区南西角で検出した土坑で全体の規模は不明だが、おそらく平面形態が楕円形の土坑とみられる。埋土下半部は止水性堆積層とみられるが、埋土上半部にはブロック土が混入することから、ある時期に人為的に埋められたと考えられる。

遺構埋土には上層から最下層まで残存状態のよい瓦器碗・土師器皿が大量に含まれていたのに加え、青磁碗・土鍾等も若干含まれていた。特に土坑の肩部に近い側壁部分に完形の土器が多数重なるように堆積していた(図78)。図79に掲載した遺物は308のみ埋土下層出土で、それ以外は埋土上層出土遺物である。図80に掲載した遺物は397・398が最下層出土で、他は下層出土遺物である。土師器皿が大半を占め、瓦器碗がそれに次ぐ。これをみると最下層出土遺物(図80・397)は13世紀前半に帰属するのに対し、下層から上の層に含まれる遺物には13世紀前半の遺物と13世紀後葉～末葉の遺物がみられる。このことから60土坑は13世紀前半を下限とする時期に掘削され、13世紀末葉を下限とする時期に埋められたと考えられる。このことから掘削されてから



- (39・43ピット) 1. 7.5YRS/2 灰褐 微砂混粘質シルト
(10YR7/6 明黄褐 シルトの地山ブロックを若干含む)
2. 7.5YR6/1 褐灰 微砂混粘質シルト
(1に似るが、それより土壌化弱い)
- (40ピット) 1. 7.5YRS/2 灰褐 微砂混粘質シルト
(10YR7/6 明黄褐 シルトの地山ブロックを若干含む)

- (41ピット) 1. 7.5YRS/2 灰褐 微砂混粘質シルト
(10YR7/6 明黄褐 シルトの地山ブロックを若干含む)
2. 7.5YR6/1 褐灰 微砂混粘質シルト
3. 7.5YRS/1 褐灰 微砂混粘質シルト
- (42ピット) 1. 7.5YRS/2 灰褐 微砂混粘質シルト
(10YR7/6 明黄褐 シルトの地山ブロックを若干含む)
2. 7.5YRS/1 褐灰 微砂混粘質シルト

図73 22 - 1 - 6 建物2平・断面図



図74 22 - 1 42ピット
出土遺物

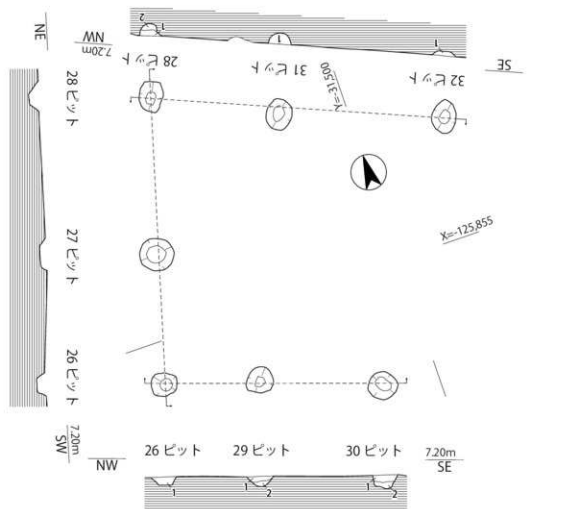
あまり時期を置かずに埋められたのではないかと考えられる。

井戸もしくは水溜として使用されたと考えるが、埋め戻す際に土器を投棄したと考えられる。ちなみに図80 - 345は体部外面に葉の圧痕がみられる。焼成前の生乾きの段階で偶然ついたものとみられる。

62溝 (図66・70・81) 62溝においては古代の溝に新しい時代の溝が重なる状況がみられた。新しい溝の西端は急激に深さを減じて調査区の中ほどで途切れるが、掘り込み面が検出面よりも高かったことによるとみられ、もとは西へ延伸していたと考える。末流は調査区の東方に延びる。

60土坑との接続部は認められなかったが、増水により60土坑の水があふれた際、余水を落とすために形成された可能性もある。図81 - 399の瓦や、外面に2段ナデを施した土師器環の他、土師器・瓦器の細片が出土した。

53溝 (図70・81) 建物1の柱穴を切り、建物3にもおよんでいることから、それらの建物が廃絶し



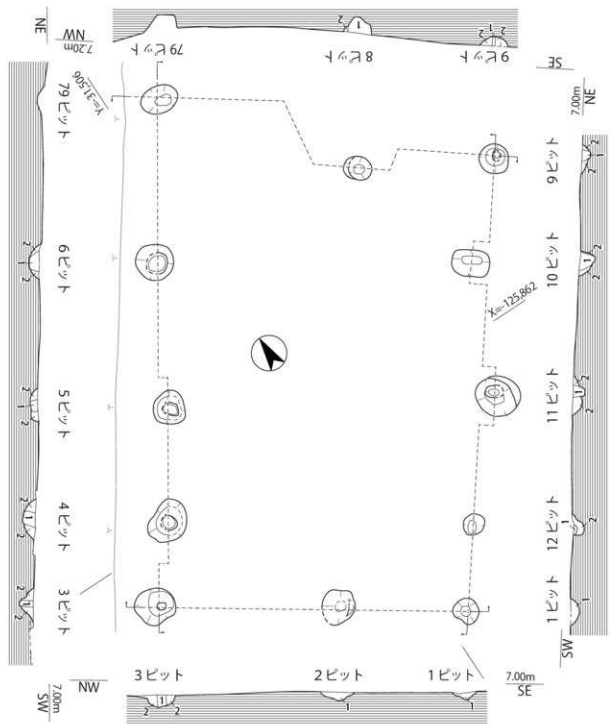
- | | |
|--|--|
| <p>(26ピット) 1. 75YRS/2 灰褐 微砂混粘質シルト
(10YR7/6 明黄褐 シルトの地山ブロックを若干含む)</p> <p>2. 75YR6/1 褐灰 微砂混粘質シルト
(1 に似るが、それより土壌化弱い)</p> <p>(28ピット) 1. 10YR6/2 にぶい黄橙 微砂混粘質シルト
(地山の 10YR7/6 明黄褐 シルトブロック若干含む)</p> <p>2. 10YR6/2 灰黄褐 微砂混粘質シルト</p> <p>(29ピット) 1. 75YRS/2 灰褐 微砂混粘質シルト
(10YR7/6 明黄褐 シルトの地山ブロックを若干含む)</p> | <p>(30ピット) 1. 75YRS/2 灰褐 微砂混粘質シルト
(10YR7/6 明黄褐 シルトの地山ブロックを若干含む)</p> <p>2. 75YR6/1 褐灰 微砂混粘質シルト
(1 に似るが、それより土壌化弱い)</p> <p>3. 75YRS/1 褐灰 微砂混粘質シルト</p> <p>(31ピット) 1. 10YR6/3 にぶい黄橙 シルト混粘質微砂
(マンガン斑文含む)</p> <p>(32ピット) 1. 75YR6/1 褐灰 シルト混粘質微砂</p> <p>2. 75YRS/2 灰褐 微砂混粘質シルト
(10YR7/6 明黄褐 シルトの地山ブロックを若干含む)</p> |
|--|--|

図 75 22 - 1 - 6 建物3平・断面図

後に形成された溝ととらえられる。幅 30cm、深さ 5cm の直線的に延びる小規模な溝で、座標北に対して東に 20° 振る。遺構埋土から図 81 - 401 の他に須恵器・黒色土器碗等の古代末葉以前の遺物が若干出土した。ただ遺構の切り合いからみて、建物 1 に後出することは確かである。

68 溝 (図 66・70・81) 建物 4 の南側に位置する東西方向の溝とみられるが、南半および西半をかく乱で壊されており、残存していたのは一部である。先述した複数の建物がある範囲の南端を限るようにはほぼ東西方向に延びていることから、区画溝を兼ねた基幹水路の可能性もある。8 区検出の 1 溝の西側延長部分の可能性はあるが、その間の溝の軌跡が不明なため断定はできない。

遺構埋土から図 81 - 404 の瓦質羽釜の他、土師器皿・須恵器・瓦器などが出土した。



- (1・2ピット) 1. 10YR6/3 にぶい黄褐色 微砂混粘質シルト
(地山の10YR7/6明黄褐色シルトブロック若干含む)
- (3・4・5・6・9・11ピット)
1. 7.5YR6/1 褐灰 シルト混粘質微砂
2. 7.5YR6/2 灰褐色 細砂混粘質シルト
- (8ピット)
1. 10YR5/3 にぶい黄褐色 微砂混粘質シルト
(炭化物粒含む)
2. 10YR7/2 にぶい黄褐色 微砂混粘質シルト
(地山の10YR7/6明黄褐色シルトブロック含む)
- (10ピット) 1. 10YR6/2 灰黄褐色 微砂混粘質シルト
2. 10YR7/2 にぶい黄褐色 微砂混粘質シルト
(地山の10YR7/6明黄褐色シルトブロック含む)
- (12ピット) 1. 10YR7/3 にぶい黄褐色 シルト混粘質微砂
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色 微砂混粘質シルト (炭化物粒含む)
- (79ピット) 1. 7.5YR6/1 褐灰 シルト混粘質微砂
2. 7.5YR6/2 灰褐色 細砂混粘質シルト
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色 微砂混粘質シルト (炭化物粒含む)

0 1.40 2m

図76 22-1-6 建物4平・断面図

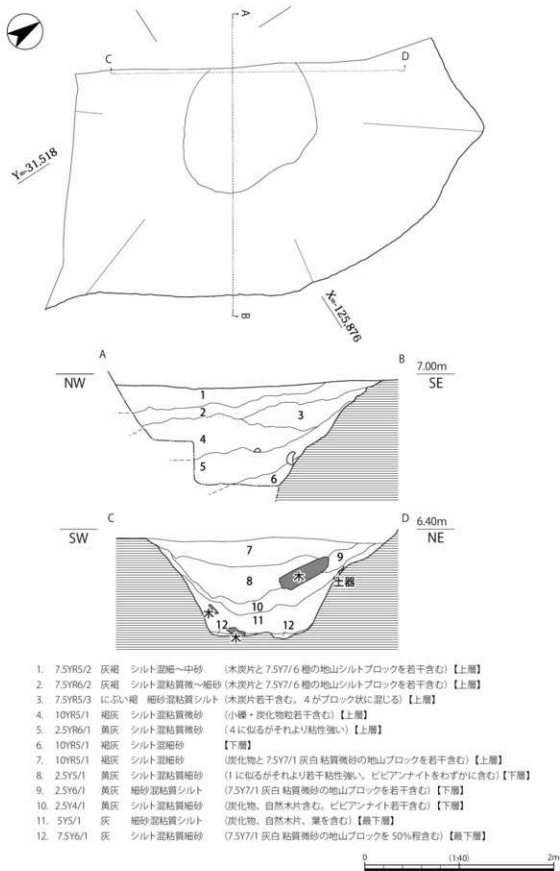


図77 22 - 1 - 6 60土坑平・断面図

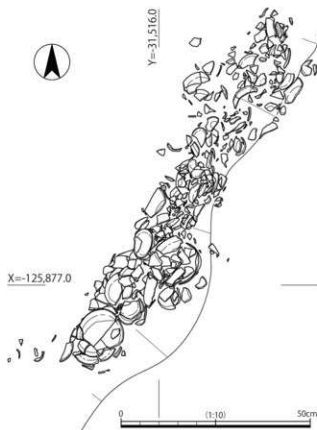


図 78 22・1・6 60土坑遺物出土状況図

当該期の可能性が高いと考えた。

建物 6 (図 83) 棟持柱の痕跡を検出することができなかったが、ピット配置の整合性からみて南北 2 間・東西 2 間以上の東西に長い掘立柱建物ととらえた。建物の西側は調査区外に延長するとみられる。

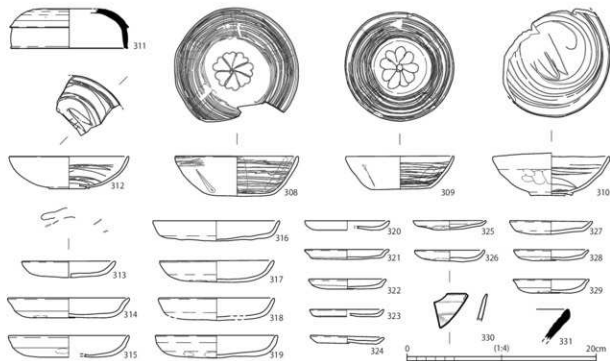


図 79 22・1・6 60土坑上層出土遺物

・古代の遺構

建物 5 (図 82) 南北 2 間、東西 3 間以上の東西に長い総柱建物である。19 ピットの存在から当遺構の西側は調査区外に延長する可能性が高いと考える。柱穴は長辺 70cm・短辺 50cm の角丸長方形を基調とし、深さは外縁部の柱穴が 20cm 強なのに対し、中央列の柱穴は 10cm 前後と浅い傾向が認められる。根石や礎石を伴う柱穴は認めなかった。

建物の方向軸は座標北に対して 25° 東に振る。建物規模は芯々距離で南北約 2.8m、東西約 4m 以上である。柱間は南北方向辺が 1.3～1.6m、東西方向辺は 1.2～1.6m とややばらつきがある。19 ピットと 20 ピットの埋土から土師器と須恵器の細片が出土した。うち 20 ピットに含まれていた土師器は 8 世紀代の坏の破片とみられる。19 ピット出土遺物は細片のため時期の特定ができないが、古墳時代の 7 ピットを切り、中世の 79 ピットに切られていることからみて、

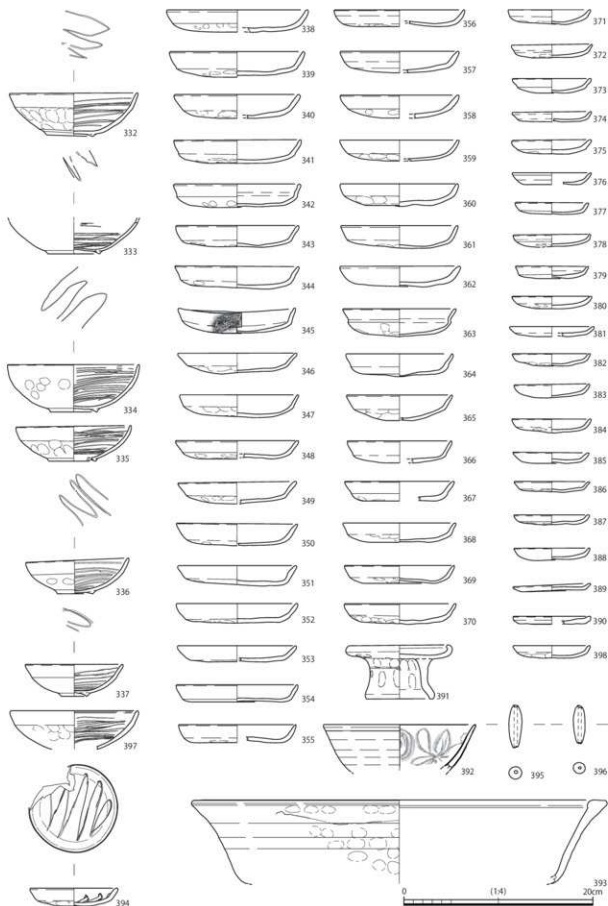


图 80 22·1·6 60土坑下層・最下層出土遺物

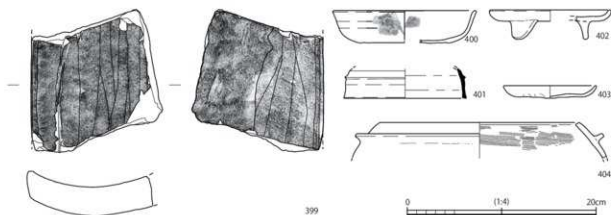


図81 22 - 1 - 6 62溝・53溝・68溝・29ピット出土遺物

柱穴は直径30～40cmの円形を基調とし、深さは20～30cmである。根石や礎石を伴う柱穴はなかった。

建物の方向軸は座標北に対して35°東に振る。建物規模は芯々距離で南北約2.7m、東西約2.8m以上である。柱間は南北方向辺1.3m、東西方向辺は1.4m前後である。44～46・49ピット埋土から土師器片が出土した。うち44ピット出土の土師器片に、古代の煮沸具の破片とみられるものが含まれていたことから、当該期に比定した。45ピット・46ピットからは土師器の細片が各1点、49ピットからは土師器の細片が3点出土したが、いずれも細片で時期判断はできなかった。

ピット列 (図84) 13～15ピットの存在から、西に向けて調査区外に掘立柱建物の柱穴が展開する可能性をうかがえたが、今回の調査でその有無を判断することはできなかった。柱穴の平面形が短辺60cm前後、長辺80cm前後の角丸長方形である点は、建物5の柱穴と類似する。それらは検出面から10～20cmの深さで、13ピットから土師器、14ピットから土師器・須恵器・弥生土器、15ピットから口縁部2点を含む土師器が出土した。いずれも細片で図示できるものはなかったが、15ピット出土遺物から当該期に比定した。

これらを結んだラインは座標北に対して22°東に振り、ピット間の距離は13 - 14ピット間が2.0m、14 - 15ピット間は2.2mと当該期の建物の柱間と比べて若干長い。

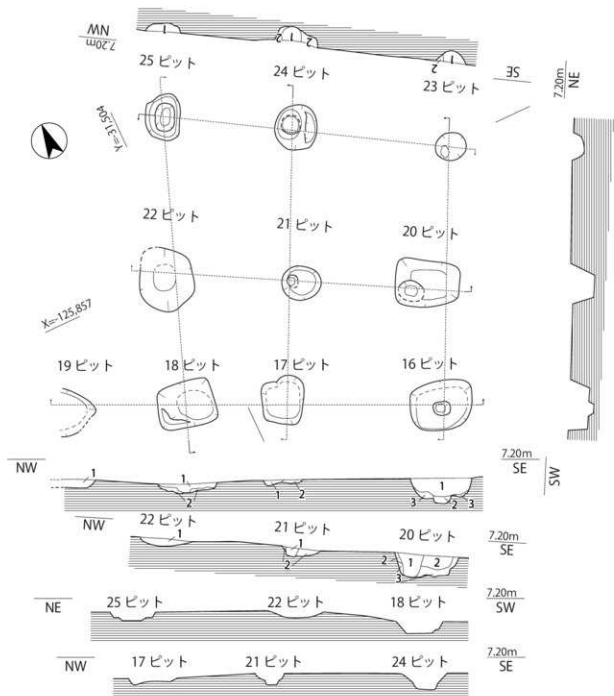
61溝・62溝 (図66・70・84) 61溝は8区75溝の、62溝は8区74溝の西側延長部分とみられる。75溝と74溝をみると前者より後者的の方が深く、61溝と62溝においても同様の傾向がみられる。61溝は西に向けて水溜状に幅が広がるとともに深くなるのに対し、62溝は幅が狭まりより浅くなるため、両者の違いは当調査区においてはより際立っている。なお図84に掲載した62溝断面は、大半を中世溝に切られている。図66にも61溝・62溝の断面が含まれているので併せて参照されたい。いずれの溝からも土師器・須恵器等が出土したが、いずれも細片で図示できるものはなかった。

・古墳時代の遺構

7ピット (図70・85) 平面形は長軸90cm、短軸60cmの角丸長方形で、深さは30cm弱である。埋土出土遺物は土師器・須恵器・移動式竈の破片とみられる土製品があるが、いずれも細片で図示できなかった。遺構の切り合い関係も加味して当該期の遺構としたが、明確な時期判断の手がかりとなる遺物がなかったことから古代の柱穴である可能性も否定はできない。

・弥生時代の遺構

方形周溝墓1 (図86・87) 当遺構は20 - 1 - 3トレンチで検出した「方形周溝墓2」の西側延長部分とみられ、墳丘西辺に沿う周溝の一部を検出した。20 - 1調査ではその東辺に沿う周溝の一部を



- | | |
|--|--|
| <p>(16ピット) 1. 7.5YR4/2 灰褐 微砂混粘質シルト
2. 10YR4/2 灰黄褐 微砂混粘質シルト
3. 10YR6/3 にぶい黄褐 微砂混粘質シルト
(地山の 10YR7/6 明黄褐シルトブロック若干含む)</p> <p>(17・18ピット) 1. 7.5YR5/2 灰褐 微砂混粘質シルト
(10YR7/6 明黄褐シルトの地山ブロックを若干含む)
2. 10YR6/3 にぶい黄褐 微砂混粘質シルト
(地山の 10YR7/6 明黄褐シルトブロック若干含む)</p> <p>(19ピット) 1. 7.5YR5/2 灰褐 微砂混粘質シルト
(10YR7/6 明黄褐シルトの地山ブロックを若干含む)</p> <p>(20ピット) 1. 10YR7/3 にぶい黄褐 シルト混粘質微砂
2. 10YR5/3 にぶい黄褐 微砂混粘質シルト (炭化物粒含む)
3. 10YR6/3 にぶい黄褐 微砂混粘質シルト
(地山の 10YR7/6 明黄褐シルトブロック若干含む)</p> | <p>(21ピット) 1. 10YR6/2 灰黄褐 微砂混粘質シルト
2. 10YR7/2 にぶい黄褐 微砂混粘質シルト
(地山の 10YR7/6 明黄褐シルトブロック含む)</p> <p>(22ピット) 1. 10YR6/2 灰黄褐 微砂混粘質シルト</p> <p>(23ピット) 1. 7.5YR5/2 灰褐 微砂混粘質シルト
(10YR7/6 明黄褐シルトの地山ブロックを若干含む)
2. 7.5YR6/1 褐灰 微砂混粘質シルト
(1 に似るがそれより土壌化弱し)</p> <p>(24ピット) 1. 7.5YR5/1 褐灰 微砂混粘質シルト
2. 7.5YR5/2 灰褐 微砂混粘質シルト</p> <p>(25ピット) 1. 7.5YR5/2 灰褐 微砂混粘質シルト</p> |
|--|--|
- 0 (1:40) 2m

図 82 22 - 1 - 6 建物 5 平・断面図

検出しており、今回の調査の検出状況も含めて墳丘規模は一边が8m前後であることがわかった。墳丘は残存せず、65溝によりその存在が確認できる。周溝埋土から弥生土器の可能性のある土器細片が2点出土し、1点にろうじてミガキの痕跡を認めたが、どちらも摩滅が著しく器種等は不明である。ちなみに20-1調査の際も、周溝埋土から土師器の細片が数点出土したのみで、当遺構の時期を明示できるものはない。

方形周溝墓 2 (図 86 ~ 88) 長軸方向がおおむね南北方向を指向する長辺12~13m、短辺9m前後の比較的規模の大きな方形周溝墓である。墳丘は残存せず、墳丘北辺に沿う66溝と、西辺に沿う67-1溝からその存在を確認できる。20-1-3トレンチで検出した「溝19」は当遺構の墳丘西辺に沿う周溝の一部ととらえられる。66溝から弥生時代中期前半の広口壺1点が出土した(図88)。

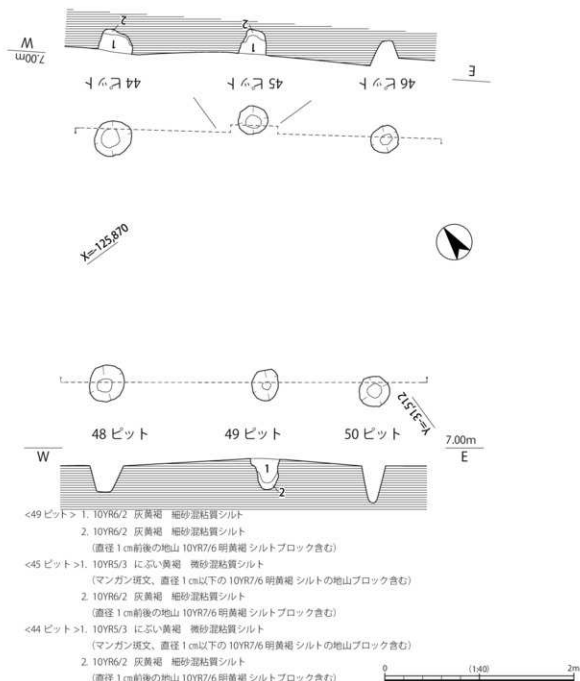


図 83 22-1-6 建物6平・断面図

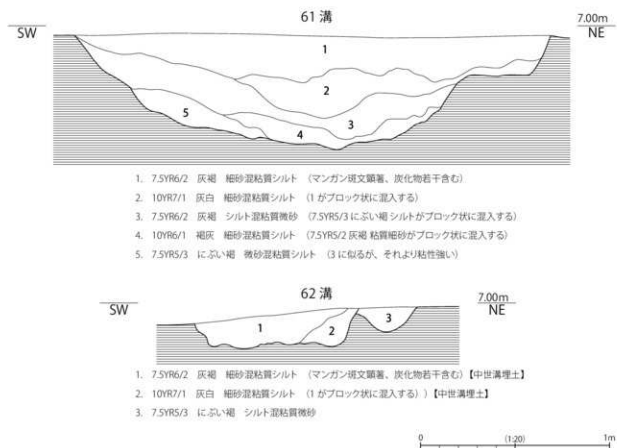
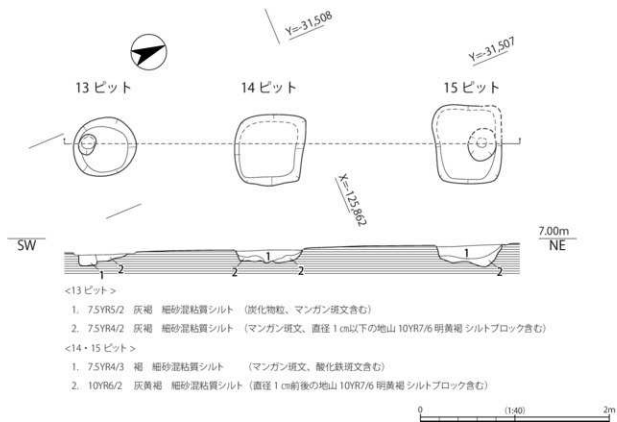


図 84 22・1・6 最終遺構面古代遺構平・断面図

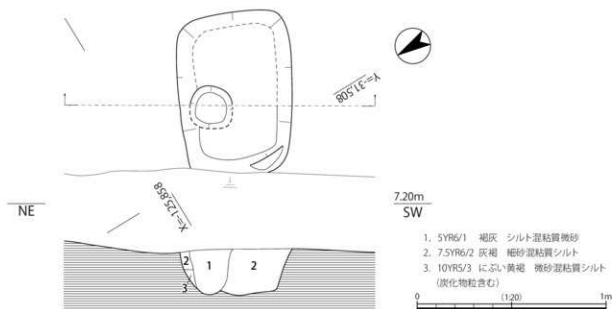


図85 22・1・6 7ピット平・断面図

66 溝埋土からこれ以外にも、弥生土器の破片が出土し、そのうち1点は櫛描直線紋を3条以上施した壺の破片である。それ以外は摩滅が著しく器種も不明である。

図88に掲示した66 溝出土の広口壺は、口縁部下端をユビオサエで加飾し、頸部には縦方向のハケ調整の後、9条の櫛描直線紋を施す。体部表面の摩滅のためミガキ調整の痕跡はわずかに残るのみである。体部には櫛描直線紋3条ごとに1条の波状紋が配されている。体部内面の摩滅もすすんでおり、口縁部付近で横方向のハケをわずかに認めたものの調整痕は明確ではない。ただユビオサエと粘土の接合痕は顕著に認められる。

66 溝からはその他に土師器や須恵器の細片も出土したことから、しばらく埋まりきらずに溝の痕跡が残存したとみられる。67 - 1 溝から遺物は出土しなかった。隣接して東西に並ぶ方形周溝墓3の67 - 2 溝と67 - 1 溝は近接するものの別々に掘削されたものである。

方形周溝墓3 (図86・87) 今回の調査で検出した新出の方形周溝墓で、方形周溝墓2に近接してその西側に位置する。墳丘・埋葬施設は残存せず、周溝によりその存在を確認できた。

長軸方向がおおむね南北方向を指向する角丸長方形の墳丘形態と考えられるが、その南東角部分を検出したのみで、正確な大きさは不明である。ただ南辺を方形周溝墓2と揃えているとみられることから、両者は墳丘規模も近似していた可能性がある。そうであれば長辺12～13m、短辺9m前後の規模と類推できる。

63 溝から弥生土器もしくはその可能性のある土器細片が少量出土している。そのうち1点には櫛描直線紋が施されていた。一方、67 - 2 溝埋土には遺物は含まれていなかった。

89 溝 (図86・87) 東西方向を指向する直線的な溝で、方形周溝墓3の63 溝と平行すること、溝埋土の土質が当調査区で検出した他の周溝と類似すること、20 - 1 - 3 トレンチでこれと連続するとみられる弥生時代の溝が検出されていることから、当該期の遺構の可能性が高いと判断した。

ただしそれらの溝の位置関係から方形周溝墓の存在をうかがうことはできない。また遺構埋土から遺物は出土しなかった。

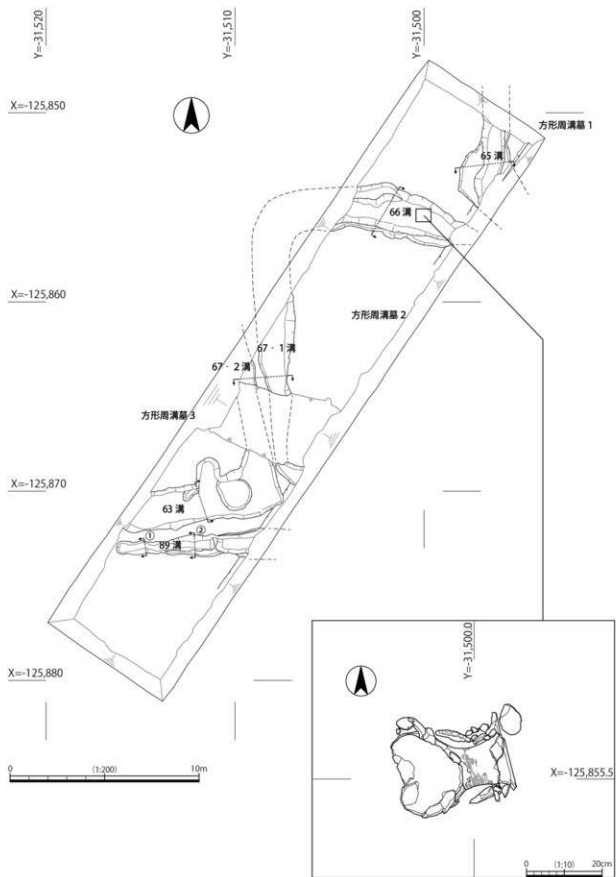


图 86 22 · 1 · 6 方形周溝墓 1~3 他平面图

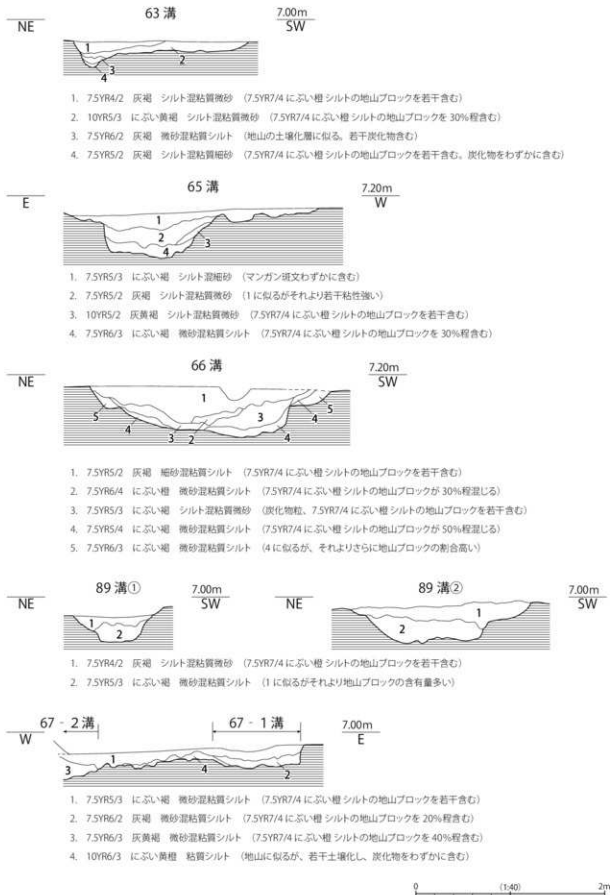


図 87 22 - 1 - 6 最終遺構面弥生遺構断面図

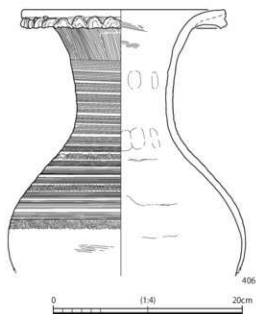
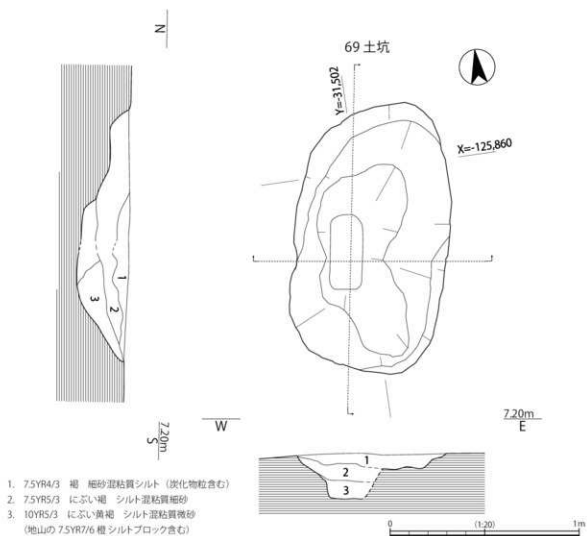


図 88 22-1-6 66 溝出土遺物

・時期不明の遺構

69 土坑 (図 89) 方形周溝墓 2 の墳丘の範囲に位置し、平面形は長辺 1.4m 前後・短辺 0.8m 弱の角丸長方形で、底面は不整形な印象を受ける。遺物は出土せず、帰属時期とその役割は不明である。



1. 7.5YR4/3 褐 細砂混粘質シルト (炭化物粒含む)
2. 7.5YR5/3 にぶい褐 シルト混粘質細砂
3. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト混粘質微砂 (地山の 7.5YR7/6 種 シルトブロック含む)

図 89 22-1-6 69 土坑平・断面図

第3項 7区

最終遺構面の標高は当調査区の北西側に隣接する20-1-2トレンチの方向に向けて徐々に低くなる傾向がみられた。また第1項・第2項で述べた8区・6区最終遺構面の標高が、T.P.+7m前後だったのに対し当調査区ではそれより20～30cm低く、第4章第2節でとりあげた放棄路路に向けて、地盤の下降傾向がうかがえる。

第1層・第2層は近年に削平を受け、残存しない部分があったが、もとは調査区全域に分布していたとみられる。第3層は調査区のほぼ全域に分布し、おおむね2層に細分できる。第4層も調査区のほぼ全域に分布するが、概して第3層よりは薄く、極めて浅い部分もあった(図90～92)。第4層に関しては、最終遺構面の標高が低い所で厚みを増す傾向がみられたが、第3層に関しては全体的に均一に堆積が認められた。

第1面では溝および集石遺構を検出した(図41・93)。溝は6区と同様、東西方向を指向する溝を南北方向溝が切っているのに加え、それらの方向軸も一致する。これらの状況から、それらの溝も耕作痕跡ととらえられる。1集石遺構は円形に拳大の石が密集する範囲に平瓦や土器片が混入していた(図93)。周囲に土坑の肩は認められなかったが、石と平瓦は平坦面を上面にして敷き並べたような状態だった。これらのことから1集石遺構は上層から掘り込まれた土坑底部の可能性があると考える。そこに含まれる瓦には、内面に摸骨痕・外面に格子タタキがみられるものと、内面に布目・外面に縄目タタキがみられるものが半々でみられる。出土遺物には図94に掲載したもの以外に弥生土器、古代の鉢を含む須恵器がある。各時期の遺物が混入していることから、それらの土器は意図的に埋置されたものではなく2次的に混入したものと考える。

包含層出土遺物をもとに第1面検出遺構の時期等を検討したい。図95-407～433は第3層出土遺物、434～439は第④-1層、440～443は第④-2層出土遺物である。細片のため図示できなかったが、第2層から瓦器・土師器等が出土した。図95からもわかるように、図示し得た遺物は古代の土器が多数を占め、古墳時代の遺物がそれに次ぐ。中世以降のもののみみられるのは428のみである。本品は陶器とみられるが、類例が乏しいため時期把握が難しく、これをもって第1面検出遺構の上限時期を把握することはできない。遺構の検出状況の類似性等から、7区第1面検出遺構の成立時期も、6区第1面検出遺構とおそらく同じと考えられることから、13世紀後葉を上限とする時期と考えたい。それ以外の遺物は、最終遺構面で検出した古代以前の遺構埋土に含まれていた遺物の時期幅に含まれるものである。

最終遺構面では8区・6区に比べて遺構の検出密度はやや低いものの、調査区全域で遺構を検出した(図96)。時期別の遺構分布状況を図97に示す。

遺構埋土出土遺物から古代末～中世の時期と判断できるのは調査区南寄りに位置する41・39ピットのみだった。他のピットにもそれらと遺構埋土の土質が類似するものは相当数あるが、図95からもわかるように、7区においては8区・6区と比べると中世遺物の出土量が明らかに少ない。このことからおそらく、当調査区は中世集落居住域の中心域からはずれた場所にあたるのではないかと考える。古代の遺構も、調査区中央部で不整形な土坑を1基検出したのみである。ただ当該期の遺物は、包含層や弥生時代の遺構埋土最上層等、調査区のほぼ全域で出土する。これらの状況からみて当調査区は、当該期集落の居住域外縁部に近い場所と考える。

古墳時代の遺構分布は調査区南半部でピット・土坑が散在する。また当該期遺物の分布範囲も調査区

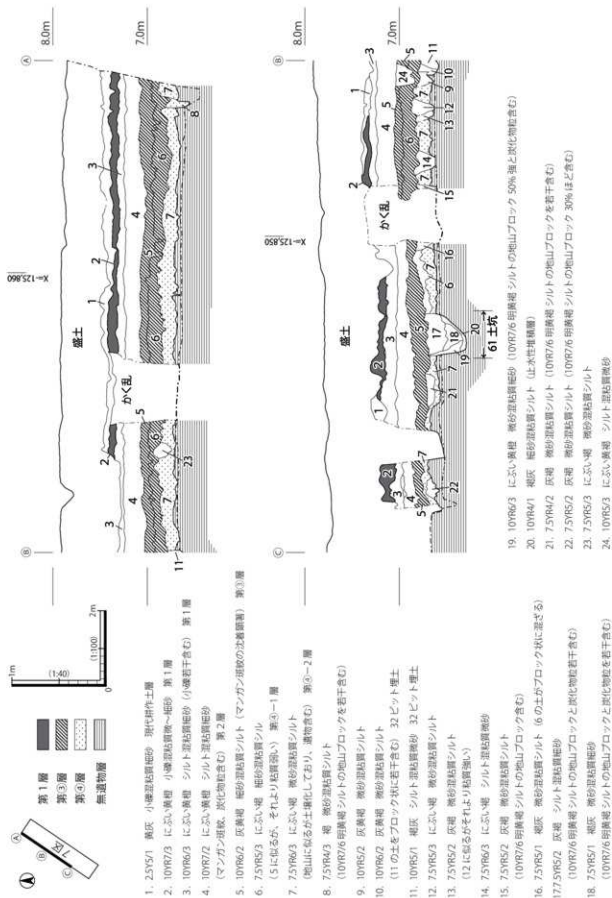


図90 22 - 1 - 7 西壁土層断面図

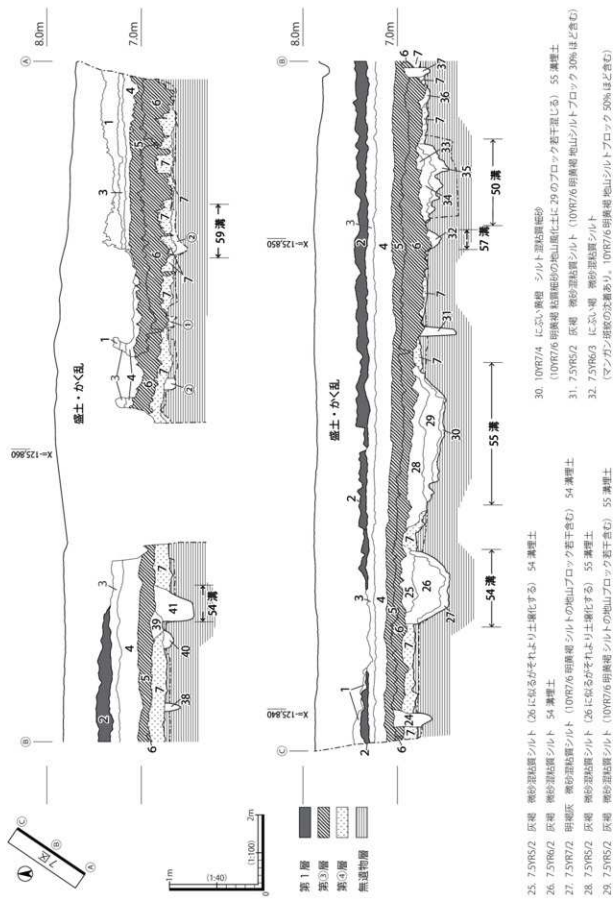


図91 22-1-7 東壁土層断面図

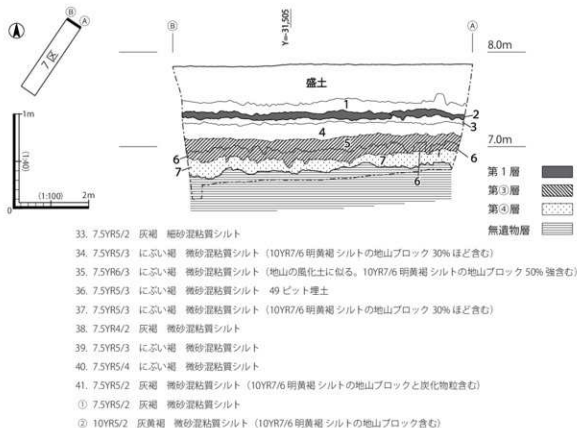


図 92 22 - 1 - 7 北壁土層断面図

南半部にほぼ限られる状況がみられた。

弥生時代の遺構は、調査区南半部および東側壁際で方形周溝墓を検出した。当該期遺物の出土量は少量で、時期比定が可能なものはなかった。なお当該調査区で検出した方形周溝墓の周溝は 8 区・6 区で検出した周溝に比べて幅が狭く浅い傾向がみられる。

・古代末～中世の遺構

41 ピット (図 96・98) 調査区南寄りで検出した。柱痕はないが残存深度が 40cm と比較的深い。細片のため図示できなかったが、埋土から中世土器を含むとみられる土師器片が出土した。

39 ピット (図 96・98) 前述の 41 ピットよりさらに南に約 3.5m のところで検出した。平面形は前述の 41 ピットに似るが、深さは 20cm 弱と比較的浅い。近辺にこれと同規模のピットが散在するものの、掘立柱建物の存在をうかがわせる規則的なピット配置は検出できなかった。埋土から燈明皿の破片を含む土師器片が出土した。

・古代の遺構

51 土坑 (図 98) 南北方向に長い長楕円形の不整形な土坑である。もとは 50 溝を切っていたが、検出面で両者の埋土の切り合い関係を正確に把握することができなかったため、土坑南端部の形状をとらえることができなかった。全長は 3m 以上 4m 以下とみられ、深さも 20cm 前後と浅い。

遺構埋土から須恵器・土師器が出土した。須恵器に飛鳥時代の坏が含まれていたことから、当該期の遺構と判断した。

12 ピット・13 ピット (図 96・98・99) 前述した 51 土坑の北側約 1m のところに位置する。いずれも直径が 60～70cm と周囲のピットに比べて比較的大きく、芯々距離は 1.6m で、8 区・6 区で検出し

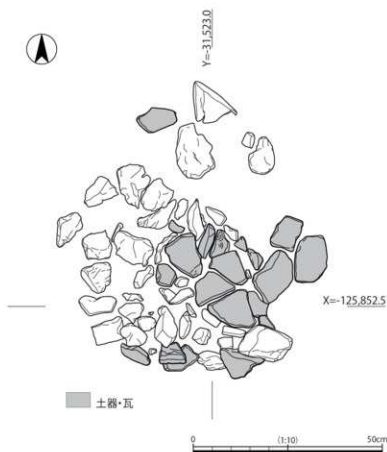


図93 22・1・7 1集石遺構平面図

46ピット (図96・98) 遺構埋土より弥生土器・土師器が出土したが、いずれも細片で図示できるものはなかった。土師器は古代と判別できたのに加え、中世の遺物を含まなかったので当該期に含めたが、遺構埋土が先述の39ピットに似ることから、中世に降る可能性もある。

47ピット (図96・99) ピットの西半部を他のピットで切られているが、おそらく直径20cm程度の円形とみられる。遺構埋土から図99 - 447の他に須恵器杯の破片等が出土した。

7～9ピット (図96) 調査区北寄りで検出した。これらのピットはおおむね東西方向に長い長楕円形のピットで、直線的に並ぶ。それらの間隔は芯々距離で、7ピット・8ピット間が1.0m、8ピット・9ピット間が1.2mである。9ピットの底部には石が据えられていた。深さはいずれも20cm強である。7ピット埋土から煮沸具とみられる土師器、8ピットから土師器、9ピットから土師器・須恵器の破片が出土した。

・古墳時代の遺構

31ピット (図90・96・101) 調査区西側壁際で検出した。全形は不明だがおそらく直径1m前後の円形の土坑とみられる。深さは検出面から20cm前後である。遺構埋土から出土した土師器片から当該期に比定した。

37土坑 (図96・100・101) 長軸2.2m強、短軸1.5m前後のやや不整形な楕円形の土坑である。深さは20～30cmである。出土

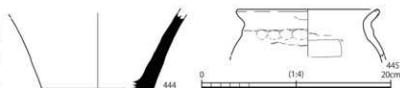


図94 22・1・7 1集石遺構出土遺物

た古代建物と近似する。ただ、これら以外に近辺に類似するピットがなかったことから、建物の存在を類推するにはいたらなかった。12ピット埋土から弥生土器・須恵器・土師器が出土し、須恵器の中に飛鳥時代の坏とみられる細片が含まれていたことから当該期に比定した。13ピット出土遺物は図99 - 446の他に須恵器・土師器がある。

29ピット (図96・98) 南北に長い長楕円形のピットとみられるが、南半部をかく乱坑で壊されているため、正確な大きさは不明である。おそらく前述の12・13ピットと同規模の大きさとみられる。土層断面より柱穴ととらえられるが、これとセット関係を有するピットを検出することはできなかった。埋土から須恵器・土師器の破片が出土した。

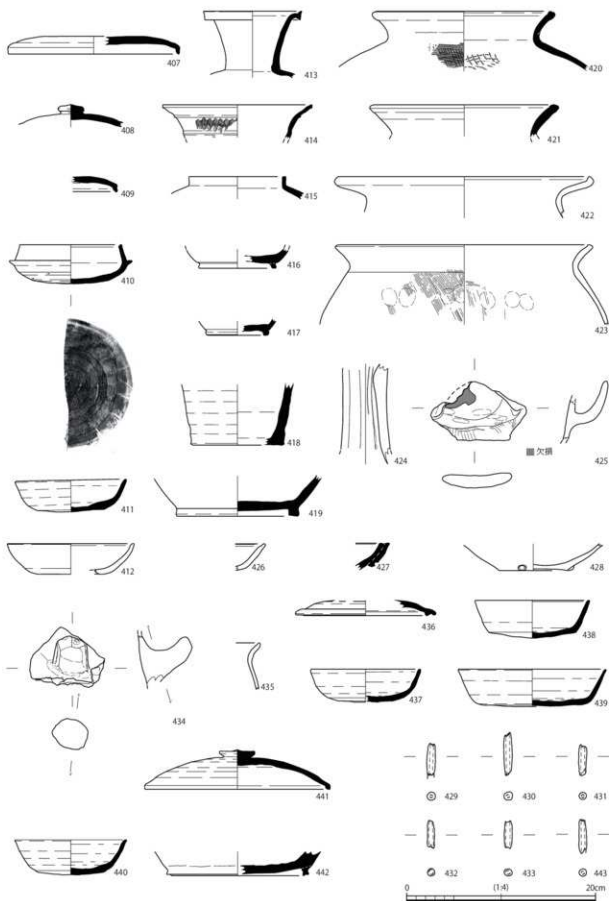
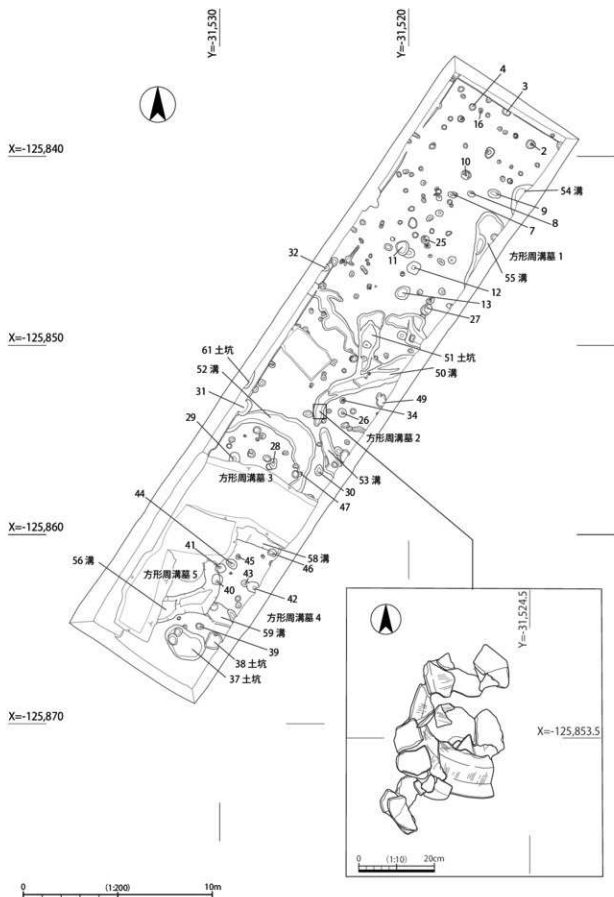


图95 22-1-7 第3层、第4-1层、第4-2层出土遗物



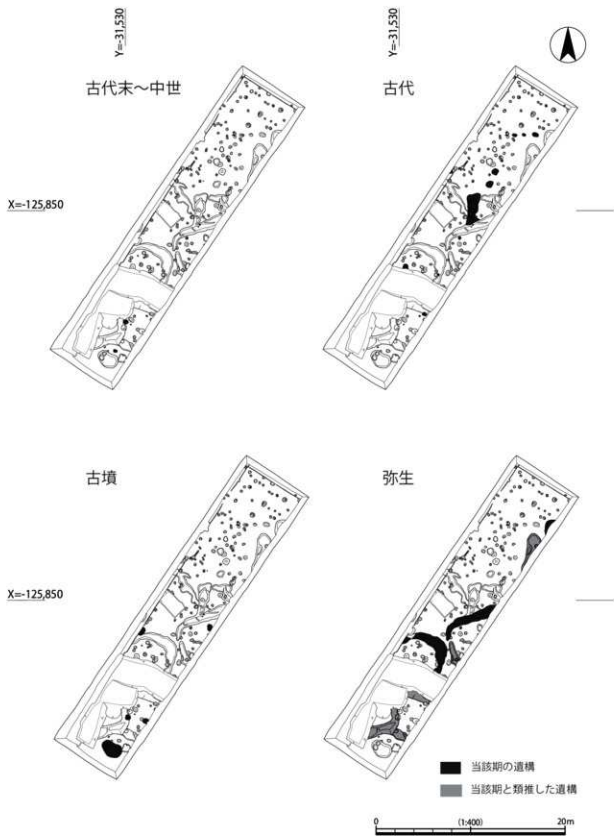


図 97 22 - 1 - 7 時期別遺構分布図

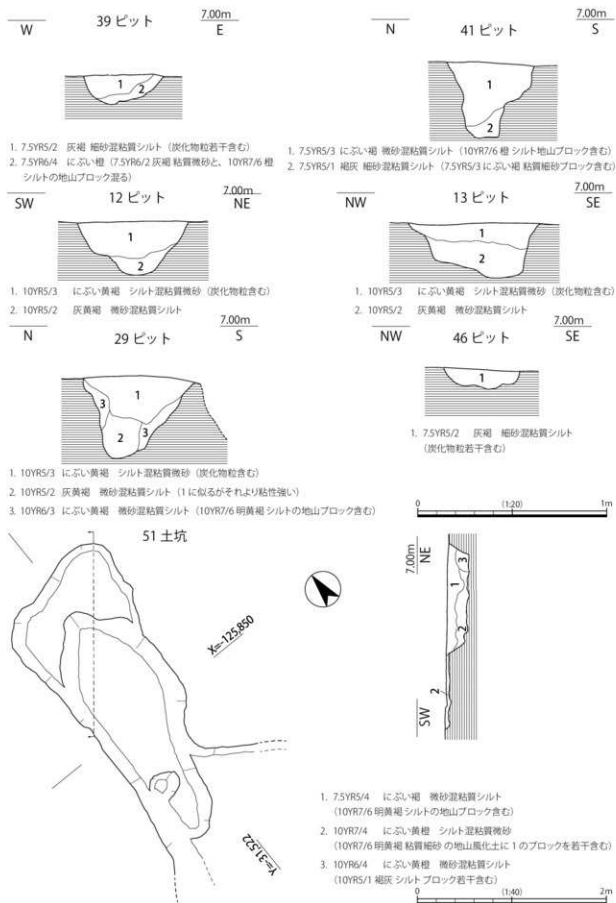


図 98 22 - 1 - 7 最終遺構面古代末～中世・古代遺構平・断面図

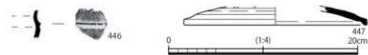


図99 22 - 1 - 7 13ビット・47ビット出土遺物

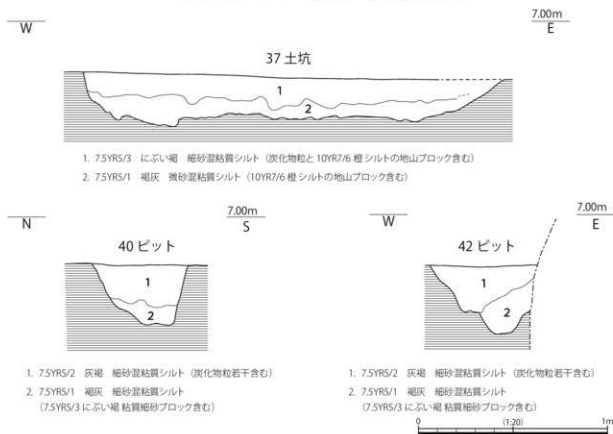


図100 22 - 1 - 7 最終遺構面古墳遺構断面図

遺物は図101に掲載したものの他に土師器の細片がある。

40ビット・42ビット (図96・100) 37土坑から北に3mのところ、ほぼ東西方向に並ぶ。いずれも深さが30～40cmとやや深い。2基のビットの芯々距離は2mである。いずれのビットからも弥生土器・土師器の細片が出土した。時期比定の手がかりとした土師器は細片のため、古代に降る可能性も否めない。

・弥生時代の遺構

方形周溝墓1 (図91・102・103) 調査区の東側壁際で周溝をわずかに検出したことによりその存在を確認した。今回の調査で検出した新出の遺構である。54溝は墳丘の北辺、55溝は西辺に沿う溝で、両者は接合しないことから、その部分が陸橋状に残る。

墳丘の大きさは不明だが、方形周溝墓2に伴う50溝の延長部と、55溝の延長部が交差しない位置関係で両者が作られていると考え、南北軸では6～7mの大きさと考えられる。

調査区内にわずかにかかっていたにすぎない54溝で弥生土器の細片が2点出土したのに対し、55溝から遺物は出土しなかった。

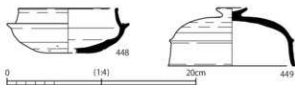


図101 22 - 1 - 7 37土坑出土遺物

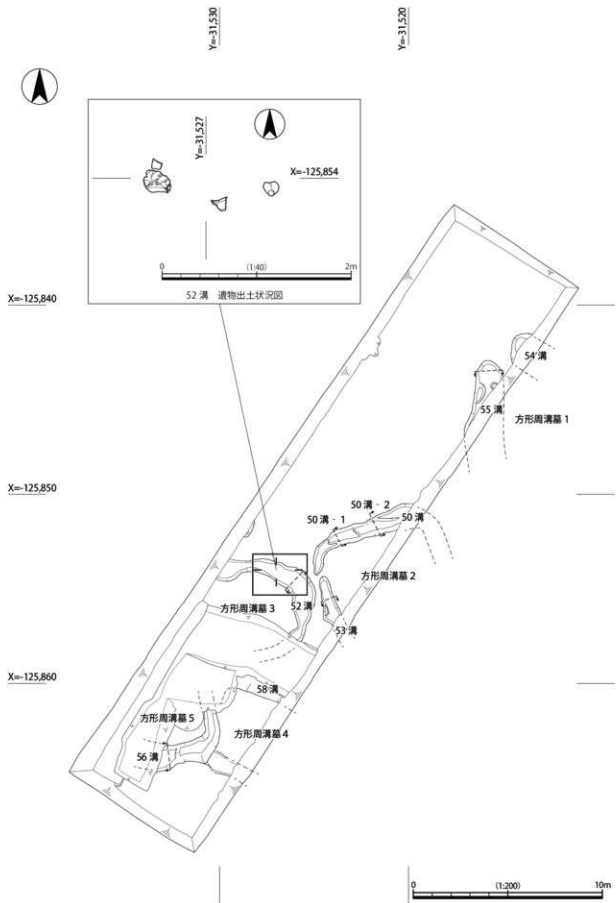


図 102 22 - 1 - 7 方形周溝墓 1 ~ 5 平面図

方形周溝墓 2 (図 91・96・102) 墳丘は残存せず、墳丘の北辺に沿う 50 溝と東辺に沿う 53 溝によりその存在を把握できる。両者は接合しないことから、その部分が途切れて陸橋状に残る。墳丘の大きさは不明だが、前述した理由から東西軸では 6～7 m の大きさと考えられる。

50 溝検出時に須恵器・土師器・弥生土器等がまとめて出土した (図 96・104)。このことから、古代の時期においても周溝が埋まりきらずに痕跡をとどめていたことがうかがえる。図 104 に掲載したそれらの遺物の中で、石鏃 (455) が唯一弥生時代のもので、前期～中期の帰属とみられる。

50 溝埋土出土の弥生土器はいずれも細片で図示できなかった。53 溝埋土から土師器片は出土したが、弥生土器は出土しなかった。

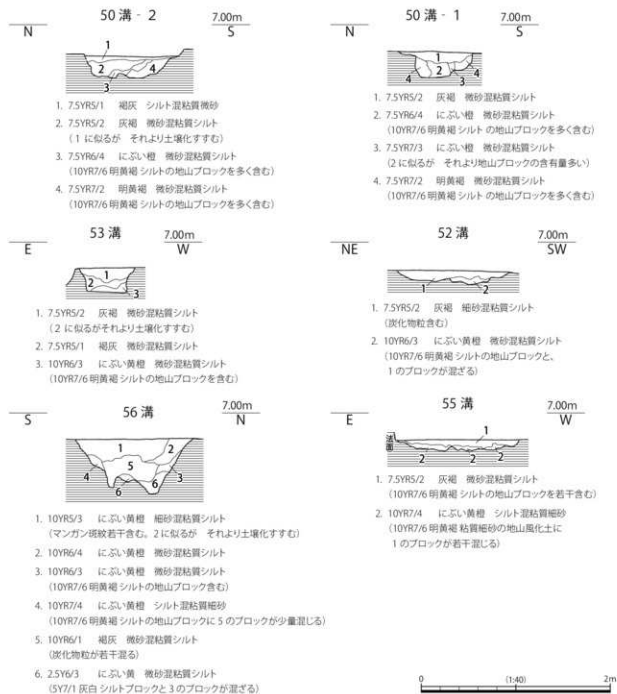


図 103 22 - 1 - 7 最終遺構面弥生遺構断面図

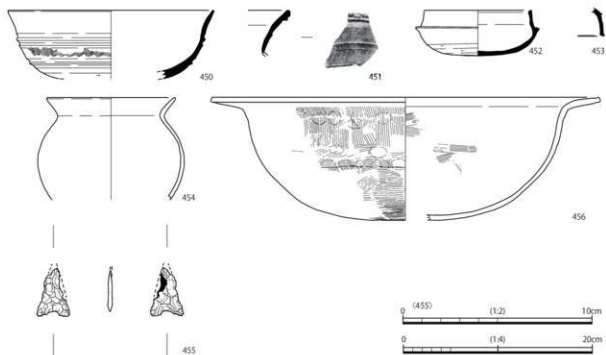


図 104 22 - 1 - 7 50 溝検出出土遺物

方形周溝墓 3 (図 102・103) もとは全体の 9 割近くが調査区内に含まれていたと思われるが、南半部は近年のかく乱坑で壊されており、正確な大きさは不明である。ただ方形周溝墓 4・5 と重ならず、当遺構が構築されていたとすれば、一辺 4～5 m 程の規模とみられる。墳丘は残存せず、周溝によりその存在を確認できる。

52 溝埋土から図 102 に図示した弥生土器の他、土師器・須恵器が出土した。弥生土器は甕で、中期のものと思われる。

方形周溝墓 4 (図 91・102) 方形周溝墓 5 の周溝に墳丘西辺に沿う周溝を切られている。これまでの調査も含めて、周溝に切り合い関係がみられたのは本例のみである。墳丘は残存せず、周溝によりその存在を確認できる。58 溝の北肩は近年のかく乱坑で壊されているが、58 溝と 59 溝の位置関係から、一辺 3～4 m の極めて小規模な墳丘の方形周溝墓だったとみられる。

58 溝・59 溝のいずれからも遺物は出土しなかった。

方形周溝墓 5 (図 102・103) 方形周溝墓 4 の周溝を切っていることから、それより後に構築されたことはわかるが、周溝の大半が近年のかく乱坑で壊されており、その正確な大きさは把握できない。

ただ方形周溝墓 3 と重ならず、墳丘が構築されていたと考えれば、一辺 3～4 m の墳丘規模と考えられ、方形周溝墓 4 と類似した小規模なものだったと考えられる。

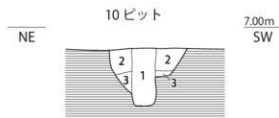
56 溝から土師器は出土したが弥生土器は出土しなかった。

・**時期不明遺構 (図 96・105・106)** ここで挙げている遺構はいずれも遺構埋土から遺物が出土しなかったか、出土遺物から時期の特定ができなかったものである。周囲のピットより直径が大きいもの、断面観察で柱痕がみられたもの、前述した遺構と列状に並ぶ等の位置関係がみられたものに関し、土層断面図を提示する。

2 ピット・3 ピット・16 ピット・28 ピットは柱痕が残ることから柱穴ととらえられる。28 ピットを除くすべて調査区北寄りに位置するが、これらも含めて掘立柱建物構成すると考えられる規則性



- 10YR6/2 灰黄褐 微砂混粘質シルト
(炭化物粒若干含む)
- 10YR5/3 にぶい黄褐 微砂混粘質シルト
(10YR7/4 にぶい黄橙 シルトの地山ブロック含む)
- 10YR6/3 にぶい黄褐 微砂混粘質シルト
(10YR7/6 明黄褐 シルトの地山ブロック含む)



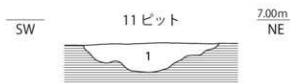
- 10YR6/2 灰黄褐 微砂混粘質シルト
(炭化物粒若干含む)
- 10YR5/3 にぶい黄褐 微砂混粘質シルト
(10YR7/4 にぶい黄橙 シルトの地山ブロック含む)
- 10YR6/3 にぶい黄褐 微砂混粘質シルト
(10YR7/6 明黄褐 シルトの地山ブロック含む)



- 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト混粘質微砂
(炭化物粒含む)



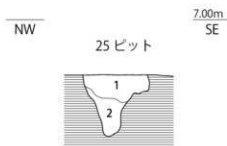
- 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト混粘質微砂
(炭化物粒含む)
- 10YR5/2 灰黄褐 微砂混粘質シルト
(1に似るがそれより粘性強い)



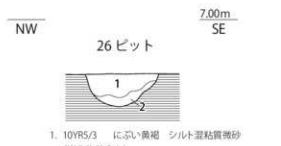
- 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト混粘質微砂
(炭化物粒含む)



- 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト混粘質微砂
(炭化物粒含む)
- 10YR5/3 にぶい黄褐 微砂混粘質シルト
(10YR7/4 にぶい黄橙 シルトの地山ブロック含む)



- 7.5YR4/2 灰褐 シルト混微砂
(10YR7/4 にぶい黄橙 シルトの地山ブロックと炭化物粒含む)
- 10YR6/3 にぶい黄褐 微砂混粘質シルト
(7.5YR4/2 灰褐 シルト混微砂 シルトブロック若干含む)



- 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト混粘質微砂
(炭化物粒含む)
- 7.5YR4/3 褐 シルト混粘質微砂
(10YR5/3 にぶい黄橙 シルト混粘質微砂ブロック含む)

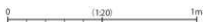


図 105 22 - 1 - 7 最終遺構面遺構断面図 (1)

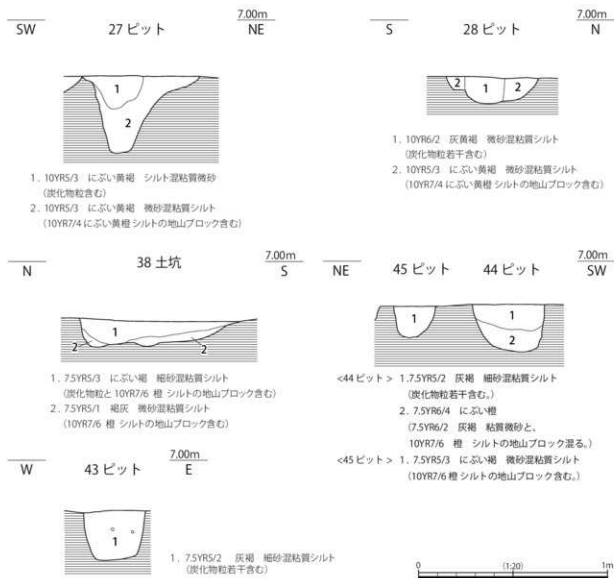


図 106 22 - 1 - 7 最終遺構面遺構断面図 (2)

のあるピットの配置を把握することができなかった。それ以外のピットに関しても、他より直径が大きくて柱穴の可能性があると考えたものを中心に断面を掲載した。

第4項 10区

当調査区内にはかつての鉄塔の基礎建設によって生じたかく乱坑の他、建設機器の据え付けなどに伴って生じたとみられるかく乱坑が散在していた。またそれ以外の最終遺構面においても、重機の掘削痕のような痕跡が散在していた。このことから当調査区は近代以降においても地形改変を大きく受けているとみられるが、全体的な傾向から地形をとらえると最終遺構面の標高は調査区南東角に向けて徐々に下がっていることがうかがえる。それは21 - 1調査区で検出した放棄流路の北肩へ向けての傾斜ととらえられる(図107)。後述する10落込み部分は、南に向けて緩やかに傾斜し、かく乱坑により確認はできなかったが調査区南東角の部分に最深部があったと考えられる。

重機で近代の盛土や近世～現代にかけての耕作土・床土を除去した段階で、おおむね無遺物層が露出する状況を確認した。このような状況から当初は残存する遺構が皆無かと思われたが、無遺物層上面でピット・落込み等を検出した(図108)。

10落込みとその周辺では整地層や、有機物を含んで黒色化した土層の分布がみられた。黒色化層は土質の特徴から、第③層もしくは第④層に類似することを指摘できるが、現時点では両者の関係性を客観的にとらえることはできない。

遺物の出土量は極めて少なく、部分的に残っていた整地層とみられる層から須恵器・土師器が若干出土した。具体的には第1層もしくはその可能性がある層から須恵器・土師器・中世の土師器皿を含むとみられる土師器が出土した。それらはいずれも細片のため図示できなかった。また、黒色化層から須恵器・土師器・内面に布目圧痕がある瓦片が出土したが、それらも細片のため図示できなかった。

以上のような遺物の出土状況から後述する遺構の帰属時期を述べることは非常に難しいが、黒色化層堆積以前に存在した遺構に関しては中世以前、黒色化層堆積以後に形成された遺構は中世より後に形成された可能性が指摘できようか。

遺構は10落込みの肩に近い所に散在する傾向がみられた。遺構の検出数量はかならずしも多くないが、遺構面が全体的に激しく削平されていたことを勘案すると、もとは一定量の遺構が存在していた可能性はあろう。10落込みの肩に近い部分で検出した不整形な長楕円形の土坑は、10落込みの肩と方向性が一致しており、耕作痕跡の特徴も有していなかったことから、人為的なものとは考えにくいと判断した。

一方、当調査区で遺物の検出量が極めて少なかったことに関しては、元来あったはずの遺物包含層が削平されて残存しなかったことに起因する可能性があるが、後述する10落込み埋土から遺物が出土しなかったことから、当調査区がもともと集落居住域ないし活動領域の中心領域からはやや離れた場所だった可能性も否定できない。以上のことから当調査区は、かつての集落居住域や活動領域の外縁部にあたると思いたい。

10落込み(図108・110) 前述したような放棄流路との位置関係や、肩のラインが不整形な状態であることから人為的に形成されたものとは考えにくく、21 - 1調査区で検出した放棄流路の北肩へ向けての落ち口にあたる部分の可能性が高いと考える。その最深部にあたると思われる部分はかく乱を受けていたが、それに最も近いと思われる部分と肩の部分との標高差は80cmほどである。

遺構埋土中層にブロック土が混入していたことから、一帯の耕地造成等に伴って人為的に埋められた可能性がある。遺構埋土から遺物は出土しなかった

ピット(図109・110) 10落込みの近辺を中心にピットを検出した。ピットを検出しなかった部分は

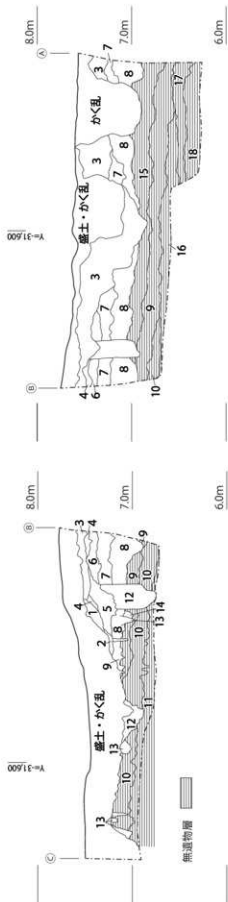
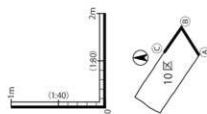


図 107 22 - 1 - 10 北・西壁土層断面図

- | | |
|--------------|--|
| 1. 10YR6/2 | 灰黄褐色 小礫混砂質粘土～中砂 (8 と地山の 10YR7/6 明黄褐色 シルトがブロック状に混る) 近～現代整地層 |
| 2. 7.5YR6/1 | 褐灰 粗砂～小礫混粘質細砂 近～現代整地層 |
| 3. 10YR5/1 | 褐灰 粗砂混粘質細砂 近～現代整地層 |
| 4. 10YR6/3 | にぶい黄褐色 細砂混粘質細砂 (他山の 10YR7/6 明黄褐色 シルトがブロック状に混る) 近～現代整地層 |
| 5. 2.5YR6/1 | 黒灰 粗砂混粘質中砂 (10YR7/3 にぶい黄褐色 シルト混粘質細砂がブロック状に混る) 第 1 層む |
| 6. 10YR6/2 | 灰黄褐色 細砂混粘質細砂 (粗砂～小礫含む、酸化鉄混粘質) 近世整地層 第 1 層 |
| 7. 10YR6/1 | 褐灰 中砂混粘質細砂 (10YR7/3 にぶい黄褐色 シルト混粘質細砂がブロック状に混る) 近世整地層 第 1 層 |
| 8. 7.5YR6/1 | 褐灰 微砂混粘質シルト (炭化物粒と微細な土層片を含む) 黒色土層 |
| 9. 10YR6/4 | にぶい黄褐色 微砂混粘質シルト (マンガン屑鉄屑を含む) 無遺物層 |
| 10. 10YR5/3 | にぶい黄褐色 微砂混粘質シルト (マンガン屑鉄屑を含む) 無遺物層 |
| 11. 10YR6/4 | にぶい黄褐色 微砂混粘質シルト 無遺物層 |
| 12. 7.5YR6/1 | 褐灰 中砂混粘質シルト (6 と地山の 10YR7/6 明黄褐色 シルトがブロック状に混る) |
| 13. 7.5YR6/1 | 褐灰 微砂混粘質シルト ビット層土 |
| 14. 7.5YR5/2 | 灰褐色 微砂混粘質シルト ビット層土 |
| 15. 7.5YR5/2 | 灰褐色 微砂混粘質シルト 無遺物層 |
| 16. 7.5YR4/2 | 灰褐色 微砂混粘質シルト 無遺物層 |
| 17. 7.5YR4/1 | 褐灰 微砂混粘質シルト 無遺物層 |
| 18. 7.5YR6/1 | 褐灰 微砂混粘質シルト 無遺物層 |



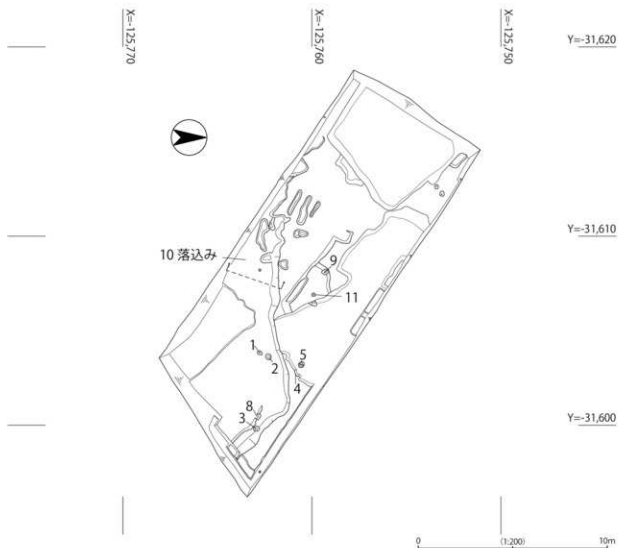


図 108 22 - 1 - 10 最終遺構面平面図

後世の削平をより大きく受けており、その際に消失したのもあったと推測する。1ピット・2ピットは10落込み上面で検出したものである。それに対して8ピットは10落込み埋土を掘削しながら底部を検出中に認めたものなので、1ピット・2ピットに先行して形成されたとみられる。したがってここで検出された遺構には少なくとも2時期あるととらえられる。

ピットは埋土の土質により2種に大別できる。遺構埋土が前述の黒色化層に類似するものと、基盤層と黒色化層がブロック状に混ざり合うものである。ただ先述したように遺構埋土から遺物出土しなかったことから、それらの形成時期を明確に特定することはできない。

遺構の残存深度は、最も深い2ピットで20cm程度、それ以外のピットは10cm前後と極めて浅い。このことから一帯が大きく削平されたことがうかがえる。

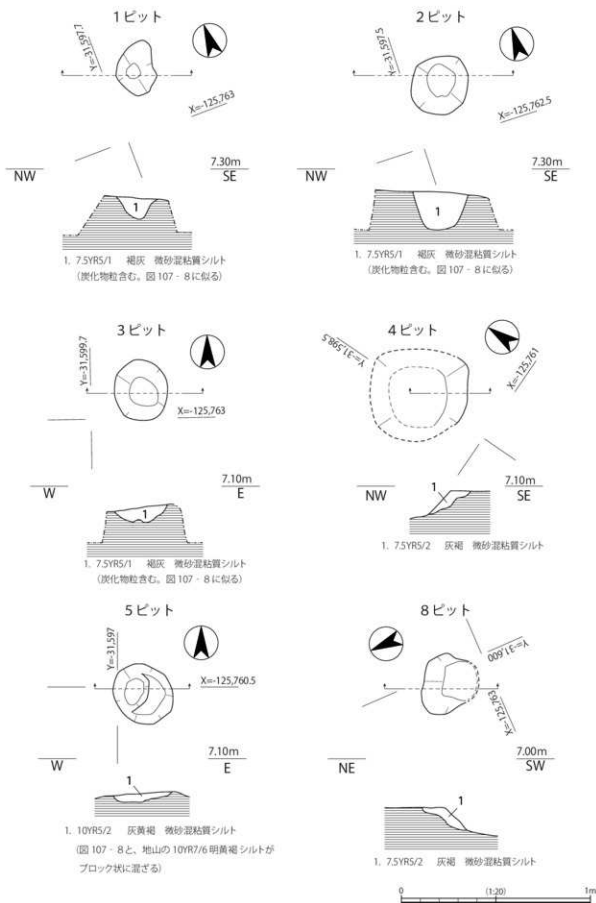


図 109 22 - 1 - 10 最終遺構面速構平・断面図 (1)

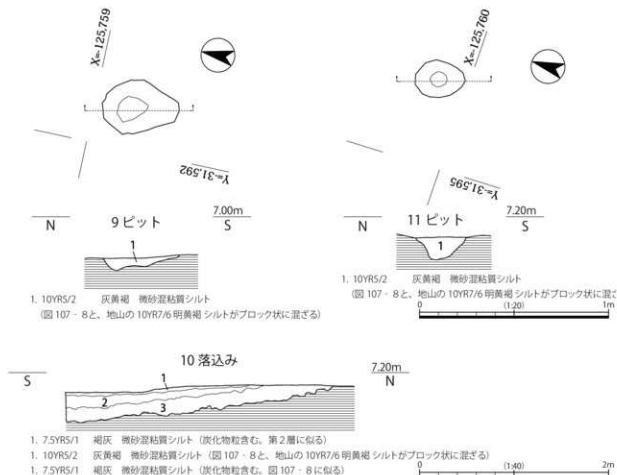


図 110 22 - 1 - 10 最終遺構面遺構平・断面図 (2)

第 5 項 9 区

当調査区は梶原南遺跡範囲の北端部にあたり、かつ古代山陽道に最も接近する場所でもある。現在の阪急電車・新幹線の線路より北側のエリアは、その南側に比べて全面的な耕地開発がやや遅れたとみられることは先述したとおりだが、その北側のエリアにおいても丘陵に近づくほど、耕地開発の時期が遅くなるのが今回の調査からうかがえる。

近～現代の耕作土・床土およびそれに伴う整地層は調査区全域でみられたが、近世の耕作土（第 1 層）とそれに伴う整地層（第 2 層）の分布は部分的で、第 3・4 層は認めなかった。

第 2 層出土遺物は須恵器・土師器で、細片のため時期判断の手がかりとはなり得なかった。したがって第 1 層およびそれより上の層に含まれる遺物も加味すると、当調査区一帯で水田造成が本格化するのには中世末葉から近世にかけての時期とみられる。

当調査区の無遺物層は細～中砂からなる砂層と、シルト～微砂からなる粘質土層の互層で、かつての河川堆積層とみられる。耕地造成では一帯を大規模に削平しながら窪地や前面の低地を埋めて高低差をならしたことがうかがえる。

最終遺構面では井戸・落込み・ピット・多数の不整形な長楕円形の土坑を検出した。そのうち不整形な長楕円形土坑は、近～現代の耕作土もしくは整地層により埋没した浅いものがほとんどで、深いものに関しては伐木痕とみられた。いずれにせよ人為的に形成されたものとは考えにくいことから、報告対象からは除外する。

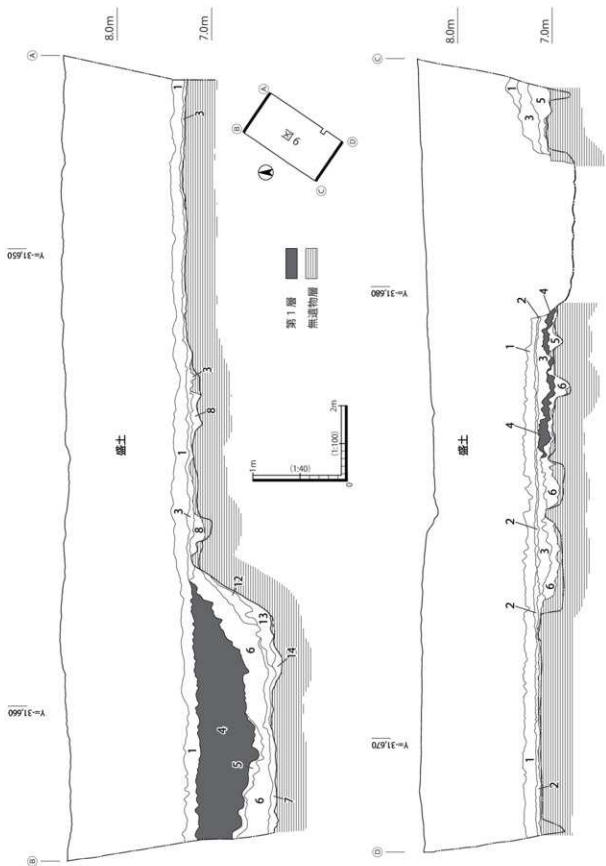


图 111 22 - 1 - 9 南・北壁土層断面図

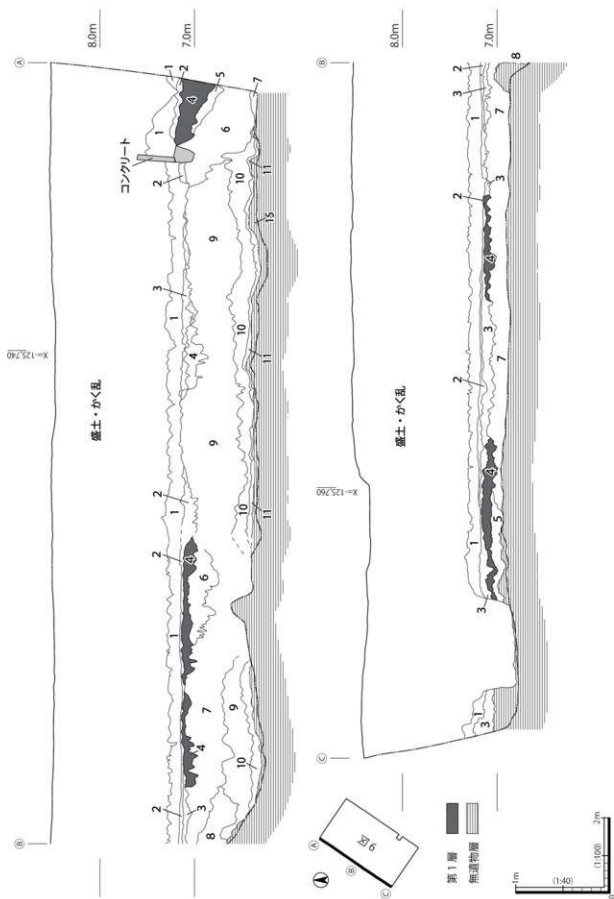


図 112 22 - 1 - 9 西壁土層断面図

1. 2.5Y5/1 黄灰 粗砂混粘質細砂 (10YR6/3 にぶい黄橙 微砂混粘質細砂ブロック若干含む)
2. 10YR6/2 灰黄褐 中砂混粘質細砂 (炭化物粒と 10YR7/3 にぶい黄橙 微砂混粘質細砂ブロック含む)
3. 10YR6/3 にぶい黄橙 中砂混粘質細砂 (10YR7/2 にぶい黄橙 中～粗砂ブロック若干含む)
4. 7.5YR6/2 灰褐 微砂混粘質細砂 (7.5YR4/2 灰褐 微砂混粘質シルトブロック、炭化物粒含む) 第1層
5. 10YR5/1 褐灰 微砂混粘質シルト (10YR6/1 褐灰 微砂がラミナ状に入る。マンガング酸の沈着あり)
6. 10YR6/3 にぶい黄橙 中砂混粘質細砂 (小礫、7.5YR4/2 灰褐 微砂混粘質シルトブロック含む)
7. 10YR5/1 褐灰 微砂混粘質シルト (10YR6/1 褐灰 微砂がラミナ状に入る。マンガング酸の沈着あり) 最上層
8. 10YR6/1 褐灰 中砂混粘質細砂 (10YR6/4 にぶい黄橙 粘質微砂ブロックを若干含む) 上層
9. 7.5YR5/2 灰褐 細砂混粘質シルト (7.5YR5/1 褐灰 微砂混粘質シルト、7.5YR5/2 灰褐 微砂混粘質シルトブロック含む) 上層
10. 10YR5/2 灰黄褐 微砂混粘質シルト (地山の 10YR7/6 明黄褐シルト、7.5YR5/1 褐灰 微砂混粘質シルトブロック含む) 上層
11. 7.5YR5/2 灰褐 シルト (止水性堆積層) 下層
12. 10YR6/2 灰黄褐 微砂混粘質細砂 (地山の 10YR7/6 明黄褐シルトブロック含む)
13. 10YR6/4 にぶい黄橙 微砂混粘質細～中砂
14. 10YR5/2 灰黄褐 粘質細～中砂 (10YR6/4 にぶい黄橙 微砂混粘質細～中砂がブロック状に混る)
15. 10YR6/4 にぶい橙 粗砂混中砂 無遺物層

図 113 22 - 1 - 9 土層断面図 (土色)

17ピット (図 114) 当調査区で検出した唯一のピットだが、遺物が出土しなかったことから時期の特定はできない。深さは 20cm 弱である。

1 落込み (図 114～117) 調査区の北西角部分を占め、埋土は 2 層に大別できる。下層は止水性堆積層とみられるが、上層はブロック土を多量に含むことから、人為的に埋められたものと考えられる。

下層の土質に加え、1 落込みの肩のラインの方向が、21 - 1 調査区で検出した放棄流路とほぼ平行することを考え併せると、これももとは放棄流路の一部だった可能性がある。下層の上部は若干土壌化しており、その埋積時においても常時水が溜まっていたわけではないとみられる。

遺物は上層に多く含まれ、下層の出土遺物は微量で細片だった。上層に多量に含まれるブロック土は、第③層・第④層に類似することから、上層から出土した遺物は本来、それらの包含層に含まれていたものの可能性が高い。古墳時代～古代の遺物が大半を占めるが、中世の上師器皿や瓦質羽釜等が若干含まれていたことから、これを埋めたのは中世以降とみられる。これにより、一帯の全面的な耕地造成が行われる以前にも、局所的な地形改変が行われたことがうかがえる。

1 落込み上層にブロック土として含まれる包含層が、どこで採取されたのかはわからないが、それほど遠方から運んだとも思われなことから、古墳時代～古代の集落居住域が比較的近辺に展開した可能性が類推できる。当調査区で古代の井戸が 2 基検出されたことからみても、少なくともここに古代の活動領域があったことは間違いないと思われる。

図 116 - 457・459・460 は第 1 層出土遺物、458・461・462・464・468・470 は 1 落込みの部分で、第 1 層と 1 落込みの最上層上面部分を掘削中に出土した遺物である。1 落込み以外では、第 1 層掘削中は土器細片が少量出土する状況だったのに対し、1 落込みの部分掘削中に出土した遺物は量的に多く、残存状態のいいものが含まれる傾向が顕著だったため、おそらくそれらはおおむね 1 落込み最上層の遺物だったと考えられる。

463・465～467・469・471～476 は 1 落込み最上層出土遺物である。図 117 に掲載した遺物のうち、504・505 のみ下層出土遺物、それ以外は上層出土遺物である。これらをもてみわかるように、各層位の出土遺物をもて、明確な時期差は認められない。これをもと 7～8 世紀の古代遺物が大半を占め、古墳時代の遺物がそれに次ぐ。それ以外の時期の遺物としては図示できなかったが中世土器が

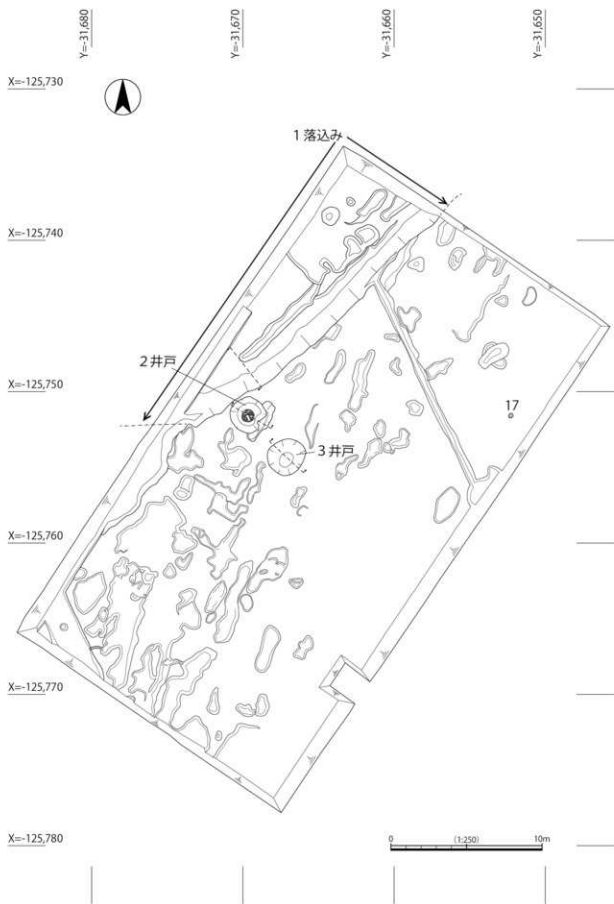
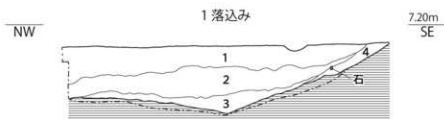


図 114 22 - 1 - 9 最終遺構面平面図



1. 10YR4/2 灰黄褐 中砂混粘質シルト (10YR7/6 明黄褐の地山シルト①と、7.5YR4/2 灰褐 細砂混粘質シルト②がブロック状に混ざる。1cm以下の礫若干含む、①と②の比率は、①の方が若干多い) 最上層
2. 10YR5/3 にぶい黄褐 細砂混粘質シルト (10YR7/6 明黄褐の地山シルト①と、7.5YR4/2 灰褐 細砂混粘質シルト②、10YR6/1 褐灰 微砂混粘質シルト③が、ブロック状に混ざる。①、②、③の比率は、2:1:1程度) 上層
3. 10YR6/1 褐灰 微砂混粘質シルト (中砂、炭化物粒を若干含む。止水性堆積層とみられるが、上部弱く土壌化する) 下層
4. 10YR5/3 にぶい黄褐 微砂混粘質細～中砂 (10YR7/6 明黄褐の地山シルトを若干含む。地山の再堆積層) 下層

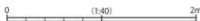


図 115 22 - 1 - 9 1 落込み断面図

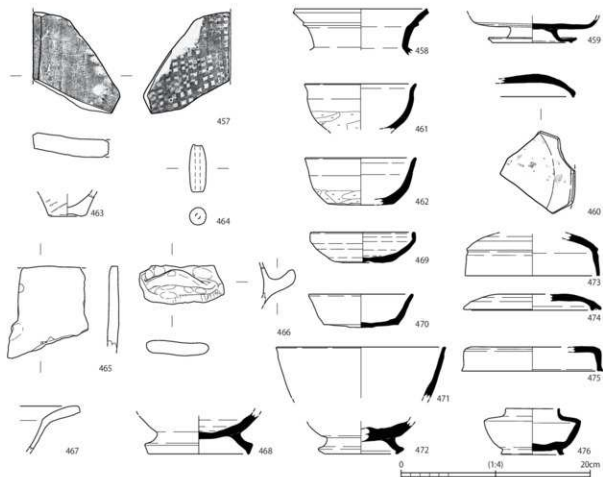


図 116 22 - 1 - 9 1 落込み最上層 (第 1 層含む) 出土遺物

含まれていた他に、図 116 - 463 の弥生時代後期の土器がある。

2 井戸 (図 114・118・119) 掘方の中央に直径 80cm 強の円形の井戸枠が据えられていた。井戸枠は土圧を受けて数か所破断していたが、もとは針葉樹の丸木をくり抜いて作った一木造とみられる。比較的高所に作られた井戸であるにもかかわらず、その残存深度は 1m に満たず、遺構上部の大半は耕地造成等により削平されたとみられる。井戸枠内には拳大の石が含まれていたが、それらは人為的に敷き並

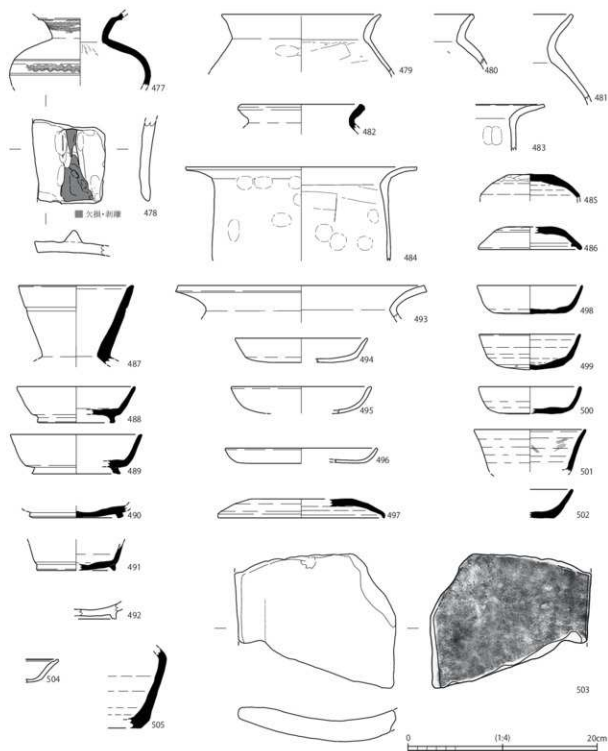
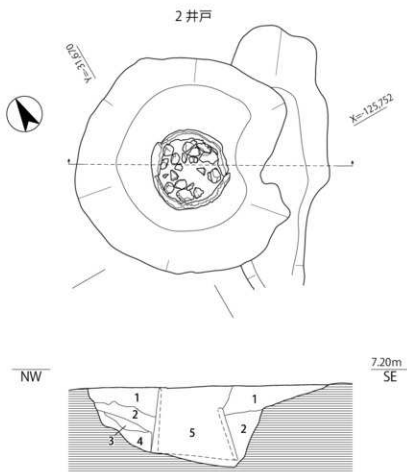


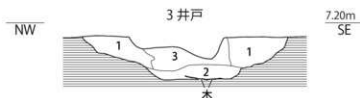
図 117 22 - 1 - 9 1 落込み（上層）・（下層）出土遺物

べられたものではない。図 119 - 506～513 は 2 井戸出土遺物で、513 は掘方の最下層から出土したものである。出土遺物は細片が多く、513 も器種と時期の特定が難しいが、8 世紀後半から 9 世紀にかけての時期のものが含まれていることから、後述する 3 井戸よりやや新しい時期の遺物を含む傾向が認められる。ただ両者に切り合い関係がないことから、同時併存した可能性も大きい。

墨書土器・硯に転用された須恵器蓋 2 点が出土した。出土遺物がそれほど多くないことを考慮すると、出土遺物全体に対する墨書土器・硯の含有比率は大きいといえるだろう。



1. 10YRS/1 褐灰 中～粗砂混粘質シルト
(7.5YS/1 褐灰 微砂混粘質シルトと地山の7.5Y6/1 褐灰シルト・10YR6/2 灰黄褐 中～粗砂がブロック状に混ざる)
2. 5YS/1 灰 中砂混粘質シルト (1に似るが、地山の7.5Y6/1 褐灰シルトの含有量が多く粘性強い)
3. 10YR6/2 灰黄褐 微砂混粘質中砂
(地山の6/2 灰黄褐 中～粗砂ブロックを主に、地山の7.5Y6/1 褐灰シルトブロックを若干含む)
4. 10YR6/3 にぶい黄橙 小礫混中～粗砂 (地山の10YR6/2 灰黄褐 中～粗砂の再堆積層)
5. 2.5YS/1 黄灰 中砂混粘質微砂 (直径3cm 前後の円礫、1辺15cm 前後の角礫を含む)



1. 10YRS/2 灰黄褐 細砂混中砂 (7.5YRS/1 褐灰 微砂混粘質シルトブロック含む)
2. 10YRS/1 褐灰 中～粗砂混粘質シルト
(7.5YS/1 褐灰 微砂混粘質シルトと地山の7.5Y6/1 褐灰シルト・10YR6/2 灰黄褐 中～粗砂がブロック状に混ざる)
3. 5YS/1 灰 中砂混粘質シルト (1に似るが地山の7.5Y6/1シルトの含有量が多く粘性強い)



図 118 22 - 1 - 9 2井戸・3井戸平・断面図

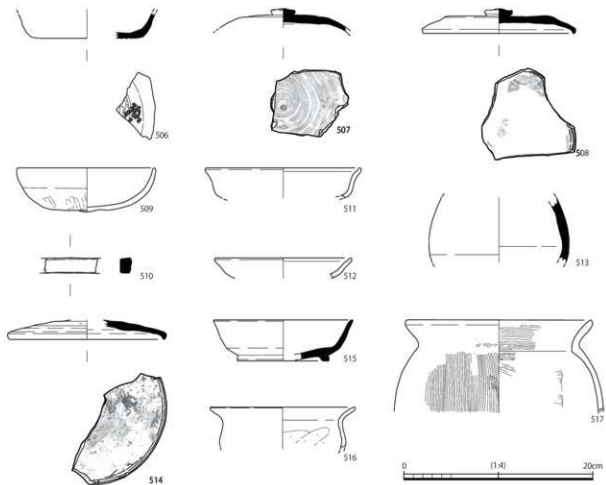


図119 22・1・9 2井戸・3井戸出土遺物

3井戸（図114・118・119）井戸枠は認めなかったが土層断面のあり様と、埋土から板材が数点出土したことから、板材を用いた平面方形の井戸枠があった可能性がある。こちらの井戸も2井戸と同様に残存深度が50cm弱と極めて浅いことから、井戸の上部大半が削平された際に、井戸枠が壊された可能性が高いと考える。

出土遺物は2井戸に比べてさらに少ないが、7～8世紀の土器に加えて図120 - 524の漆器箱が出土した。土器には硯に転用された須恵器蓋1点が含まれる。古代の漆器箱は極めて類例の乏しい資料で、特に本品のような一木を削り出して作られた割り物の方形の箱は極めて希少である。いずれにせよ漆器箱は寺院や官衙等の公的機関で主に用いられた家財であると考えられることから、古代における当該地の役割を考えるうえでも重要な手掛かりとなる資料である。この資料の観察所見と、制作技術に関する詳細は次項で詳述する。

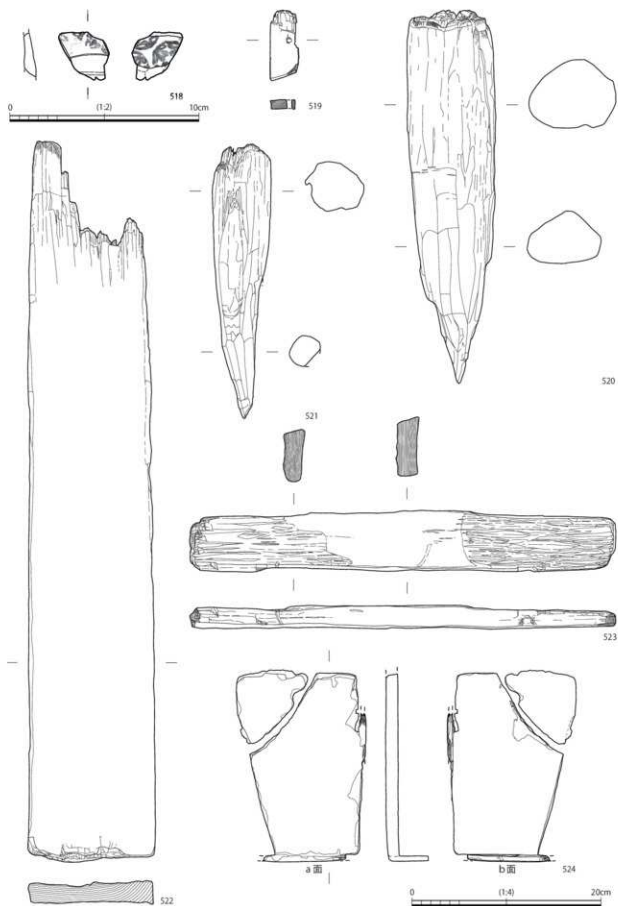


图 120 22 · 1 出土木製品

第6項 古代漆器箱について

図120-524は写真図版1-1からもわかるように、内外面ともに黒色漆が塗られており、模様は付されていない。b面の割れ口付近の白くみえる部分は、漆膜を覆うように薄く固着した灰白色の結晶状のもので、細かい砂粒状のものを巻き込んでおり、厚みも不均一である。漆の下地材や漆の塗布後に意図的に付されたものでなく、2次的に付着したものと考える。天板もしくは底板は大きくみて2片あり、それらは接合しないものの年輪やハケメの連続性からみて近接する位置関係とみられる。平面形が長方形の箱の一部とみられ、2側辺とそれらに接続する側板が部分的に残存する。表面に塗刷毛の痕跡が残っていることから仕上げの研磨はされていないが、全体的に黒漆特有のつやを帯びる。

四柳嘉章氏にデジタル写真の画像を、村上由美子氏と蒲簀子氏に実物を見ていただき、各氏から多くのご教示をいただいた。黒漆の色調や質感などから、本品が古代の漆器の可能性が高いとみられるという四柳氏の所見は、本品の出土状況から推測される時期と矛盾しないものである。村上氏と蒲氏からは漆膜ごしに年輪をとらえられる部分があることから、それを手がかりに木取りや原木の大きさが把握できること、年輪が天板もしくは底板の部分に認められることから本品は縦木取りとみられること、列り物の容器を作る際は横木取りの材を使うのが通有（縦木取りの素材は列り抜く際に縦方向に割れやすい）ためであり、その点でも本品が非常に特異であるとの所見を得た。

本品の年輪の曲線に併せて正円の同心円を重ねたのが図121である。同心円の間隔は実際の年輪よりも大きい。円弧はおおむね実物に合わせている。これを見ると、b面の左下角の部分が最も木の表面に近く、そこから右上方に向けて年輪の髓に近づくことがわかる。長辺が髓を通り越す長さであることから、原木を中心角が90度になるよう4分割して素材としたものではないことがうかがえる。

芯材の部分は辺材に比べて硬いため除外されたとすると、箱の横幅は残存幅と比べてそれほど大きくない14cm弱だったのではないかと考えられる。また、原木は外皮までも含めても直径50cm前後の大きさのものだったと考えられる。本品の平面形はおおむね長方形を呈するが、b面左辺は必ずしも直線ではなく、わずかに外側に湾曲する。

村上氏・蒲氏からは上記に加え、b面に比べてa面の方がハケメが見えにくいことから、それが目立たないように意識した塗が施された可能性があり、蓋の可能性があると指摘があった。b面では年輪が明瞭にとらえられる部分があるのに対し、a面では年輪を認められない点もそれと合致すると思われ、漆膜の厚みに差があることも想定されたことから、漆膜断面の観察を試みた。

写真1~4（131ページ参照）は漆膜の断面を80倍の実体顕微鏡で撮影したものだが、b面に比べ



図121 漆器年輪

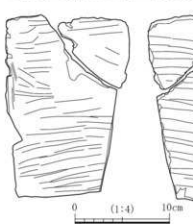


図122 ハケメ観察図

てa面の方が下地や漆の塗の回数が多いこと、またそれにより厚みが増していることが見て取れたことから、a面を表面とする蓋の可能性がより高いと考えられる。

第5章 自然科学分析

第1節 梶原南遺跡出土材の酸素同位体年輪年代および放射性炭素年代

佐野雅規・李貞・中塚武（名古屋大学大学院環境学研究所）

1. 調査地とサンプルの概要

本研究は、梶原南遺跡出土材の暦年代を酸素同位体比年輪年代法および放射性炭素年代法により決定することを目的とした。分析の候補とした自然木のサンプルは全部で5点あった（サンプルID：A, B, C, D, E）。Aは5区、それ以外は1区から出土した木材であり、層位は、Aが第7-1層、B, C, Dが第7-2層、Eが第7-3層であった。発掘調査から分析前のサンプルの年代観は、Eは弥生時代前期以前、それ以外は弥生時代後期以前と見積もられている。

2. 酸素同位体比年輪年代法の概要

年輪年代法は、年輪幅の変動パターンを個体間で照合することで、当該年輪が形成された暦年代を誤差なく正確に決定できるため、放射性炭素同位体（以下、 ^{14}C と略記）などの年代測定法よりも精度の点で優れている。日本では、1980年より年輪幅に基づく年輪年代研究が始まり（光谷1988）、これまでに過去3000年超におよぶ標準年輪曲線が作られている（奈良国立文化財研究所1990）。年輪幅は、簡便かつ非破壊でも測定可能なため、これまで多数の木材が年代測定に用いられてきた。しかし、年輪幅のパターンマッチングは樹種依存性が高く、また年代決定には100年輪ほど必要なこともあり、条件から外れた試料については年輪年代が未だ定まっていない。一方、2010年代に入って、年輪セルロースに含まれる酸素同位体比（ $\delta^{18}\text{O}$ ）が年代決定に有望であることがわかってきた（中塚2015, 2018）。この手法の特徴として、セルロースの酸素同位体比が夏季の相対湿度や降水量によって規定されており、異なる樹種であっても経年変動パターンが極めてよく同調する。従って、針葉樹で作成した標準年輪曲線を用いて、50年輪程度の広葉樹材の年代を決めることも可能になってきた（Sano et al.2022）。本研究では、この酸素同位体比年輪年代法を用いて、梶原南遺跡で出土した広葉樹の自然木サンプルの年代照合を行った。また、同一個体内の複数箇所でも ^{14}C を測定し、ウィグルマッチング法により暦年代を絞り込み、年輪年代の結果を検証した。

3. 材料と方法

3.1 酸素同位体比の測定と年代照合

本報告では、梶原南遺跡で出土した木材のうち、年輪数の比較的多い2点（サンプルID：B, E）を分析対象とした。これらの樹種は、Bがコナラ属クヌギ節で、Eはニレ属であった。収集したサンプルは、酸素同位体比および ^{14}C の測定に先立ち、まずダイヤモンドホイールソーを用いて1mm厚の薄板に切り分けた。市販のスキャナーを用いてこれら薄板を取り込みA3紙に拡大印刷したうえで、実物のサンプルを顕微鏡で観察しながら年輪境界を認定し、年輪に番号を付けた。次に、薄板の形状のまま、考古材用のプロトコルに従って化学処理を施しセルロースを抽出した（Sano et al., 2022）。セルロース板を顕微鏡で拡大し、100～300マイクログラムを目安として精密カッターを用いて年輪を1枚ずつ切り分け秤量した。サンプルを銀箔に梱包したのち、熱分解式の元素分析計（TC/EA, Thermo Fisher Scientific）と連結させた同位体比質量分析装置（Delta V Advantage, Thermo Fisher Scientific）を用いてサンプルの

酸素同位体比 ($\delta^{18}\text{O}$) を測定した。標準物質 (Merck セルローズ) の繰り返し測定から、酸素同位体比の測定精度 (標準偏差) は 0.2% 以下であった。

取得した各サンプルの酸素同位体比データには、個体特有の中・長周期変動成分が含まれており、そのままでは年輪年代の照合に適さない。従って、測定した酸素同位体比の時系列データに 11 年の移動平均を当てはめ、実測値からの偏差を求め短周期の変動成分を抽出した。年輪年代の照合には、年代が決まった多数のサンプルのデータを統合した標準年輪曲線が必須である。本研究では、中部・近畿地方の針葉樹材 (ヒノキとコウヤマキが主体) から作成した過去 2600 年間にわたる標準年輪曲線 (Nakatsuka et al.2020; Sano et al.2022)、および福井県若狭の黒田埋没木 (全てスギ) から作成した紀元前 2349–1009 年の約 1300 年間をカバーする標準年輪曲線 (Sano et al.2023) を用いてサンプルの年輪年代を照合した。これら標準年輪曲線についても、11 年移動平均を用いて長周期の変動成分を抽出しており、サンプルと同じ周期成分を保持している。

年輪年代の照合は、標準年輪曲線に対し、サンプルの年輪時系列を 1 年づつずらしながら対象とする全ての年代で相関係数を算出して、両者の変動パターンの類似度を定量化する。探索した期間のなかで突出して高い t 値 (相関係数と年輪数を元に算出) が 1 つの年代でのみ出現した場合に年輪年代の照合が成功した (年代が定まった) と判断する。年代決定の評価には、1 階の自己相関を補正した t 値、 $1/p$ 値 (ボンフェローニ法で多重比較補正した p 値の逆数)、 IF 値 (isolation factor: 1 番目と 2 番目に高い照合結果が得られた年代での両者の $1/p$ 値の比) を用いた (Loader et al.2019)。ただし、 t 値の相对比较に基づく年代照合の特性上、これらの統計量を用いて年代決定の成否を厳密に判定することが原理的にできない。そのため、本研究では、先行研究でも採用されている $1/p > 100$ 、および $IF > 10$ を年代決定の成否の基準とし (Loader et al.2019)、これらの基準を満たした場合に高い信頼度で年代決定できたと判断した。年代既知の日本産木材を用いた先行研究からも、これら基準をクリアしたサンプルは全てにおいて正確な暦年代を提示しており、基準として妥当であることが確認されている (Sano et al.2022)。

3.2 放射性炭素 (^{14}C) の測定とウィグルマッチング

酸素同位体比による年輪年代のパターンマッチングに加え、 ^{14}C の年代測定を実施して、それぞれ独立して求めた年代が互いに整合するか確認した。大気中の ^{14}C 濃度が時代と共に変動するため、測定で得られた各サンプルの ^{14}C 年代は、年代既知試料の ^{14}C 測定に基づいて整備された較正曲線との対比によって暦年代に換算する。その際、2400 年間問題として認識されているように、時代によっては較正曲線がフラットになるため推定される年代幅が数百年と大きくなる場合がある。一方、年輪がカウントできる木材の場合は、複数の ^{14}C 測定の間年輪数を数えることで、大気中 ^{14}C 濃度の変動に由来する較正曲線の微細なゆらぎ (ウィグル) を利用し、年代の幅を絞り込むことが可能となる。本報告では、ウィグルマッチングと呼ばれる本手法を用いて ^{14}C 測定に基づく年代幅の絞り込みを試みた。

本報告では、B と E の各サンプルにつき ^{14}C 測定を 3 箇所で行い、 ^{14}C 較正曲線のウィグルマッチングを実施した。具体的に、サンプル B については、年輪番号 6 - 10 (髄側の中心に最も近い年輪の番号を 1 として昇順で各年輪に番号を付与)、年輪番号 41 - 45、年輪番号 76 - 80 の連続する 5 年輪を 1 サンプルとして、セルローズ板から ^{14}C 用のサンプルを 2 - 4mg 採取した。同様に、サンプル E については、年輪番号 6 - 10、41 - 45、81 - 85 から ^{14}C 用サンプルを収集した。計 6 点のサンプルの ^{14}C 測定は、株式会社パレオラボに委託した。3 点で得られた ^{14}C 年代とそれらのギャップ年数

に基づき、OxCal v4.4 のオンラインプログラムを用いて (Bronk Ramsey2009)、最新版の IntCal20 較正曲線 (Reimer et al.2020) に対するウィグルマッチング法により各サンプルの年代幅を絞り込んだ。

4. 結果と考察

サンプル B の酸素同位体比パターンマッチングの結果を図 123 に示す。最初に、現在から紀元前 600 年まで遡る中部・近畿地方産のヒノキ標準曲線を用いて年代照合を試みたが t 値の明瞭なピークが検出されなかった。そこで、より古い時代をカバーする若狭産のスギ標準曲線と比較したところ図 123a に示す通り t 値のピークが検出された。図 123b に示した t 値のヒストグラムからも、t = 0 から数値が離れるに従い頻度が減少し、頻度分布の縁を越えた 1 点で突出して高い t 値が確認できる。この明瞭な t 値のピークは、サンプル B の年輪番号 88 の年代が紀元前 1577 年を示したときに出現した。図 123c は、年代照合に成功したサンプル B の酸素同位体比の時系列を標準年輪曲線と対比したものであり、両者の変動パターンが良く一致していることが確認できる。この年代でのサンプル B と標準曲線との相関係数は 0.54、t 値は 5.69、1/p は 7369、IF は 4048 を示した。1/p と IF の数値は、いずれも上記で設定した基準を大幅に上回り、統計的にも充分な確度で年代決定に至ったと判断できる。酸素同位体比の分析に供した部位は、最も髄に近い中心部 (年輪番号 1) から 88 番目の年輪までである。一方、辺材部の劣化と狭い年輪幅のため、酸素同位体比の分析に使用しなかった年輪がさらに外側に存在する。この外側の最外年輪が 115 番目に該当するため、単純に 27 年を追加することで、サンプル B の最外年輪 (年輪番号 115 番) は紀元前 1550 年に形成されたとと言える。この年代結果を検証するために実施した 14C ウィグルマッチングの結果を表 1 と図 124 に示す。ウィグルマッチング法で推定された年輪番号 80 番の暦年代は、1542 - 1505 cal BC (95.45%) を示した。先ほどの酸素同位体比年代法で得た 80 番目の年輪の年代は、紀元前 1585 年に対応する。両者を比較すると、ウィグルマッチングの 2 σ (95.45%) の年代幅に 1585 年は含まれないものの、年代幅の上限值 (紀元前 1542 年) からわずかに古い年代を示したに過ぎない。今回のウィグルマッチング法に使用した較正曲線 (IntCal20) は数回にわたる更新を経て 2020 年に公開された最新のものであり、北半球の陸域有機物の 14C 年代測定のために作成されている (Reimer et al.2020)。当該の時代は、北半球の各地に分布する年代既知の樹木年輪サンプルを元に作成されたものであり、日本産の樹木は較正曲線の作成に使われていない。よく知られているように、大気中の 14C 濃度は、海洋リザーバー効果の影響を受けるため地域差がある。日本産樹木の 14C 濃度を他地域と比較した研究によると、その 14C 年代は北半球の較正曲線よりも古くなる傾向がある (Nakamura et al.2013)。この影響を加味すると、今回の 14C ウィグルマッチングの年代と酸素同位体比の年輪年代は整合的である。すなわち、14C 年代からも今回のサンプル B の最外年輪 (年輪番号 115 番) は紀元前 1550 年に形成されたものと結論づけられる。

次に、サンプル E については、上記 2 種の標準年輪曲線とそれぞれ年代照合を試みたが、t 値の明瞭なピークを検出するに至らなかった (図は省略)。この E について実施した 14C ウィグルマッチングの結果をみると、紀元前 3946-3907 (95.45%) を示しており、黒田の標準年輪曲線の末端 (紀元前 2349 年) よりも、さらに古い時代の木材であることが判明した。すなわち、現存する日本産の標準年輪曲線がカバーしない時代のサンプルから取得した酸素同位体比の時系列データなので、t 値のピークが検出されなかったのは妥当である。さらに、偽のピークも出現しなかったことから、年代照決定の成否として設定した上記の基準 (1/p > 100、および IF > 10) が機能していたことの検証とも言える結果となった。

5. 結論

サンプル B については、紀元前 1550 年の最外年輪を持つことが酸素同位体比年輪年代法により明らかとなった。一方、サンプル E については、標準年輪曲線がカバーする時代よりも古かったため年輪年代の照合には至らなかったが、14C ウィグルマッチングによって紀元前 3946 - 3907 年の木材であることが分かった。サンプル B が第 7 - 2 層、サンプル E が第 7 - 3 層から出土した自然木であることから、今回の年代は層位の観点からも矛盾しなかった。

6. 謝辞

本研究は、JSPS 科研費 (21H04980: 酸素同位体比年輪年代法の高精度化による日本列島の気候・生産・人口変動史の定量化) の助成を受けて実施した。

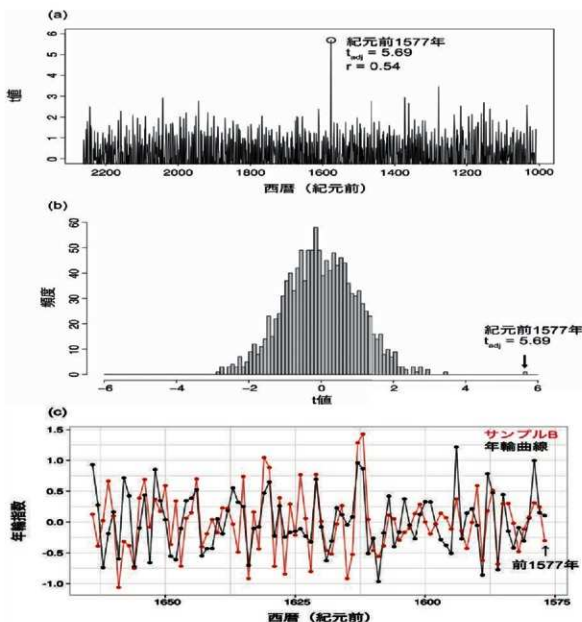


図 123 サンプル B の酸素同位体比の年輪年代パターンマッチング
(a) 標準曲線に対しサンプル時系列を 1 年ずつスライドさせて算出した t 値の分布
(b) t 値のヒストグラム
(c) 照合に成功した年代でのサンプル B と標準曲線の時系列比較

表1 出土材サンプルBの14C年代測定とウィグルマッチングで得られた年代

測定番号	暦年較正用 ^{14}C 年代 (yr BP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
		1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-49135 試料No. B-innermost	3305 \pm 23	1611-1574 cal BC (40.47%) 1564-1552 cal BC (12.38%) 1548-1534 cal BC (15.43%)	1620-1515 cal BC (94.84%) 1513-1511 cal BC (0.61%)
PLD-49136 試料No. B-middle	3333 \pm 23	1623-1599 cal BC (23.33%) 1591-1588 cal BC (2.12%) 1587-1543 cal BC (42.81%)	1686-1652 cal BC (8.29%) 1644-1532 cal BC (86.74%) 1524-1521 cal BC (0.42%)
PLD-49137 試料No. B-outermost	3273 \pm 20	1598-1592 cal BC (5.23%) 1542-1504 cal BC (63.03%)	1612-1572 cal BC (21.34%) 1568-1499 cal BC (74.11%)
	試料No.B 最外試料年代	1534-1524 cal BC (33.68%) 1521-1510 cal BC (34.59%)	1542-1505 cal BC (95.45%)

表2 出土材サンプルEの14C年代測定とウィグルマッチングで得られた年代

測定番号	暦年較正用 ^{14}C 年代 (yr BP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
		1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-49138 試料No. E-innermost	5195 \pm 26	4041-4017 cal BC (34.28%) 3994-3970 cal BC (33.99%)	4047-3960 cal BC (95.45%)
PLD-49139 試料No. E-middle	5176 \pm 30	4038-4022 cal BC (22.66%) 3990-3960 cal BC (47.61%)	4047-3949 cal BC (95.45%)
PLD-49140 試料No. E-outermost	4990 \pm 25	3791-3710 cal BC (68.27%)	3933-3921 cal BC (1.43%) 3916-3877 cal BC (9.82%) 3804-3701 cal BC (76.28%) 3681-3656 cal BC (7.92%)
	試料No.E 最外試料年代	3937-3916 cal BC (68.27%)	1542-1505 cal BC (95.45%) 3946-3907 cal BC (95.45%)

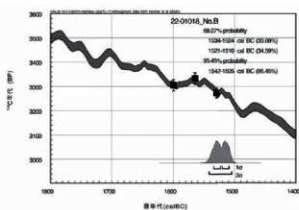


図124 出土材サンプルBの14Cウィグルマッチング
グレー帯がIntCal20較正曲線、黒3点が
14のサンプルの14C年代を示す

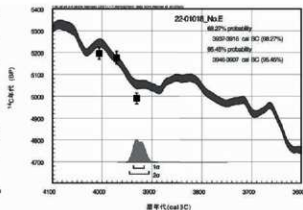


図125 出土材サンプルEの14Cウィグルマッチング
グレー帯がIntCal20較正曲線、黒3点が
14のサンプルの14C年代を示す

引用文献

- 光谷拓実, 1988. わが国における年輪年代研究法の現状と展望, 考古学と自然科学 20, 1-6.
- 中塚武, 2015. 酸素同位体比年輪年代法がもたらす新しい考古学研究の可能性, 考古学研究 62, 17-30.
- 中塚武, 2018. 酸素同位体比年輪年代法の誕生と展開, 考古学と自然科学 76, 1-13.
- 奈良国立文化財研究所, 1990. 年輪に歴史を読む - 日本における古年輪学の成立 -, 奈良国立文化財研究所, 奈良, p. 195.
- Bronk Ramsey, C., 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51, 337-360.
- Loader, N.J., Mccarroll, D., Miles, D., Young, G.H.F., Davies, D., Ramsey, C.B., 2019. Tree ring dating using oxygen isotopes: a master chronology for central England, *Journal of Quaternary Science* 34, 475-490.
- Nakatsuka, T., Sano, M., Li, Z., Xu, C., Tsushima, A., Shigeoka, Y., Sho, K., Ohnishi, K., Sakamoto, M., Ozaki, H., Higami, N., Nakao, N., Yokoyama, M., Mitsutani, T., 2020. A 2600-year summer climate reconstruction in central Japan by integrating tree-ring stable oxygen and hydrogen isotopes, *Clim. Past* 16, 2153-2172.
- Nakamura, T., Masuda, K., Miyake, F., Nagaya, K., Yoshimitsu, T., 2013. Radiocarbon ages of annual rings from Japanese wood: evident age offset based on IntCal09, *Radiocarbon* 55, 763-770.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., Talamo, S., 2020. The IntCal20 Northern Hemisphere Radiocarbon Age Calibration Curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62, 725-757.
- Sano, M., Li, Z., Murakami, Y., Jinno, M., Ura, Y., Kaneda, A., Nakatsuka, T., 2022. Tree ring oxygen isotope dating of wood recovered from a canal in the ancient capital of Japan, *Journal of Archaeological Science: Reports* 45, 103626.
- Sano, M., Kimura, K., Miyake, F., Tokanai, F., Nakatsuka, T., 2023. Two new millennium-long tree-ring oxygen isotope chronologies (2349-1009 BCE and 1412-466 BCE) from Japan, *Radiocarbon*. DOI: 10.1017/RDC.2023.29

第2節 大型植物遺体同定分析

1. 樹種同定

木材試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の切片を採取し、封入剤ガムクロラールでプレパラートを作成して生物顕微鏡で観察・同定した。同定結果を表2に示す

同定された樹種は10分類群で、針葉樹6分類群、広葉樹4分類群であった。

以下に同定の根拠となる細胞構造学的記載をおこなう。

マツ属 (Pinus) マツ科：晩材部の幅は広く早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。垂直樹脂道は晩材部に限らず全体に散在する。分野壁孔は大きな窓状である。放射細胞の壁が風化のため保存が悪くマツ属とするにとどめた。

モミ属 (Abies)：早材から晩材への移行は緩やかで晩材部は薄い。放射細胞の壁は厚くじゅず状末端壁を有する。分野壁孔はスギ型で1分野に1-4個ある。

ヒノキ (Chamaecyparis obtusa (Siebold et Zucc.) Endl.) ヒノキ科ヒノキ属：晩材部の幅は狭く、樹脂細胞が晩材部に偏って分布する。放射細胞の分野壁孔は縦に開く孔口のかなり小さいヒノキ型で1分野に2個存在する。

ニレ属 (Ulmus) ニレ科：年輪初めに大きい道管が配列し、その後急に径を減じて接線方向や斜めに塊状に配列する環孔材。放射細胞は同性で1-8細胞幅程度で外形がなめらかな紡錘形である。

コナラ属クヌギ節 (Quercus sect. Aegilops) ブナ科：大管が数列配列したのち厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材。放射細胞は同性で単列と複合状の大きいものがある。

風化や菌類の繁殖により保存性が悪いものについては同定レベルが順次「科」「針葉樹」と下がっている。

表3 梶原南遺跡出土木材および種実の同定結果

試料番号	同定番号	登録番号	器種	調査区	地区	遺構面・層	遺構名	遺構の時期	分類群名	出土部位/備考
1	1		自然木	1区				縄文時代後期	コナラ属クヌギ節	ヤンブルB
	2		自然木	1区				縄文時代中期	ニレ属	ヤンブルE
	3		自然木	1区				古墳時代以前	コナラ属クヌギ節	V字状木
	4	622	井戸枠	9区			2井戸	奈良時代	ニレ属	—
	5	266	礎材	9区			2井戸	奈良時代	ヒノキ科	—
2	6	265	井戸枠	9区			3井戸	奈良時代	針葉樹	—
	7	276	礎石	9区			3井戸	奈良時代	針葉樹	—
	8	617	井戸枠	8区			11井戸	奈良時代S64	ヒノキ	—
	9	617	井戸枠	8区			11井戸	奈良時代	針葉樹	—
	10	46	加工品	1区	南半部	第6層・第7層		古墳時代以前・奈良下部	ヒノキ	—
	11	46	加工品	1区	南半部	第6層・第7層		古墳時代以前・奈良下部	モミ属	—
3	12	46	杭	1区	南半部	第6層・第7層		古墳時代以前・奈良下部	マツ属	—
	13	532	柱礎	8区			76ピット	古代末～中世	モミ属	—
	14	535	柱礎	8区			100ピット	奈良時代	針葉樹	—
	15	278	礎	1区				古墳時代か	モミ属	—
	16	48	種実	5区	東端部	第5層(下層)		奈良時代	モミ	核完形
17	68	種実	5区	東端部	第7-2層		弥生時代か	オニグルミ	内果皮完形	
18	222	種実	1区	南東半部(旧)	第5層(上層・下層)		奈良時代	モミ	核半分	
4	19	241	種実	1区	南西半部	第6層(下層)		古墳時代か	モミ	核完形
	20	235	種実	3区	北半部	第6層(下層)		古墳時代か	オニグルミ	内果皮完形欠け
	21	206	種実	7区	16N4e		32ピット	中世	モミ	核半分
	22	583	種実	8区	15N8g		40土坑(下層)	中世	モミ	核半分欠け

2. 種実同定

種実試料は肉眼で観察、同定し分類群別部位別に計数し表3に同定結果を示す。同定された分類群は木本のモモとオニグルミの計2分類群であった。モモとオニグルミには利用痕跡などは特には見られなかったが、他の木本種実等が出土していないことや出土個数が少ないことから利用後に廃棄された種実の一部が堆積したと考えられる。

3. 出土大型植物遺体からみた梶原南遺跡の植物利用

縄文時代の自然木2点はコナラ属クヌギ節とニレ属であった。

古墳時代以前からは4点同定し、1点は自然木のコナラ属クヌギ節であった。3点のうち1点はマツ属の杭、2点は加工品で樹種はヒノキとモミ属である。加工材には針葉樹が使われていた。古墳時代とされた試料は槽が1点で、モミ属が使われていた。

奈良時代の試料は7点で、うち4点が井戸枠、井戸に伴って出土した漆器と端材である。井戸枠はヒノキ1点と針葉樹2点、ニレ属1点が使われていた。漆器は針葉樹、端材はヒノキ科と同定された。7点のうち6点が針葉樹であり針葉樹の利用率が高いと言える。

古代末から中世とされる試料は柱根が1点で、モミ属が使われていた。

本遺跡では15点のうち自然木3点はいずれも広葉樹であった。このうちニレ属は谷や河川沿いに生育するが、クヌギ節は日当たりのよい丘陵などに生育する。古墳時代以降の加工木12点のうち11点で針葉樹が使われており、針葉樹が優先的に利用されていたといえる。さらに井戸枠などでヒノキを用いていることから、本地域ではヒノキ属が比較的潤沢に確保できていた可能性がある。大阪府では古墳時代以前頃から時代が新しくなるにつれて針葉樹利用率が高くなり、古代にはヒノキ属の利用が3割程度を占めるまでになる(黒須2012)。本遺跡でもこの傾向と調和的である。

引用文献

黒須亜希子, 2012. V遺跡出土木製品の種類と地域性 19章南近畿(1) 一大阪府・和歌山県一, 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社, 241-257.

第4章 挿入写真



写真1 a面漆膜

写真2 a面漆膜



写真3 b面漆膜

写真4 b面漆膜

第6章 総括

第4章・第5章を通じて今回の発掘調査成果をまとめたが、本章では2019年度・2020年度の調査成果と今回の調査成果を合成させ、調査範囲の拡大によって新たに得た知見を基に、梶原南遺跡での集落が展開した、微高地における土地利用の時間的変遷等をまとめた。したがって本章の対象となるのは2022年度調査の6区～8区である。2019年度・2020年度の発掘調査成果をまとめた『梶原南遺跡』の「総括」では、弥生時代から中世へという時間的な流れで遺構の変遷が説明されているが、本書では各調査区の成果報告を古代末～中世から弥生時代へと、時間をさかのぼらせて記述しているため、本章もそれと同じ流れで記述することとする。

古代末～中世 各調査区から当該期の遺構・遺物をとらえたが、8区・6区に比べて7区では遺構・遺物の検出密度や点数が明らかに少ないことから、6区と7区との間に集落居住域の内と外を分ける境界があったこと、さらにその境界から微高地の西縁にかけての部分は居住域の外縁部にあっていたことがうかがえた。遺物の出土状況等から、13世紀前葉～中頃にかけての時期に当該期集落の盛期があり、13世紀後葉にそれが廃絶または移動した後、一帯が生産域となった経緯を跡付けることができた。

当該期集落の成立時期は、おおむね8区において「て」字状口縁の土師器皿や黒色土器の細片が、遺構埋土や包含層から若干出土する状況が散見されたことから、11世紀末葉から12世紀初頭の時期ととらえることができる。ただそれ以外の手がかりは極めて少ない状況で、その時期の集落実態は具体的にとらえることはできない。同様に12世紀代の瓦器碗も8区を中心に若干出土するのを認めたが、19-1-7トレンチ東端部で検出された12世紀中頃の井戸や溝のように、12世紀と明確に特定できる遺構は検出しなかった。ただ6区で検出した掘立柱建物のうち、建物4は建物の方向軸が古代の建物と近似していることから、細かな時期の特定はできないものの、集落成立当初のものとして位置付けることができるかもしれない。いずれにせよ、当該期の集落は微高地の東縁部で成立した小規模なものを起点とし、13世紀中ごろまでの期間を通じて西側に向けて拡大したことがうかがえる。加えて当該期集落の最盛期である13世紀中ごろに存在した水溜や基幹水路・井戸を新たに検出した。基幹水路は必ずしも直線的に磁北に直交するように付設されたものではないが、おおむね東西方向を指向し、西側を流末としていたとみられる。

古代 8区・6区・7区のいずれからも当該期の遺構・遺物を検出したが、8区・6区に比べて7区における遺構・遺物の検出数量が少ない傾向がみられた。これまでの調査成果とあわせてみても、微高地東半部に当該期の集落居住域の中心があり、西半部はその外縁部にあたると考えられる。8区・6区でも掘立柱建物やその可能性があるピット列を検出したことから、『梶原南遺跡』で類推されていたよりも当該期における建物の分布エリアが面的に広がることがわかった。今回検出した掘立柱建物と併せてみても、調査区一帯の建物規模は比較的小規模なものが主体だが、8区で検出した建物1は建物規模に比べて柱穴が大きいという特徴がみられる。

20-1-3トレンチの調査で検出されていた平行する2条の当該期の基幹水路の延長部分を今回の調査で検出した。これにより2条の溝は同時併存したものではなく、時期差があったことがわかった。具体的には南側の溝が先行して掘削され、それを埋めた後そのすぐ北側にそれと平行するように新たな溝を掘削したと考えられる。これまでの調査成果でも奈良時代後期の遺構に2時期あることは指摘され

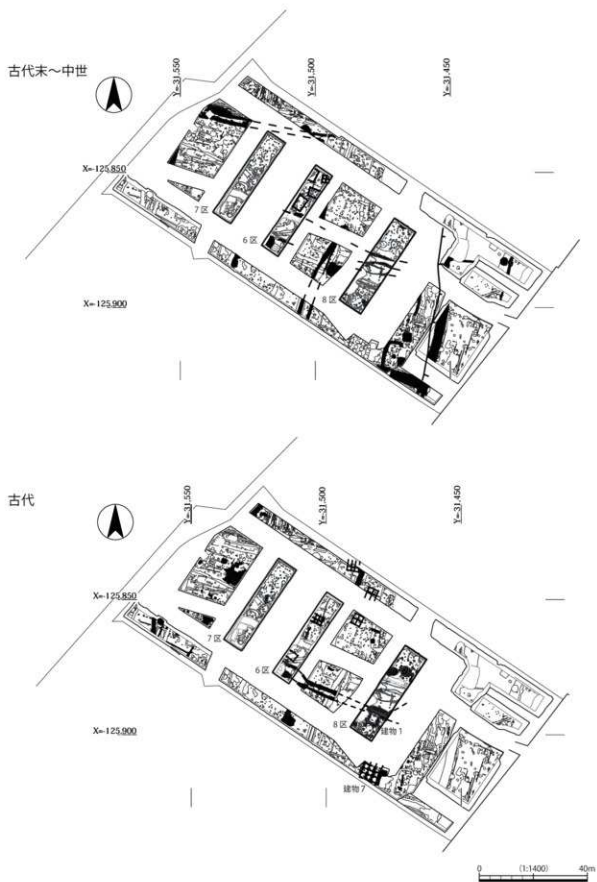


圖 126 變遷圖 (1)

古墳時代



X=125,850

X=125,000

Y=31,550

Y=31,900

Y=31,450

弥生時代



X=125,850

X=125,900

Y=31,550

Y=31,900

Y=31,450

0 (1:1400) 40m

圖 127 変遷図 (2)

ていたが、今回の調査成果によりそれが建物の建て替えだけでなく、基幹水路の掘り直しといった集落の再整備も含めたものだったことがうかがえる。前述した8区・建物1は、先行する溝を埋めた後、後出の溝に近接して作られている。これは19-1-7トレンチで検出された建物7に近く、建物の方向軸も近似する。建物7は一連の調査で検出された掘立柱建物の中では最も規模が大きい総柱建物で、溝掘りの大きな柱穴を伴うという特徴から、当該期集落の核をなすものの可能性が指摘されている。8区・建物1も、建物規模に比べて大きな柱穴を伴うという点では特徴的な建物である。このことから東西方向溝の北と南とで建物の規模や構造に差が存在する可能性が考えられ、これが基幹水路としての役割をだけではなく、集落の空間機能を区分する役割も果たしていたことが類推できる。

8区で検出した当該期の2基の井戸は、前出の井戸を埋めた後にそれと半分重なるようにしてそれより小規模な井戸を新たに掘り直したものである。このような造作を加えた井戸は、これまでの調査も含めて初出である。井戸の一部が調査区外に広がっていたため、遺構全体を完掘できたわけではないが、これらの井戸に祭祀行為を思わせるような遺物の出土状況は認めなかった。この場所に井戸を作り直して存続させることにどのような意味があったのか不明だが、継続して存続した屋敷地が存在し、それに伴うものだった可能性が指摘できようか。

古墳時代 当該期の遺構は8区では認められず、6区でピット2基、7区でピット4基と土坑1基を検出した。包含層や古代以降の遺構埋土に2次的に混入した当該期の遺物の出土は各調査区で認められたが、細片が多く出土点数も相対的に少ないことから、依然として当該期の集落の様相は不明である。

先述したように遺構の検出数は西に向けて微増するが、遺物の出土量には明瞭な違いは認められなかった。もとは8区に向けて最終遺構面の標高が高くなっていったと考えられることを勘案すると、古代や中世以降の造成に伴って当該期の遺構面がより大規模に削平を受けたことにより、8区では遺構が残らなかった可能性も考えられる。

当該期の遺物はおおむね5世紀中頃の時期に含まれるとみられ、明確に6世紀以降と考えられる遺物は出土しなかった。調査地における当該期の生活痕跡は相対的に希薄で、『上牧遺跡』でも指摘されるように集落の中心域からやや外れた場所にあっていたのではないかと考える。

弥生時代 これまでの調査に引き続いて弥生時代中期の方形周溝墓を検出した。方形周溝墓は6区～8区のすべての調査区で、初出のものも含めて検出された。これにより『梶原南遺跡』の総括で「6基の周溝墓が微高地の稜線上に2列に並ぶ」とされていた分布が、より面的に広がることがわかった。また今回の調査で方形周溝墓の規模をより具体的に把握することができるようになった。

方形周溝墓の形状や大きさを子細に検討すると、平面形には長方形のものと正方形に近いものが含まれることが類推される。大きさをみると長辺が12m前後の大型のものと、1辺が5～6mとその半分程度の中規模のもの、1辺が3m前後の小型のものからなることがわかった。大きさや平面形との相関関係を見ると、大型のものは長方形が主体を占めるとみられるのに対し、中型・小型のものは正方形もしくはそれに近い長方形が主体を占める傾向がみられた。また、大型の方形周溝墓が微高地の最高所部分に配され、その間を埋めるように中型の方形周溝墓が配されている状況がうかがえる。

方形周溝墓は7区においては最終遺構面の標高が高い範囲で分布が認められ、西に向けて下がる部分では検出しなかった。一方、8区・6区では方形周溝墓の分布範囲に微地形との相関関係はみられなかった。このことからおそらく7区でみられるような微高地の縁辺部までが方形周溝墓の分布範囲と考えられる。また7区で検出した方形周溝墓がなべて中～小規模だったことから、微高地の縁辺部には大型

の方形周溝墓が作られず、中型・小型のものが密接して配置されたことがうかがえる。

8区の方形周溝墓3と方形周溝墓2は長辺が近接する位置関係だが、溝は共有せず、それぞれに周溝が掘削されていた。周溝は中～小型の方形周溝墓に伴うものは狭くて浅い傾向がみられるのに対し、大型の方形周溝墓に伴うものは幅が広くより深い傾向が認められた。周溝底部の深さは同じ墓に伴うものであっても一定せず、底部の凹凸が顕著なものも認められた。これはそもそも周溝が、墳丘の土を得るためにその周囲を掘り下げた際に生じたものであることを示唆している。7区の方形周溝墓1・方形周溝墓2のように墳丘の角の部分の周溝が途切れている例は、その部分が墳頂にいたる通路として掘り残されたと考えられる。

今回の調査でも方形周溝墓以外の、集落に関連付けられる遺構は検出しなかった。このことから発掘調査で出土した弥生時代の遺物はおおむね墓に供献するために持ち込まれたものと考えられる。周溝から出土した弥生土器の出土量は限られており、包含層や他の遺構埋土から出土したものを含めても少量だが、器種は甕・広口壺・摂津型水差形土器におおむね限られる傾向が認められた。このことから梶原南遺跡に構築された方形周溝墓に供献された土器は、甕・広口壺・摂津型水差形土器のいずれか、もしくはそれらのセットからなり、中期前半の摂津地域の器種組成を反映することがうかがえる。

周溝埋土からの弥生土器の有無は墳丘規模とは相関せず、小型・大型の別なく土器が出土し、墳丘規模と土器の出土量との相関性も認められない。また周溝埋土における土器の有無は調査区内での検出距離とは相関しなかった。つまり側辺のほぼ全長を検出しているにも関わらず、弥生土器を1片も含まない場合もあれば、検出距離はわずかにもかかわらず弥生土器が出土する場合がみられた。その差が何に起因するかという点において、一つの可能性としては方角との関連性を指摘できる。今回の調査で当該期の遺物が出土した溝の位置（図126、遺構番号のみ記載）をみると、63溝以外はすべて墳丘の北辺に沿った溝であることがわかる。今回検出したものに関しては、北辺溝が調査区に含まれている方形周溝墓においてはほぼすべての北辺溝から遺物が出土した。例外は南辺の63溝から出土した例と、2019年度の調査で検出した方形周溝墓で、東辺の溝14から完形の広口壺が検出された例がある。

以上のことから梶原南遺跡で検出された方形周溝墓は、墳丘規模にかかわらず墳丘の北端や北辺の溝底部に土器を供献するケースが多かったこと、しかしその行為には少数の例外が含まれていた可能性が指摘できる。そのような傾向が葬送儀礼における集団ごとの習慣を反映するのか、集落と墓域との位置関係に起因していたのか、またその傾向に合致しない例は何に起因しているのかは現時点では不明である。周辺遺跡の例を含めて今後検証する必要があると考える。

今回の調査区は周辺を既往調査区に囲まれるが、新たに検出された遺構・遺物とそれに対する解析により、従来の調査成果にさらに多くの知見を加えることができた。またここではふれなかった1～5区・9区・10区の調査成果を加味すると、周辺の遺跡とのかかわりや縄文時代以降の当該地域の地形変化の一端をとらえる手がかりを得ることができたと思う。

表4 遺物一覧表

掲載 番号	図録 番号	図取 番号	器種	器形	時期	上：口径 下：底径	器高	色調	調査名・ トレンチ	層名	遺構名
1	30	15	青磁	碗	中世	【13.6】 —	(3.6)	外 オリーブ灰 5CY6/1 内 オリーブ灰 5CY6/1	21-1-1	第2層	—
2	30	—	瓦	平瓦	古代	長(8.1) 短(7.1)	2.0	外 にぶい-黄緑 7.5YR6/4 内 にぶい-黄緑 10YR7/4	21-1-1	第2層	—
3	30	—	石器	打製刃器	—	縦(3.5) 横(3.2)	厚1.4	—	21-1-1	第2層	—
4	30	—	須恵器	用途不明 私用品	古代以前	長(8.0) 短(6.4)	厚(0.8)	外 灰白 N7/0 内 灰白 N7/0	21-1-1	第3層	—
5	30	—	須恵器	甕	古墳	【18.4】 —	(4.0)	外 灰白 N7/0 内 灰白 N7/0	21-1-1	第2層	—
6	30	—	陶器	漆鉢	中世	【13.3】 【8.6】	(4.9)	外 緑 2.5YR6/6 内 緑 2.5YR7/8	21-1-1	第4層(上層)	—
7	30	—	土師器	皿	中世	【13.2】 【7.6】	(2.2)	外 灰黄緑 10YR6/2 内 にぶい-黄緑 10YR7/2	21-1-1	第4層(上層)	—
8	30	—	土師器	皿	中世	【9.6】 【6.0】	(2.1)	外 灰黄緑 10YR6/2 内 にぶい-黄緑 10YR7/3	21-1-1	第4層(上層)	—
9	30	—	土師器	皿	古代末	【12.2】 —	(1.7)	外 灰黄 2.5Y7/2 内 灰黄 2.5Y7/2	21-1-1	第4層(上層)	—
10	30	15	緑釉陶器	碗	古代末	【11.0】 【5.8】	4.3	外 灰 N6/0 内 灰 N6/0	21-1-1	第4層(上層)	—
12	30	—	須恵器	甕	古墳	【19.2】 —	(6.5)	外 灰白 N7/0 内 灰白 N7/0	21-1-1	第4層(上層)	—
13	30	19	土師器	甕	古代	【23.9】 —	(6.1)	外 灰黄緑 10YR6/2 内 にぶい-黄緑 10YR7/2	21-1-1	第4層(上層)	—
14	30	—	須恵器	高坏	古墳	—	(8.1)	外 灰白 N6/0 内 灰白 N6/0	21-1-1	第4層(上層)	—
15	30	—	瓦	平瓦	古代	長(20.4) 短(12.7)	厚(2.2)	外 にぶい-黄 7.5YR7/4 内 にぶい-黄 7.5YR7/4	21-1-1	第4層(上層)	—
16	30	—	瓦器	椀	中世	【14.8】 —	(3.4)	外 黄灰 2.5Y5/1 内 暗灰 N3/0	21-1-1	第4層(下層)	—
17	30	—	須恵器 (底部)	古代	—	【8.4】 —	(1.8)	外 灰白 N6/0 内 灰白 N6/0	21-1-1	第4層(上層)	—
18	30	—	須恵器	甕	古代	—	(3.3)	外 灰白 N7/0 内 灰白 N7/0	21-1-1	第4層(下層)	—
19	30	—	須恵器	蓋	古代	【12.4】 —	(1.3)	外 灰白 N6/0 内 灰白 N6/0	21-1-1	第4層(下層)	—
20	30	—	須恵器	坏	古代	【12.0】 —	(2.3)	外 灰 N5/0 内 灰 N6/0	21-1-1	第4層(下層)	—
21	30	—	須恵器	甕	古墳	—	(3.7)	外 灰白 N6/0 内 灰白 10YR8/1	21-1-1	第4層(下層)	—
22	30	—	土師器	羽釜	古代	—	(3.4)	外 にぶい-黄緑 10YR7/4 内 にぶい-黄緑 10YR6/3	21-1-1	第4層(下層)	—
23	30	—	須恵器	甕	古墳か	頭部径【12.8】 —	(6.7)	外 灰 N5/0 内 灰 N5/0	21-1-1	第4層(下層)	—
24	30	—	石器	削片	—	縦(4.7) 横(2.8)	(1.8)	—	21-1-2	第4層(上層)	—
25	31	18	土製品	製塩土器	—	—	(10.7)	外 暗灰黄 2.5Y5/2 内 灰黄緑 10YR8/3	21-1-1	第5層(上層)	—
26	31	—	土師器	皿	中世	【15.2】 【12.4】	1.6	外 灰黄 2.5Y7/2 内 灰白 2.5Y8/2	21-1-1	第5層(下層)	—
27	31	17	須恵器	坪形用碗	古代	長(10.2) 短(6.3)	(0.9)	外 灰白 5Y7/1 内 灰白 5Y7/1	21-1-1	第5層(上層)	—
28	31	17	須恵器	坪形用碗	古代	—	(1.8)	外 青灰 5PB6/1 内 青灰 5PB6/1	21-1-1	第5層(上層)	—
29	31	—	土師器	坪か	古代	—	(0.7)	外 灰黄 2.5Y7/2 内 灰黄 2.5Y7/2	21-1-1	第5層(上層)	—
30	31	—	須恵器	蓋	古代	【11.4】 —	(3.9)	外 灰白 N6/0 内 灰白 N6/0	21-1-1	第5層	—
31	31	—	須恵器	蓋	古墳	【13.1】 —	(4.0)	外 灰白 N6/0 内 灰白 N5/0	21-1-1	第5層(上層)	—
32	31	—	土師器	坏	古代	【19.1】 —	(3.4)	外 灰黄 2.5Y7/2 内 灰黄 2.5Y6/2	21-1-1	第5層(下層)	—
33	31	—	土師器	坏	古代	【16.0】 —	(2.9)	外 オリーブ 7.5Y6/2 内 にぶい-黄緑 10YR6/3	21-1-1	第5層(下層)	—
34	31	17	須恵器	坏	古代	【12.1】 —	(4.0)	外 黄灰 2.5Y5/1 内 黄灰 2.5Y5/1	21-1-1	第5層(下層)	—
35	31	—	須恵器	甕	古墳	—	(12.2)	外 灰 5Y6/1 内 灰 N7/0	21-1-1	第5層(下層)	—
36	32	—	須恵器	坏	古代	【9.6】 —	(3.4)	外 暗灰 N3/0 内 灰 N6/0	21-1-1	第6層(上層)	—
37	32	—	土師器	坏	古代	15.4 10.9	3.5	外 にぶい-黄緑 10YR7/3 内 灰黄 2.5Y7/4	21-1-1	第6層(上層)	—
38	32	—	土師器	坏	古代	【18.0】 —	(4.0)	外 にぶい-黄緑 10YR7/2 内 にぶい-黄 7.5YR6/4	21-1-1	第6層(上層)	—

掲載 番号	図号 番号	図名 番号	器種	器形	時期	上：口径 下：底径	器高	色調	調査者・ トレンチ	層名	遺構名
39	32	—	瓦	丸瓦	古代	長(4.1) 短(3.5)	厚(2.2)	外 灰 5Y6/1 内 灰 5Y6/1	21-1-1	第6層(上層)	—
40	32	18	土師器	壺	古墳	【10.3】 —	(7.4)	外 粉 5YR7/6 内 粉 5YR7/6	21-1-1	第6層(上層)	—
41	32	—	赤生土器	甕	赤生	【21.7】 —	(5.5)	外 灰黄緑 10YR5/2 内 にぶい黄緑 10YR6/3	21-1-1	第6層(上層)	—
42	32	—	土師器	高坏	古墳	— 【8.4】	(5.6)	外 にぶい黄緑 10YR7/2 内 にぶい黄緑 10YR7/2	21-1-1	第6層(下層)	—
43	32	—	土師器	高坏	古墳	— 【9.2】	(7.3)	外 浅黄緑 10YR8/3 内 粉 5YR7/6	21-1-1	第6層(下層)	—
44	32	—	赤生土器	甕	赤生	【14.8】 —	(7.2)	外 灰白 2.5Y8/2 内 灰白 2.5Y8/2	21-1-2	第6層(下層)	—
45	32	—	赤生土器	甕	赤生	【20.8】 —	(5.0)	外 黒 10YR2/1 内 灰黄緑 10YR5/2	21-1-1	第6層(下層)	—
46	32	—	赤生土器	壺か	赤生	【7.0】 —	(3.8)	外 灰黄緑 10YR5/2 内 陶灰 N3/0	21-1-1	第6層(下層)	—
47	32	—	赤生土器	壺	赤生	【12.0】 —	(6.1)	外 黒 N2/0 内 灰黄 2.5Y6/2	21-1-1	第6層(下層)	—
48	32	—	赤生土器	甕	赤生	【19.6】 —	(7.0)	外 黒 2.5Y2/1 内 黒相 2.5Y3/1	21-1-1	第6層(下層)	—
49	32	—	赤生土器	甕	赤生	— 7.1	(10.1)	外 灰黄 2.5Y7/2 内 陶灰黄 2.5Y5/2	21-1-1	第6層(下層)	—
50	32	—	赤生土器	担持型水注	赤生	【7.8】 —	(8.5)	外 灰黄 2.5Y6/2 内 灰黄 2.5Y6/2	21-1-1	第6層(下層)	—
51	32	21	赤生土器	担持型水注	赤生	— —	(16.6)	外 黒 N2/0 内 灰白 2.5Y8/1	21-1-1	第6層(下層)	—
52	32	—	赤生土器	壺	赤生	— 6.4	(6.0)	外 灰黄緑 10YR5/2 内 灰黄緑 10YR6/2	21-1-1	第6層(下層)	—
53	32	—	赤生土器	壺	赤生	【24.8】 —	(3.6)	外 黒相 10YR3/1 内 黒相 10YR3/1	21-1-1	第6層(下層)	—
54	32	—	赤生土器	壺	赤生	【29.2】 —	(2.7)	外 陶灰 10YR5/1 内 黄灰 2.5Y6/1	21-1-1	第6層(下層)	—
55	32	—	石器	剥片	—	長(4.5) 短(4.3)	厚(0.6)	—	21-1-1	第6層(上層)	—
56	33	—	赤生土器	甕	赤生	【28.8】 —	(4.7)	外 黒 10YR1.7/1 内 灰黄緑 10YR5/2	21-1-1	第7-1層	—
57	33	—	土師器	椀?	中世か?	【17.3】 —	(8.0)	外 黒相 2.5Y3/1 内 黄相 2.5Y5/3	21-1-1	第7-1層	—
58	33	21	赤生土器	甕	赤生	【31.0】 —	(12.4)	外 にぶい黄緑 10YR7/2 内 にぶい黄緑 10YR7/2	21-1-1	第7-1層	—
59	33	21	石器	石版丁	—	長10.9 短3.9	厚(0.7)	—	21-1-1	第7-1層	—
60	33	—	瓦	平瓦	古代	長(9.3) 短(6.6)	(2.2)	外 灰 N5/0 内 灰 N5/0	21-1-2	第4層(下層) 以下	—
61	33	15	白磁	碗	古代末~ 中世	【5.9】 —	(2.3)	外 灰白 10YR8/1 内 灰白 10YR8/1	21-1-2	—	70土坑
62	33	—	瓦	平瓦	—	長(8.6) 短(6.2)	厚(1.7)	外 灰白 N7/0 内 灰白 N7/0	21-1-2	第4層(上層)	—
63	34	—	須恵器	用途不明 用品	—	長(7.7) 短(4.4)	厚(0.9)	外 灰白 N7/0 内 灰白 N7/0	21-1-3	第3~5層	—
64	34	—	赤生土器?	壺	赤生?	【13.8】 —	(5.9)	外 にぶい黄緑 10YR7/3 内 灰 N4/0	21-1-3	第5層	—
65	34	19	土師器	器台	古墳	8.4 —	(4.6)	外 にぶい黄 7.5YR7/4 内 にぶい黄 7.5YR7/4	21-1-3	第5層	—
66	34	—	赤生土器	壺	赤生	【24.1】 —	(3.8)	外 灰黄 2.5Y6/2 内 灰黄 2.5Y6/2	21-1-3	第5層	—
67	34	—	赤生土器	甕(ミニチュ ア)	赤生	7.9 2.7	4.8	外 灰黄 2.5Y7/2 内 灰黄 2.5Y7/2	21-1-3	第6層(下層)	—
68	34	—	土師器	坏	古代	【12.6】 —	(4.7)	外 にぶい黄 7.5YR7/4 内 にぶい黄 7.5YR7/4	21-1-3	第6層(上層)	—
69	34	—	土師器	高坏	古墳	13.0 —	(5.4)	外 にぶい黄緑 10YR7/3 内 灰白 10YR8/2	21-1-3	第6層(上層)	—
70	34	—	土師器	高坏	古墳	13.2 —	(5.8)	外 浅黄緑 7.5YR8/6 内 浅黄緑 10YR8/4	21-1-3	第6層(上層)	—
71	34	—	土師器	坏	古代	【15.2】 —	(3.5)	外 にぶい黄緑 10YR7/3 内 にぶい黄緑 10YR7/3	21-1-3	第6層(上層)	—
72	34	18	須恵器	坏	古墳	9.3 —	4.9	外 灰 N6/0 内 灰白 N7/0	21-1-3	第6層(上層)	—
73	34	18	須恵器	蓋	古墳	11.4 —	4.5	外 灰 N6/0 内 灰 N6/0	21-1-3	第6層(上層)	—
74	34	—	土師器	甕	古墳	【17.4】 —	(9.8)	外 灰黄緑 10YR6/2 内 灰黄緑 10YR6/2	21-1-3	第6層(上層)	—
75	34	19	土師器	甕	古代	【18.2】 —	(12.8)	外 灰黄 2.5Y6/2 内 灰黄 2.5Y6/2	21-1-3	第6層(上層)	—
76	34	17	土師器	坏	古代	10.3 —	4.6	外 にぶい黄緑 10YR7/3 内 粉 7.5YR7/6	21-1-3	第6層	—

掲載 番号	図号 番号	図取 番号	器種	器形	時期	土口径 下口径	器高	色調	調査者・ トレンチ	層名	遺構名
77	34	18	甕	環	古墳	9.7	5.0	外 灰N5/0 内 赤灰2.5YR4/1	21-1-3	第6層(下層)	—
78	34	—	土師器	環	古代	【15.9】	(3.8)	外 浅黄緑.5YR8/4 内 浅黄緑.5YR8/4	21-1-3	第6層(下層)	—
79	34	—	土師器	高環	古墳	—	(7.6)	外 粉7.5YR7/6 内 粉7.5YR7/6	21-1-3	第6層(下層)	—
80	34	—	土師器	高環	古墳	【19.6】	(5.0)	外 灰白10YR8/2 内 灰白10YR8/2	21-1-3	第6層(下層)	—
81	34	—	土師器	壺	古墳	胴部径【5.6】	(7.0)	外 灰白7.5YR8/2 内 浅黄緑10YR8/3	21-1-3	第6層(下層)	—
82	34	19	土師器	甕	古墳	19.1	(13.8)	外 灰白10YR7/2 内 灰白10YR7/2	21-1-3	第6層(下層)	—
83	34	—	土師器	高環	古墳	【10.7】	(8.2)	外 浅黄緑7.5YR8/4 内 浅黄緑7.5YR8/4	21-1-3	第6層(下層)	—
84	34	—	土師器	高環	古墳	—	(6.3)	外 灰白7.5YR6/4 内 灰白7.5YR6/4	21-1-3	第6層(下層)	—
85	34	19	土師器	甕	古墳	【17.6】	(6.9)	外 灰黄緑10YR6/2 内 灰黄緑10YR6/2	21-1-3	第6層(下層)	—
86	34	—	土師器	高環	古墳	—	(6.4)	外 灰黄2.5Y7/2 内 灰黄2.5Y7/2	21-1-3	第6層(下層)	—
87	34	—	土師器	甕	古墳	【14.4】	(5.7)	外 相灰N3/0 内 灰白10YR7/3	21-1-3	第6層(下層)	—
88	34	19	土師器	甕	古墳	【18.4】	(19.3)	外 灰黄2.5Y7/2 内 相灰黄2.5Y5/2	21-1-3	第6層(下層)	11溝
89	34	19	土師器	甕	古墳	【16.9】	(26.2)	外 灰白7.5YR7/4 内 灰白7.5YR7/4	21-1-3	第6層(下層)	—
90	35	—	土師器	甕	古墳	【12.8】	(4.7)	外 灰黄2.5Y7/2 内 灰白10YR7/4	21-1-3	第6層(下層)	—
91	35	19	土師器	壺	古墳	【12.2】	8.2	外 灰白7.5YR7/4 内 灰白10YR7/3	21-1-3	第6層(下層)	—
92	35	—	土師器	直口壺	古墳	【14.2】	(5.8)	外 粉7.5YR7/6 内 灰白7.5YR7/4	21-1-3	第6層(下層)	—
93	35	—	土師器	高環	古墳?	—	(7.7)	外 浅黄緑10YR6/2 内 灰白10YR7/2	21-1-3	第6層(下層)	—
94	35	19	土師器	甕	古墳	【16.8】	(9.6)	外 灰白10YR7/3 内 相灰N3/0	21-1-3	第6層(下層)	—
95	35	—	土師器	甕	古墳	【13.0】	(4.4)	外 相灰N3/0 内 灰白2.5Y8/2	21-1-3	第6層(下層)	—
96	35	—	赤生土器	甕	赤生	【14.6】	(5.0)	外 灰白2.5Y7/1 内 灰黄2.5Y6/1	21-1-3	第6層(下層)	—
97	35	—	赤生土器	器台	赤生	【15.0】	(1.8)	外 灰黄2.5Y6/2 内 灰白7.5YR7/3	21-1-3	第6層(最下層)	—
98	35	—	瓦器	羽釜	中世	体部最大径【22.1】	(4.9)	外 灰白10YR7/2 内 灰白2.5Y8/2	21-1-4	第2層	—
99	35	—	甕	環状用甕	古代	—	(2.1)	外 灰白10YR7/1 内 灰N5/0	21-1-4	第5層	—
100	35	—	土製品	土錘	—	長(3.8) 幅(0.8)	厚(0.25)	外 灰N4/0 内 灰N4/0	21-1-4	第6層	—
101	35	18	土師器	高環	古墳	14.4	(5.1)	外 粉7.5YR7/6 内 灰白10YR7/3	21-1-4	第6層(下層)	11溝
102	35	—	土師器	高環	古墳	—	(6.9)	外 灰白10YR8/2 内 灰白10YR8/2	21-1-4	第6層(下層)	—
103	35	—	土師器	高環	古墳	—	(12.1)	外 灰白10YR7/3 内 灰白10YR7/3	21-1-4	第6層(下層)	—
104	35	—	土師器	甕	古墳	【13.8】	(10.6)	外 黒10YR1.7/1 内 灰白10YR7/3	21-1-4	第6層(下層)	—
105	35	—	土師器	甕	古墳	胴部径【11.5】	(5.3)	外 灰黄2.5Y6/2 内 灰白10YR7/3	21-1-4	第6層(下層)	—
106	35	—	土師器	甕	古墳	16.8	(7.7)	外 灰白10YR7/3 内 灰黄緑10YR5/2	21-1-4	第6層(下層)	11溝
107	35	21	赤生土器	甕	赤生	【23.2】	(7.6)	外 灰黄緑10YR6/2 内 灰白10YR6/3	21-1-4	第6・7・1層	—
108	35	—	赤生土器	(底部)	赤生	—	(6.8)	外 灰白2.5Y8/2 内 灰黄2.5Y7/2	21-1-4	第7・1層	—
109	35	—	甕	蓋	古墳	—	(3.6)	外 灰N5/0 内 灰N5/0	21-1-4	—	11溝
110	35	—	土師器	高環	古墳	—	(6.3)	外 粉5YR6/4 内 粉5YR6/4	21-1-4	—	11溝
111	35	—	甕	縦壺	古墳	長(7.2) 短(7.6)	厚(0.8)	外 灰N4/0 内 灰白N7/0	21-1-4	—	11溝
112	36	—	土師器	甕	中世	【11.5】 【5.0】	2.2	外 灰白10YR8/2 内 灰白10YR8/2	21-1-5	第4層(下部)	—
113	36	—	土師器	甕	中世	【9.0】	(1.3)	外 浅黄緑10YR8/3 内 浅黄緑10YR8/3	21-1-5	第4層(下部)	—
114	36	—	甕	蓋	古代	【15.2】	3.3	外 灰黄2.5Y5/1 内 灰白2.5Y7/1	21-1-5	第4層(下部)	—

掲載 番号	探出 番号	採取 番号	器種	器形	時期	上：口径 下：底径	器高	色調	調査名・ トレンチ	層名	遺構名
115	36	—	須恵器	平瓶	古代	体部最大径 【16.0】	(5.9)	外 灰 7.5Y/1 内 灰 N6/O	21-1-5	第4層(下部)	—
116	36	17	須恵器	杯	古代	13.8 9.0	3.8	外 灰 N5/O 内 灰 7.5Y6/1	21-1-5	第4層(下部)	—
117	36	—	須恵器	蓋	古代	【8.6】 —	(1.0)	外 灰 N6/O 内 灰白 N8/O	21-1-5	第4層(下部)	—
118	36	—	須恵器	杯	古代	【10.0】 【6.4】	2.8	外 灰 N6/O 内 灰 N6/O	21-1-5	第4層(下部)	—
119	36	17	須恵器	杯	古代	— 【8.1】	(1.8)	外 灰 N6/O 内 灰 N6/O	21-1-5	第4層(下部)	—
120	36	18	瓦	軒平瓦	古代	長(22.7) 短(14.8)	厚3.0	外 灰 5Y6/1 内 灰 N5/O	21-1-5	第4層(下部)	—
121	36	—	瓦	平瓦	古代	長(8.0) 短(8.9)	厚(1.6)	外 灰 N4/O 内 灰 N4/O	21-1-5	第4層(下部)	—
122	36	—	瓦	平瓦	古代	長(10.9) 幅(8.5)	厚2.0	外 灰黄 2.5Y6/2 内 灰黄褐 10YR5/2	21-1-5	第4層(下部)	—
123	37	—	土師器	高杯	古代	【13.2】 4.6	4.6	外 灰黄 2.5Y6/2 内 灰黄褐 10YR5/2	21-1-5	第4層(下部)	—
124	37	—	須恵器	高杯	古墳	— 【9.9】	(5.0)	外 灰 N6/O 内 灰 N6/O	21-1-5	第5層	—
125	37	—	須恵器	高杯	古代	— 11.6	(4.6)	外 灰 5Y6/1 内 脚：灰 5Y6/1 身：灰白 5Y8/1	21-1-5	第5層	—
126	37	17	土師器	杯	古代	【13.2】 4.6	4.6	外 灰黄 2.5Y6/2 内 灰黄褐 10YR5/2	21-1-5	第5層	—
127	37	17	須恵器	蓋	古代	9.9	3.3	外 灰白 2.5Y7/1 内 灰白 2.5Y7/1	21-1-5	第5層	—
128	37	17	須恵器	杯	古代	9.4	4.0	外 灰 5Y4/1 内 灰 5Y4/1	21-1-5	第5層	—
129	37	17	須恵器	杯	古代	11.0 —	3.9	外 灰 N5/O 内 灰 7.5Y6/1	21-1-5	第5層	—
130	37	—	須恵器	蓋	古代	【19.3】 —	3.2	外 灰 N5/O 内 灰 2.5Y5/1	21-1-5	第5層	—
131	37	—	須恵器	杯	古代	— 【21.6】	(1.7)	外 灰白 2.5Y7/1 内 灰黄褐 10YR5/2	21-1-5	第5層	—
132	37	18	瓦	軒丸瓦	古代	長(15.5) 短(11.0)	厚2.6	外 灰褐 5YR5/2 内 灰褐 5YR5/2	21-1-5	第5層	—
133	37	—	瓦	平瓦	古代	長(21.8) 短(18.2)	厚2.0	外 灰 N6/O 内 灰 N6/O	21-1-5	第5層	—
134	37	—	瓦	平瓦	古代	長(13.0) 短(13.1)	厚2.0	外 灰 N6/O 内 灰 N6/O	21-1-5	第5層	—
135	37	18	瓦	軒平瓦	古代	長(13.6) 短(13.2)	厚3.7	外 灰黄褐 10YR5/2 内 灰赤褐 7.5YR6/3	21-1-5	第5層	—
136	38	—	瓦	平瓦	古代	長(16.7) 短(13.6)	厚2.0	外 灰 N5/O 内 灰 N6/O	21-1-5	第5層	—
137	38	—	土製品	製塩土器	—	体部最大径 【7.8】	(5.6)	外 赤白黄橙 10YR7/2 内 灰灰 7.5YR6/1	21-1-5	第6層	—
138	38	—	須恵器	器	古墳	【12.2】 —	(3.8)	外 灰 N4/O 内 灰 N5/O	21-1-5	第6層	—
139	38	—	土師器	高杯	古墳	【14.5】 —	(6.1)	外 灰白 10YR8/2 内 赤白黄橙 7.5YR7/4	21-1-5	第6層(下部)	—
140	38	—	土師器	高杯	古墳	【13.2】 —	(4.35)	外 灰褐 7.5YR6/2 内 赤白黄橙 10YR6/3	21-1-5	第6・7・1層	—
141	38	21	縄文土器	甕	縄文	長(8.3) 短(9.5)	(8.4)	外 灰灰 2.5Y4/1 内 灰灰 2.5Y4/1	21-1-5	第6・7・1層	—
142	38	—	石器	砥石	—	長(10.6) 短(7.5)	厚(0.7)	外 灰白 N7/O 内 灰白 N7/O	21-1-5	第7・1層	—
143	38	21	弥生土器	壺	弥生	— —	(4.4)	外 相灰 N3/O 内 赤白黄橙 5YR7/4	21-1-5	第7・1層	—
144	38	19	土師器	小型丸底壺	古墳	体部径 【9.6】 —	(9.3)	外 赤白黄橙 10YR7/3 内 相灰 2.5Y7/2	21-1-5	第7・1層	—
145	38	21	縄文土器	甕	縄文	【22.2】 —	(7.5)	外 相灰 10YR4/1 内 相灰 10YR4/1	21-1-5	第7・1層	—
146	38	—	石器	打製石器	—	長(5.3) 短(5.6)	厚1.2	—	21-1-5	第7・1層	—
147	38	21	弥生土器	壺	弥生	体部最大径 【22.4】	(11.3)	外 灰黄褐 10YR6/2 内 灰黄褐 10YR6/2	21-1-5	第7・1層	—
148	38	—	弥生土器	甕	弥生	【13.0】 —	(11.1)	外 灰黄 2.5Y6/2 内 相灰 N3/O	21-1-5	第7・1層	—
149	38	—	弥生土器	壺	弥生	— 【9.6】	(6.1)	外 灰黄 2.5Y6/2 内 灰黄 2.5Y6/2	21-1-5	第7・1層	—
150	39	—	木製品	用途不明	—	長(13.1) 短(4.4)	厚1.4	—	21-1-4	第5層	—
151	39	—	木製品	用途不明	—	長(9.1) 短(8.6)	厚(6.4)	—	21-1-5	第5層	—
152	39	22	木製品	曲物	—	長(17.9) 短(17.3)	厚1.0	—	21-1-5	第5層	—

掲載 番号	種別 番号	取組 番号	器種	器形	時期	上：口径 下：底径	器高	色調	調査名・ トレンチ	層名	遺構名
153	39	22	木製品	用途不明		長26.6 短3.0	厚1.2	—	21-1-5	第5層	—
154	39	22	木製品	下駄		長26.0 短11.8	厚3.5	—	21-1-1	第5層(下層)	—
155	39	—	木製品	曲物		外径17.6 内径17.0	高さ6.4 厚0.25	—	21-1-1	第5層(下層)	—
156	39	—	木製品	用途不明		長46.7 短16.9	厚1.6	—	21-1-1	第5層(下層)	—
157	40	22	木製品	槽		長(234) 幅(90)	厚5~10	—	21-1-1	第6層(下層)	—
158	40	—	木製品	用途不明		長14.0 短2.8	厚1.5	—	21-1-4	第6・7・1層	—
159	40	—	木製品	用途不明		長17.0 短5.4	厚3.9	—	21-1-4	第6・7・1層	—
160	47	—	弥生土器	水差し形	弥生	【10.6】	(4.6)	外] におい-黄緑 10YR7/2 内] におい-黄緑 10YR7/2	22-1-8	第2・3層	—
161	47	15	青磁	碗	中世	—	(2.6)	外] オリーブ灰 10Y6/2 内] オリーブ灰 10Y6/2	22-1-8	第2層	—
162	47	—	土師器	甕	古代	—	(7.6)	外] 黄緑 7.5YR7/6 内] におい-黄緑 10YR7/3	22-1-8	第3層(上層)	—
163	47	—	石製品	鍋	中世	—	(5.4)	外] 灰N4/0 内] 灰N6/0	22-1-8	第3層(上層)	—
164	47	—	土製品	土師		長(5.6) 幅(6.1)	厚1.8~ 2.2	外] 黄緑 10YR8/4 内] 黄緑 7.5YR8/4	22-1-8	第3層(上層)	—
165	47	15	白磁	皿	中世	—	3.5	外] 灰白 7.5Y7/2 内] 灰白 7.5Y7/2	22-1-8	第3層(上層)	—
166	47	14	瓦器	皿	中世	—	9.8	外] 灰 10Y5/1 内] 灰白 N7/0	22-1-8	第3層(上層)	—
167	47	—	土師器	羽釜	中世	【27.7】	(8.5)	外] 黄緑 5YR6/6 内] 黄緑 5YR6/6	22-1-8	第3層(上層)	—
168	47	20	土師器	甕	古代か	【13.4】	(8.5)	外] におい-黄緑 10YR7/2 内] 灰黄緑 10YR 6/2	22-1-8	第3層	—
169	47	16	土師器	高坏	古代	—	(7.3)	外] 黄緑 5YR6/6 内] 黄緑 10YR8/4	22-1-8	第3層	—
170	47	—	土師器	甕	古代	【27.7】	(3.7)	外] におい-黄 7.5YR7/4 内] におい-黄 7.5YR7/4	22-1-8	第3層	—
171	47	—	瓦器	蓋	古代	—	(2.1)	外] 灰 N6/0 内] 灰 10Y5/1	22-1-8	第3層	—
172	47	—	瓦器	平皿	古代	—	(5.0)	外] 灰 N6/0 内] 灰 N6/0	22-1-8	第3層	—
173	47	—	土師器	甕	古墳	【14.0】	(2.5)	外] 黄 7.5YR7/6 内] におい-黄 7.5YR7/4	22-1-8	第3層以下 (側溝)	—
174	47	—	瓦器	椀	中世	12.0 4.5	3.9	外] 灰 N5/0 内] 灰 N5/0	22-1-8	第3層以下 (側溝)	—
175	47	—	土師器	皿	中世	【13.2】	—	外] 灰白 2.5YR/2 内] 灰白 2.5Y6/1	22-1-8	第3層以下 (側溝)	—
176	51	13	瓦器	椀	中世	14.4 4.9	4.85	外] 灰 N5/0 内] 灰 N5/0	22-1-8	—	1溝
177	51	13	瓦器	椀	中世	13.5 5.2	5.0	外] 灰 N5/0 内] 灰 N5/0	22-1-8	—	1溝(上層)
178	51	—	瓦器	椀	中世	【13.6】 【4.6】	4.6	外] 灰 N4/0 内] 灰 N4/0	22-1-8	—	1溝(上層)
179	51	—	瓦器	椀	中世	【14.4】 5.6	4.9	外] 灰 5Y5/1 内] 灰 5Y5/1	22-1-8	—	1溝(上層)
180	51	13	瓦器	椀	中世	14.3 4.7	4.7	外] 灰 N5/0 内] 灰 N5/0	22-1-8	—	1溝
181	51	13	瓦器	椀	中世	14.2 5.0	5.0	外] 灰 N5/0 内] 灰 10Y5/1	22-1-8	—	1溝(上層)
182	51	13	瓦器	椀	中世	13.7 【5.5】	(4.3)	外] 灰 N5/0 内] 灰 5Y5/1	22-1-8	—	1溝
183	51	—	瓦器	椀	中世	13.5 4.4	4.9	外] 灰 N5/0 内] 灰 N5/0	22-1-8	—	1溝(上層)
184	51	—	瓦器	椀	中世	【14.2】	(3.9)	外] 灰白 2.5YR/1 内] 灰 N5/0	22-1-8	—	1溝(上層)
185	51	—	土師器	皿	中世	【11.9】	2.2	外] 黄緑 7.5YR8/4 内] 黄緑 7.5YR8/4	22-1-8	—	1溝(上層)
186	51	—	土師器	皿	中世	【9.2】	1.2	外] におい-黄緑 10YR7/2 内] におい-黄緑 10YR7/3	22-1-8	—	1溝(上層)
187	51	—	土師器	皿	中世	8.4	1.6	外] 黄緑 5YR8/3 内] 黄緑 5YR8/4	22-1-8	—	1溝(上層)
188	51	—	土師器	皿	中世	8.3	1.5	外] におい-黄緑 10YR7/4 内] におい-黄緑 10YR7/4	22-1-8	—	1溝(上層)
189	51	13	土師器	皿	中世	8.2	1.6	外] におい-黄 7.5YR7/4 内] におい-黄 7.5YR7/4	22-1-8	—	1溝(上層)
190	51	—	土師器	皿	中世	8.9	1.3	外] 灰白 10YR8/2 内] 黄緑 10YR8/3	22-1-8	—	1溝(上層)

図録 番号	種別 番号	図録 番号	器種	器形	時期	上：口径 下：底径	高さ	色調	調査名・ トレンチ	層名	遺構名	
191	51	—	土師器	皿	中世	【8.3】 4.9	1.2	外 灰N6/O 内 灰N5/O	10YR7/3 10YR7/3	22-1-8	—	1溝(上層)
192	51	—	須恵器	(底部)	古代末か	【10.0】	(6.0)	外 灰N6/O 内 灰白2.5Y7/1	—	22-1-8	—	1溝(下層)
193	51	—	瓦器	椀	中世	【12.6】 4.9	4.4	外 灰N5/O 内 灰N5/O	—	22-1-8	—	1溝(下層)
194	51	—	石器	瓦片割片	中世	長(2.3) 幅(2.2)	厚0.4	—	—	22-1-8	—	1溝(下層)
195	52	14	瓦器	椀	中世	13.55 4.9	4.7	外 灰N5/O 内 灰N5/O	—	22-1-8	—	4土坑
196	52	—	瓦器	椀	中世	【13.8】 【5.2】	4.9	外 灰N4/O 内 灰N4/O	—	22-1-8	—	4土坑
197	52	—	土師器	皿	中世	12.9	3.0	外 浅黄緑 10YR8/3 内 浅黄緑 10YR8/3	—	22-1-8	—	4土坑
198	52	—	土師器	皿	中世	8.3	1.3	外 浅黄緑 7.5YR8/4 内 浅黄緑 7.5YR8/3	—	22-1-8	—	4土坑
199	52	15	青白磁	合子	中世	【4.8】 【3.3】	1.9	外 灰白N7/O 内 明オリーブ灰 2.5GY7/1	—	22-1-8	—	4土坑
200	52	—	瓦質土器	羽釜	中世	【17.4】	(13.3)	外 灰N4/O 内 灰白N 8/O	—	22-1-8	—	4土坑
201	53	20	赤土土器	甕	赤土	—	(3.8)	外 灰黄褐色 10YR6/2 内 灰白・黄緑 10YR6/3	—	22-1-8	—	71溝
202	53	—	土師器	皿	中世	【10.0】	1.35	外 黄 7.5YR7/6 内 灰白・黄 7.5YR7/4	—	22-1-8	—	71溝
203	53	—	瓦質土器	羽釜	中世	【20.0】	(8.9)	外 灰N5/O 内 灰N5/O	—	22-1-8	—	71溝
204	53	—	土師器	羽釜	中世	—	(7.5)	外 灰白・黄緑 10YR7/4 内 灰白・黄緑 10YR7/4	—	22-1-8	—	3土坑
205	53	—	土師器	甕	古代	【23.9】	(11.7)	外 浅黄緑 10YR8/3 内 灰黄緑 10YR6/2	—	22-1-8	—	122土坑
206	53	—	瓦器	椀	中世	【16.2】	(3.1)	外 浅黄緑 10YR8/3 内 浅黄緑 10YR8/3	—	22-1-8	—	18ピット
207	53	—	土師器	皿	中世	【8.3】	1.0	外 灰白・黄 7.5YR7/4 内 浅黄緑 10YR8/3	—	22-1-8	—	119ピット
208	53	—	土師器	皿	中世	8.2	1.3	外 灰白 10YR8/2 内 灰白 10YR8/2	—	22-1-8	—	120ピット
209	53	—	土師器	皿	中世	7.4	1.3	外 灰白・黄 7.5YR7/4 内 灰白・黄 7.5YR7/4	—	22-1-8	—	149ピット
210	60	—	土師器	椀	古代	【11.0】	(2.8)	外 浅黄緑 7.5YR8/4 内 浅黄緑 7.5YR8/4	—	22-1-8	—	11 井戸(樽内)
211	60	—	土師器	甕	古代	—	(2.0)	外 灰白 2.5Y8/1 内 灰白 2.5Y8/1	—	22-1-8	—	11 井戸(最上層・ 上層)
212	62	—	須恵器	甕	古代	—	(9.3)	外 明オリーブ 7.5Y5/2 内 灰 5 Y 6/1	—	22-1-8	—	40 井戸(最上層・ 上層)
213	62	16	土師器	蓋	古代	【20.2】	2.9	外 灰白・黄 7.5YR6/4 内 灰白・黄 7.5YR6/4	—	22-1-8	—	40 井戸(最上層)
214	62	—	土師器	坏	古代	【13.8】	(3.4)	外 黄 7.5YR6/6 内 黄 7.5YR6/6	—	22-1-8	—	40 井戸(最上層)
215	62	—	土師器	(底部)	古代	—	(1.1)	外 黄 7.5YR7/6 内 黄 7.5YR4/1	—	22-1-8	—	40 井戸(最上層)
216	62	—	須恵器	坏	古代	—	(4.3)	外 灰白 7.5Y8/1 内 灰白 7.5Y8/1	—	22-1-8	—	40 井戸(最上層・ 上層)
217	62	—	土師器	甕	古代	—	(3.9)	外 灰白・黄 7.5YR7/4 内 灰白・黄 7.5YR7/4	—	22-1-8	—	40 井戸(最上層・ 上層)
218	62	16	土師器	甕	古代	【31.2】	(5.8)	外 浅黄緑 10YR8/4 内 浅黄緑 10YR8/4	—	22-1-8	—	40 井戸(最上層)
219	62	—	須恵器	坏	古代	【12.6】	4.1	外 灰白N8/O 内 灰白N8/O	—	22-1-8	—	40 井戸(最上層・ 上層)
220	62	—	土師器	甕	古墳	【14.2】	(4.1)	外 灰白・黄 7.5YR7/4 内 灰白・黄 7.5YR7/4	—	22-1-8	—	40 井戸(上層)
221	62	16	土師器	坏	古代	【18.6】	(5.7)	外 黄 5YR6/6 内 黄 5YR6/6	—	22-1-8	—	40 井戸(上層)
222	62	20	土師器	甕	古墳	【15.0】	(6.1)	外 灰白 2.5Y8/1 内 灰白 7.5Y8/1	—	22-1-8	—	40 井戸(中層)
223	62	—	土師器	鉢 (片口)	古代	【24.0】	(6.4)	外 浅黄緑 10YR8/3 内 浅黄緑 10YR8/3	—	22-1-8	—	40 井戸(中層)
224	62	16	須恵器	坏	古代	【18.4】 【13.8】	4.9	外 灰N4/O 内 灰白 2.5Y7/1	—	22-1-8	—	40 井戸(中層)
225	62	16	須恵器	坏	古代	10.6	3.9	外 灰N6/O 内 灰N6/O	—	22-1-8	—	40 井戸(下層)
226	56	—	須恵器	坏身	古墳	—	(2.3)	外 灰白N7/O 内 灰白N7/O	—	22-1-8	—	74溝(最上層)
227	56	—	陶器	鉢	中世	【27.0】	(3.8)	外 暗灰 N3/O 内 灰 10Y4/1	—	22-1-8	—	74溝(上層)
228	56	—	須恵器	坏	古代	—	(2.0)	外 灰N6/O 内 灰N6/O	—	22-1-8	—	74溝(最上層)

掲載 番号	種別 番号	図版 番号	器種	器形	時期	上：口径 下：底径	高さ	色調	調査名・ トレンチ	層名	遺構名
229	56	—	須恵器	壺	古墳	胴径【17.9】	8.6	外 灰 N5/0 内 灰 S5/1	22-1-8	—	74溝(上層)
230	56	—	須恵器	杯	古代	【14.8】 【9.2】	(4.1)	外 灰 10Y6/1 内 灰 10Y6/1	22-1-8	—	74溝(アゼ)
231	56	—	須恵器	壺	中世	—	(2.9)	外 灰 N6/0 内 灰 N6/0	22-1-8	—	74溝(上層)
232	56	—	土師器	用途不明 瓶用品	古代	—	(3.0)	外 樽 7.5YR6/6 内 樽 7.5YR6/6	22-1-8	—	74溝(上層)
233	56	—	須恵器	高杯	古墳	—	(2.5)	外 灰白 2.5Y7/1 内 灰白 N7/0	22-1-8	—	75溝(上)
234	56	—	須恵器	杯	古代	【12.2】	3.2	外 灰白 2.5Y7/1 内 灰 S5/1	22-1-8	—	74溝(下層)
235	56	—	須恵器	蓋	古代	【13.8】	(1.8)	外 灰 S5/1 内 灰 S5/1	22-1-8	—	75溝(下)
236	56	20	赤生土器	四脚型水甕	赤生	—	(4.5)	外 におい-樽 7.5YR7/3 内 におい-黄樽 10YR7/4	22-1-8	—	75溝(下)
237	56	—	土師器	杯	古代	—	(2.6)	外 樽 5YR6/6 内 におい-樽 5YR7/4	22-1-8	—	74溝(最下層)
238	56	—	須恵器	杯	古代	—	(3.0)	外 灰白 2.5Y7/1 内 灰白 2.5Y7/1	22-1-8	—	74溝(最下)
239	59	—	須恵器	杯	古墳	【10.8】	(3.5)	外 灰 N5/0 内 灰 N5/0	22-1-8	—	103ピット
240	59	—	須恵器	杯	古代	—	(3.7)	外 灰白 2.5Y8/1 内 灰白 2.5Y8/1	22-1-8	—	5ピット(掘方)
241	59	—	土師器	杯	古代	—	(2.5)	外 樽 5YR7/8 内 樽 5YR7/8	22-1-8	—	29ピット
242	59	—	土師器	杯	古代	—	(2.6)	外 におい-樽 7.5YR6/4 内 におい-樽 7.5YR6/4	22-1-8	—	64ピット
243	59	—	土師器	杯	古代	—	(2.1)	外 樽 7.5YR6/6 内 樽 7.5YR7/6	22-1-8	—	50ピット
244	59	—	瓦	平瓦	古代	長(11.0) 幅(10.4)	厚2.0	外 灰 N5/0 内 灰 N5/0	22-1-8	—	131ピット
245	59	—	瓦	平瓦	古代か	長(15.0) 幅(14.1)	厚2.2	外 におい-黄樽 10YR7/4 内 灰 S5/1	22-1-8	—	30ピット
246	64	—	赤生土器	(底部)	赤生	—	(4.6)	外 灰黄褐色 10YR5/2 内 灰白 5YR/1	22-1-8	—	150溝
247	68	—	赤生土器	甕	赤生	【5.6】	(3.4)	外 におい-黄樽 10YR5/3 内 におい-黄樽 10YR4/3	22-1-6	第2層	—
248	68	—	須恵器	高杯	古墳	—	(2.5)	外 灰白 N7/0 内 灰 N5/0	22-1-6	第2層	—
249	68	—	須恵器	壺	古代	【10.2】	(2.6)	外 灰白 7.5Y7/1 内 灰白 7.5Y7/1	22-1-6	第2層	—
250	68	—	土製品	土鉢	—	長(2.9) 幅(3.7)	厚(2.9)	外 におい-黄樽 10YR7/2 内 におい-黄樽 10YR7/2	22-1-6	第2層	—
251	68	—	土製品	土鉢	—	長(3.7) 幅2.4	厚(1.2)	外 灰白 10YR8/2 内 黄黄樽 10YR8/3	22-1-6	第2層	—
252	68	—	瓦質土器	羽釜	中世	【13.0】	(2.2)	外 黄灰 N3/0 内 灰白 N 8/0	22-1-6	第2層	—
253	68	—	瓦質土器	火鉢	中世	—	(3.5)	外 黄灰 2.5Y4/1 内 灰白 2.5Y8/2	22-1-6	第2層	—
254	68	—	土師器	甌	中世	【9.0】	1.7	外 黄黄樽 7.5YR8/3 内 黄黄樽 7.5YR8/3	22-1-6	第2層	—
255	68	—	土師器	甌	中世	【8.6】	1.3	外 黄黄樽 7.5YR8/3 内 黄黄樽 7.5YR8/3	22-1-6	第2層	—
256	68	—	土師器	甌	中世	【7.4】	1.1	外 におい-黄樽 10YR7/4 内 におい-黄樽 10YR7/2	22-1-6	第2層	—
257	68	—	須恵器	器台	古墳	—	(2.8)	外 灰白 N7/0 内 オリーブ灰 10Y4/2	22-1-6	第3層	—
258	68	—	須恵器	瓶	古代	【6.9】	(3.3)	外 灰白 N7/0 内 灰 7.5Y6/1	22-1-6	第3層	—
259	68	—	須恵器	壺	古代	【8.7】	(5.4)	外 灰 S5/1 内 オリーブ灰 10Y5/2	22-1-6	第3層	—
260	68	—	土師器	甌	古代末	【9.2】	1.55	外 灰白 10YR8/2 内 黄黄樽 10YR8/4	22-1-6	第3層	—
261	68	—	土師器	甌	中世	【7.8】	1.6	外 におい-黄樽 10YR6/2 内 におい-黄樽 10YR6/2	22-1-6	第3層	—
262	68	—	土師器	甌	中世	【7.8】	1.2	外 灰白 10YR8/2 内 におい-黄樽 10YR7/3	22-1-6	第3層	—
263	68	—	土師器	甌	中世	【7.8】	0.85	外 黄黄樽 10YR8/3 内 黄黄樽 10YR8/3	22-1-6	第3層	—
264	68	—	土師器	甌	中世	【9.0】	1.0	外 樽 5YR7/6 内 樽 5YR7/6	22-1-6	第3層	—
265	68	—	土師器	甌	中世	【12.0】	(1.7)	外 黄黄樽 10YR8/3 内 灰白 10YR8/2	22-1-6	第3層	—
266	68	14	土師器	甌	中世	—	8.3	外 灰白 7.5YR8/2 内 灰白 7.5YR8/2	22-1-6	第3層	—

掲載 番号	種別 番号	採取 番号	器種	器形	時期	上：口径 下：底径	器高	色調	調査名・ トレンチ	層名	遺構名
267	68	—	土師器	皿	中世	【7.9】 —	1.2	外：H01 10YR8/2 内：H01 10YR8/2	22-1-6	第3層	—
268	68	—	土師器	皿	中世	【6.8】 —	1.0	外：H01 2.5Y8/2 内：H01 2.5Y8/2	22-1-6	第3層	—
269	68	—	土師器	皿	中世	【8.8】 【7.8】	0.85	外：にふい-相 7.5YR7/4 内：にふい-相 7.5YR7/4	22-1-6	第3層	—
270	68	—	土師器	皿	中世	【13.2】 —	2.45	外：H01 10YR8/2 内：にふい-相 10YR7/3	22-1-6	第3層	—
271	68	—	土師器	皿	中世	【13.5】 —	2.3	外：にふい-相 10YR7/3 内：にふい-相 10YR7/3	22-1-6	第3層	—
272	68	—	土師器	皿	中世	【14.2】 —	1.95	外：浅黄緑 10YR8/3 内：H01 10YR8/2	22-1-6	第3層	—
273	68	—	土師器	皿	中世	【12.7】 —	2.1	外：浅黄緑 7.5YR8/3 内：浅黄緑 7.5YR8/3	22-1-6	第3層	—
274	68	—	土師器	皿	中世	【12.7】 —	3.0	外：にふい-相 7.5YR7/3 内：にふい-相 7.5YR7/3	22-1-6	第3層	—
275	68	—	土師器	皿	中世	【16.0】 —	2.35	外：にふい-相 10YR7/4 内：浅黄緑 10YR8/3	22-1-6	第3層	—
276	68	—	土師器	皿	中世	【11.8】 —	(2.1)	外：にふい-相 10YR7/2 内：にふい-相 10YR7/2	22-1-6	第3層	—
276	68	—	瓦器	椀	中世	【12.1】 5.0	4.0	外：H N5/0 内：H N5/0	22-1-6	第3層	—
278	68	14	瓦器	椀	中世	13.3 【5.0】	4.2	外：H N6/0 内：H01 N7/0	22-1-6	第3層	—
279	68	—	瓦器	椀	中世	【14.8】 —	(4.0)	外：H01 7.5YR/1 内：H01 7.5YR/1	22-1-6	第3層	—
280	68	—	瓦器	椀	中世	【15.2】 【5.6】	4.5	外：H N4/0 内：H N5/0	22-1-6	第3層	—
281	68	—	瓦質土器	羽釜	中世	—	(12.3)	外：H N4/0 内：H N4/0	22-1-6	第3層	—
282	68	—	瓦質土器	火鉢	中世	—	(5.3)	外：黄灰 2.5Y6/1 内：黄灰 2.5Y6/1	22-1-6	第3層	—
283	69	—	弥生土器	(底部)	弥生	— 8.9	(3.2)	外：H01 10YR8/2 内：H01 10YR8/2	22-1-6	—	南側溝
284	69	—	須恵器	(底部)	古代	— 【12.0】	(3.5)	外：H N6/0 内：H N6/0	22-1-6	第3・4層	—
285	69	—	須恵器	(底部)	古代	— 【11.0】	(5.5)	外：H N6/0 内：H01 N7/0	22-1-6	第3・4層	—
286	69	—	土師器	鉢	中世	—	(3.8)	外：にふい-相 7.5YR7/4 内：にふい-相 7.5YR7/4	22-1-6	第3・4層	—
287	69	—	瓦質土器	火鉢	中世	—	(5.55)	外：暗灰 N3/0 内：暗灰 N3/0	22-1-6	第3・4層	—
288	69	—	土製品	土師	—	長3.75 幅1.1	厚1.1	外：にふい-相 7.5YR7/4 内：にふい-相 7.5YR7/4	22-1-6	第3・4層	—
289	69	14	瓦器	椀	中世	9.6 5.4	3.3	外：H N4/0 内：H N4/0	22-1-6	第3・4層	—
290	69	—	瓦器	椀	中世	【11.2】 2.9	3.6	外：H N4/0 内：H N4/0	22-1-6	第3・4層	—
291	69	14	瓦器	椀	中世	12.6 5.0	4.5	外：H N5/0 内：H N5/0	22-1-6	第3・4層	—
292	69	—	瓦器	椀	中世	【12.2】 【4.8】	4.2	外：H N5/0 内：H N5/0	22-1-6	第3・4層	—
293	69	14	瓦器	椀	中世	11.2 3.7	3.6	外：H 5/0 内：H 5/0	22-1-6	第3・4層	—
294	69	—	瓦器	椀	中世	【12.4】 【3.3】	3.6	外：H N4/0 内：H N5/0	22-1-6	第3・4層	—
295	69	—	土師器	皿	中世	8.5 —	1.1	外：浅黄緑 10YR8/3 内：浅黄緑 10YR8/3	22-1-6	第3・4層	—
296	69	—	土師器	皿	中世	【12.4】 —	1.95	外：浅黄緑 7.5YR8/4 内：浅黄緑 7.5YR8/4	22-1-6	第3・4層	—
297	69	14	土師器	皿	中世	12.6 —	2.4	外：浅黄緑 7.5YR8/4 内：浅黄緑 7.5YR8/3	22-1-6	第3・4層	—
298	69	—	須恵器	鉢	中世	【30.8】 —	(3.5)	外：H01 N8/0 内：H01 N7/0	22-1-6	第4層	—
299	69	—	瓦器	椀	中世	【12.2】 【3.6】	4.1	外：H N6/0 内：H N6/0	22-1-6	第4層	—
300	69	—	瓦器	皿	中世	【9.8】 —	(1.5)	外：H N4/0 内：H N5/0	22-1-6	第4層	—
301	69	—	土師器	皿	中世	【11.4】 —	2.0	外：浅黄緑 7.5YR8/4 内：7.5YR7/6	22-1-6	第4層	—
302	69	—	土師器	皿	中世	【12.8】 —	1.7	外：H01 10YR8/2 内：H01 2.5Y8/1	22-1-6	第4層	—
303	69	—	石製品	砥石	—	長(11.5) 幅(11.5)	厚3.5	外：H 5Y6/1 内：H 5Y6/1	22-1-6	第4層	—
304	69	—	石製品	砥石	—	長(5.8) 幅(5.4)	厚0.5	外：暗灰 N3/0 内：暗灰 N3/0	22-1-6	第4層	—

掲載 番号	採出 番号	図種	器形	時期	上：口径 下：底径	器高	色調	調査名・ トレンチ	層名	遺構名	
305	69	—	須恵器	古墳	—	(4.7)	9内 灰白 N8/O 灰白 N8/O	22-1-6	第3層	—	
306	69	—	土師器	瀬	古代	—	9内 浅黄橙 10YR8/3 灰白 10YR8/2	22-1-6	第3層	—	
307	69	—	白磁	瀬	中世	—	9内 灰白 5Y7/2 灰白 5Y7/2	22-1-6	第3層	—	
308	79	14	瓦器	椀	中世	12.9 5.8	4.2	9内 暗灰 N3/O 暗灰 N3/O	22-1-6	—	60土坑
309	79	14	瓦器	椀	中世	11.3 6.2	3.6	9内 暗灰 10YR5/1 灰 N4/O	22-1-6	—	60土坑(上層)
310	79	14	瓦器	椀	中世	[12.2] [4.3]	(4.5)	9内 灰白 N8/O 灰白 N8/O	22-1-6	—	60土坑(下層)
311	79	—	須恵器	蓋	古墳	[12.4]	4.2	9内 灰 N6/O 灰 N6/O	22-1-6	—	60土坑(上層)
312	79	—	瓦器	椀	中世	[12.6] [4.2]	3.4	9内 灰 N5/O 灰 N6/O	22-1-6	—	60土坑(上層)
313	79	—	瓦器	皿	中世	[9.8]	1.75	9内 灰 4/O 暗灰 N3/O	22-1-6	—	60土坑(上層)
314	79	—	土師器	皿	中世	[12.8]	2.1	9内 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3	22-1-6	—	60土坑(上層)
315	79	—	土師器	皿	中世	[12.6]	2.3	9内 灰白 10YR8/2 灰白 10YR8/2	22-1-6	—	60土坑(上層)
316	79	—	土師器	皿	中世	[13.2]	2.2	9内 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/3	22-1-6	—	60土坑
317	79	—	土師器	皿	中世	12.05	2.3	9内 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3	22-1-6	—	60土坑(上層)
318	79	—	土師器	皿	中世	12.1	2.4	9内 にぶい橙 7.5YR7/4 浅黄橙 10YR8/3	22-1-6	—	60土坑
319	79	—	土師器	皿	中世	[12.8]	2.4	9内 浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/4	22-1-6	—	60土坑
320	79	—	土師器	皿	中世	[8.9] [6.4]	1.0	9内 浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙 7.5YR8/6	22-1-6	—	60土坑(上層)
321	79	—	土師器	皿	中世	8.8	1.05	9内 浅黄橙 7.5YR8/3 灰白 7.5YR8/2	22-1-6	—	60土坑
322	79	—	土師器	皿	中世	8.1	1.1	9内 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3	22-1-6	—	60土坑(上層)
323	79	—	土師器	皿	中世	[7.6]	0.8	9内 浅黄 2.5YR/3 浅黄 2.5YR/3	22-1-6	—	60土坑(上層)
324	79	—	土師器	皿	中世	7.7	0.9	9内 浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/4	22-1-6	—	60土坑(上層)
325	79	—	土師器	皿	中世	7.75	1.0	9内 にぶい黄橙 10YR7/4 灰白 10YR8/2	22-1-6	—	60土坑(上層)
326	79	—	土師器	皿	中世	7.3	1.2	9内 灰白 7.5YR8/2 浅黄橙 10YR8/3	22-1-6	—	60土坑
327	79	—	土師器	皿	中世	8.6	1.5	9内 にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/4	22-1-6	—	60土坑(上層)
328	79	—	土師器	皿	中世	7.8	1.15	9内 灰白 10YR8/2 灰白 10YR8/2	22-1-6	—	60土坑
329	79	—	土師器	皿	中世	[7.9]	1.5	9内 浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 10YR8/4	22-1-6	—	60土坑(上層)
330	79	15	青磁	碗	中世	—	(3.6)	9内 灰オリープ 7.5Y6/2 灰オリープ 7.5Y6/2	22-1-6	—	60土坑(上層)
331	79	—	須恵器	鉢	中世	—	(3.2)	9内 灰白 10YR8/1 灰白 10YR8/1	22-1-6	—	60土坑(上層)
332	80	13	瓦器	椀	中世	13.5 4.95	4.6	9内 暗灰 N3/O 暗灰 N3/O	22-1-6	—	60土坑(下層)
333	80	—	瓦器	椀	中世	[5.4]	(3.4)	9内 灰 N3/O 灰 N4/O	22-1-6	—	60土坑(下層)
334	80	—	瓦器	椀	中世	13.8 4.8	5.0	9内 灰 N5/O 暗灰 N3/O	22-1-6	—	60土坑(下層)
335	80	13	瓦器	椀	中世	12.1 [4.9]	3.7	9内 暗灰 N3/O 灰 N4/O	22-1-6	—	60土坑(下層)
336	80	13	瓦器	椀	中世	10.8 3.75	3.75	9内 灰 N4/O 灰 N5/O	22-1-6	—	60土坑(下層)
337	80	—	瓦器	椀	中世	[10.2] [5.8]	3.4	9内 暗灰 N3/O 暗灰 N3/O	22-1-6	—	60土坑(下層)
338	80	—	土師器	皿	中世	[14.8]	2.35	9内 にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/4	22-1-6	—	60土坑(下層)
339	80	—	土師器	皿	中世	[14.0]	2.7	9内 にぶい黄橙 10YR7/2 灰白 10YR8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
340	80	—	土師器	皿	中世	[13.2]	2.5	9内 にぶい黄橙 10YR7/2 にぶい黄橙 10YR7/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
341	80	—	土師器	皿	中世	13.35	2.5	9内 灰白 10YR8/2 灰白 10YR8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
342	80	—	土師器	皿	中世	[13.2]	2.5	9内 浅黄橙 7.5YR8/3 浅黄橙 7.5YR8/3	22-1-6	—	60土坑(下層)

掲載 番号	採出 番号	採取 番号	器種	器形	時期	上：口径 下：底径	器高	色調	調査名・ トレンチ	層名	遺構名
343	80	—	土師器	甗	中世	12.9 —	2.2	外 浅黄緑 10YR8/3 内 浅黄緑 10YR8/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
344	80	—	土師器	甗	中世	13.0 —	2.45	外 灰白 10YR8/2 内 灰白 10YR8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
345	80	13	土師器	甗	中世	12.3 —	2.7	外 灰白・黄緑 10YR7/3 内 灰白・黄緑 10YR7/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
346	80	—	土師器	甗	中世	【12.5】 —	2.2	外 浅黄緑 7.5YR8/6 内 浅黄緑 7.5YR8/6	22-1-6	—	60土坑(下層)
347	80	13	土師器	甗	中世	12.4 —	2.4	外 灰白・黄緑 10YR7/3 内 灰白・黄緑 10YR7/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
348	80	—	土師器	甗	中世	【13.0】 —	1.95	外 灰白 2.5Y8/1 内 灰白 2.5Y8/1	22-1-6	—	60土坑(下層)
349	80	—	土師器	甗	中世	12.4 —	2.4	外 浅黄緑 7.5YR8/4 内 灰白 10YR8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
350	80	—	土師器	甗	中世	12.7 —	2.4	外 灰白 10YR8/2 内 灰白 10YR8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
351	80	13	土師器	甗	中世	12.4 —	2.2	外 灰白 2.5Y8/2 内 灰白 2.5Y8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
352	80	—	土師器	甗	中世	12.8 —	2.1	外 灰白・黄緑 10YR7/2 内 灰白・黄緑 10YR7/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
353	80	—	土師器	甗	中世	【12.4】 —	1.7	外 灰白 10YR8/2 内 灰白 10YR8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
354	80	—	土師器	甗	中世	【12.8】 —	1.8	外 浅黄緑 10YR8/3 内 浅黄緑 10YR8/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
355	80	—	土師器	甗	中世	【12.4】 —	1.9	外 灰白 2.5Y8/2 内 灰白 2.5Y8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
356	80	—	土師器	甗	中世	【13.6】 —	1.75	外 灰白 10YR8/2 内 灰白 10YR8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
357	80	—	土師器	甗	中世	【12.5】 (2.3)	—	外 灰白・黄緑 10YR7/2 内 灰白・黄緑 10YR7/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
358	80	13	土師器	甗	中世	【12.4】 —	2.4	外 浅黄緑 10YR8/3 内 浅黄緑 10YR8/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
359	80	—	土師器	甗	中世	【12.5】 —	2.2	外 灰白・黄緑 10YR7/2 内 灰白 10YR8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
360	80	—	土師器	甗	中世	【12.3】 —	2.4	外 灰白・黄緑 7.5YR7/3 内 浅黄緑 10YR8/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
361	80	13	土師器	甗	中世	12.3 —	2.4	外 灰白・黄緑 10YR7/2 内 灰白・黄緑 10YR7/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
362	80	—	土師器	甗	中世	12.6 —	2.2	外 灰白・黄緑 7.5YR7/3 内 灰白・黄緑 7.5YR7/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
363	80	—	土師器	甗	中世	【11.8】 —	2.95	外 灰白・黄緑 10YR7/2 内 灰白・黄緑 10YR7/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
364	80	—	土師器	甗	中世	【11.2】 —	2.4	外 灰白・黄緑 10YR7/2 内 灰白・黄緑 10YR7/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
365	80	—	土師器	甗	中世	【11.1】 —	2.7	外 灰白・黄緑 10YR7/2 内 灰白・黄緑 10YR7/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
366	80	—	土師器	甗	中世	【11.0】 —	2.3	外 浅黄緑 7.5YR8/3 内 灰白 7.5YR8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
367	80	—	土師器	甗	中世	【11.4】 —	2.1	外 灰白・黄緑 7.5YR7/4 内 灰白・黄緑 7.5YR7/4	22-1-6	—	60土坑(下層)
368	80	—	土師器	甗	中世	【11.8】 —	2.05	外 灰白・黄緑 10YR7/2 内 灰白・黄緑 10YR7/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
369	80	—	土師器	甗	中世	【11.5】 —	1.9	外 灰白・黄緑 10YR6/3 内 灰白・黄緑 10YR7/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
370	80	13	土師器	甗	中世	11.7 8.1	2.1	外 灰白・黄緑 7.5YR7/3 内 灰白・黄緑 7.5YR7/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
371	80	—	土師器	甗	中世	8.6 —	1.6	外 灰白・黄緑 7.5YR7/4 内 灰白・黄緑 10YR7/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
372	80	—	土師器	甗	中世	8.4 —	1.45	外 灰白 10YR8/2 内 灰白 10YR8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
373	80	—	土師器	甗	中世	【8.2】 —	1.5	外 浅黄緑 7.5YR8/3 内 浅黄緑 7.5YR8/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
374	80	—	土師器	甗	中世	8.3 —	1.1	外 灰白・黄緑 10YR7/3 内 灰白・黄緑 10YR7/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
375	80	—	土師器	甗	中世	8.2 —	1.5	外 灰白 10YR8/2 内 灰白 10YR8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
376	80	—	土師器	甗	中世	【8.4】 —	1.3	外 灰白・黄緑 10YR7/3 内 灰白・黄緑 10YR7/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
377	80	13	土師器	甗	中世	7.6 —	1.2	外 浅黄緑 7.5YR8/4 内 浅黄緑 7.5YR8/4	22-1-6	—	60土坑(下層)
378	80	—	土師器	甗	中世	8.0 —	1.4	外 灰白 2.5Y7/1 内 灰白 2.5Y7/1	22-1-6	—	60土坑(下層)
379	80	—	土師器	甗	中世	7.6 —	1.3	外 灰白 10YR8/2 内 灰白 10YR8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
380	80	—	土師器	甗	中世	【8.4】 —	1.35	外 灰白 2.5Y8/2 内 灰白 2.5Y8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)

図録 番号	採回 番号	図取 番号	器種	器形	時期	上：口径 下：底径	器高	色調	調査名・ トレンチ	層名	遺構名
381	80	—	土師器	甗	中世	【8.9】 —	1.1	外 浅黄 2.5Y7/3 内 におい黄橙 10YR7/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
382	80	—	土師器	甗	中世	8.1 —	1.3	外 灰白 2.5Y7/1 内 灰白 2.5Y7/1	22-1-6	—	60土坑(下層)
383	80	—	土師器	甗	中世	7.9 —	1.5	外 灰白 10YR8/2 内 灰白 10YR8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
384	80	—	土師器	甗	中世	8.3 —	1.5	外 浅黄橙 7.5YR8/3 内 浅黄橙 7.5YR8/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
385	80	13	土師器	甗	中世	8.0 —	1.2	外 浅黄橙 7.5YR8/4 内 浅黄橙 7.5YR8/4	22-1-6	—	60土坑(下層)
386	80	13	土師器	甗	中世	7.9 —	1.2	外 におい黄橙 10YR7/2 内 におい黄橙 10YR7/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
387	80	—	土師器	甗	中世	7.9 —	1.05	外 灰黄 2.5Y7/2 内 灰黄 2.5Y7/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
388	80	—	土師器	甗	中世	8.0 —	1.3	外 浅黄橙 7.5YR8/3 内 浅黄橙 7.5YR8/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
389	80	—	土師器	甗	中世	8.2 —	0.9	外 灰白 2.5Y8/2 内 灰白 2.5Y8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
390	80	—	土師器	甗	中世	【8.0】 —	0.9	外 におい黄橙 10YR7/3 内 におい黄橙 10YR7/3	22-1-6	—	60土坑(下層)
391	80	13	土師器	台付甗	中世	10.2 7.1	5.7	外 灰白 2.5Y8/2 内 灰白 2.5Y8/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
392	80	15	青磁	碗	中世	【16.1】 (4.9)	—	外 灰オリーブ 7.5Y6/2 内 灰オリーブ 7.5Y6/2	22-1-6	—	60土坑(下層)
393	80	—	瓦質土器	火鉢	中世	【41.0】 (8.9)	—	外 灰白 7.5Y8/1 内 灰白 7.5Y8/1	22-1-6	—	60土坑(下層)
394	80	13	瓦器	皿	中世	【9.2】 —	1.9	外 灰 N4/0 内 灰 N4/0	22-1-6	—	60土坑(下層)
395	80	—	土製品	土罐	—	長4.5 幅1.4	厚1.3	外 におい黄 2.5Y6/4 内 におい黄 2.5Y6/4	22-1-6	—	60土坑(下層)
396	80	—	土製品	土罐	—	長4.0 幅1.25	厚1.15	外 におい黄 2.5Y6/4 内 におい黄 2.5Y6/4	22-1-6	—	60土坑(下層)
397	80	—	瓦器	碗	中世	【13.4】 —	(4.1)	外 灰 N5/0 内 灰 N5/0	22-1-6	—	60土坑(最下層)
398	80	13	土師器	甗	中世	8.0 —	1.3	外 におい黄橙 10YR7/2 内 灰黄 2.5Y7/2	22-1-6	—	60土坑(最下層)
399	81	—	瓦	平瓦	古代か	長(15.0) 幅(13.9)	厚2.5~ 3.2	外 灰白 2.5Y7/1 内 灰白 2.5Y7/1	22-1-6	—	62溝
400	81	—	土師器	甗	中世	【14.8】 —	3.5	外 におい黄 7.5YR7/4 内 におい黄 7.5YR7/4	22-1-6	—	62溝
401	81	—	須恵器	蓋	古墳	【13.0】 —	(3.1)	外 灰 N6/0 内 灰 N6/0	22-1-6	—	53溝
402	81	—	土師器	三足甗	中世	【12.6】 —	3.1	外 橙 7.5YR7/6 内 浅黄橙 7.5YR8/4	22-1-6	—	29ビット
403	81	—	土師器	甗	中世	【9.8】 —	1.4	外 灰白 10YR8/2 内 灰白 10YR8/2	22-1-6	—	68溝
404	81	—	瓦質土器	羽釜	中世	【21.2】 —	(3.8)	外 灰 N4/0 内 灰 N4/0	22-1-6	—	68溝
405	74	—	須恵器	蓋	古墳	【11.9】 —	(3.1)	外 灰白 N7/0 内 灰 N6/0	22-1-6	—	42ビット
406	88	20	弥生土器	甗	弥生	【21.1】 —	(28.2)	外 明黄 7.5YR7/2 内 におい黄橙 10YR7/2	22-1-6	—	66溝
407	95	—	須恵器	蓋	古代	【18.0】 —	(1.9)	外 黄 2.5Y6/1 内 灰 N6/0	22-1-7	第3層	—
408	95	—	須恵器	蓋	古代	つまみ径2.8 —	(2.4)	外 灰白 5Y7/1 内 灰白 2.5Y7/1	22-1-7	第3層	—
409	95	—	須恵器	蓋	古代	— —	(1.6)	外 灰白 N7/0 内 灰白 N7/0	22-1-7	第3層	—
410	95	—	須恵器	杯	古墳	【10.7】 —	4.1	外 灰 N5/0 内 灰 N5/0	22-1-7	第3層	—
411	95	16	須恵器	杯	古代	11.6 —	3.5	外 灰白 N7/0 内 灰白 N7/0	22-1-7	第3層	—
412	95	—	土師器	杯	古代	【13.3】 —	(3.2)	外 橙 7.5YR7/6 内 におい黄 7.5YR7/4	22-1-7	第3層	—
413	95	—	須恵器	甗	古代	【10.3】 —	(7.1)	外 灰 N6/0 内 灰 N6/0	22-1-7	第3層	—
414	95	—	須恵器	竈口甗	古墳	【15.8】 —	(3.59)	外 灰 N5/0 内 灰白 N7/0	22-1-7	第3層	—
415	95	—	須恵器	短甗	古代	【10.2】 —	(2.4)	外 灰 N5/0 内 灰 N5/0	22-1-7	第3層	—
416	95	—	須恵器	(底部)	古代	【8.0】 —	(2.0)	外 灰白 2.5Y8/1 内 灰白 2.5Y8/1	22-1-7	第3層	—
417	95	—	須恵器	甗	古代	【6.5】 —	(1.7)	外 青灰 5B5/1 内 青灰 5B5/1	22-1-7	第3層	—
418	95	—	須恵器	甗	古代	【9.6】 —	(6.4)	外 灰白 5Y7/1 内 灰白 5Y7/1	22-1-7	第3層	—

図面 番号	採石 番号	採取 番号	器種	器形	時期	上：口径 下：底径	器高	色調	調査名・ トレンチ	層名	遺構名
419	95	—	須恵器	(底部)	古代	— 【12.8】	(4.3)	外 内 灰 N4/0 黒灰 2.5Y6/1	22-1-7	第3層	—
420	95	—	須恵器	壺	古墳	— 【18.6】	(6.4)	外 内 灰白 N7/0 灰白 N7/0	22-1-7	第3層	—
421	95	—	須恵器	(土師部)	古墳か	— 【18.8】	(3.4)	外 内 灰 N6/0 灰白 N7/0	22-1-7	第3層	—
422	95	—	土師器	甕	古代	— 【26.5】	(4.4)	外 内 樽 7.5YR7/6 にふい桶 7.5YR6/4	22-1-7	第3層	—
423	95	16	土師器	甕	古代	— 【26.4】	(8.4)	外 内 灰白 10YR8/2 灰白 10YR8/2	22-1-7	第3層	—
424	95	—	土師器	高坏	古代	—	(10.6)	外 内 灰白 2.5Y8/2 樽 7.5YR6/6	22-1-7	第3層	—
425	95	—	土師器	甕	古代	—	(6.2)	外 内 樽 5YR6/6 灰白 10YR8/2	22-1-7	第3層	—
426	95	—	土師器	坏	古代	—	(2.8)	外 内 樽 7.5YR7/6 樽 7.5YR7/6	22-1-7	第3層	—
427	95	—	須恵器	壺	古墳	—	(2.8)	外 内 灰 N6/0 灰 N6/0	22-1-7	第3層	—
428	95	—	陶器	壺か	中世か	— 【7.2】	(2.9)	外 内 にふい桶樽 10YR7/3 灰白 N8/0	22-1-7	第3層	—
429	95	—	土製品	土師	—	長3.4 幅0.9	厚0.85	外 内 浅黄樽 10YR8/3 浅黄樽 10YR8/3	22-1-7	第3層	—
430	95	—	土製品	土師	—	長4.55 幅0.9	厚0.9	外 内 浅黄樽 10YR8/3 浅黄樽 10YR8/3	22-1-7	第3層	—
431	95	—	土製品	土師	—	長3.3 幅0.8	厚0.7	外 内 灰白 2.5Y8/2 灰白 2.5Y8/2	22-1-7	第3層	—
432	95	—	土製品	土師	—	長2.9 幅0.8	厚0.8	外 内 にふい桶樽 10YR7/2 にふい桶樽 10YR7/2	22-1-7	第3層	—
433	95	—	土製品	土師	—	長2.9 幅0.85	厚0.75	外 内 にふい桶樽 10YR7/4 にふい桶樽 10YR7/4	22-1-7	第3層	—
434	95	—	土師器	瓶か	古墳	—	(6.35)	外 内 浅黄樽 7.5YR8/3 黒灰 10YR4/1	22-1-7	第①・1層	—
435	95	—	土師器	甕か	古墳	—	(5.0)	外 内 樽 5YR7/8 樽 5YR7/8	22-1-7	第①・1層	—
436	95	—	須恵器	蓋	古代	— 【13.0】	(1.6)	外 内 灰白 N7/0 灰白 N7/0	22-1-7	第①・1層	—
437	95	—	須恵器	坏	古代	— 【11.5】	3.5	外 内 灰白 2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1	22-1-7	第①・1層	—
438	95	—	須恵器	坏	古代	— 【12.0】	4.0	外 内 灰白 5Y7/1 灰白 5Y7/1	22-1-7	第①・1層	—
439	95	—	須恵器	坏	古代	— 【15.6】	(3.9)	外 内 灰白 5Y7/1 灰白 5Y7/1	22-1-7	第①・1層	—
440	95	—	須恵器	坏	古代	— 【11.7】	3.7	外 内 灰 N6/0 灰 N6/0	22-1-7	第①・2層	—
441	95	16	須恵器	高坏蓋	古代	— 【19.6】	4.2	外 内 灰白 N7/0 灰白 N7/0	22-1-7	第①・2層	—
442	95	—	須恵器	(底部)	古代	— 【14.0】	(2.5)	外 内 灰 N6/0 灰白 N7/0	22-1-7	第①・2層	—
443	95	—	土製品	土師	—	長(3.6) 幅0.8	厚0.8	外 内 灰白 10YR8/2 灰白 N8/0	22-1-7	第①・2層	—
444	94	—	須恵器	壺	中世	— 【11.8】	(8.0)	外 内 灰白 5Y7/1 灰白 5Y7/1	22-1-7	—	1 集石遺構
445	94	—	土師器	甕	古代	— 【14.8】	(5.2)	外 内 にふい桶 7.5YR5/3 にふい桶 7.5YR5/3	22-1-7	—	1 集石遺構
446	99	—	須恵器	把手付埴	古墳	—	(2.9)	外 内 灰 5Y6/1 灰 N6/0	22-1-7	—	13 ビット
447	99	—	須恵器	蓋	古代	— 【19.2】	(1.9)	外 内 灰白 N7/0 灰白 N7/0	22-1-7	—	47 ビット
448	101	—	須恵器	坏	古墳	— 【10.5】	4.7	外 内 灰白 N8/0 灰白 N8/0	22-1-7	—	37 土坑(下層)
449	101	20	須恵器	高坏蓋	古墳	13.4 —	6.15	外 内 灰白 N7/0 灰白 N7/0	22-1-7	—	37 土坑(下層)
450	104	20	須恵器	器台	古墳	— 【21.6】	(7.2)	外 内 灰 N5/0 灰白 N7/0	22-1-7	—	52 溝
451	104	—	須恵器	壺	古墳	—	(4.5)	外 内 灰白 7.5Y7/1 灰白 7.5Y7/1	22-1-7	—	52 溝
452	104	20	須恵器	坏	古墳	— 【11.3】	4.8	外 内 灰 N5/0 灰 N4/0	22-1-7	—	52 溝
453	104	—	須恵器	蓋	古墳	—	(3.0)	外 内 灰 N5/0 灰 N5/0	22-1-7	—	52 溝
454	104	20	土師器	甕	古墳	— 【13.6】	(10.8)	外 内 灰白 10YR8/2 灰白 N7/0	22-1-7	—	52 溝
455	104	20	石器	石鐮	弥生か	長(2.5) 幅1.8	厚0.2	—	22-1-7	—	50 溝(1層)
456	104	16	土師器	鍋	古代	— 【40.8】	13.0	外 内 灰白 10YR8/2 灰白 10YR8/2	22-1-7	—	50 溝(下層)

掲載番号	採回番号	図面番号	器種	器形	時期	上：口径 下：底径	器高	色調	調査名・トレンチ	層名	遺物名	
457	116	—	瓦	平瓦	古代	長(10.7) 幅(9.2)	厚1.9	外 内	灰白 N7/O 灰白 N7/O	22-1-9	第1層	—
458	116	—	須恵器	壺	古墳	【140】 —	(4.9)	外 内	灰 N5/O 灰 N6/O	22-1-9	調査区西側掘	—
459	116	—	須恵器	胴付皿	古代	— 【8.3】	(2.9)	外 内	灰白 N7/O 灰白 N7/O	22-1-9	第1層	—
460	116	—	須恵器	蓋 転用甕	古代	—	(2.4)	外 内	灰白 7.5YR7/1 灰白 N8/O	22-1-9	第1層	—
461	116	—	須恵器	杯	古代	【118】 —	(4.9)	外 内	灰 5Y6/1 灰 N6/O	22-1-9-2	—	1層込み(最上層)
462	116	—	須恵器	杯	古代	【118】 【7.0】	5.0	外 内	灰 5Y6/1 灰 N6/O	22-1-9-2	—	1層込み(最上層)
463	116	—	弥生土器	甕	弥生	長5.0 幅1.75	(2.4)	外	浅黄橙 10YR8/3 灰 N4/O	22-1-9-2	—	1層込み(最上層)
464	116	—	土製品	土鍾	—	長5.0 幅1.75	厚1.8	外	橙 7.5YR6/6 橙 7.5YR6/6	22-1-9-2	—	1層込み(最上層)
465	116	—	土師器	移動式甕	古墳	—	厚1.1	外 内	にぶい-橙 7.5YR7/4 にぶい-橙 7.5YR7/4	22-1-9-2	—	1層込み(最上層)
466	116	—	土師器	甕	古代	長5.0 幅1.75	厚0.6	外	浅黄橙 10YR8/3 灰白 2.5Y8/1	22-1-9-2	—	1層込み(最上層)
467	116	—	土師器	鍋	古代	—	(4.6)	外 内	浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3	22-1-9-2	—	1層込み(最上層)
468	116	—	須恵器	(底部)	古代	— 【10.6】	(4.4)	外 内	灰白 5Y8/1 灰白 5Y8/1	22-1-9-2	—	1層込み(最上層)
469	116	—	須恵器	杯	古代	— 【11.0】	(3.2)	外 内	灰 N6/O 灰 N6/O	22-1-9-2	—	1層込み(最上層)
470	116	—	須恵器	杯	古代	【11.0】 【8.0】	3.5	外 内	灰白 N7/O 灰白 2.5Y7/1	22-1-9-2	—	1層込み(最上層)
471	116	—	須恵器	杯	古代	— 【17.8】	(5.4)	外 内	灰白 2.5Y8/2 灰白 2.5Y8/1	22-1-9-2	—	1層込み(最上層)
472	116	—	須恵器	(底部)	古代	— 【7.6】	(3.45)	外	暗青灰 5B4/1 緑灰 10G6/1	22-1-9-2	—	1層込み(最上層)
473	116	—	須恵器	蓋	古墳	— 【13.8】	(4.4)	外 内	灰白 N7/O 灰白 N7/O	22-1-9-2	—	1層込み(最上層)
474	116	—	須恵器	蓋	古代	— 【12.8】	(1.7)	外 内	灰白 N7/O 灰白 N7/O	22-1-9-2	—	1層込み(最上層)
475	116	—	須恵器	蓋	古代	— 【14.8】	2.7	外 内	灰白 10YR7/1 灰白 10YR7/1	22-1-9-2	—	1層込み(最上層)
476	116	16	須恵器	壺	古代	【5.6】 【6.4】	5.0	外	黄灰 2.5Y6/1 灰黄 2.5Y6/2	22-1-9-2	—	1層込み(最上層)
477	117	—	須恵器	壺	古墳	首部(5.9)	(7.7)	外 内	灰白 N7/O 灰 N4/O	22-1-9	—	1層込み
478	117	—	土師器	移動式甕	古墳	—	厚1.1, 2.4	外 内	浅黄橙 7.5YR8/4 にぶい-橙 7.5YR7/4	22-1-9-2	—	1層込み(上層)
479	117	—	土師器	甕	古墳	【16.7】	(6.2)	外	浅黄橙 7.5YR8/3 にぶい-橙 7.5YR7/4	22-1-9-2	—	1層込み(上層)
480	117	—	土師器	甕	古墳	—	(5.35)	外 内	灰白 10YR8/2 にぶい-橙 7.5YR6/4	22-1-9-2	—	1層込み(上層)
481	117	—	土師器	甕	古墳	—	(9.1)	外 内	にぶい-橙 7.5YR7/4 にぶい-橙 7.5YR7/4	22-1-9	—	1層込み(上層)
482	117	—	須恵器	甕	古代か	【12.8】	(2.9)	外 内	灰 N6/O 灰 N5/O	22-1-9-2	—	1層込み(上層)
483	117	—	土師器	甕	古代	—	(4.9)	外 内	にぶい-橙 7.5YR7/4 にぶい-黄橙 10YR7/4	22-1-9-2	—	1層込み(上層)
484	117	—	土師器	甕	古代	【24.4】	(9.9)	外 内	浅黄橙 7.5YR8/4 にぶい-橙 7.5YR7/4	22-1-9	—	1層込み(上層)
485	117	—	須恵器	蓋	古代	—	(2.5)	外 内	灰白 N7/O 灰白 N7/O	22-1-9-2	—	1層込み(上層)
486	117	—	須恵器	蓋	古代	【10.6】	2.4	外 内	青灰 5B5/1 青灰 5B5/1	22-1-9	—	1層込み(上層)
487	117	—	須恵器	壺	古代	【12.0】	(8.3)	外 内	灰白 10YR8/1 灰オリブ 7.5Y4/2	22-1-9-2	—	1層込み(上層)
488	117	—	須恵器	杯	古代	【12.4】 【8.0】	3.8	外 内	緑灰 10YR6/1 灰白 10YR7/1	22-1-9-2	—	1層込み(上層)
489	117	—	須恵器	杯	古代	【13.8】 【9.0】	4.2	外 内	灰 N6/O 灰 N6/O	22-1-9-2	—	1層込み(上層)
490	117	—	須恵器	杯	古代	【9.2】	(1.3)	外 内	灰白 7.5Y7/1 灰白 7.5Y7/1	22-1-9	—	1層込み
491	117	—	須恵器	(底部)	古代	【8.2】	(2.9)	外 内	灰 N6/O 灰 N6/O	22-1-9	—	1層込み(上層)
492	117	—	緑釉陶器	(底部)	古代未カ	—	(1.6)	外 内	灰白 2.5Y8/1 灰白 2.5G8/1	22-1-9-2	—	1層込み(上層)
493	117	—	土師器	甕	古代	【26.0】	(3.5)	外 内	灰白 2.5Y8/2 灰白 2.5Y8/2	22-1-9-2	—	1層込み(上層)
494	117	—	土師器	皿	中世	【13.8】	2.6	外 内	橙 7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6	22-1-9-2	—	1層込み(上層)

掲載 番号	図例 番号	図解 番号	器種	器形	時期	上：口径 下：底径	器高	色調	調査名・ トレンチ	層名	遺構名
495	117	—	土師器	杯	古代	【14.6】 —	(2.8)	外) 灰白・黄 7.5YR7/4 内) 灰白・黄 7.5YR7/4	22-1-9- 2	—	1部込み(上層)
496	117	—	土師器	皿	中世	【16.0】 —	1.6	外) 黄 7.5YR6/6 内) 黄 7.5YR6/6	22-1-9	—	1部込み(上層)
497	117	—	須恵器	蓋	古代	【17.6】 —	(2.0)	外) 灰 N6/0 内) 灰 N6/0	22-1-9- 2	—	1部込み(上層)
498	117	—	須恵器	杯	古代	【11.0】 —	3.0	外) 灰白 N7/0 内) 灰 N6/0	22-1-9	—	1部込み(上層)
499	117	—	須恵器	杯	古代	【10.6】 —	3.75	外) 灰 5Y6/1 内) 灰白 5Y7/1	22-1-9- 2	—	1部込み(上層)
500	117	—	須恵器	杯	古代	【10.6】 —	2.9	外) 灰白 N7/0 内) 灰白 5Y7/1	22-1-9	—	1部込み
501	117	—	須恵器	杯	古代	【11.7】 —	(4.5)	外) 灰 N6/0 内) 灰 N6/0	22-1-9	—	1部込み(上層)
502	117	—	須恵器	杯	古代	—	3.0	外) 灰白 N7/0 内) 灰 N6/0	22-1-9	—	1部込み(上層)
503	117	—	瓦	平瓦	古代か	長(14.2) 幅(17.0)	厚 2.3	外) 灰白 5Y8/1 内) 灰白 5Y8/1	22-1-9	—	1部込み(上層)
504	117	—	土師器	杯	古代	—	2.45	外) 黄 5YR6/6 内) 黄 5YR6/6	22-1-9	—	1部込み(下層)
505	117	—	須恵器	壺 or 瓶	古代	—	(8.4)	外) 灰白 5Y7/1 内) 灰白 5Y7/1	22-1-9	—	1部込み(下層)
506	119	—	須恵器	杯	古代	—	(2.7)	外) 灰 10Y6/1 内) 灰 10Y5/1	22-1-9	—	2井戸(掘方)
507	119	—	須恵器	蓋 転用破	古代	【9.5】 つまみ径 (2.6)	(2.5)	外) 灰 N6/0 内) 灰 N6/0	22-1-9	—	2井戸(掘方)
508	119	—	須恵器	蓋 転用破	古代	【16.0】 —	2.6	外) 灰白 2.5Y7/1 内) 灰白 2.5Y7/1	22-1-9	—	2井戸(掘方)
509	119	16	土師器	椀	古代	14.5 —	4.7	外) 灰白・黄 10YR7/3 内) 灰白・黄 10YR7/4	22-1-9	—	2井戸(木枠内) 下層
510	119	—	須恵器	平瓶	古代	長(5.6) 幅 1.6	厚 1.2	外) 灰 N4/0 内) —	22-1-9	—	2井戸(木枠内) 下層
511	119	—	土師器	杯	古代	【16.2】 —	(3.2)	外) 灰白・黄 5YR6/4 内) 黄 5YR7/6	22-1-9	—	2井戸(木枠内) 下層
512	119	—	土師器	皿	古代	【14.2】 —	(2.2)	外) 灰白 2.5Y8/2 内) 灰白 2.5Y8/2	22-1-9	—	2井戸(枠内)
513	119	—	須恵器	壺	古代	—	(7.0)	外) 灰 7.5Y6/1 内) 灰 7.5Y6/1	22-1-9	—	2井戸(掘方・掘下層)
514	119	16	須恵器	蓋 転用破	古代	【16.4】 —	(2.1)	外) 灰 N6/0 内) 灰 N6/0	22-1-9	—	3井戸
515	119	—	須恵器	杯	古代	【14.6】 【9.6】	4.3	外) 灰白 N7/0 内) 灰白 N7/0	22-1-9	—	3井戸
516	119	—	土師器	甕	古代	【15.2】 —	(4.5)	外) 灰白・黄 5YR6/3 内) 黄 10YR5/1	22-1-9	—	3井戸(掘方)
517	119	—	土師器	甕	古代	【19.6】 —	(9.9)	外) 灰白・黄 10YR7/2 内) 灰白・黄 10YR7/2	22-1-9	—	3井戸
518	120	—	漆器	椀	中世	長(2.5) 幅(2.6)	厚 0.7	—	22-1-6	—	60土坑(最下層)
519	120	—	木製品	用途不明品	—	長(7.4) 幅 3.1	厚 1.0	—	22-1-8	—	40井戸
520	120	—	木製品	杭	—	長(39.5) 幅 9.4	厚 7.2	—	22-1-8	—	76ピット
521	120	—	木製品	杭	—	長(29.0) 幅 6.2	厚 5.3	—	22-1-8	—	101ピット
522	120	—	木製品	井戸枠	—	長(75.9) 幅 13.5	厚 2.5	—	22-1-8	—	11井戸(掘方)
523	120	—	木製品	板状木器	—	長 45.0 幅 6.5	厚 2.4	—	22-1-9	—	3井戸(掘方)
524	120	—	漆器	箱	古代	長(20.0) 幅(12.3)	4.5	—	22-1-9	—	3井戸(掘方)
525	—	15	緑釉陶器	(底部か)	中世	—	—	—	22-1-8	—	25ピット

写真図版



3井戸出土漆器



2区から高槻市街地を望む（東から）

図版2 1区



1区 全景 (南西から)



1区 全景 (北東から)



1区 槽出土状況(西から)



2区 全景(南西から)

図版4 5区



5区 全景（北東から）



5区 遺物出土状況（南から）

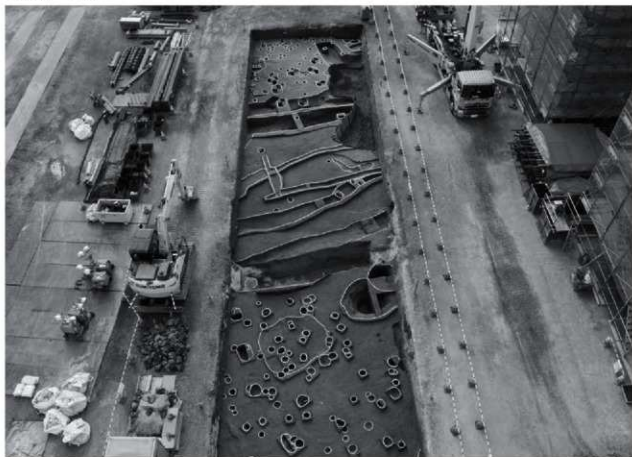


4区 全景(南西から)



3区 全景(北西から)

図版6 8区



8区 全景（北東から）



8区 全景（南西から）



11井戸 (南東から)



40井戸 (北から)

図版8 6区



6区 全景(南西から)



60土坑 遺物出土状況(北西から)



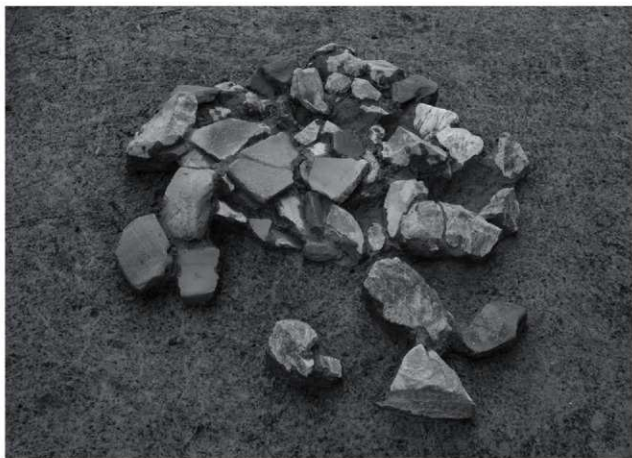
6区 方形周溝墓(南西から)



66溝 遺物出土状況(東から)



7区 全景 (南西から)



1集石遺構 (南から)



50 溝 検出状況 (南から)



52 溝 遺物出土状況 (北から)

図版 12 9区

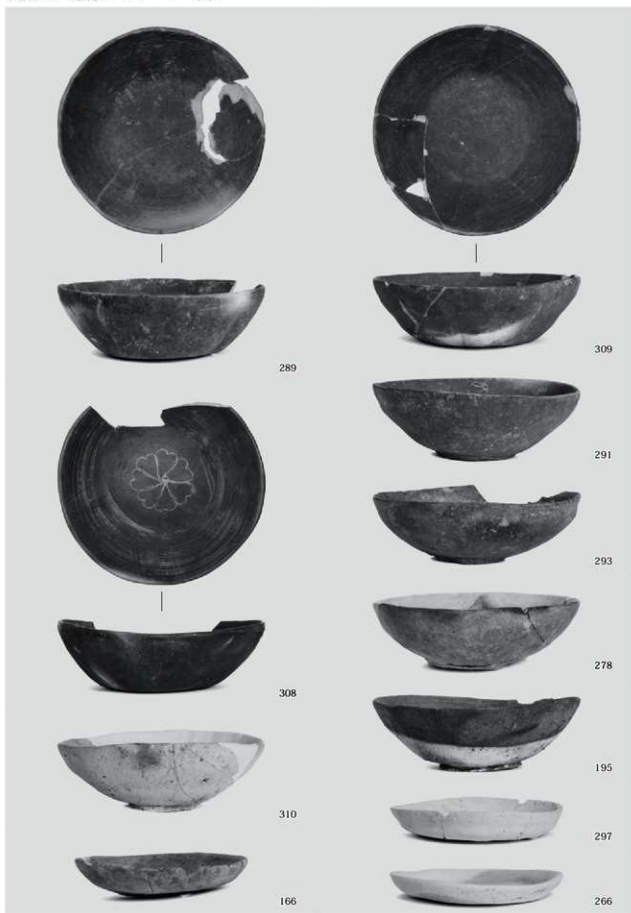


9区 全景 (南西から)



2井戸 (南西から)







11



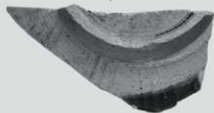
61



165



392



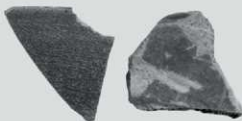
161



199



1



330

525



476



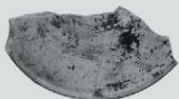
456



441



218



514



224



213



509



411



221



225



169



423



116



119



128



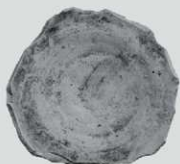
129



127



126



|



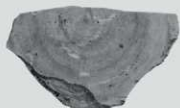
28



76



34



27



132



25



120



73



135



72



75



77



101



40



91



144



89



65



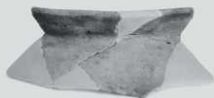
94



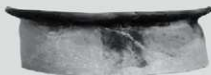
82



88



85



13



449



452



450



222



168



454



455



406



236



201



58



107



147



51



59



143



145



141



157



153



152



154

報告書抄録

ふりがな	かじはらみなみいせき						
書名	梶原南遺跡2						
副書名	高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第 326 集						
編著者名	若林幸子						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号 TEL072-299-8791						
発行年月日	2023年(令和5年)11月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号				
かじはらみなみ 梶原南遺跡	おおさかふかひつちみきはら 大阪府高槻市梶原3・4 丁目・梶原中村町	27207	158	北緯 34° 51' 52" 東経 135° 39' 22"	令和3年10月 1日～ 令和4年12 月31日	3723㎡	新名神高速道路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
梶原南遺跡	墓	弥生時代	方形周溝墓	弥生土器・石器		数種の方形周溝墓	
	集落	古墳時代	ピット	土師器・須恵器		建物柱穴の可能性のあるピット	
	集落	飛鳥時代・奈良時代	孤立柱建物・井戸・溝・ピット・土坑	土師器・須恵器・瓦・製塩土器・木器(漆器箱含む)		大型の掘方を有する礎柱建物・墨書土器や硯、漆器箱が出土した井戸・区画溝	
	集落	平安時代～鎌倉時代	孤立柱建物・井戸・水溜・溝・ピット・土坑	土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・積製品・土製品・瓦・木器		孤立柱建物・井戸・溝や水溜への土器の大量投棄	
	生産	鎌倉時代以降	ピット・溝	土師器・須恵器・瓦器・陶磁器		13世紀後半以降にみられるそれまでの集落居住域の耕地化	
要約	<p>弥生時代においては中期前半の方形周溝墓の分布域や配置・墳丘規模をより明確にとらえることができた。</p> <p>古墳時代の土地利用の詳細は依然として不明だが、調査範囲が当該期の集落縁辺部にあたったことがうかがえる。</p> <p>飛鳥時代の土地利用の詳細についても不明な部分は大きい。奈良時代に集落域が構築される以前に、その前身となる小規模な集落の存在がうかがえる。奈良時代にはこれまで調査が行われてきた微高地の他、北摂丘陵斜面の微高地上に存在した奈良時代の集落の様相をとらえることができた。当該期の井戸から出土した一本道の漆器箱は極めて希少性の高い資料で、当集落を公的施設(駅家等)にかかわるものとするこれまでの評価を補強する。</p> <p>平安時代から鎌倉時代にかけては複数の建物が調で囲まれた屋敷地が窺われる様子をより具体的にとらえることができた。13世紀における集落の廃絶時に土器箱が溝や水溜に廃棄されたこととみられ、多量の土師器皿や瓦器箱等がまとまって出土した。</p> <p>集落域が形成された微高地の北西縁に位置した放棄水路の痕跡とその埋没状況の検証から、調査地の地形形成の過程と土地利用の経過を理解するための有効な検討材料を得た。</p>						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第326集

梶原南遺跡2

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 2023年11月30日

編集・発行 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 株式会社 明新社
奈良市南京終町3丁目464番地